

刀使ノ巫女と武宮ノ氏 子

セルユニゾン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

古来より人々を脅かしている荒魂と呼ばれる存在。それを討伐するのは刀使と呼ばれる神薙ぎの巫女の少女たち。

御刀と呼ばれる特殊な鋼で出来た日本刀を手にして荒魂を斬って祓う神事を行う刀使の少女達だが、そこに男性の姿が無い訳がでは無い。いや、世界的に見れば女性がこの神事に当たり前の様に参加しているのは不思議な話なのだ。

世界には刀使の少女では無く、様々な呼ばれ方で荒魂を狩り、討伐する男達も居る。日本ではそんな男達を神薙ぎの氏子、扱う武器が多彩な事から武宮と呼ばれる少年達だ。

これは刀使と武宮が織り成す物語。

目次

第一話 物語は当然に | 1

第二話 御前試合 前編 | 13

第三話 御前試合 後半 | 26

第四話 歪な友情と歪な愛情 | 38

第五話 チョコミントは沼! | 53

第六話 鋼の種類 | 72

第七話 各々の過去 | 86

第八話 極彩色のケン | 98

第九話 真実を知った者 | 115

第十話 矢は番えられる | 130

第十一話 放たれたのは四本の矢 | 143

第十二話 放たれる折神の矢 | 159

第十三話 放たれた矢は親衛隊五席 | 181

181

第十四話 親衛隊第六席対未熟な三河武 | 202

宮 | 202

第十五話 謎多き親衛隊対荒魂と共にあ | 211

る巫女と氏子 | 211

第十六話 伊豆での戦い | 231

第十七話 伊豆での戦い 第二幕 | 243

243

第十八話 伊豆での戦い 第三幕 | 254

254

第十九話 伊豆での戦い 第四幕 | 254

第二十話 伊豆での戦い 第五幕

第二十一話 蛾の荒魂 | 298

第二十二話 伊豆から帰って | 310

第二十三話 伊豆での後始末 | 320

第二十四話 青みを帯びた世界に消えて | 331

第二十五話 夜に出逢う者達 | 344

第二十六話 無邪気なキョウケン | 357

第二十七話 狩人の武器 | 372

第二十八話 再会と隠された話 | 388

第二十九話 隠れた話 | 396

第三十話 一夜明けて | 418

第三十一話 予期せぬ出会いと信じ難き | 436

真実 | 436

第三十二話 舞草の隠れ里決戦 第一幕 | 449

第三十三話 舞草の隠れ里決戦 第二幕 | 465

第三十四話 舞草の隠れ里決戦 三河武 | 478

宮ノ意地 | 490

第三十五話 舞草の隠れ里決戦 男達ノ | 490

最後 | 490

第三十六話 まだ見ぬ明日の為に

			504
	第三十七話	折神家殴り込みと仇打ち	
	516		
	第三十八話	迷う者と強敵、そして姉弟	
	第三十九話	始まる戦いと終結する戦い	
	第四十話	弾と刃が鳴る	
	第四十一話	夜を見やる者と明ける夜の	
	者		
	第四十二話	死闘回廊	
	第四十三話	月下の死闘	
	第四十四話	靖国の前で	
601			
591			
576			
567			
	第五十二話	終わらぬ決戦	
	692		
703			
	第五十一話	終わる気配を見せぬ戦い	
	第五十話	第三席の決意と仕事	
685			
	第四十九話	決戦!! 第二幕	
671			
	第四十八話	決戦!!	
657			
	第四十七話	譲れぬ者の戦い	
643			
	者		
630			
	第四十六話	禁足地の奥地に待ち受ける	
	613		
	第四十五話	帝の殺人剣と隼の殺人剣	

第一話 物語は当然に

首都高を蛇行する黒と赤の10mは超える大きさの塊があった。

それは決して車などでは無く、丸い顔に包丁を思わせる角が二本に身体は百足に鋭いヒレを首の近くに生やした様な姿をした存在だった。

そんな存在を前に立ちほだかるのは道路を封鎖する為にMP5と防弾板で武装した警官隊。

警官隊は迫る百足に向かってMP5を発砲するも放った弾丸の殆どは効力は無く、百足は封鎖の警官隊を蹂躪して一段上を走る高速道路へと防音板と道路を破壊して盛り上げる。

「来るぞ、構えろ！」

百足が乗った高速道路にも警官隊が封鎖しており、百足はイラつく感情を発散しようと不快な叫び声を上げながら警官隊に頭から迫れば、中年の警官が部下に叫ぶ様に命令を下す。

新人の警官がぶつかると確信して身体に力を込めた瞬間に防弾板を叩くのは百足の身体では無く、強力な風圧だった。

「な、何が……!？」

新人警官が目を見開くと百足と警官隊の間に中学生程だろうか。一人の少女が一本の刀で百足の突進を止めるといふあり得ない光景が広がっていた。

百足は少女を押し潰さんと身体を曲げて力を込めるがビクともせず、口からは炎に似た何かが漏れる様に吹き出される。

「守備手、遊撃手はツーマンセルで散開。攻撃手はS装備の到着を待て！」

複数人の少女と少年が百足の脇を走り抜けながらそれぞれの獲物を抜き、果敢に攻撃するが百足もやられてばかりでは無いと身体を攻撃の意思を乗せて動かして反抗する。

首都高には硬い物同士がぶつかり合う音に混じって、少年少女達の様々な声が響く。

その中でも些か異彩を放つ物があった。

ゴツゴツと殴られたら確実にヤバイなどという印象を受けながらも宝石の様な輝きを放つナツクルダスターに目を奪われる。

宝石の様なナツクルダスターが付いたグローブを着用した少年が荒魂を拳で殴り付けた。

「……………」

無言で自身の手を叩き付ける様に百足の身体を覆う黒い岩を思わせる甲殻を殴る。

百足は苦しげな悲鳴を上げながらのたうち回る。叩かれた部分は深く窪み、周りには

大小様々なヒビを走らせていた。

「時間」

そして機械の腕と足を持つ少年が呟くと空からSR-71を連想させる形状の飛行物体が首都高に突き刺さる。

そんな物体が突如として地面に突き刺されれば、呆気に取られる物だが、最初に刀で百足を止めてみせた少女は臆する事なく突き刺さった飛行物体に近付き、光るパーツに刀の柄頭を当てる。

すると可動パーツが動き、中から着けると言わんばかりに金属パーツが付いた長手袋が現れる。

少女はそんな手袋にも臆する事無く嵌めると身体が炎の様な物に包まれるが直ぐに鎮火されると肘から少し上と足全体、胸と顔の上半分を灰色の金属とオレンジ色に光るパーツで構成された鎧を纏った状態で現れる。

少女は無言で百足に近寄り、一太刀、二太刀と刃を振って百足をぶつ切りにしていく。そして最後にナツクルダスターを持つ少年のダブルパンチが頭部に叩き込まれた百足は頭部を潰されて、ピクリとも動かなくなる。

剣を持つ少年少女は納刀し、ナツクルダスターの少年はナツクルダスター同士を打ち合わせながら、先程まで暴れまわっていた巨大な百足を一瞥して去って行く。

この百足は荒魂と呼ばれる存在だ。

古来よりこの国を脅かしてきた荒ぶる神。それを祓う能力を持つ武器を持って戦う神薙ぎの巫女を刀使と呼び、神薙ぎの氏子を武宮と呼んだ。

岐阜県。そこに校舎を置くのは美濃関学院は刀使・武宮を育成すると同時にその仕事を支える職業に就く為の様々な技能を習得するべく、刀使・武宮では無い生徒も多くが通う。

そんな学校のホールに全校生徒が集まり、学長の羽島江麻の前に4人の生徒が立っていた。

「武宮科準優勝。中等部二年柳瀬隼士」

「はは、はい」

茶に黒の混じった短髪に深緑の目が特徴な男子生徒が前に出る。

「おめでとう」

「ありがとうございます」

呼ばれた男子生徒が一礼の後に賞状を受け取ると江麻は隼士を含めた四人の生徒を見回す。

「貴方達が美濃関の代表です。本大会でも頑張つてね」

「はい!」「は、はい」「はい!」「あ、はい」

四者四様の言葉に江麻は優しげに微笑んだ。

へはい。問題無く届きました。ええ、確認しました。では」

隼士は今日の昼に届いた荷物の荷解きと確認を送った相手に電話をしながらしていた。

一見では刀に似た刃物だが、よく見るとどこか日本刀とは違う作りの刃に付けた柄のトリガーを引くと空間に僅かながらに何かが震える音が響く。

彼の御刀だが、通常の刀とは言い難い。

武宮の武器は刀使とは違い、その形状や種類は様々であり、最近になると技術革新や感覚の変化からか、ここ二十年の間に様々な武器が現れる様になった。

彼の獲物だが、まず刀身は色こそ普通の鉄を思わせる色だが、心鋼しんがねと言う製作者が心を込めて作ったと言う刃物などに宿る神力を持つて荒魂と戦える武器だ。

形状はチロリアンナイフの刀身をした打刀サイズのブレードに、嵌めた刃に高周波を

流す両手サイズの機械柄を付けている。

高周波故に音は聞こえないが触れている物が共振する事で僅かな音を放っている。彼の高周波ブレードの連続稼働時間は30分と短いが通常の刃として運用次第では優秀な性能を持っている。

「明日……か」

明日は刀使・武宮を管理する折神家での御前試合。しかも彗士にとっては人生初の大舞台。

今までは誰かに見られている、見せる戦いでは点でダメだった彗士が舞衣と言う双子の姉に追い付く為に必死に精神を鍛え続けたからこそ手に入れた大舞台への切符。

彗士の心臓はバクバクと痛みすら感じる程に心拍が上がっており、胸元を押さえた瞬間に自室に來客を知らせるベルが鳴る。

扉を開けるとそこには此処に居ていい人物では無い來客が立っていた。

「お姉ちゃん!？」

來客は黒を混ぜた紫の髪をヘアゴムで簡単に纏めただけのラフな髪型にし、薄黄緑色の目には緊張を匂わせた双子の姉だった。

美濃関では基本的には女子寮と男子寮を分けて居るが一定の時間内で有れば出入りは自由になっている訳だが、七時以降は原則出入り禁止である。

「時間！ ああ、許可証」

慌てた様に声を上げた隼士だが、舞衣の首から下げられた透明なパスケースには学園長から許可を出されている事を示す許可証がぶら下がっていた。

「新幹線のチケット貰って来たから渡しておくね。呼び出したけど出なかったでしょ？」

「あ、ついさつきまで電話してた。後で謝らないと」

「わかってたから説明しておいたよ。学長が大変ねって」

舞衣の言葉に隼士は苦笑いを浮かべる。

高周波ブレードの維持には工場などの専用機材がある場所とそれをいじれる技術者のサポートを受けなくてはいけない。しかも、心鋼にはブレードの錆や折れもあり得る。

対して刀使の持つ御刀は珠鋼と言う希少金属を使って鍛えられている為に刃こぼれ無し、折れもせず、錆びたりもしない。分解して磨いたりなどもするが基本は曇りを拭いたり、錆びる金属製の拵を使っているのです、どちらかと言えば刃の管理よりも拵の管理と言えるだろう。無論ながら全ての刀使・武宮は一般的な刃物の手入れをする為の道具一式と知識は持っている。

「……………」

「入って」

扉から半身を反らせて中へと誘う隼士。もしもコレが幼馴染などなら許されない行為だが、二人は姉弟だ。部屋に入れたとしても誰からも咎められる事はないだろう。

「ほうじ茶でいい?」

「ありがとう」

部屋に舞衣を招き入れた隼士だが、そこで会話が途切れてしまう。

何とも言えない沈黙は部屋を包む。時計も電子時計と振動を生み出しそんな原始的な仕組みが無い高周波ブレードの超簡易的整備施設としても機能する隼士の部屋では二人が吐く呼吸音とお茶を淹れる音だけがイヤに響く

「緊張する?」

「隼士も?」

「してる。だから、ブレードと柄の整備を会社に頼んだんじゃん」

高周波ブレードの整備は難しく、僅かなブレや誤差が機能低下に繋がる。その場で動かなくなるならいい方。場合によってはブレードがフライアウェイして敵に向かうなら御の字。しかし場合によっては自分に向かつて突っ込んで来る場合がある。だからこそ、今日に限っては簡易点検だろうと専門職の人間に頼った。

万が一でも脱落したブレードが誰かに突き刺されれば、ただではすまされない大事故に

なりかねない。

彗士はチラリと壁に立て掛けたナイフに視線を向ける。

鹿の毛皮を巻いて作った鞆に収まるヤイバは見れないが、手元に置いた高周波ブレードをナイフサイズにまで縮めた様な形状とサイズであり、猪の足を剥製と同じ様な加工をした物を柄として使用している。

これは彼がドイツで暮らしていた時に作った刀身にその地方の儀式をこの地で終わらせた事で生まれたナイフ。刀身に使った鋼材が特殊な物故に荒魂にも有効な武器だが、出来はギリギリ認められた程度で御前試合では使わずに、御守りとして持つて行うと考えている。

「そっか……強いね」

「(強くなんか……先人の教えに、思い出に、縫り続けてる……)」

またも沈黙が二人の間に落ちると彗士が立ち上がる。

「クツキー焼こうよ。落ち着けるんでしょ?」

「……そうだね。(そうやって優しく出来るのが強いんだよ)」

時間は進んで御前試合前夜。

美濃関の代表の四人は同じ部屋に集まって食事を摂っていた。四人の出で立ちはそのれぞれに用意された浴衣姿とちよつとした温泉旅行の様な気分だった。

武宮科優勝者は高等部三年の先輩だったが、先輩である自分が居ると気を遣うだろうと言いつ残して、他校の友人が代表で此処に来たいいい機会だから会つてくると席を外して居る。

「食べたー」

刀使科優勝者の可奈美が背もたれに背中を預けながら片手を自身の腹の上に置いて告げた言葉に舞衣と彗士は揃つて笑うが、彗士のそれは苦笑いに近かった。

「温泉旅行みたいでちよつと楽しいね」

「明日が試合でなければもつと楽しめましたかね」

「何言つてるのさ。本当に楽しいのは明日だよ！」

興奮気味に話す可奈美に柳瀬の二人は本当に剣術が好きなんだと再認識させられる。

可奈美は美濃関では剣術好きで剣術マニアで有名だ。相手の剣術や工夫、妙技を見る

と楽しいと感じてしまうタイプの間人だ。

明日が楽しみ、剣術は好き、そして舞衣のクツキーも好きだと人懐っこい笑顔を浮かべて語る可奈美だが、舞衣は顔を伏せる。

「私は、やっぱり緊張してるな。明日は御刀での試合だからかなあ」

「緊張し過ぎると僕みたいに写シが張れなくなるよ」

写シは緊張などで張れなくなってしまう場合もあり、御刀同士での戦いでは写シが張れなかった場合はそれだけで棄権や不戦敗となってしまう。

慧士が帯に差したナイフに目を向ける。慧士も少し前に写シが張れずに不戦敗になつた経験がある。

「じゃあ、庭で練習しよう」

「良いですね。食後の軽い運動にもなりますし」

慧士は可奈美の言葉に賛同すると誰よりも早く床に置いていた自分の御刀を持ちながら立ち上がり、可奈美も立ち上がると刀掛台に掛けてあつた自分と舞衣の刀を取り上げて、舞衣に渡す。

舞衣が受け取つたのを見て、可奈美は慧士の後に隣接する庭へと出る。舞衣も仕方ないと思つて最後に庭へ出る。

「千鳥」

可奈美が自分の持つ御刀の銘を告げながら御刀を鞘から引き抜く。

千鳥は切っ先付近に焼けた様な後がある事と切っ先が強く反り返っている事が特徴なやや小振りな刀だ。

鞘を腰に下げる道具が無いので鞘は片手で保持したまま片手だけで御刀を構える。

「孫六兼元」

舞衣も目を閉じて自分の御刀の銘を告げてから抜刀し、片手で鞘を保持して、片手で構える。

世界的にも名高い孫六兼元の打刀。特徴は三本の杉の木が連なった様に見える刃紋が焼かれています事だろう。

「波切曾凜厳」
なみきりぞりんげん

隼士も二人と同じ様に刀の銘を告げながら引き抜く。

彼の御刀の刃は柄の近くの鑢にはSolingenの刻印がされた輸入品を使っているが、刻印が示す通りに切れ味だけなら美濃関一を誇る。

「一本やってから寝る？」

「今日はいいよ。本番は明日だから」

舞衣が何かを考える様に明日と呟いた。

第二話 御前試合 前編

朝靄に朝日が遮られる時間。

和装に身を包んだ長髪の女が神社の境内から出て石階段を降りる先に六人の少年少女がそれぞれの体勢で和装の女が出て来るのを待っていた。

茶とオレンジが混じった様な色の短い髪に肘の少し下から指の第三関節までをテーパーリングした少女が開け放たれた門の片側に立ち、背中には背骨と同じ方向に一本の刀を背負って立つ、その少女の後ろにも肌色の混じった銀髪と血の様に赤い目をした美少女然とした人物が打刀と何かの棒を背中に背負って、女が出て来るのを待っていた。

逆側にも手を自然な位置で合わせて立っている赤い髪の少女が一振りの刀を背負って女が出てくるのを静かに待っている少女の後ろには青緑の髪の少年が頭を下げて立っており、両腕に革製の分厚い籠手を付け、柄の部分にパラシュートコードを巻き付けただけの味気の無い剣を太腿から平行に帯剣している。

門を越えた先の渡り廊下にも人影があった。

柱の一本に薄桃色の髪に毛先だけが薄い黄緑の色をした髪の少年が腰に対して、横に付けた機械的印象がある鞘に片腕を置いた状態で船を漕いでいた。

そんな少年の脇には薄桃色の髪に毛先が薄い青紫の少女が納刀された刀を両手で抱える様に持ちながら暇そうに待つており、女が近付いたのに気付くと、船を漕いでいる少年に鞘の先を押し当てて起こす。

そんな二人の逆側の柱に背中を預け、黒と茶の塊を抱く様に床に座って眠っていた群青色に先だけが鮮やかな橙色の夜明けの空を思わせる色の髪を持った少年が誰かの接近を感じ取ったのか自然に目を覚まして立ち上がると抱えていた塊を背骨と平行になる様に背負う。

その横では毛先だけが黒い鶴の翼を思わせる髪をした少女が手を合わせて立ち、背中には一本の刀を背負う。

「魂鎮め、お疲れでした」

女が前を通り過ぎるタイミングで声を掛け、後ろを赤髪の少女と並んでついで行く。

「織田防衛事務次官がご到着です。本日の大会は決勝戦のみ、紫様にご来場頂きます」

最初の二人がその後ろに立っていた二人の前を通るとテーピングをした少女の後ろに立っていた人物は、テーピングの少女の後ろを付いて行き、味気の無い剣を下げた少年が赤髪の少女の後ろをついで行く。

「僕と童子、寿々花と礎々石、葉結と結芽は会場の警備、夜見と明夜は紫様の護衛を」

5人が渡り廊下に入った所で、渡り廊下の柱と床で眠っていた二人も最後尾に着いて歩き出すと機械的な鞆を持つ少年が口を開ける。

「明夜おにーさん、今日こそ滑り落ちないでね」

「今日こそ大丈夫です」

「本当かなー。それで一回、沼に落ちたよね」

毛先だけが薄紫色の髪を持つ少年少女にからかう様に声を掛けられた塊を背負う少年は、フツと不敵に笑って見せ、今日は大丈夫だと言わんばかりに滑り止めがなされた靴底を見せる。

「それで滑るのが満月明夜と言う人間です。ご注意を」

鶴の翼を連想させる髪の少女が注意喚起を行うと前を歩く全員が横に寄った瞬間に明夜と呼ばれた少年の足から抵抗が無くなって渡り廊下の階段を頭から滑り落ちて行くが、寸前で写シという彼の同業者なら大抵が使える技術を使い、怪我は未然に防ぐも、誰よりも先に不恰好に降り切ってしまう。

「あわわわわわ!! だ、大丈夫ですか?」

「今日で28回目。案ずるな、滑る時間が来たただけだ」

「あいも変わらぬ不幸体質ですわね」

「だから警備をさせないんだ」

銀髪の人物は落ちた少年に声を掛けながら駆け下りて行き、味気の無い剣を下げる少年が笑いながら話すと赤髪の少女が頭を押さええながら呆れた様に告げ、テーピングの少女は昔を思い出す様に何処か遠い目をしながら告げる。

時間は少し進んで朝の爽やかな空気と明かりが包んだ時間。柳瀬姉弟と可奈美は御前試合の準決勝までを行う折神家の道場までやって来る。

3人は道場に入ると礼をしてから更に一步分深く入ると二階式となった観客席が見える様になった。

五角形に置かれたベンチには既に他校の生徒が座っており、雪の様な真っ白な白に鴉の羽を思わせる黒のセーラー服に同じ色の白を基調にボタンや襟、袖口やズボンの両サイドの縦の一本線に同色の黒を施した学ラン姿の生徒が4人。よく言えば伝統的、悪く言えば保守的な見た目だが、清楚な印象と何処よりも古いこれぞ綾小路武芸学舎の生徒という印象を受ける。

少し近代化した様な形状の綾小路よりも目に眩しく無い柔らかな白に薄い紫と橙色のネクタイを着用するセーラー服と襟と袖口、ズボンに何本も入ったラインが薄紫色に

柔らかな白を基調としたフォーマルタイプの制服に橙色のネクタイを着用した生徒が4人。前述の綾小路よりも些か近代的なその制服は学生らしさの中に大人な印象を隠し味程度に匂わせ、首都圏を守護するに相応しい鎌府共学院の生徒だ。

その隣に胸を強調する様なデザインの白と茶に黄橙を混ぜた色の長船学園の女子制服の二人にセーラー服を男性が着たがる様な鋭角なデザインを取り入れ、上着を白を基調に袖口は茶黄橙茶のサンドされたラインが走り、ツーピース構造のヒラヒラとした襟は白と茶。肩と胸元の布は黄橙に黒いスカーフを巻き、下は上とは少し違う濃い茶を基調に太腿外側に黄橙、裾に白のラインが走った男性制服の生徒が二人。

長船の隣には緑を基調とした制服に身を包んだ生徒が4人居た。女子の制服はワンピースに胸元だけを覆うセーラー服風の上着を付けた様なデザインだが、男子生徒のそれは肋骨短衣という胸元から臍にかけて肋骨の様に飾り紐が入っている制服。色は緑を基調として紐は黄緑、ズボンの外側にだけ白いラインが縦に走り、肩から袖口までのデザインは女子制服と同様のデザインを採用している。

「舞衣、可奈美、慧土くーん」

そして2階には美濃関の制服に身を包んだ女子生徒に混じるのは黒い長方形のボタンを二列に並べた上着の襟と袖口が赤の記生地を使った美濃関の男子用制服を着る人物。

その人物を見た可奈美が声を掛ける。

「来てくれたんだー!」

「当たり前。親友達の大舞台なんだから」

そう言つて手を振るのは黒い髪を後ろで一房に纏めただけの少年。とりだかむい鳥多勝武居。

可奈美は勿論ながら柳瀬姉弟とも親友の関係を築いている。インフルエンザが原因で不参加だったが、不調でなければ決勝進出も可能どころか御前試合優勝も夢では無いと言われる程の実力は持っている。

「うん?」

勝武居が何かに気付いて目を向けると周りの生徒達が騒ぎ始める。

「あの人、獅童さんだ! 親衛隊の」

VIP席とも言える場所から現れたのは茶にオレンジが混じった髪色に燻んだ茶の服を着込み、腕にテーピングを施した刀使。

獅童真希が現れる。

「前回、前々回の優勝者……」

平城学館の割り当てられたベンチからも黒い前髪に向こう側から赤い目で獅童を見つめる少年が呟くと隣に座っていた別の代表である男子生徒が茶化して来るがそれを真つ向から否定する。

「奴には雪辱がある」

「ま、俺と当たるまでは応援してやるよ、ていと帝人」

帝人と呼ばれた人物はそつと黒い長髪を持つ女子生徒を横目で見る。見られた人物はまるで何かを不満に思うように獅童の事を見ていた。

「今年は中等部の年少者が多いようですね」

獅童の後ろから赤髪に青い目の少女が歩み寄り獅童の隣に立つ。

獅童と同じ親衛隊の制服に身を包む此花寿々花だ。

「御刀との相性は年少時の方が高いとも言おうし、次世代になったのさ」

「前世代はお前が終わらしたのか？」

味気の無い剣に青緑の髪に薄黄色の目をした少年が背後から声を掛ける。彼はこけいししきぎし苔石礎々石。

彼も親衛隊の服に腕を通して居るが男性故にデザインが反転している。

「ボクはそこまで自惚れじゃないよ」

「あの二人の強さは才能ですが、それに見合うだけの努力をしています」

少し離れた場所を見て回っていたのか遅れて到着したのは銀髪の親衛隊の服に身を

包んだ人物、ともえみむむ友衛童子だ。

友衛の登場に会場はざわざわと色めき立ち、女子生徒からは嫉妬や羨望の中に殺意が

混じった目を友衛に送っていた。

というのも、この友衛の見た目が美少女然とした風貌にも関わらず、身に纏う親衛隊の制服は男性デザインのもの。男性なのにそこら辺の女子が黙って退く事が出来るくらいには美人だ。

「お互いがお互いに超えたい、勝ちたいと思っただからこそです。あんな関係の人が居るって……」

羨ましいと思いませんか？　と言いながら、会場に目を向ける童子に対して、真希の視線は別の場所に行っていた。

「結芽、葉結を見ると自分なんてまだまだなのだと思います、同時に世界は広く、そして……」

獅童が影になっている場所で顔に腕を置いて壁に寄りかかっている男性用親衛隊制服を着る少年、はやぶさはゆ隼葉結を見ながら何かを言おうとした時に、放送が第一回戦の始まりを告げる。

道場には綾小路の女子生徒と赤い目の平城学館の女子生徒が出て来る。

寿々花は自分と童子の後輩が真希と礎々石の後輩が戦うという事で見える目が少し変わる。童子としても自分の後輩がよく知る人物の後輩と戦うという事で無意識ながら目に力が籠る。

「礼」

審判の言葉に互いに礼をする。

「双方、構え」

その指示で互いの刀を抜く。

「私達の後輩と貴女の後輩の一戦ですわね」

「負けるな」

此花の言葉に苔石が告げる。

「写シ」

審判の言葉で互いに写シを張ったのか身体が白く輝く。

「始め」

審判の声で互いに互いの流派の構えを取る。

最初は互いに読み合いが始まるが平城学館の生徒が刀使・武宮の使う高速移動、迅移を使って接近、反応出来なかつた綾小路の学生が腰を斜めに斬られて、床に転がる。

写シを張っていれば人体へのダメージは精神疲労と僅かな痛みだけで済まされる。腰を斬られた生徒は苦しそうな声を上げるが、無傷で横に転がる。

「それまで」

審判の声で試合は終わり、互いに最初の開始位置に戻ると審判の礼の指示に従って礼

をし合い、ベンチに戻る。

「第二試合。鎌府共学院、糸見沙耶香。美濃関学院、衛藤可奈美。前へ」

互いに前へ出ると第一試合と同じ行程を経て試合が始まる。

糸見はいきなりの迅移で接近し、可奈美は見ている者をヒヤヒヤとさせる光景を見せてしまうが、次第に迅移を使いながら素早く動き、糸見の攻撃に対応して行く。

そして糸見が当たらない攻撃に焦り始めたタイミングで可奈美が修める柳生新陰流の『相手の動きや考えを読み、それに乗って勝つ』と言う思想の元に糸見の動きと流れを読んだ末に肩を切って勝負を着ける。

そして次の試合では長船学園の生徒で巨大な太刀に小学生と間違えかねない程に低身長な生徒と舞衣との戦い。

巨大な太刀での振り下ろしを横に動いて躲した舞衣が一刀の元に斬り伏せて勝利を収める。

その後も何度か試合は続き、いよいよ彗士の番。相手は身長2mにも達する巨漢に丁度良いサイズ感の腰鉈。圧倒的にパワーと射程距離で負けてこそいる彗士だが、開始と同時に腰に刺していた御守りのチロリアンナイフを抜いて投擲、脳天を切り裂く様に貫通して壁に刺さり、巨体は床に沈む。

無事に勝利を収めるも、姉から御前試合でする行為では無いと注意を受ける。

次の試合は金髪の長船学園の生徒と綾小路の生徒だが、特にこれと言った事は無いまま長船が勝利を収めた。

平城の武宮と鎌府の武宮だが、鎌府の方がグローブに付けたメリケンサックという武器を構える。拳で殴る際に指の保護と威力強化を行う為の道具で基本は格闘技故に連発がしやすいが距離が少ない。だが、始めの合図と同時に腹に潜り込んでダブルパンチを腹に直撃させた事で相手は吹き飛び、勝負を終わらせる。

その後も試合は続き、遂に準々決勝で最悪の展開。同校での試合が始まる。

「(慧士とは何百回と打ち合ってきた、互いに手の内は！)」

「(お姉ちゃんの防御は早々に崩せる物じゃ無い、我慢！)」

双子の姉弟の慧士と舞衣。普段から手合わせをしているメンバーでもある二人は互いの手札は知れているし、知れてしまっている。

二人は試合運びを自分の手札を重ね合わせて勝ちを手に入れるに行く。

「逆手！」

獅童が驚く。

慧士の武器は薄刃と言えどサイズは打刀。逆手で持てなくは無いが、するサイズかと問われればそうではない。だが、意外性では舞衣が上を行った。

「居合なんて！」

此花があり得ないと声を上げるが、苔石はそう来たかと感心する。

舞衣は床に両膝を付き、腰を上げた居合の構え。

居合は急な戦闘や暗殺の技と言われるが、理論上では最速の斬りを放てる。

「(彗士の戦い方は対荒魂特化の返し技。向かって来る敵に対しては強いけど、これなら！)」

「(元々は常人が荒魂と戦う為の流派の私に合わせたの待ちの姿勢。投げナイフは使えない)」

実戦なら当の昔に彗士の勝ちだが、これは試合。

彗士の流派、會凛厳狩猟術は常人が荒魂と戦う為の技でゾリンゲンの斬れ味鋭い刃物に荒魂の突っ込んで来る勢いを利用して荒魂を倒す技。向こうから突っ込んで来る事を前提にした返しの流派。

対して居合は待ちの技。向こうから迫るか予め射程内の敵を素早く斬り伏せる技。

「フウ……」

このままではいつまで経っても終わらない。

だからこそ、彗士は切り札を切る。會凛厳狩猟術唯一の自分から攻撃する技。動けない相手に確実にトドメを刺す為の横の一撃。それを姿勢を低くして獣が飛び込む様な構えを見せる。

「Wir 我 jagen 等 in が der 狩 Tod り」
て
屠
る
の
み

そして彗士が告げたのはゾリンゲンの武宮に当たる人物が出撃前や接敵に告げる御呪いの様な物。同時にこれは目の前の獲物を狩つて屠る事を現した宣誓でもある。これを告げた瞬間に彼の中から家族の情は消え失せた。

そこにあるのは狩人とその前に現れてしまった武器を持った二足歩行の獲物と言う関係のみ。

混じり気無しの純粹過ぎるまでの殺意。生きて、勝つて狩つて、今日の命と明日の命を得る為の狩り。

彗士が跳び、迅移で加速する。そして二人は互いの射程範囲に互いを捉えると全く同時に刃を煌めかせた。

「負け……た……よ」

腰を一刀両断された彗士の写シが床に転がり、下半身のあつた場所に五体満足の彗士が倒れ込む。

舞衣は振り切つた刀を振り、鞘に戻すが、写シを張つた舞衣の鼻が一文字に切り裂かれていた。

第三話 御前試合 後半

時は進み準決勝第二ブロック。

「兄さん。棄権は頼んでも……しないですよね」

鋒が両刃造の造りが特殊な刀を構えた少女が兄と呼ぶ人物に説得しようとするが、長い付き合いから引く筈が無いと途中で確信する。

「ああ、彼奴に借りを返さねばならないからな」

黒い刀身に白い筋が不規則に入った黒雲母を刀身にした様な刀を持って対峙する少年は申し訳無さそうに笑いながら告げる。

二人は平城学館の制服。そしてどっちが勝ってもおかしくないどころか油断しなくても負けかねない相手だ。二人は否応無く警戒し、可能なら戦いたくないと言うのが女子生徒の本音だ。

二人は共に性を十条。名をそれぞれに姫和、帝人と呼ぶ。

奇しくも先程の試合同様双子だが、兄妹と言う違いしか無かった。

動き出したのは妹の方、姫和からだった。

迅移で接近して両手での横振りを放つも両手持ちで刀を立てられて防がれてしまう。

そして兄の方、帝人は刀使と武宮が使える特殊な能力の一つで筋力を大幅に強化する八幡力という能力を利用して姫和の刀、小鳥丸を大きく弾くと同時に上段斬りの構えを作るが、姫和はギリギリで身体を逸らして回避に成功するも八幡力を使った無理矢理のブレイキで姫和の心臓に向けて、身体ごと捻る様な突きを放つ。

姫和は度重なる追撃に意地で腰を後ろに曲げて躲し、床を転がって回避。素早く体勢を整える。

整えるまでに一撃入れられそうな隙はあつた筈だが、帝人はそのまま構えを直して姫和が復帰するのを警戒しながら待っていた。

「舐めているんですか！」

隙が有つたのに攻撃して来なかつた事に姫和は激昂する。

「落ち着け、感情の乱れは呼吸の乱れ、呼吸の乱れは太刀筋の乱れに繋がる」

両手に持った刀を

「それでは雪辱を晴らせませんよ」

「あいつには容赦無しで行かせて貰うさ」

今度は帝人の方から襲い掛かる。

迅移で移動してからの素早い横振りを姫和は素早く打ち払い、首筋を斬ろうと袈裟斬りを放つが帝人はその一撃を柄頭で受け止めて見せる。

「変則防御か」

「昔の貴方みたいですからね」

「護拳がないだけでかなり難しい技術だぞ」

此花が横目で苔石の事を見ながら告げれば、彼も昔の事を思い出した様に自分の劍の柄頭を撫でながら、向こうの方が上手だと賞賛する。

親衛隊にも少ないながらも印象を与えた二人だが、その親衛隊の眼下で打ち合いは加速する。

帝人は獅童との再戦も考えているのか放つ技は今までの試合で使った技をより速く、試合中にも加速させて行く。そしてそれは姫和に取っては全力を出してこない兄への憤りとなる。

「はああー！」

全力での打ち上げに刀をかち上げられた帝人は迅移で後退しようとするが姫和はそれを読んでおり、帝人よりも速い迅移で追撃し、突きの姿勢を見せる。

帝人も逃げられず、防御も無理と悟ったのか刀を回転。両手で逆手持ちの様な持ち方に変えて、顔を突こうとする。だが、姫和は頭を傾けた事で回避に成功。帝人の刀は姫和の写シの片耳だけを削ぎ落とし、姫和の刀は帝人の写シが張られた心臓を貫き、横に振られた事で大きく写シを損傷。その場で横に倒れる。

二人は礼をすると揃ってベンチへと戻って行く。

平城学館の二人に他の代表の二人はなんと言えば良いかと思つたが帝人が姫和の頭を撫でる。

「強くなつたな。決勝、勝てよ」

「……はぐ」

姫和の目尻に申し訳無さから来る涙には誰も気付けないまま、舞台は決勝の会場となる本殿白洲へと移る。

折神家の本殿の一部である古風ながら厳かな雰囲気佇む。

そんな場所に建物の奥から一人の女性が親衛隊の服を着た二人の刀使と武官を連れて現れる。

折神紫。救国の英雄と称されるだけの女傑にして、古来の朝廷より御刀の管理を任せ、現在でも政府から管理を委託されている一族であり、その役割は警察庁特別武器類管理局、その局長と言う形で続けられている。

そして武器管理局は全ての刀使・武官の頂点に立つ存在でもあり、伍箇伝という刀使・武宮育成機関の管理も行っている。

折神家に仕えている親衛隊も含めて、殆どの刀使から尊敬と憧れの眼差しが向けられており、刀使に関わるもので知らない人はいないであろう。

そして、その姿を見た者は二つに分かれる。

二十年前の相模湾岸大災厄という巨大な荒魂、大荒魂討伐の特務隊に選ばれ、荒魂と交戦した上で勝利。生還する程の実力者。

英雄と言われるだけの力を持つ武人とだけあつてカッコいいと言う印象を受けた後に同性ですら羨む程の美貌を脳が把握するだろう。事実大抵の人物はその美貌を羨むだろうが中にはこんな者もいる。

何故、二十年前と変わらない姿を維持できる、と。

二十年前の写真と比べれば、目付きこそ環境の差で変わるだろうがそれ以外の場所も月日は否応無く変える。それが彼女には無い。

そんな不審に思う者が居ながらも試合の進行は進んで行き、遂に二人の決勝進出者が白砂の上に引かれた絨毯の上に姿を現わす。

二人は今までの試合通り、審判の声に反応して刀を抜き、写シを張り、それぞれの構えを取る。

姫和は肘を前に出して、刀は首から顎の位置に来る様に構える車の構えを取り、可奈美は姫和の構えを見て、刀を下げて様子を伺うが直ぐに刀を元の位置に戻す。

そして姫和は消えた。いや、視覚では追い付けない程の速度を叩き出す迅移で移動したのだ。

折神紫の元へ。

「それがお前の一つの太刀か」

だが、姫和の神速の突きは紫が持つ二振りの刀に払い除けられた。姫和は止められる筈が無いと思っていた己の全てを賭けた一撃を払われた事、そして奇襲だったにも関わらず動揺一つ見せずに対処しきつた折神への驚愕で一瞬だけ動きを止めてしまう。

「くっ……」

この日の為だけに積み重ねた修練によつて生み出された迅移からの突き技を払われた姫和だが、それだけで諦める様な少女ではない。

直ぐに一步分飛び退き、再び突きを放とうとした瞬間に苔石が左腕を楯の様に構えながら折神と姫和の間に飛び込んで、姫和の突きを受け止めると同時に背後から獅童に胸を突かれた。

姫和は獅童からの一撃で写シが剥がされ、そのダメージから床に座り込んでしまう。「動くな」

鋒両刃造の剣先、片側は通常の刃、逆側は突けば肉を引き裂き、抵抗少なく抜き易い角度の鋸刃が設けられた改造ワイドレイピアの様な形状をした極彩色の剣が姫和の首筋に苔石の手で添えられて、動きを封じ、獅童は御刀を上段に構えて姫和を無表情に見つめる。

姫和は床に座り込んだまま、前の苔石と後ろの獅童を見て、僅かに口が動いたと同時に獅童が無言で上段に構え直した刀を振り下ろそうとしたその瞬間に、可奈美が獅童の刀を斬り払い、帝人が姫和を迅移で白砂の場所まで連れ去る。

「臯月は離れるな」

チューブ弾倉がエストックの様に長いポンプアクション式のシヨットガンを使用する満月が逃げる三人に銃口を向けるが折神に撃つなど命令され、直ぐに銃口を地面に向ける。だが、追うなど命令されていないと隼と燕が迅移で三人の前に飛び出す様に移動し、お互いに平正眼と言う構えで立ち塞がる。

「(天然理心流……?)」

その構えから流派を絞った可奈美は燕と交戦に入り、姫和も可奈美に即席であるが合わせて交戦し、帝人は脛狙いで蹴りを隼に仕掛けるが横飛びで躲され、側面から平突きを放たれる。

「ッシー！」

帝人は平突きに対して勢い良く振った刀で突きを弾くと同時に斬りかかる。

「おっとー！」

迫る刃を腰を後ろに倒して刃を回避すると同時にバク転で距離を離し、射程外へと逃れる。

「跳んで逃げろ！」

その隙に刀使達を逃す為に白砂を蹴り上げて二人の視界を奪う帝人に燕が素早く白砂を剣末で吹き飛ばし、隼が迅移で帝人に斬りかかる。

「逃げなくて良かったの？」

子供が話す様に無邪気な声で話しながら、円を描く様に唐竹、逆袈裟斬り、袈裟斬りと流れる様に連発されるがどの一撃もそこまで脅威に感じない。太刀筋こそ速く、綺麗に見えるが、何処か棒振り芸に近い。いや、棒振り芸から卒業したばかりの様な太刀筋とも見える。

「(なんだ、この感じ……何かに……)」

「何かが足りてないじゃない？」

帝人の『似ている』と言う言葉が内心であつたにも関わらず消えて、脳裏の奥に飲み込まれる。自分の太刀筋に文句を言われるのはまだ、学生武宮故に致し方無いとわかっているが、棒振り芸卒業直後の様な奴に言われると腹が立つのは当然だ。

「そんな太刀筋しか出来ない貴様に何が！」

隼の腹を蹴りつけて距離を離すと八幡力で門の上へと上がり、燕を八幡力を使って罅迫り合いから無理矢理に吹き飛ばした武宮も後に続き、先に白洲を脱出した二人を追い掛ける。

隼も追い掛けようと膝を曲げたが、折神の追撃禁止の命令を聞いて、直ぐに刀に付いた血を振るい落とす様に刀を払う動作をして鞘にしまった瞬間。

「!? 葉結!」

空間が振れ、中から鬼瓦に輪つかと細い足が四本生えた黒と赤の塊、荒魂が姿を現わすも隼は刀を納めた後に加えて、抜刀術も居合道も納めていない。不味いと感じた獅童が迅移で割って入ると同時に荒魂を斬って捨てる。

「真希! 油断するな!」

そう言って背後に立っていたのは苔石。写シを張った皮の籠手で受け止めるのは同じように鬼瓦の顔を付けたヤスデの様な体型の荒魂に改造ワイドレイピアを突き立て、獅童と隼を助けていた。

「すまない。それとこれは……」

隼が打ち払った鬼瓦に車輪の荒魂を獅童が斬り伏せながら、背後に背中合わせで立つ苔石に告げる。

「ああ、く最近になって多発する奴だな」

飛び込んでくる鬼瓦を突き技で迎撃し、別方向から来る鬼瓦に蹴っ飛ばして妨害すると妨害された鬼瓦は隼に切り捨てられる。

「関東圏の局地的大発生ね」

突き殺したばかりの荒魂を蹴り飛ばして、友衛が合流する。

「ああ、もう！ 来るならいつぺんに来てよ！」

燕がイラついた様に叫ぶ。

荒魂は同時に纏めてでは無く、親衛隊が一体倒す間にもう一体現れる程の出現速度で逆に誰もフリーに出来ない。さらにどこに現れるか予想出来ない為に不要に動く訳にいかず、親衛隊同士で比較的固まった状態で荒魂に包囲される。

「流石に他の伍箇伝生徒が心配だ」

そう言つて周囲を見渡せば、突然の荒魂大量発生に驚きながらそれぞれがそれぞれの御刀を抜いて交戦している。

引率を頼まれているのか高等部と思しき人物達が必死に自分達の生徒だけでも指揮下に置こうと騒ぎ立てており、その所為で指示が混ざり合い、経験の浅い中等部の生徒達が危険に晒されている。

それでも壊滅的で無いのは優秀な生徒の存在に伍箇伝を卒業後、ここの警備を専門にしている管理局配下の刀使や武官、経験豊かな鎌府の刀使や武官が居てくれたからこそだろう。しかし、それでも統率が取れていない状態での乱戦は乱闘とも言える。

乱闘は戦う者同士が敵味方問わず、互いに干渉し合ってしまう事から危険な状況が生まれ、それを助けようとした事でまた危険な状況が生まれると辛づる式に状況が悪く

なつて行く。

獅童と苔石の脳裏に焦りが疼きだした瞬間に鼓膜を揺らしたのか誰かの声や金属がぶつかり合う様な音では無く、何か爆発した音だった。

そして爆発音の後に金属の何かがスライドする音と軽い金属かプラスチックの様な物がバウンドする音が響く度に荒魂の顔が一体、また一体とひしゃげる様に潰されて行く。

「獅童さん、苔石さん、隼さん。紫様を安全、とは言い切れませんが取り上えず、危険度は低い所まではお連れしました。直ぐにここも片付きますよ」

そう告げたのは親衛隊所属の満月明夜。使用する武器は中身を全て新造パーツに交換し、チューブ弾倉を中身が空洞の鋭いエストックに改造した古い外観のポンプアクシオン式のシヨットガン。

ポンプを操作する度に銃口から球体状の弾丸が吐き出され、荒魂達を破壊とも言える倒し方をしながら、戦場を走り、給弾作業をしながら周りの生徒達に自分の学校の先輩の指示に従う様に喝を飛ばして回る。

銃と言う騒音を生む武器だが、あり得ないと思っていた場所で銃声がなれば良くも悪くも注目を浴びる。その注目を利用して、自分の言葉を聞かせ、状況を好転させて行く。そして彼が状況を変えるだけの働きが出来たのも銃声と言う騒音だけでなく、銃と言う

高い攻撃力を持つ武器を持って確実に荒魂を倒している事も大きく貢献していた。

「射手と言う存在価値を改めて実感したよ」

荒魂の発生が止まり、獅童がそつと声を漏らす。

静かになつた本殿白洲には無数の壊れたとも言える様な姿を晒す荒魂の亡骸と、白い砂に混じつて赤い散弾銃の葉莢が点々と転がっていた。

第四話 歪な友情と歪な愛情

荒魂出現の混乱に乗じて、折神紫襲撃犯の姫和はそれを援護してしまった、可奈美・帝人と共にとある神社に逃げ込むと3人共に荒い息を整える為に足を止める。

可奈美は石段に座り込んで、姫和は手を膝につけて、帝人は上を見上げるように息を吸っては吐いていた。

「此処までだ。別れよう」

姫和が可奈美と帝人を順に見ながら告げると可奈美はそれに対して反対意見を述べ、帝人も姫和の言葉に考え直す様に説得し始める。

その様子に姫和は自分の御刀の柄に手を添える。

「決着を付けたいと言っていたな」

可奈美は神社までの逃亡中に姫和との決着が着いていないからと言う理由で逃亡を助けたと告げており、姫和は可奈美を振りほどく為に此処で決着を付けてやると言うて、刀の鯉口を切る。

「待て。まずすべきは逃げるか隠れるか判断する事だ」

柄頭を押して姫和の御刀が鞘に戻る。帝人は抗議しようとして口を開いた姫和の口元に

指を押し付けて黙らせる。

「何かやり遂げないといけない事がある。そうだろ？　なら、此処で派手に動くのは悪手だ」

「そうだよ。さつきみたいに3人でやればどうにかなるよ」

「自分が何を言っているのかわかっているのか？」

姫和の言葉に可奈美はどうなるのかわかっているながらも着いて行くと目を見て宣言し、帝人は肩を竦めながら姫和を助けた以上は進退窮まった状態だと告げる。

「なら、姫和に着いて行く方が悔いは無い」

そう言った瞬間にパトカーのサイレンの音が二人の鼓膜を揺らす。

「お前の、本当の目的はなんだ？」

「え？　だから、安全な場所に一緒に逃げて、「なんの為に？」だから、力が戻ったら、ちゃんと試合してもらいたいから……」

疑いの目を向ける姫和の肩に帝人の手が置かれる。

「此奴はお前が考える様な事は考えていない。ただ、お前とちゃんとした試合で戦いたいだけだろう」

「はあ……」

姫和は諦めた様に溜息を吐くと好きにしろ、ただし邪魔になるなら見捨てると言っ

刀を納めると可奈美は好きにすると満面の笑みで告げる。
そんな可奈美の様子に帝人も溜息を吐いた。

「見た事の無い剣ね」

特別武具管理局の本部施設にある取り調べ室のとある一室に友衛と鳥田の姿に、記録係の職員に彼の剣を保持する鎌府の生徒の姿が有った。

「それに答える前に……」

鳥田が回転椅子に座ったまま鎌府の生徒が持つ自分の剣の柄を素早く掴むと中腹まで抜かれてからピタリと止まる。

突然の事に友衛も鎌府の生徒も動けずに目を見開いていた。

「と言う事もあり得るから、離れた方がいいと思うが？」

友衛は鳥田の行動に面食らいながらも、改善点の提示をありがとうと言いながら、鎌府の生徒達を自分の背後に立つ様に手振りで指示する。

「改めてだけど、見た事無い剣ね、こんな仕事してるから新しい武具の登録申請で写真は多く見るけど、こんな剣は見た事が無いわ」

そうやって鞘から剣を抜こうとするが抜けずに首を傾げる友衛に鳥田は笑いながら話す。

「祖父が鍛えた……と言うよりは削り出した物です」

「一本削り出し……腕の良い職人ね」

鞘ごと彼の剣を見物する友衛。

サイズ違いのダブルアックスが打刀程のサイズに幅広な両刃造の剣とも言える刀身の護拳の様に装着され。柄は両手でも片手でも振れる日本刀の柄がついた不思議な剣だった。

「それなり以上に名の知れた彫刻家です」

「成る程ね。美術には疎いからわからないけど……良い剣ね」

鎌府の生徒に剣を返し、本題に入ると前置きを置いてから告げる。

「今回の襲撃者、衛藤可奈美とは親しい関係よね？ 何か変わった事や連絡をしていた感じは？」

「昨日までインフルで自室待機の命令が出されていたから何とも、美濃関に確認してみてください、関係各所は把握してると思う」

「成る程ね。インフルに感染する前は？」

「特に変化は無かった。連絡も特にないかな？」

「3人の誰かとても面識は？」

「無いと思います」

「あの連携で？ 無茶があると思うけど？」

「手練れ同士で協調性が高い、他人に合わせやすい奴なら多少の連携は可能かと」

御前試合に出る程の猛者なら相手の動きに合わせようという意思があれば、多少は出来るかと告げる鳥田。

その目は自分なら出来るぞとも言いたげな目力が籠っていた。

「……取り調べは取り敢えず終わり。ただ、暫く此処に拘束させて貰うわ。不便は極力無いよう努める」

「でしょうね。一応は容疑者ですし……理解しますよ。お疲れ様でした」

そう言つて座つたまま頭を下げる鳥田に友衛も軽く頭を下げながらお疲れ様と告げて廊下に出る。

「随分と楽しそうな会話をしていましたわね」

廊下で先に待つていたのは取り調べを先に終えていた獅童・此花・苔石の三人。その中の此花が雰囲気が他の三人とは軽く感じる友衛に声を掛けて来ていた。

「ええ。一本削り出しで凄いい形の剣だったからついでね。鳥田と彫刻家に何か心当たりつて有りますか？」

「鳥田夕栄氏かな？ 世界的に一定以上の評価を得ている木材、金属問わずの彫刻家だ。妻は腕の良い拵職人と聞いている」

苔石が友衛の問いに答えると獅童がそんな事はいいと言って話を元に戻す。

「柳瀬舞衣は無関係だ」

「岩倉早苗も同じですわ」

「同じく柳瀬隼士もだな。ありや、嘘つけない末弟タイプだ」

「鳥田勝武居も何も知らないと思う」

沈黙が四人に降りると無防備に近づく影に気付いて、四人が顔を向けるとそこには満月と皐月の姿があつた。

「紫様に御刀を抜かせたのは、親衛隊として恥ずべき行為ですね。もう少し警戒すべきでした」

「親衛隊全員の責任です。貴方だけが背負うものでは」

満月の言葉に同意すると同時に全員の責任だと背負うものを軽くさせる様な発言をする皐月の言葉に他の全員も頷いて同意すると、此花が何かに気付いた。

「ちようど良いタイミングですから、此処で言わせて貰いますわ」

何を言うつもりだと男性陣達が内心ないし身体を身構える。こう言う時の此花が恐ろしいのを男性陣は経験で理解していた。

「何故、あの時の葉結と結芽の援護に真希さんが、そしてその援護に礎々石さん、童子さんが向かったんです？」

何を言っているんだと友衛が首を傾げると獅童・苔石は表情筋を固まらせる。どうやら、此花が言わんとする内容に今更ながら感付いた様だった。

「あなた達が向かえば、前衛が張れるメンバーが紫様の側に居なくなりますわよね？」

此花も皐月も親衛隊所属故にその実力はトップクラスだが、乱戦に飛び込んだ五人との試合では勝率より敗率の方が高い。つまり、実力は拮抗しているとも言える親衛隊だが、細かく見ればそこにも順位は存在する。

その中でもトップ5が揃って戦場に飛び出せば、護衛対象の紫には付くのは親衛隊でも実力が低いと言わざるを得ない三人。しかも満月に至っては銃と完全な後衛向きの武器に技術体系。銃剣もあくまでも近付かれた時の最終手段に過ぎず、前衛をする為の技術とは言い難い。

あの状況下に置いては折神紫に対する護衛の戦力は著しく低下している。護衛を任務とした彼等が取って良い戦術ではない事は確かだろう。

「あの状態なら三人か二人を紫様の近くまで下げて、私か夜見、ないしは私達二人と交替した方が適切だと思うのですが、違いますでしょうか？」

その言葉に全員が黙っていると皐月が口を開いた。

「間違っていないですね。そして私から言わせて貰えば、何故に離脱して直ぐに満月さんが動かれたのか疑問です。ただでさえ、戦力が不足気味だったにも関わらず、戦力過多の方に？」

「何人か連れ戻そうと思つたら予想以上にピンチでつい、ね？ お節介を」

「ついのお節介で荒魂の殆どを射殺したのかと突っ込みかけた苔石だが寸前で押し黙る。

満月は指揮者としても現場で動く人間にしても、その才能が最も輝く内の一つが窮地の状態での戦闘。

彼の剣を才能が輝いている時点で不味い状況であるが、輝けば凌げる確率は大幅に上がる為に、押されていたあの状況下では嬉しい援軍だったが、思考の正しさに対して行動の愚かさが目立つ。

「後はアレです。言わんとしている事は分かりますが、せめてものお願いです。此処は安全だと言いつつから離れて下さい」

「夜見の言う通りですわね。わたくし達は頼りになる殿方がいない状況下。しかも、いつ戦場が変わってもおかしくない場所の真つ只中に放置されて不安でしたわ」

その言葉に仲間を不安にさせてしまったと言う罪悪感からか顔を伏せる置いてけぼりされたメンバー以外の親衛隊。だが、此花が爆弾を放り投げる。

「か弱い乙女のその気持ち。あなた達に解りまして?」

ツポッと頬を朱に染めながら告げた此花に男性陣と獅童が一瞬で食い付いた。

「待て! 半分は同意しかねるぞ!」 「半分は言ってる事わからないな」 「心中お察ししますが、此ればかりは……」

順に苔石と獅童、友衛、満月である。満月は性格や戦い方故に致し方ないと此花も臯月も理解を示したが、前の三人の言葉に食って掛かった。

「わかりませんこと?」 「分かりませんか?」

シレッと臯月も此花の言葉に被せて同じだと主張する。

「いや、不安だった気持ちはわかるが、二人がか弱いと言う点に関しては同意出来ないかな?」

「か弱かったら、その服着れないでしょ?」

苔石と友衛が反論する。

か弱い女性が着れないのが親衛隊の制服だ。

「例え親衛隊と言えども、強い風が吹けば簡単に折れてしまう。そんな花の十代乙女でしてよ?」

花の十代の意味が違うだろうと獅童が突っ込みを入れると苔石のテンションが吹っ切れた。

「お前が、か弱い？ お前がか弱かったら一般の乙女は生まれてもこんじやろうが！」

此花の発言に苔石が壁を拳で殴りながら告げる。

あまりの衝撃発言についつい口調が荒れる苔石。

「それは失礼かと。ですが、私はあなた方ほど、前線で戦う能力は有りません」

「夜見のその言い分は分かるけど、此花さんがか弱いはちよつと……ねえ？」

皐月の言葉に友衛は答えると最後は同意を求める様に獅童に視線を向ける。

これでも上から数えた方が速い獅童相手に前回、前々回の決勝でぶつかり合つて、泥沼試合の末に敗北している。

それがか弱いと言われても同意しかねる。

「そうだね。ボクも寿々花と同じ乙女だけど」「その乙女は漢に女つて書きませんか？」
よーし、明夜は写シを張ろうか？ その喧嘩は言い値で買うよ」

獅童が御刀に手を伸ばしながら告げると満月も上等ですと言いながら、シヨットガンに手を掛ける。

流星にこんな場所で親衛隊同士が獲物を抜き合つて、やり合えばタダでは済まないと残りの四人がすかさず止めに入る。

二連覇の獅童と銃を扱う武宮では最強と言われかねない実力を持つ満月がぶつかり合えば、周囲の被害はタダでは済まされない。

御前試合で2位だった此花と三年と四年前の御前試合で優勝と準優勝を共に経験した友衛と苔石、実力こそ未知数だが親衛隊に居る事を認められている皐月の四名が力を合わせれば取り敢えず押さえ付けられる。

互いにライバル。だが、同時に友でもある親衛隊の日常とも言える歳相応のやり取りをする光景だった。

「東京の……東側か？」

トラックの荷台に紛れ込む事で鎌倉から離れた逃亡者三人の内の一人、十条帝人が荷台に張られたホロの間から見える景色を見ながら呟く。

「取り敢えず、岐阜と奈良は警戒されてるだろうな……取り敢えずは変装だな」

流石に御刀と制服では悪くも良くも目立つと変装をするように告げると可奈美の提案でギターケースとパーカーを買ってから宿へとやって来る。

で、此処で問題が発生する。

「あなた達、未成年？ 三人だけ？」

そう未成年が宿で泊まると言う事は大なり小なり疑われる。それも男女となれば、さらに怪しくなる。

宿の主人である女性から少し怪しまれる

「自分達はバンドをしまして。ライブで上京したのですが、些か初めての事で色々興奮していた所為か準備不足でして……」

帝人の言葉に主人も心当たりというか思い出があるのか、笑いながら三人を泊まらせる事に了承する。この際に同じ部屋を使う事を言及されるが未成年で節約したいし、親戚と妹だと告げるとなら良いかとそれ以上の言及はされずに部屋へと歩を進められた。

「兄さんは嘘が上手いな」

まるで皮肉る様な姫和の声が帝人が部屋に入つて鍵を掛けた瞬間に掛けられる。

「準備不足に兄妹なのは確かだろう？」

「そうだがな……取り敢えずだが、可奈美。悪いが夕食を買い出して来てくれ。適当に弁当かお握り、後はゼリー系の栄養食を」

ゼリー系の栄養食ならカロリーと栄養を手軽に取れる上に荷物も嵩張らない為に見える内を買っておく事にする為に買い出しを可奈美に頼んで人払いをした帝人はカーテンを閉めて、視界を遮ると此処に座れと言わんばかりに床を叩く。

姫和は何を話すつもりだと警戒しながら叩かれた床に座る。

「止めたりはしない。お前は辞めると言って殴るまで止まらないからな」

「なら、殴れば……」

「やらかした事が大き過ぎる。今更に辞めさせてどうなる？ 出頭させてはいお終いか

？ 紫様に刀を向けたんだ。無期で済めば良い方。最悪死刑だろ」

今のお前はテロリスト扱いだろうから、人権も法律も適用させない事は可能だろうと告げる。

「ならば、お前と破滅するまで進むのは当然だろう」

一興の言葉で姫和は殴り掛かろうと立ち上がろうと膝を動かした瞬間に襟首を掴まれて、先に頭突きを炸裂させられる。

姫和はクリーンヒットした頭を涙目になりながら抑える。

「お前と俺は唯一の家族だ。残された方を考える。それにな……」

姿勢を元に戻した帝人が続ける。

「本当なら助けるつもりは無かっただが、親衛隊第一席に斬られる時に兄さん、助けてって言っただろ。可愛い妹から助けてと言われたら助けるのが兄だ」

優しく姫和の頭を撫でながら告げる。

姫和は失敗しても自分だけが死ぬだけだと震える声で告げたが、姫和がやらかした事は身内が無関係で何も語られていなかったと言った所で証拠がない以上はこれからの

人生に大きく響く。

「家族なんだ」

その一言を聞いた姫和は久々とも言える程に兄の肩に抱き着いて甘えるかの様に頬を擦り付ける。

姫和は少し安心した様な微笑みを浮かべ、帝人は慈しむ様な微笑みを浮かべながら姫和の頭を優しく撫でる。

「迷惑を掛けるや自分だけ、なんて考えるな。たった一人の家族。迷惑を掛ける、助けて貰え。武宮になったのもお前を助ける為なんだから」

この日に帝人は何故に折神紫を襲ったのかは聞かず、そしてその理由が記されているだろう母への手紙を読む事も辞めた。

いつか、姫和の方から語るまでは無償の愛からくる手助けを続ける覚悟を決めた。

それこそ、姫和が目的を果たすまでに邪魔する者は世話になった先輩だろうと教師。国家権力の下で動いている者であろうと姫和を守る為なら斬って捨てるのも辞さない覚悟を。

そんな帝人が覚悟を決めた頃に日本の何処か。

「切れて……いる？」

一人の男性が抜けない様に刀を鞘に固定していた四本の鎖の内の一本が切れている事に気付いた。

「現れたのですね」

そんな男性の後ろから一人の女性が肩越しに刀を見ながら告げる。

「ああ。此処に来るまでに三本切れれば良いのだが……」

空は月明かりのない新月の夜故か、それとも別の理由故だろうか。

男性には星が異様に瞬いている様に見えた。

第五話 チョコミントは沼!

杉が生い茂る山の中の僅かにある平地に近い場所。ずっと前に開梱して平地にしたのか、その辺りに草は生えて居るが木は生えていない。

そんな場所にカーキ色の服を着た一人の老人と、平城学館の制服を着た一人の少年が立っている。

そんな二人を帝人が木の陰から覗き見る様な構図で見っていた。

「良いか。これはまもる為の剣であり、剣術だ」

懐かしいもう聞けない声に帝人の胸の内が震える。

それは死んでしまった己の祖父だった。

「これから先。二人か一人で生きて行く事になるだろう。親はいつまでも居ないからだ」

その言葉を後に帝人は嫌でも知った。身内が何かの呪いかの如く、立て続けに死んで行ったからだ。

「お前は男だ。今の若者が聞けば古めかしいと言うだろうが、お前は男としても、兄としても、妹の姫和を守らねばならない時が来るだろう。そんな時に無力ならどうなる」

帝人と少年、幼い時代の帝人が揃って拳を握る。

「その為にコレを教える。手に入れられるかどうかはお前次第だ。死ぬ気で付いて来い」

祖父が構えを取る。まるで本当に命をやり取りした事のある剣士だけが取れる覇気のある構えに、帝人も猿真似と言われそう同じ構えを見せた瞬間に視界はホワイトアウトし、視界が回復すれば、見慣れない天井が視界を埋めていた。

「……ああ……夢か」

朝になったのか、カーテンの隙間から朝日が帝人の瞼を突き抜けて来る感触に目を覚ました帝人が眩く。

「懐かしいな、爺ちゃんとの剣術修行」

帝人は昔の事を夢に見た事で祖父の教えと共に過去を思い出していた。少し遠い記憶、母が亡くなる少し前の事だろうか。

自分が死ぬば男手は自分だけになるからと色々教えてくれた。昔気質な所もあったが昔なら異端的な事でも現代なら普通や珍しいで済まされる様な行動もしていた。

祖父からは野外での活動に必要な知識や技術の他に何かあった時の為に掃除や料理の仕方。そして武宮になると夢を語った日から始まった剣術修行。

祖父が死去し、後を追う様に病死した母。期待する者は物言わぬ骨となり、居なく

なった。

武宮にならなくても良かったかもしれないが、祖父の妹を男としても兄としても守らなければならぬ時が来るかもしれない。そんな時に力が無ければ何も出来ない。

力は制御する為に必要な技術・意思が伴わなければ暴力となり、道具が無ければ無力となる。姫和を守る為に自分は『平穏』を選べたにも関わらず、それを選ばずに『守護』を選択した。

だからこそ、自分の腰には一振りの刀が収まっている。

それは同時に、大好きだった祖父の言葉を捨てず、生前に結んだ約束を守り続けると決意した日でもある。

「戻りたいなんて思わないよ。刀一本で護れるとこまで、姫和を守り抜く……」
この先に何が待っているようにも。

そんな言葉をあえて口にせず、抜いたのは黒雲母の様な刀身を持つ黒刀。

その黒刀を朝日に翳す。

黒い刀身を光がすり抜け、黒の色に混じって見えなかった白い筋以外の様々な濃さや色合いの黒で作られた波模様が浮かび上がる。

その模様を見ながら御刀の銘を呟く。

「御刀無銘愚鋼造」

帝人の御刀は愚鋼おろはがねと言う特殊な合金製の御刀で、珠鋼という鋼で作った姫和や可奈美達のような刀使が使う刀とは違う鋼で鍛えられている。

抜いた御刀には若干な刃こぼれがある事に気付いた帝人。獲物を切り易い物打ちからは少し逸れているが、放つては置けない位置と事象に手入れをする事を決める。

「珠鋼の武器が羨ましい、」

そう言いながら、姫和の御刀に目をやる。

珠鋼で作られた御刀は錆びず、欠けず、曲がらず、折れずを行く、鋼材として最良最高のもの。対して愚鋼は荒魂に抵抗出来る武器を多く手に入れられる人工物に近い人間が作り出した鋼材。故に錆び、欠け、曲がり、折れる。

ただ、帝人の場合は鋼材の良し悪しもそうだが、姫和の持つ御刀が御刀だからでもあるのだが、それは追々に語るとしよう。

「そこまでの手間が無いのが救いだな」

愚鋼は元となる特殊な鋼があり、その特殊な鋼、もしくはその鋼を含む鋼から作られた武器には一つづつに存在する特殊な手入れがある。

その手入れの方法や手段は所有者が手に取って、御刀に認められた瞬間に直感で理解する。

「いつ見ても不思議だな」

帝人の御刀が日光に触れると徐々に刃こぼれしていた刃が再生するかの様に直って行く。

愚鋼や元となる特殊な鋼の武器はその武器一つ一つにある特殊な手入れを施す事で錆びは取れ、欠けた刃は戻り、曲がりも戻り、折れた刃は再び繋がるといふ不思議な能力を持っている。

「こういう時でも簡単に出来る内容なのが有難いな」

彼の御刀の場合は日光ないし月光に晒す事である。

曇りでない限りはごく僅かずつだが、斬れ味を維持しながら戦えるある種では当たりの愚鋼の御刀だ。

「時刻は……」

祖父から貰った男なら持つておけと言われたゼンマイ式の古い懐中時計は朝の4時を指している。

早く動くのも手だが、姫和の消耗具合を考慮しながら姫和に視線を向ける。

「無防備な顔しちゃって」

兄が居るからだろうか。御刀を抱きながらの睡眠だが、その寝顔は年相応なあどけなく、無防備な寝顔だった。その寝顔を見るともう少し後に起こす事して、御刀を日光が触れる場所に置き、逃亡中で無ければ、二度寝に入り込むんだがなど、自身に笑う。

姫和の寝顔に微笑みかけて、肩越しにカーテンの隙間から外を伺う。朝の早い時間なのか、追手らしい人物も車も見えなかった。

少し時間が進み、様々な人が通りに出始める時間に背中に一振りの剣を背負った人影がポツリと歩いていった。

「やはり、良い仕事をするな」

周囲に怪しまれない程度に目を光らせながら、呟くのは鳥田勝武居。

彼が今居るのは台東区と荒川区の境目辺り。舞衣が公衆電話から掛けられた可奈美からの電話に混じっていた公共放送の音声から台東区と荒川区に絞り込み、美濃関から舞衣・彗士・勝武居からなる志願捜索組が手分けして捜索していた。

「逃亡中に電話するか？　もしかしたら……」

勝武居が脳裏で推理する。

可奈美と姫和・帝人は知らない場所で繋がっており、可奈美は二人に脅されれ協力しており、可奈美としては助けて欲しいから不用意に電話を掛けた。何処かで二人の監視

を受けていたからこそ、僅かな時間に、特定情報を出せない言葉しか話せなかった。

「可奈美なら舞衣の聡明さもわかるだろうし……」

きつと混じった音から現在地を割り出してくれる筈と電話した。もしもそうでないなら電話など馬鹿な事はしない筈だと推理すると、早く助けださなければと拳を握り締めた瞬間に耳元のブルートゥースから着信を知らせる音楽は流れる。

〈へどうした?〉

〈へ可奈美ちゃんが宿泊してる宿を見つけました。周辺に移動して下さい〉

〈へ了解した〉

同じく捜索班である柳瀬舞衣からの連絡の後に携帯に座標が送り込まれ、勝武居は車道に出て、管理局から支給された車と運転手に合流。送られた座標地点へと向かう。

「動きが早い……」

都バスとすれ違った黒い車を見て帝人が呟く。

時刻は舞衣が宿泊した宿に突入を掛けたのと同じタイミング。合流と周辺警戒、待機

の為に動く彗士を乗せた車と帝人達三人は都バスですれ違っていた。

「ごめん……」

座席に座る可奈美が呟く。

帝人と姫和が話を聞くに、昨日の買い出しの時に公衆電話から友人の舞衣に心配無用と荷物を預かっていて欲しいと言う旨の短い電話をしていた。

「何をしているんだ……」

姫和が苛立ちを含んだ声を出すと帝人は落ち着けと姫和を頭を叩く様に撫で、可奈美と一緒に逃がっている時点で戻る道は無い事と、捕まれば同罪で後が無い故に暫くは勝手な事をするなど教えると座席に深く腰掛ける。

十条兄妹としての不幸は連絡を受け取った舞衣が聡明であり、武力以外での力が強かった事だろう。

舞衣の起点と柳瀬という一大グループ企業のトップの家系故にそれなりに顔の幅は聞く。

自分で手に入れた情報を調べるくらいは声を掛けるだけで差したりスクも無く実行出来る。

「取り敢えずだが、人の多い場所へ……」

周りに大勢の人間が居れば事を起こしにくくなり、紛れるのにも難易度は下がる。

今は兎に角だが、追っ手を振り切る必要がある。その為には周辺搜索をする部隊から逃げて、再び広範囲に搜索の手を伸ばす瞬間まで隠れなければならないだろう。

「で、観光に來た訳では無いんだが?」

そんなこんなで可奈美の提案もあつて新宿に來ていた。

この状況に帝人は冷静だった。

確かに日曜の朝と言えども、新宿だ。自分達くらいの学生と思しき制服を着た人もチラホラと見える。紛れるなら格好の場所と言えるだろう。

「こんな所で突つ立つてたら目立つっちゃうよ」

可奈美に引つ張られる姫和を追つて、帝人も歩を進める。

道中と言うべきタイミングでは、素なのかそうでないのか分からんが可奈美の余りにも自然体の態度に驚きつつも、可奈美に付き合う様な素振りを見せつつも、三人は姫和の発案でアイスクリームショップへと寄つて小休止を取る事にする。

「へえ、姫和ちゃんも帝人さんもチョココミント好きなの!」

「そうだな。アイスの中だと比較的口に合う方かもな」

姫和の言葉に帝人も口数少なく同意する。

「でも、チョココミントって苦くない? スーツとしてなんか歯磨き粉みたいで」「馬鹿!!」「馬鹿!!」

歯磨き粉みたいだと言った瞬間に二人から馬鹿と言われた可奈美が自分のアイスクリームを落とし掛けるが、辛うじて落下を防ぐ事に成功する。

「歯磨き粉を使われ易くする為にミントを使った訳であつて、チョコミントが歯磨き粉から生まれた訳では無い」

「チョコミントの有りか無しかでその例えは言い尽くされている！ 禁句と言つていい」

「そ、そうなんだ……」

「姫和は私以上にチョコミント好きだからな。まあ、この沼に引きずり込んだのは私だが。チョコミントって意外と沼だぞ。場所によって風味や味付けが違うんだ」

帝人がチョコミントのアイスを舐めながらチョコミントについて語る。

曰く、チョコミントには大きく分けて三つあり、ミント重視とチョコ重視、親和重視の三つだ。

ミント重視だとミントの独特な味や風味、清涼感などに比重を置き、ミントの味や風味を強くなり過ぎない程度にチョコの甘ったるさを与えて調整したアイスクリーム。

対してチョコ重視の場合はチョコの風味や味にこだわり、濃厚過ぎたり、甘過ぎたりするチョコをミントの風味や清涼感で整えるアイスクリーム。

親和重視だとミントもチョコもベストマッチな味と風味のものと言いたいのだが、意

外と当たりは少なく、大抵はミントも弱ければチョコも弱いと言う微妙なラインを行くので、誰でも食べられるがチョコミント愛好家には受けが宜しくない物が多い傾向にある。親和重視で美味しい店を知っていると言うのはチョコミント愛好家の中では結構レアな存在となる。

出典：チョコミント好きな人のセルユニゾンによる独断と偏見。

そんな事を語られた好きではない人の可奈美はごめんと押されながら言うしか無かった。

「ごっつちだ!」

彗士が雨粒を邪魔に思いながら、悲鳴を上げて逃げる人の波に逆らいながら突き進んでいると視界が突然に開き、先には腕を振って方向を示した後に走り去っていく勝武居の姿だった。

彗士は手元の携帯に目を落とす。

隼士の持つ携帯は刀使と武宮なら誰でも持つスペクトラムファインダーと呼ばれる機器で、無線・携帯の機能に加えて、荒魂の出現に反応して位置と最短ルートを割り出して荒魂の位置まで誘導する機械だ。

この機械の登場により、昔は使われていたスペクトラム計と呼ばれるものよりも迅速に発見、接触が出来る様になった。何故ならスペクトラム計は荒魂の元となるノロと言う液体金属が互いに引かれ合うと言う性質を利用した物で、経験を積みれば大体の距離や数が分かるが、そうでない人物が使うと大雑把な直線方向しかわからないと言う物だったからだ。

「これは!!」

隼士が遅れて到着した頃には既に飛び上がった可奈美の唐竹割りを空中で喰らって、翼を斬られた荒魂が待ち構えて居た帝人の袈裟斬りにより、首を刎ねられた直後だった。

「ノロの回収はどうする？ スペクトラムファインダーが無ければ、要請は「私が要請します」!!」

物言わぬ屍に変わり、甲殻の周りに荒魂の身体を作っていたノロが溶けたアイスの様に道路に流れ出る光景を背にしながら、帝人と姫和が声をした方向に柄を握りながら向き直る。

「お姉ちゃん!!」「舞衣! 早計すぎる!」

既に御刀を抜いて正眼に構える舞衣の両サイドを彗士と勝武居が慌てて声を掛ける。可奈美もよく知る親友とも呼べる相手が三人も集まっている事に驚きながらも御刀を抜いて向ける帝人と姫和に待つてと告げると如何して此処にいるのか問う。

「スペクトラムファインダーが此処を示した。その原因はそこに転がっているがな」
「でも、お陰で可奈美ちゃんに会えました。美濃関に帰りましょう。みんなが待つてます」

勝武居の言葉の後に彗士が言葉を紡ぐ。

二人は己の獲物を抜く訳では無いが、いつでも抜ける様に背中に縦に背負っている剣を腰に来る様に動かしてはいた。

「親友ならどうして御刀を向けている」

「親友だからこそ、だろう。私達二人は可奈美さんを誑かした罪人と云った所か?」

姫和の言葉に帝人が被せるとそこまでは思っていないと勝武居がそうは思っていないと慌てながらに告げるが、舞衣がその努力をぶち壊す様な言葉を紡ぐ。

「私は可奈美ちゃんの親友です。親友だから、可奈美ちゃんは私が助けます」

舞衣がこれ以上も話し合いは不要だと写シを張ると姫和と帝人も写シを張る。

その様子に可奈美と彗士が写シを張った三人に一旦は御刀を納めてと説得するが姫

和と帝人はその気は無い事を舞衣の目から感じ取っており、舞衣も舞衣で可奈美が十条兄妹と戻って来れば罪が軽くなる様に美濃関の学長である羽島江麻が掛け合ってくれと引く気を見せる素振りを見せない。

「悪いが、姫和はまだ捕まる訳にはいかないらしい。なら、活人剣を掲げる人間として、剣士として、刃を向けざるを得ない」

「結構です。私が力尽くでねじ伏せますから」

「やってみろ」

姫和と舞衣が迅移で移動。互いに剣をぶつけ合い、剣同士がぶつかった音が鳴ると同時に横合いから舞衣の腹を目指して帝人の突きが放たれる。

「やせませんー！」

その刃を彗士が踵落としを持って地面に落とすと踵落としを放った足を軸に横振りを帝人の腹に目掛けて振るう。

帝人はバックステップで回避すると同時に地面に刺さった自分の刀を地面から抜く。

その隙に姫和は舞衣に上段を放つも舞衣は御刀を横にして防御、振り払うと同時に袈裟斬りの体勢を作り、素早く放つが姫和は片手を御刀の峰に添える様を持って防御、迅移で後退する。

舞衣が上段斬りで後退した姫和に追撃を掛けるもその間に帝人が入り込んで舞衣の

上段を防御すると同時に腹を蹴り付けて引き剥がし、横から迫る彗士の一撃には片方で保持した柄での防御を試みながら左ストレートを放つ為に腕を引く姿勢を見せる。

「クソー」

まともな打ち合いでは彗士の武器は耐久性の意味で弱い。

まともな打ち合いを避けるべく、八幡力を使った急ブレーキから迅移を使ったバックステップで逃亡。

帝人が追撃を掛けるも途中で姫和を無茶に振り切った舞衣が飛び込んで帝人を抑える。そんな舞衣の背後に回り込んで袈裟斬りを放とうとした姫和に彗士は刀は振れない体勢だったが、わざと倒れる事で足を姫和の脛に鎌の様に引っ掛けると八幡力を使った無理矢理な足払いで転倒させる。

帝人は姫和を救う為に襟首を掴むと八幡力と迅移の同時併用で一旦ではあるが距離を取り、舞衣も同様の手段で彗士を助けて距離を取る。

姫和と彗士が同時に立ち上がると四人は迅移を持って再びぶつかり合う瞬間に可奈美の御刀が姫和と舞衣の御刀を、勝武居の剣が帝人と彗士の獲物を弾く。

帝人以外は一旦下がる。が、弾かれこそしたが、素早く勝武居に上段で斬りかかる帝人に勝武居は刃が付いている筈の刀身をガツチリと握って盾の様に受け止め、相手が備える前に柄の方を振り上げて大きく体勢を崩させた。

「ぬうおりゃー！」

剣先に握り直した剣が勝武居の八幡力抜きとは言え、全力のフルスイングで振るわれて、護拳の役割をもこなす斧の刃が首を切断とは行かずとも、半分程の深さまで突き刺さり、引き抜かれると帝人の写シが剥がれて、膝を降り掛けるが姫和が肩を持って素早く全員から距離を取る。

「ごめん、みんな。私も姫和ちゃんも帝人さんもまだ、捕まる訳には行かないの」
「どうして……」

「私、見たの……」

舞衣の言葉に可奈美は必死に語り掛ける。

姫和が折神紫に斬り掛かった時に折神紫は何もない空間から二振りの御刀を取り出して防いだ。その瞬間に可奈美にだけは、折神紫の背後に有って良い筈が無い物が見えていた。

その言葉に姫和はやはりなと何処か納得した様子で、それ以外のメンバーは何なのかと、動きを止めて可奈美の次なる言葉を聞き逃すまいと無言になる。

「一瞬だったし、見間違いかと思ったけど……やっぱり、アレは……」

可奈美の脳裏に姫和の一撃を弾いた折神紫が思い出される。

弾いた折神紫の首元を流れる髪の中に白目が黄色で、黒目が赤色の目が現れた光景

を。

「荒魂だった」

言い切った可奈美の言葉に可奈美以外の美濃閨三人は驚き、帝人に至っては可奈美が今回の荒魂討伐をする際の説得に『姫和ちゃんのやった事自体、おかしくなる』という言葉が使われた。

その言葉の意味を臆けながら予想していた帝人にとっては確信に至る程の情報だった故、驚きはせずとも、やはり筋肉がほんの一瞬だけ硬直した。

「荒魂……紫様が……嘘だろ……」

「そんな筈……あの人は折神家の当主様で……」

「大荒魂討伐の英雄だぞ、そんな人が、あり得ない」

彗士・舞衣・勝武居がそんな筈は無いと否定しようと紡いだ言葉はまるで嘘だと言いたくなる様に自己暗示を掛ける様な声だった。

「違う、奴は。折神紫の姿をした……大荒魂だ!」

姫和からも強く言い切って見せた言葉に彗士も、舞衣も、勝武居に至っても腕から力が抜ける。

「もしそれが本当なら、折神家も、管理局も、伍箇伝も……刀使も武宮も、全部……」
「ああ、荒魂が支配している」

姫和の言葉が紡がれた瞬間に隼士の絶叫は響く。まるでこの世の全てに怒り散らす様な叫び。

「じゃあ！俺たちは！なんの為に荒魂を狩って来たんだ！荒魂が遊ぶ為の駒なのか！ただの道具なのか！」

怒り散らす様に地面を殴る隼士の拳が無意識に八幡力が発動しているのか地面に小さいながらも亀裂とクレーターを作り始めると勝武居が腕を掴んで辞めさせると、隼士の胸を自身の剣で貫いて精神疲労と痛みで我に返させる。

「行け、可奈美。お前が自分から言い出した事はいつだって本気だった。俺たちは動くにしても、動けない立場になっている」

舞衣は勝武居の言葉に頷きながら写シを解き、御刀を鞘に納めると可奈美に近付き、証拠や調査の名目で押収された可奈美の荷物から唯一回収出来たクツキーの入った袋を手渡す。

「隼士が心配だから、ついて行けない。だから、またね……あ、十条さん」
何かを思い出した様に十条の名を呼んだ舞衣に姫和と帝人が振り返る。

「可奈美ちゃんを宜しくお願ひします」

そう言つて頭を下げる舞衣に姫和も帝人も自分の果たすべき事をするだけだと告げて去ろうとする。だが、帝人だけが戻り、舞衣と勝武居に写シを張れと言つて張らせる

と素早く片手で斬り付ける。

「捕縛の際に交戦。激しい交戦の末に斬られて敗北、取り逃がしたと伝えろ。面目は立つだろう」

そう言い残すと姫和と可奈美を追って帝人も消える。

「三河生まれだったら、惹かれる所だったな」

勝武居が地面に胡座を掻きながら呟いた言葉に落ち着いた隼士が声を掛ける。

「そこ重要なんですね。これからどうするんです?」

「取り敢えず、単独行動にさせてくれ。共倒れは避けるべきだ」

「なんか渡り鳥みたいですね」

舞衣がノロの回収要請をしながら、帝人に言われた通りの報告を上げる。

本当は上げたくなかった舞衣だが、勝武居から言えと無言のプレッシャーを掛けられて言わざるを得なかったのは本人達にはしか知り得ない情報だった。

第六話 鋼の種類

「居場所を特定出来ただけでもお手柄よ。あなた達は、戻って来て」

舞衣からの報告を聞いた美濃関の学長。羽島江麻の言葉に舞衣は了解と告げて通信を切る。

場所は鎌府共学園の中の機動本部。様々なサイズのPCにディスプレイが部屋に所狭しと並べられ、部屋の明かり以上に部屋を照らしてさえいる。

「美濃関の刀使と武宮の構成部隊。それもトツプクラスを退けるか、これは衛藤可奈美の関係は黒と見るべきだな」

手持ち無沙汰に椅子に座り、ジツポライターの蓋を開け締めしている苔石が声を漏らす。

「どうしてそう思いますの？」

「是非とも聞きたいな。時々言う、なんとなくは無しでな」

苔石の言葉に此花と獅童が問い掛ける。

苔石は椅子から立ち上がり、ライターをポケットに納めながら告げる。

「状況は分かりやすく三対三だった。もしも、衛藤可奈美が非協力的ないし脅されてな

ら二対三か二対四になる」

彼の仮定通りなら、美濃閔の三人は救援に近い。逃走中に関わらず電話をすると言う事は恐らくは居場所を知って欲しいと言う意味なのだろうと言う事は予想が着く。

「これで逃げられる程に平城兄妹が強いとは思えない。ならば、衛藤可奈美は二人に協力的な関係。簡単に言えば共犯者って事だ」

苔石の中で今回の襲撃に可奈美は脅されていたのでは、と言う疑惑は有った。だが、今回の報告で可奈美の協力関係が確固な物と見て問題が無いだけの状況証拠が揃ってしまった。

「成る程、確かに状況証拠は揃っている」

「交戦地点周辺に監視カメラは無いですし、これだけで判断する他ありませんわね」

だろうと苔石がドヤ顔を浮かべた瞬間にドアが開け放たれ、鎌府共学園の学長を務める高津雪那が現れる。

「賊の追跡は「関係者以外の立ち入りを禁止していたと思うのですが？」貴様!! 私を見下すか! 所詮は紫様の温情で拾われ、親衛隊の服に袖を通す分際で!」

高津の登場に給湯室から顔を出した友衛が高津に退出を口外に願いと高津は激情して、友衛を見下す様な発言をする。

「おどれ、もう一度「いいの」……ああ、わかったよ」

友衛を馬鹿にする様に発言に苔石が詰め寄ろうとすると友衛自身が手を翳して辞めろと指示を出す。

苔石も彼からの意思であればと無理矢理に怒りを沈めて、椅子に腰掛ける。

「私の事はなんと思つて貰つても結構です。ですが、今は関係者以外の出入りを禁止しています」

出て行つて下さいと扉を指し示す友衛に、高津はそれ以上は何も言わずに怒りと嫉妬を混ぜた様な視線で睨んでから、ドカドカと歩き去つて行くその際に周辺の監視カメラを解析する様に命令し、羽島と平城学館の学長の席に座る五条いろはに逆賊を育てた罪は重いと吐き捨てる。

「丁度いい時間ですね」

給湯室から響いたタイマーの音を聞いて本部の空気が変わる。

「気を張り詰めるの毒です。お茶でも飲みながら現状を再度確認しませんか？」

「そうやね」「頂こうかしら」

学長の二人がそれを了承した事で友衛が全員分のお茶を注いでいる間に獅童が口を開く。

「事件発生から30時間。この件に関しては箝口令を敷いています」

次に此花が口を動かす。

「御前試合に参加した他の生徒達も調査しましたわ」

次に苔石。

「だが、他に協力者は無し。三名のみの犯行のみと考えられる」

最後にお茶を注ぎ終えた友衛が明るい内容を告げる。

「他の生徒達も現状では拘束してますが、そろそろ解けるかと」

友衛の言葉に生徒思いの教師と言える二人の学長は目に見えてホッと息を吐くが、五條は逃げている三人を案ずるかの様に頬に手を置いて、どれだけの罪が被るのかと告げる。

少し時間は遡り、高津が本部を出て行った頃。

高津の歩く廊下の中央に二人の刀使と武宮と思える鎌府の生徒が立っていた。

二人の風貌は白の混じった銀髪にアメジストの様な瞳と並んでいれば双子だと思える程に似通っていた。

女子生徒は人形の様な可愛らしさに幼さを残した顔立ち。背中には一振りの水色の日本刀拵の柄に4枚花弁の丸い鏢のみと飾り気の無い御刀を黒い鞘に納めて背負っている。対して男子生徒は幼さを残しながらも十人中八人は振り返る程に整った顔だ

が、背中に黒い長方形の小型コンテナを背負い、手には電光受けて極彩色に輝く金属製の保護ブーツが付けられた指抜きグローブと少し恐怖心を煽られる。

「沙耶香、津佳沙。あなた達は東京に向かい、潜伏中の逆賊どもを討ち取るのよ」

「はい」

高津の指示に二人は揃って感情の抑揚がない声で返答する。人次第だが、この返事を薄気味悪く思う程の返事だったが、高津は気にしないどころかこの返答に満足した様に沙耶香の側頭部に片腕を添えて、軽く撫で付ける。

「試合で敗れこそしたけれど、私の評価は変わらないわ。貴女こそ我が鎌府が誇る最高の刀使。親衛隊の様な試作品とは違うわ」

その言葉を投げられた沙耶香も、聞こえた津佳沙も虚空を見つめる様な感情の無い目をしていた。

「此処か……」

とある建物の中で帝人と姫和。可奈美の三人は誰かを待っている様な素振りを見せ

ていた。

姫和はこの場所に来る様に告げた相手が管理局の手の者では無いかと警戒しているが、可奈美は舞衣から受け取ったクツキーの中に隠す様に入っていた手紙が舞衣の字では無いが、罨では無いと可奈美には何処か確信していた。

「何も無いんだ。もしも、管理局なら倒して逃げればいい」

「あー！ 居た居た！ びしょ濡れじゃない」

そんな三人に無警戒と言える程によく耳に通る声音に足音を立てて近付く相手に帝人は警戒を解く。

近付いた人物の手には両手で抱える程に紙袋が入ったビニール袋があるからでもあるが。

「貴女が姫和ちゃんやんで貴女が可奈美ちゃんね。で、貴方が帝人くんね」

「ええ。貴女は？」

「私、恩田累。宜しくね。はいはい、これ持つて」

そう行つて両手で抱えていた荷物を帝人に差し出すと、三人は互いに目をやつてから累の荷物を受け取り、累の車に乗り込んだ。

「羽島学長のお知り合い、ですか？」

「うん。私、美濃関出身だから」

暫く走っていると可奈美が累に話し掛ける。

「え、じゃあ、先輩なんですな」

「そう。羽島学長には今も良くして貰つてて、電話で三人のこと宜しくつてお願いされたの」

「では、あの手紙は？ まさか……」

帝人の口が開くと同時に車は信号待ちで止まると累は後部座席に振り返る。

「羽島学長よ」

そう言つて累は警戒心を解きたいのか笑つて見せるが、姫和は未だに警戒心を解いてはおらず、そのまま累の住まいであるマンションについてしまう。

部屋の中では元刀使であると言う言葉を聞いた姫和が警戒心を強めるが帝人が頭を軽く叩いて注意する光景に累は笑いながら今は管理局との繋がりは無いと告げると食事の準備をするからその間に入浴を勧める。

「あんなデカイ風呂があるのは羨ましいな」

そう言いながら部屋の襖を開けた帝人に姫和はもう少し警戒してはどうだと告げると警戒はミスを抑えるが時にはチャンス逃しかねない足枷にもなると告げる。

「ならば、せめて入浴中も御刀を持つて行つてはどうですか？」

「お前の珠鋼造と違ってこっちは愚鋼造だぞ。水で錆びる場合もある。最近は天候も安

定しないから錆び取りは出来ないんだぞ？」

愚鋼は通常の手入れでは錆や刃こぼれを直せない。直すには個体ごとにある手間や鍛え直さないと刃こぼれも錆も直せない少し面倒で特殊な鋼だ。

金やコネのある武宮や刀使は御刀にパウダーコートや別の金属を張り付けて錆の懸念を軽くするのだが、帝人はそれが出来ない為に錆に注意を払っている。

「状況が状況だ。私は、持っていく」

そう宣言すると御刀を持ったまま入浴の為に部屋を出て行く。

可奈美は空気を変えようと帝人に話し掛ける。

「帝人さんの御刀って愚鋼だったんですか！ てつきり、にきはがね和鋼造だと思っていました！」

「あんなレア物早々に手に入らないさ」

帝人がたははと軽く笑う。

和鋼。

ノロが変質した物体で時間経過で固まり、高温の熱で直ぐに粘度の高い液体状の鉄に変わる美しい鉱石の様な鋼だ。算出方法が荒魂を退治した際に倒し方次第と言われているが未だに解明しておらず奇跡の産物となっており、荒魂退治で和鋼を手に入れた刀使や武宮にはその和鋼を報酬として獲得。換金するか鋳物か削り出し武器にするか選べる。

ある程度の厚みがあれば曲がりもしなければ折れもしない御刀が作れる故に手に入れた刀使や武宮は武器にするのだが、御刀同様に使用者を武器側が選ぶので作ったは良いが選ばれなかつた場合がある。また、和鋼の入手自体が滅多に無い事と削り出し・鋳物の武器は伝統的、保守的な存在が多い武宮や刀使には人気が無く、作り方の問題か刃文が無いなどの理由で使いたがる者が少ない。

さらに愚鋼同様の手間を掛けなければ自然と錆びてしまうという弱点もある。

因みに愚鋼はこの和鋼をカサ増しする為にダマスカス鋼の作り方でやったら偶然に出来た量産品だ。

「御守りはどれでどこですか？」

そして愚鋼は大抵の人物は認められるが写シや八幡力、迅移が使えないという弱点があり、簡単に言えばただ単純に荒魂にダメージを与えられるだけの武器で使うのに適性があるという面倒くさい武器だ。

そんな武器を荒魂退治で使うにはセット運用される通称で御守りという道具がある。

「(ハ)だよ」

そう言つて見せたのは柄頭のカバーを外した下にある細長い六角形にカットされた和鋼で出来た護石の様な物だった。

御守りには二種類あり、帝人の持つ和鋼の御守り、和神の御守りと荒魂の甲殻から作

にぎかみ

られる禍神の御守りだ。

和神の御守りには同じ様に御守りごとにある特殊な手間により効力を維持する。

禍神の御守りに手間は要らないが長く使った時や所持していると悪夢を見やすくなる。ただし、禍神の御守りは珠鋼や和鋼、愚鋼の近くにあると悪夢を見せなくなる、悪夢の質がマシになる事から禍神の御守り使用者は刀使や和鋼、愚鋼の御刀を持つ人間と同室で寝たりする。

「和神の御守りなんです。 慧士くんは心鋼しんはがねの御刀だから、禍神の御守りを付けた鹿の足のナイフを持っているんだよ！」

心鋼。

職人達が心・誇りを込めて鍛えた物、神域や聖域と呼ばれる場所に祀られた物や鍛えられた物、受け継がれた物になるという御刀の一種だ。

ただし、上記の条件の一つを満たせば必ずしも出来る物ではないので奇跡の産物とされ、和鋼の次あたりにレアな御刀だが、中には探せば簡単に見つかるという程に心鋼を生産出来る場所もある。

対荒魂能力は持ち、八幡力を使う能力はあるが、迅移と写シが使えないので御守りとの併用は必須。また、折れたり、曲がったりはしなくなるがあくまでも通常の鋼なので、錆や切れ味低下はするので普段の手入れは必須。

「あの投げたナイフか。足になんか巻いていると思ったが、禍神の御守りだったのか」
　　隼士の投げたナイフだが、鹿の足の剥製を柄にすると言うアレな趣味だが、ドイツの一部では普通に見られるナイフの形式だ。それはナイフ販売・製造の会社のカタログにも載る位には主流だ。

　　そんな彼の柄の足だが、足を怪我しており、それを隠す意味でも足輪に禍神の御守りを付けて巻いている。

「そういえば、帝人くんの流派ってなんなの！　見た事ない動きだからよくわかんないんだよ」

「流派じゃなくて、術かな？　ただ、祖父から教わった術に我流、それに色んな流派の技を混ぜてるから……斬り方がなっている我流かな？」

　　我流と言うと良い顔をしなのが刀使だが、可奈美はそんな事は無く、輝く様な笑みを浮かべる、

「我流!!　今度、手合わせしてよ！　色々見てみたいな！　どの流派をどんな時に使うか見てみたい！」

　　絆が深まったからか、それと剣術の話になったからか、一定の物理的な距離を取っていた可奈美が言い迫る様に帝人との距離を詰め、流石の帝人も上体を反らして距離を取るが、帝人もやつぱり男子。同年代の女性に近寄られる。それも可奈美ほどの少女とな

れば嫌な気はしない。

そんな二人の様子を風呂上がりに見てしまった（見せられたとも言おう）事で若干ではあるが、不機嫌さを抱くも平静を装う姫和が合流。姫和の声に不機嫌さが混じっているなど帝人は思いながらも累と共に夕飯のハンバーガーを食べながらニュースで情報を収集。折神紫襲撃は伏せられている事を知る。

「警察発表はないみたいだね」

「混乱を避ける為か……」

一応はまだフットワークが軽い事に安堵する帝人の隣で御刀を抱える様に座る姫和が累に警戒心剥き出しの声で告げる。

「貴女は何を何処まで知っているんですか」

「一応、大体の事は知っているわ。あの、英雄折神紫様に御刀を向ける。なんてね。ま、余計な詮索はしないけど」

そのまま累は朝が早いからと寝てしまう。

「可奈美、兄さん。話がある」

姫和が異様に真剣味のある目で語り掛けて来た。

鎌倉。

御前試合へと来ていた生徒達は今回の一件に対して無関係であると判断され、箝口令を敷かれた今回の事を誰にも口外しないという誓約書にサインした生徒達がバスに乗って各校へと帰る日。

生徒達の中にはやはり、今回の一件で未だに捕まらない同じ学校の仲間を心配する声がある。

「みんな帰るんだ……」

「そりゃあね。自分から面倒事に首突っ込みたがる奴なんて……なあ？」

「その面倒事に首突っ込んでる阿保が目の前にいるんだが、殴っていいか？」

少し離れた場所で帰還する生徒達を見ながら話すのは、舞衣・隼士・勝武居。その側を鎌府の制服を着た二人の生徒が車に乗り込んで消えて行くのを勝武居だけが見つめる。

「急いだ方が良いな」

ゆつくりと静かに呟くと野暮用で席を外すと二人に告げようとしたが、何か二人の家族がビジネスパートナーという金髪碧眼の女性と話している光景を見て、何も言わずに

去る。

勝武居は二人から離れると指揮が取られている本部へと赴くと、目的の人物が居た事にホツとするとその目的の人物に近寄る。

「羽島学長、五條いろは学長。少しお時間を良いですか？ 少々お聞きしたい事が……」
羽島は勝武居の声に拒否は許さないと聞いたげな雰囲気を感じ取り、五條もそれを受け取り、羽島と五條は人気の無い場所であり、盗聴器などもないだろう場所として屋上を選ぶ。

勝武居としても大勢に聞かれるのは不味いとして二人の言葉に従う。

「で、話して何かしら？」

「真実をお聞かせ願いたい。二十年前の相模湾岸で起きた、あの日の事を……」

第七話 各々の過去

「真実をお聞かせ願いたい。二十年前の相模湾岸で起きた、あの日の事を……」

勝武居の言葉に学長の二人は固まる。

相模湾岸大災厄。

二十年前。正確には一九九八年九月に発生した観測史上最大規模の荒魂災害。

相模湾岸沖の事故により海中に大量のノロが流出、観測史上最大の荒魂と化した大荒魂は相模湾岸から上陸、北上し、藤沢市などで死者3千人を超える甚大な被害をもたらすという天災とも言える被害を振り撒き、この大荒魂討伐の為に警察の機動隊、自衛隊の全面協力の下、大荒魂を江の島に封じ込めることに成功。

封じ込めた大荒魂にトドメを刺すべく、特別祭祀機動隊による少数精鋭の特務隊によつて鎮圧された。

帰還した六名の特務隊は後に英雄視され、その戦績から折神紫は当主に、残りの五人はそれぞれの伍箇伝の学長に就任している。

「何を言っているかしら。二十年前の相模湾岸大災厄の事なら何度も授業で学んでいる筈よね？」

羽島が驚いた様子で告げる。羽島のその言葉に五條もその筈だと頷いて見せる。

伍箇伝だけで無く、一般の学校の授業でも当然の様に学ぶのが相模湾岸大災厄。

「それは存じています」

常識とも言える相模湾岸大災厄の内容を理解していると頷いて見せる勝武居。ならば、如何して自分達に聞きに来たのかと羽島は問う。

「歴史は時に指導者の都合で捻じ曲げられた事実を教えます。最近ではお隣さんの反日教育、古い物を言うならば日本の植民地だった国でのアメリカの教育然りです」

今、私が知りたいのは指導者が何かを隠す為に、誤認させる為に施す都合や調子のいい歴史では無く、当時を戦い、生き残った人間が実際に感じた体験と経験。如何に時間が過ぎようと、指導者達が都合良くしようとも変えられない。本当の真実を。

「羽島学長の口から大災厄に参加した事は伺っているのです、伍箇伝の学長が参加者と言う情報は真実でしょう。ですが、他の部分を知りたいのです」

「如何してか、聞かせてくれへん?」

「それをお話すれば、お話して頂けると、思つて宜しいですね?」

これでNOとは言わせないぞ。と、またも鋭い眼光を送り付ける勝武居。

そんな勝武居の眼光に様々な刀使や武宮と出会つて来た五條ですら彼程の眼光を見せる相手と会つた事は数える程しかなく、それも記憶が正しければ片手で事足りる。

「私が話せる事は全て話します」

「いろはさん……」

「堪忍な。流石に此処までの覚悟を匂わせられれば、話さないなんて選択はできへん。そうやる？」

「そうですか……」

未だに言い澁む羽島だが、勝武居は五條に頭を下げ、感謝を述べ、羽島学長は知っているとありますが、と前置きを置いて告げる。

「私は愛知、それも三河地方の生まれ。そして三河生まれの武宮は三河武士の末裔をも意味します。血筋だけでは無く、その精神、心の遺伝子を引き継ぎます。三河武士は忠義を、献身を果たすべき相手は……自分で決めます」

時の將軍、徳川家康の人望に惹かれて募った十万もの武士達。

その格式、家柄は長い時代の中で滅びた。しかし武宮がまだ、刀を主兵装に扱っていた刀宮と呼ばれていた時代に三河武士達は武士から刀宮へとその身を変え、古くより三河の地、そして愛知の地を守り続けた。

愛知の三河地方では中学入学前に御守りでの武宮選抜は行われ、選ばれた子供が志願し、親が同意すれば三河武宮とも呼べる教育を受ける事が出来る。

そしてその教育で自然と心の遺伝子と呼べる物は三河の地に刀宮、武宮の才を持って

生まれた者達に受け継がれて来た。

血筋だけではないずれ途絶える。だが、心の遺伝子^ミだけでも受け継げれば、決して途絶える事は無い。だからこそ、三河の武宮や刀使は三河武士としての信条を重視する。心に響かせる事が出来なければ、心の遺伝子^ムは遺伝しないからだ。

「ほな、あの時で私の知る限りの事をお話するな」

五條の口から語られる相模湾岸大災厄の事が語られる。

その内容は、五條の当時の状況故に知りたい情報は無かった故に勝武居の疑念を確信に至る程の情報は無かったが、その内容は今後の身の振り方を決め、そして誰に忠義を、献身をするべきかはつきりさせるには充分過ぎる代物だった。

羽島の口からも語られる内容も、当時は五條と同じ行動をしていた故に変わりは無かった。

「貴重なお話。ありがとうございます」

それだけ告げると勝武居は消える。

「面倒な事にならんとええけど」

五條の言葉に羽島は薄つすらと冷や汗を流しながらも、それを気付かれまいと努めて平静な声で同意の言葉を紡いだ。

「よし、全快だ」

「こつちも、ね」

累の自宅の一室。姫和と帝人は同じ部屋で自身のコンデションを整えていた。

姫和は御刀を構えて写シなどの状況を。帝人は朝日に当てて御刀の切れ味や刃こぼれを直していた。

「なんだ？ 兄さん」

「いや、少し羨ましいいなと思つてね」

そう言つて床に胡座を組んで座つていた帝人が立ち上がり、姫和の目から、その手に握られた姫和の御刀。小烏丸に向ける。

「またですか」

姫和の顔に仕方なさの中に若干な苛つきと呆れを混ぜた表情を浮かべながらも帝人の言葉を聞き、逃げる様に鞘の中へ御刀を納める。

「悪いな。如何しても小烏丸と言う刀には少し思う所があつてな」

そう言いながら帝人も自分の御刀を鞘に納める。鞘の作りは姫和と同じ物で金色の金具を地金だろうが、磨いた鉄の色剥き出しの物で姫和の物と差別化を図っている。

「わからないですね。兄さんのその感情」

帝人は姫和以外にはこの様な話は話さないが珠鋼造の御刀、特に小烏丸には姫和以上に何かしらの感情を抱いている。

羨望とも言える感情なのだが、姫和には何故そんな感情を珠鋼造の小烏丸に向けるのか。

姫和は一度、帝人の御刀を作り直して小烏丸の写しにすれば良いと言ったが、帝人はそれを拒否しており、姫和には余計に帝人の感情がわからなくなった。

「その内に分かると良いな」

帝人が腰のジョイントパーツに鞘をはめて背中に背負う様に保持させて全ての準備を終えた瞬間、リビングから何かが落ちる様な音が聞こえた事で二人は急いでリビングへと現れる。

「何をやっている……」

そこには慣れない掃除をしようとしたは良いが、逆に散らかしてしまった様な状態のリビングで落ちたゴミを拾おうとする可奈美が居た。

そんな光景に姫和が戸惑いを見せる声を発してしまふ。

「お世話になったから、せめて掃除くらいはと、思ったんだけど……」

涙目で訴える可奈美に姫和も帝人も同じ様な顔で肩を竦めた。

誰も居ない鎌府の廊下で勝武居の声が響く。

「鎌府の学長だが、度し難いな」

舞衣・彗士・勝武居は合流後に高津を交えて、もう一度の報告をしてくれと頼まれて、昨日に起きた一連の行動と顛末を報告したのだが、高津は荒魂退治やノ口の回収よりも反逆者である三人の捕縛を優先しろと叫んだのだ。

三河武士の末裔であり、心の遺伝子^ムを継ぐ者として、武宮の最重要責務は荒魂退治による被害の防止と再発防止にノ口の回収であり、折神紫ありきの高津とは徹底的にソリが合わない勝武居。

「私は高津学長のあの目が気に食わないです。人を道具の様に……いえ、道具としてしか見ていないあの目が嫌いです」

彗士の言葉に勝武居も頷いた瞬間。

「ねえねえ」

少女の声に三人がバツと素早く振り返る。その際に勝武居と彗士は自分の獲物に手を添えながら振り返る。

「せっかく見つけたのに逃げられちゃったって、ほんとう？」

壁に寄り掛かかる毛先が薄い青紫の桃髪の少女。

片手にはストラップを弄ぶ様に触り、身に付けた服は精鋭を意味する茶の服。

「貴女は、親衛隊の……」

舞衣の言葉を聞いて、ニツカリと笑うとゆつくりと鯉口を切り、迅移を発動。一瞬で距離を詰めて、舞衣の首筋に御刀、ニツカリ青江の剣先を首筋に添える。

「へえ……そつちの剣のおにーさんはやるね。そつちの刀のおにーさんは、ちよつと弱いかな」

舞衣の首筋に切つ先を添えられたのと同時に勝武居の剣に護拳として付けられていく斧頭の刃が頭部に添えられ、一息遅れてだが、隼士は親衛隊の少女の脇。それも的確に動脈が走っている場所に切つ先を添えていた。

「今すぐに御刀を納めろ。親衛隊第七席、燕結芽」

廊下の曲がり角から小走りであるが、走って来た同年代の少年が命令をする様に語りかけながら近寄ってくる。

その少年も来ている服は精鋭を意味する親衛隊の制服。

少女と同じデザインの上着を男性用に変えたデザインのものに同色のバックルで止めるタイプの布ベルトで締め付けて着る現代的な工夫がされた袴という何処か大正時代

に居そうな出で立ちと何処か風変わりな服装をしていた。

その顔は御刀を添える親衛隊の少女、燕に何処か似通った風貌だった。一目でわかる違いと言えば、肉の付き方が鍛えているのか武宮や刀使ならわかるのと、毛先が燕の薄い青紫に対して、薄い黄緑と言う事だろう。

「おにーさん方も、お願いします」

「こっちは仲間を殺されかけたんだ。そっちが納めなきや、納められないんだがな？」

それもそうですよね。と笑うと、爪先で軽く脹脛の後ろを小突いて御刀を納める様に無言の圧力を送る。

「はぁーい」

可愛げのある声で無言の圧力に応じると御刀を回す事で逆手に持ち直してから、鞘へと納める。

「第七席が失礼しました」

「いきなり御刀を抜いて向けてくるなんて……親衛隊はどんな組織なんですか？」

「御宅の精神教育がどうなっているのかお聞きしたい物だ。親衛隊第八席の隼葉結さんや」

隼士の声に勝武居が続け、自分よりも幼い親衛隊の少年に問い掛ける。

「親衛隊なんて新撰組みみたいな理由で選ばれてますから」

つまりは腕っ節重視で選んだからこうなっている腕を広げて、とぼける様な姿勢を見せるが、ここにいるメンバーは親衛隊がそんな理由で選出されているのを知っているが、問題らしい問題は折神紫のカリスマや忠義で如何にかなっていたのだが、それが効くのはそれを理解出来るだけの知性や感性を持つ相手のみ。

燕はそれが効かない程にまだ感性や知性が幼い故に少し本能や願望で動いてしまうのだと隼は告げる。

「子供故か。自己経験で言えば、子供の精神教育は意外と簡単だ。精神教育は言つてしまえば、体の良い洗脳に近い」

子供は洗脳がしやすいからな。と勝武居は告げる。

三河武士の教育も早くからするのは平均寿命の少ない当時の時代背景の時の様に極力早い内から教育すると言う伝統的、悪く言えば保守的な理由と精神教育がしやすいと言う目的もあつての事。

「親の教育はどうなっているんだ？」

そう言つた瞬間に勝武居の腕が掴まれ、背負い投げで床に叩きつけらる。

「……結芽にまともな親は居なかつた……」

怒りと悲しみを含んだ目を見て、勝武居は済まないと謝ると隼自身も自分も短慮だつたと言つて、燕が去つた方向へと去つて行く。

「すまない」

隼がそれだけ言い残す様に告げると曲がり角に消える。彼に勝武居の此方こそだ。と言ふ言葉が聞こえたかどうかは彼のみが知る事だろう。

「すつごーい。 姫和ちゃんも帝人くんも料理上手なんだねー」

台所で二人並んで料理の腕を振るう二人に可奈美が声を掛ける。

「まあな。料理全般はよく祖父と祖母に徹底して叩き込まれたよ。男も台所に立てないと」

帝人が作っているのは焼き鮭のだが、その目は真剣そのものでただの焼き魚を作っていると言う人間の目では無かった。

「以前はよく、兄さんと一緒に母親に作っていたんだ。最近は滅多にしないけどな」

そう話す姫和が作るのは得意の煮物だった。醤油ベースなのか煮えた醤油のいい香りが部屋を満たす。

「お母さん?」

「ああ」

姫和が答える。その目は寂しさと悲しき、そして何処かに怒りが含まれていた。

「私の母親も元は刀使だった。長患いの末、去年亡くなったがな」

沈黙する部屋の中で蛇口から垂れた水滴が弾けた音が聞こえた瞬間に可奈美の口が開く。

「そっか、二人のお母さんも」

可奈美の言葉で意外な共通点に姫和は首を傾けて、帝人はチラリと可奈美の顔を伺った。

第八話 極彩色のケン

「おお。引つ越して来たばかりみたいーい」

「お世話になったお礼に、私と姫和ちゃん。帝人くんを掃除しました」

可奈美の言葉に姫和は恥ずかしげに若干の俯きを、帝人は照れ笑いを浮かべながら顔を背ける。

「ありがとう。ん？ なに？？ いい匂い」

累の言葉に待つてましたと帝人が累を食卓が見える場所まで誘導する。

食卓の上には姫和の煮物に帝人の焼き鮭とご飯が並ぶ。

「おお」

久し振りに見る誰かが作ってくれた料理に累のテンションも上がる。

「姫和ちゃんと帝人くんが作ってくれましたー！」

「へえ。姫和ちゃんはわかるけど、帝人くんは意外だな」

累の言葉に向かい合つて座る姫和と帝人が同時に頬を薄つすらと朱に染めて俯く。

「どれどれ……うん！ 美味しい！ 何処かのお店みたいー！」

「別にそれくらいは……」

「ん!? 何この鮭! 火はしっかり通ってるのに全然硬くない!」

「焼けた魚と焼いた魚は違うらしいです。ちゃんと焼けていた様で良かったです」

累が二人の料理を心から賞賛すると姫和は恥ずかしげに、帝人は何処か遠くを見る様に告げる。

可奈美も二人の料理に舌鼓を打っていると累が軽い気持ちでこんな事を言い出す。

「帝人くんと姫和ちゃんってどっちが強いのか?」

累の言葉に可奈美も興味津々と言わんばかりに目を輝かせる。

帝人はそんな可奈美にお前は御前試合で自分は斬られたの見てただろ! と叫びたがったが、勝負は時の運。一勝無いし一敗は強さを計る上ではそこまで差がなく、偶然でも片付けられる。

「私です」

帝人がどう言った物かと顎に手を当てていると姫和が宣言すると累はお兄ちゃんとしてどうなのよと小突いて来ると目尻を軽い怒りでヒクつかせた帝人が口を動かす。

「あくまでも試合ではです。ルール無用の実戦なら私の方が上です」

そんな事を言ううと姫和は実戦形式の模擬戦で帝人が行った試合では即反則負け、嚴重注意、好ましく無い行為の数々を早口で捲し立てると帝人も姫和を規則で守られた甘ちゃんと言を突き付けながら告げた瞬間に二人が両腕を掴みあつて齒軋りをしながら

押し合っていると可奈美と累からチョップを貰って収まる。

「ねえ。後で三人に見て欲しい物があるの」

喧嘩後のなんとも言えない雰囲気を払拭したい累のそんな言葉に三人は何だろーかと思議そうな表情で累を見るが、累はこの話はおしまいと勝手に切り上げて、美味しい食事に舌鼓を打ちに戻っており、聞き出す事は出来なかった。

鎌府共学院に併設された本部。

「場所の特定に成功しました」

友衛がPCを操作しながら告げる。

搜索本部は偶然にも監視カメラが累と可奈美・姫和・帝人の三人を捉えた画像を入手。車のナンバーも映った画像の確保に成功。ナンバーから持ち主である累を見つけ、三人が潜伏するマンションの部屋も特定していた。

「持ち主は恩田累さんね。十年前まで美濃関出身の刀使で、現在は八幡電子株式会社に勤務してる」

大型ディスプレイに表示された累の画像を羽島が心配そうな顔で見つめているのを

五條だけが気付く。

「八幡電子？ そこつて……」

「八幡電子と言うと……」

苔石と獅童の言葉に此花が続ける。

「ええ。S 装備開発に携わっている一社ですわね」

場所を特定した事で確保の為の最終確認の段階に入ったのと同じタイミングで累の自室へと足を踏み入れた可奈美・帝人・姫和の三人は累の持つPCの画面を食い入る様に見ていた。

「ようこそ。グラデイのご友人達。我々は君達を歓迎する？ グラデイ？」

可奈美が累を見ながら、グラデイとは何か聞くと、累は笑いながら自分だと指を指すと好きに答えてと催促すると姫和が椅子に座って、キーボードを叩く。

姫和が『あなたは？』と打ち込むと『A-I-Y.』と返って来る。可奈美は英語が読めないのか、ええ……と困惑を浮かべると帝人が仲間、味方だと和訳して教えるのと同タイミングで『たった三人の謀反者達』『手紙は持っているな』と送られて来る。

「!？」

手紙と言う単語に姫和が反応すると『立ち向かう覚悟はいいね？』『Yes/No』と送られると姫和は迷う素振りを見せずに『Yes』と返信すると即座に『今日という日

は完璧になった!』と送られた瞬間に帝人が部屋の外に飛び出ると扉が何かに叩かれて、廊下を飛んで、帝人に飛び込んで来る。

「襲撃だ!!」

叫ぶと同時に写シを張り、ヤクザキックとも言わべき蹴り方に八幡力を足して飛び込んで来た扉を蹴り落とすと開けた視界に迅移とは思えぬ速度に、残像を残しながら走り寄って来る白髪の少年が映る。

「速い!!」

素早く御刀を抜くと、帝人は片手を峰に添えて、一本の棒の様な扱い方で突き出された右拳を受け止める。

受け止めた拳は重く、帝人の身体がほんの少し後ろに下がるが、剣術修行で鍛えた足腰は帝人が倒れるのを未然に防ぐ。

「ナツクルダスターか!!」

折り重なった甲殻の様な極彩色のナツクルダスターが縫い付けられた格闘技用の指抜きグローブと帝人の黒い刀が幾度となくぶつかり合い、薄暗い廊下を飛び散る火花が一瞬だけ明るく照らす。

「帝人くん!!」

何合か数秒程の打ち合いをしていると、可奈美が部屋から飛び出るが、手に御刀は握

られておらず、無防備な状態だった。

「早く御刀を!!」

帝人の防御を突破する為だろう。特殊な迅移を使った攻撃に襲撃者の少年が切り替える。

特殊な迅移を使っている事で目は淡い紫色に輝きながら残像を見せる程の速度で動き、手のナツクルダスターは鋼材の影響か元々の色なのか極彩色に輝く。

極彩色に輝くナツクルダスターを使ったラツシユを帝人に叩き付ける襲撃者の少年だが、帝人はそのパンチを全て、両手で保持した刀を使って、必死の形相で防ぎつつも部屋から飛び出た可奈美に叫んでいた。

可奈美は追い込まれている様に見える帝人に一瞬だけ身体を止めるが御刀が無ければ何も出来ないかと判断し、自分の御刀を取りに行くと累が出てくる。

「累さん! 貴女は奥へ!」

「う、うん……」

累を極力安全な部屋の奥へ逃がすと襲撃者の少年を蹴り飛ばし、リビングへ迅移を使って後退。自分達が寝室として使わせて貰っていた部屋へと逃げると襲撃者の少年が追って来る。

「させない!!」

可奈美の御刀、千鳥が襲撃者の少年に襲い掛かるが、少年は涼しい顔で手甲の部分に縫い付けで施された極彩色のプロテクターで防御してみせる。

「嘘!!」

可奈美が驚いた瞬間に、帝人は御刀の柄を口に加えると部屋の床に置いていた皮で作られた三角形の物体を引っ手繰る様に掴み、中に入っていた黒い塊を取り出して襲撃者の少年に向ける。

襲撃者の少年は向けられた物を察すると可奈美から残像を残す程の速度で離れようとするが、帝人の放った物質の方が一瞬だけ早く、乾いた音が響き、襲撃者の少年の服を僅かに何かが引き裂く。

「銃弾を避けた!!」

帝人が目の前で起きた光景に目を見開いた隙に可奈美の全力の横振りが放たれ、襲撃者の少年は吹き飛ばされ、壁に背中から強かに打ち付けられたその隙に二人はリビングへと出るとベランダの洗濯物が散乱しているのを見て、姫和は既に外に出た事を悟る。

「窓から外へ!!」

刀を口から手に移すと同時に可奈美に指示を飛ばすと同時に襲撃者の少年が立ち上がり、背中へ背負っていたコンテナに手を伸ばす。

聞き慣れない鯉口が外れる音とは全く違う、何かの金具を無理矢理に外れる様な音が

嫌に響くと帝人の本能が警笛をけたましく鳴らす。

「!!」

本能に従ってバク転で後方に下がると背中を何かを通り過ぎるのを風圧で感じるが、そのまま後方に逃げ、ベランダに飛び出ると扉を飛び越えて、外へと逃げる。

「ツチイ!!」

外に出た帝人だが、コンテナが自ずと閉じながら襲撃者の少年が飛び降り、空中で追いついた事で空中戦闘が勃発する。

少年の右拳を帝人は銃を持った左手で弾き、続けて繰り返された左手の拳は刀の柄頭で防ぐと同時に帝人は少年の腹を蹴って距離を取らせるとそのまま膝を付ける、三点着地で地面に降りるが、蹴られた少年は二本の足を少し曲げるだけで軽やかに着地し、両手を構える。

「やるしかないか……」

姫和と可奈美の二人は同じ襲撃者である白髪の少女との交戦状態に入っており、帝人は自分だけでやるしか無いと刀を構え直し、自ら攻撃の為に足を前に突き出した。

一方で可奈美と二人で襲撃者の少女と攻防を繰り返す姫和は襲撃者の少女の手段に注目していた。

「（一瞬の加速では無く、持続的に迅移を使っている……）」

迅移を説明するならば、御刀などを媒介として通常の時間から逸して加速する。と言う技だが、これを詳しく話すならば、現世と言われる表世界と表すべきものの裏とでも言える世界、隠世と言う世界に御刀などの道具を使って干渉する。

迅移は隠世の段階的に時間の流れの早い層に潜る事で現世の中で素早く動く事を可能にする。そして、隠世の中にも当然ながら時間の流れが速い場所と層があり、層を深く潜れば潜るか流れの速い場所の隠世に干渉する事でより高位の迅移を発動できる。

そして、鍛練を積んだ者はより流れの早い深い層に到達し、適正のある者や運の良い者は流れの速い場所に干渉出来る。

「だが、そんな事が出来るのか……」

迅移の層や場所に限らず、殆どが一瞬の加速。

分かりやすく言えば、通常は一瞬の音速移動な様な物なのだが、今回の襲撃者の二人は持続的な迅移、音速を維持しながら動くと言う様な物で通常の刀使や武官には出来ない行動をしていた。

「きゃあー」

可奈美が力負けしたのか鍔迫り合いで押し切られて、体勢を崩してしまったのを見た姫和は、迅移を使った加速をもって可奈美の援護の為に割って入ろうとしたが、襲撃者の少女が可奈美では無く、姫和の方に接近した事でタイミングをズラされた。

そして少女の御刀を防げないと判断した姫和は後退による回避を選択するが、少女の速度が優っていたらしく、袈裟斬りを直撃させられて写シが剥がれてしまう。

「姫和ちゃん！ 下がって！」

可奈美が地面に倒れた姫和を守る為に姫和と襲撃者の少女の間に立つ。

襲撃者の少女は姫和から視線を外し、可奈美を先に斬り伏せる為に御刀を振るうのと全員の鼓膜が銃声で震えたのは同時だった。

「拳で!!」

迫る銃弾を襲撃者の少年は手の甲に施されたプロテクターで弾き、肉薄すると少女の御刀よりも一層強い極彩色の輝きを放つ背中の中のコンテナから取り出した剣を振るう。

振るわれた襲撃者の少年の武器は武宮である帝人ですら、見慣れない形状をしていた。

一言で言うならば、あるべき場所にあるべき物が無いのだ。

「うっおー！」

横向きに首を狙って振るわれた剣を後ろ側に腰から曲げる事で上体を倒して、リンボーダンスの様に躲す。

帝人の目の前を剣先が残像を残しながら通り過ぎて行く。

切っ先は剣の様に鋭角では無く、かと言って刀の様な鋭さのある形状でも無い。

その切っ先は戦い、勝つ為の道具に見られる物でも、何かを作業する為のものにも無い。丸い切っ先。

それを持つ剣は処刑刀。

文字通り。人を殺す為の剣に見られる形状だった。

「っ！」

帝人の握る拳銃。ニューナンプM60Cを向けるが手刀で銃口を地面に向けられて地面に発砲してしまう。

そして襲撃者の少年が握る剣は両刃の剣らしく、刀を返して刃を向ける仕草を省いた素早い二度目の振りが上から下へ行く様な軌道で迫るが、帝人は剣の鎬を柄頭で殴って弾く事に成功する。

「ガアア！」

今度は降り抜かれた拳に反応出来ずに腹から喰らった帝人は降り抜かれた拳と共に地面に倒れると逆手に握り直された剣が顔を貫こうと振り下ろされるが、帝人も必死の防御が功をそうしたのか、刀を直ぐに引き寄せて押し付けた事で少年の剣と帝人の剣は互いに火花を散らしながら軌道を変えて、少年の剣は帝人の耳に一筋の深い傷を付けただけで、写シを剥ぐ程のダメージを与えられなかった。

「お返しだ!!」

少年は帝人に腹を蹴り上げられて、大きく吹き飛ばされるが、素早く着地すると、剣を背部のコンテナに戻して両手を構えた瞬間に帝人は銃を構えて銃弾を放ち、銃声になったのと同じタイミング可奈美は放たれた袈裟斬りを右下に斬り払い、右下から掬い上げる様な一撃を御刀を斜めに傾ける事で防御する。

可奈美と交戦する少女は素早く引いた後に放つ高速の平突きを可奈美に姿勢を低くしながら半身を捻り込ませる様に動かされた事で回避され、同時に御刀を左手のみで保持して、空いた右手で襲撃した少女の御刀の柄に伸ばそうとする可奈美に少女は左手を柄から離して、可奈美の右手に裏拳を当てる事で弾き、右手で素早く動かした御刀を首筋に押し付ける様に触れさせるとバックステップを行い、可奈美の首筋を引いて斬る。

可奈美は浅いと言えども斬られた事で身体を硬直させてしまい、その隙に片手で保持された御刀が可奈美の肋骨を避ける様に胸に突き立てられる。

平突きで突き立てられた刀はそのまま振り抜かれた事で身体を斬られた可奈美の写シが剥がれる。

「くぅ……まだ、だ！」

だが、可奈美の攻防は短くも姫和が写シを剥がされた際に負った痛みに慣れされるには充分で、斬られた胸元を抑えながら、襲撃者の少女を見定めながら写シを張ってみせる。

「速い……ならば、こちらも!!」

姫和は平城でも速い分類に入る己の迅移をさらに深い層に入り込ませる事で今の迅移をさらに加速させる選択を選ぶ。

姫和は迅移使用の際に更に意識を投入する事で先程よりも速い迅移を発動させて迫り、上段斬りを放つも襲撃者の少女は姫和の加速した迅移が見えたらしく、姫和が斬り伏せたのは、目で見た物を脳が処理し切れずに遅れて見せる質量の無い残像のみ。

そして襲撃者の少女は風切り音を残しながら、背後に回るが姫和は模擬戦で背後によく回りがる帝人の相手をよくしている経験から背後に回っていると確信。迷う事なく、次の攻撃は胴抜きを選択。より深い階層へと踏み込んだ姫和は襲撃者の少女が横への一閃を放つよりも速く、御刀で斬り伏せた。

少女は写シが切れると同時に身体を曲げながら軽く吹き飛ぶが、写シが剥がれた際の痛みを感じていないのか、片膝を付きながらだが、滑らかな着地を見せる。

「(技の影響か? もう、写シは張れない様だな)」

だが、少女の目は淡い光を今も放ち続けており、それが未だに戦意が残っている事を姫和に確信させ、少女はその確信を裏切る事は無く、息を吐いた様な声と共に立ち上がり、正眼に御刀を構える。

「まさか!？」

姫和の言葉は正しかった。

張れないなら張らなければいい。と言わんばかりに少女は写シを張らずに残像を残しながら弧を描く様な軌道で姫和に迫り、御刀を振り下ろすが、姫和もついさつき出来る様になった高速迅移を使って大きく回避すると同時に背後に回って回避する。

「写シ無しで!？」

姫和が驚いた隙に少女は姫和が背後に回る軌道を取っていたのが見えていたのだらう。

残像を残す迅移を持って素早く方向転換をして接近すると同時に腹を切り開くかの様に腹を七割程の深さで斬り付けられた姫和の写シが再び剥がれてしまう。

写シが剥がされて地面に座り込んでしまった姫和にトドメを刺すつもりか、少女が御刀を振り上げる。

「姫和!!」

叫び声が恐怖で目を瞑った姫和の鼓膜を叩いた事で姫和が目を開くと同時に迅移で少女の刀の軌道に飛び込んだ帝人が刀で少女の御刀を防ごうとしたが、少女の御刀が帝人の刀を切り裂いたのか、帝人の刀に斬る程では無いが明確な深さの傷を付けながら、帝人の左肩を斬れる深さまで差し込まれる。

「兄さんー!」

「無事……だな、よかった……」

どうしてと言いたげな姫和。

「お前の兄だから……妹を守るのに理由は……必要か？」

祖父との約束、祖父から継いだ剣術がなかったとしても帝人は姫和の盾になっただろう。

そんなものが無かろうと有ろうと帝人にとっては姫和は可愛い妹で自分はそんな妹の兄なのだ。

兄だから、家族だから、男として。愛する家族を助け、守る理由はそれだけで十分に過ぎる。

「ッ……」

肩に御刀を食い込まされた帝人は少女の八幡力を使った押し込みに片膝を地面に付けて耐えるが、そんな帝人にコンテナから剣を取り出しながら少年の方が迫る。

「ぬうおおお!!」

叫びながらワザと力を抜いて左肩を斬らせると同時に少女は突然の抵抗消失により、体勢を崩してしまい、その隙に帝人は地面に転がっていたニューナンブM60Cを右手で拾って発砲。

弾丸は少年の腹を狙って飛来するが少年は強い光を放つ剣で切り裂かんと振るうが、

銃弾と剣の当たり方が不味かったのか、銃弾は剣に触れた事で真つ直ぐな軌道からやや前方斜めに飛来する軌道に変わり、少年の右目を貫くが写シを解くとまでは行か無かったが、体勢を崩して剣を振るう体勢を一瞬だけ崩すが、直ぐに仰け反つた上半身を起こして復帰。

少女は体勢を崩した少年を見て、帝人の手首を切り上げて切断すると少年の剣に触れない様に迅移で後退。

少年は同士討ちの心配が無くなったからか、帝人・姫和の順で斬れる大振りの袈裟斬りを放つが、痛手を追い、攻撃も防御の手段も失つた帝人だが、写シはまだ健在だからと姫和の前に身体を晒して盾になろうとする。

「!!」

深傷を負いつつも動けない訳ではない。迅移を使えば逃げられるのを姫和を守るつもりなのか盾になる様に動く帝人に目を見開くと同時に少年と帝人の間に何か黒光りする黒い塊が回転しながら通過する。

「……」

無表情で切断された腕を見つめる少年の上空で少年の剣が腕と共に宙を舞い、通り過ぎた物体は地面に突き刺さり、その存在を誇示するかのように街灯と月明かりを反射すると宙を舞つた少年の剣は地面に切り裂かれた少年の片腕と共に転がる。

「あの剣って……」

写シを派手に剥がされた可奈美が気絶から復活した時の最初に見た光景は深傷を負った帝人が姫和を守る様な位置で切れた腕を支えに立ち塞がり、飛来物が少年の腕を切り飛ばし、その飛来物が地面に突き刺さった瞬間だった。

そして、突き立った剣は可奈美にとつては見間違える筈の無い物でもあり、美濃関学院中等部では英雄的な象徴の一つであり、高等部では一種の恐怖の対象にもなっている剣。

騎士が持つ様な剣に鍔を斧頭にした様な剣に斧を付けました、斧に剣を付けましたという様な形状に光を反射する黒を持つ黒鉄製の武器。

「フウー。やっと見つけた」

地面から飛び移っただろう存在は美濃関の男子用制服に身を包んだ同年代ではしつかりした体格に重力に引かれて地面に舞い落ちる様に落ちてくる一房に纏めただけの濡羽色の長髪の少年。

「勝武居くん!!」

美濃関最強の一角に席を置く一人。烏田勝武居が戦場に姿を現した。

第九話 眞実を知った者

「フウー。やっと見つけた」

地面から飛び移っただろう存在は美濃関の男子用制服に身を包んだ同年代ではしつかりした体格に重力に引かれて地面に舞い落ちる様に落ちてくる一房に纏めただけの濡羽色の長髪の少年。

「勝武居くん!!」

美濃関最強の一角。三河武宮・刀使に席を置く一人。烏田勝武居が戦場に姿を現した。だが、襲撃者の少女と少年の制服は鎌府の物。美濃関内の最強の一角の一人であるなど知る筈も無い。

少女が残像を残す程の速度で迫り、斬り上げを放つが勝武居がその刀の鎬を両手で挟む様に受け止めてしまう。

「速いな。だが、速いだけではどうにもならんよ!」

八幡力を使って押し込もうとする少女だが、勝武居も八幡力を使い耐えながら、片足で少女の腹を蹴り飛ばして引き剥がすと、少女と同様の迅移を使って迫る少年の拳を勝武居は両手の掌を重ねる様な構え方で防いで見せる。

「フンツ……ハアツ！」

腹を蹴られて体勢を崩された少年が息を吐きながらなんとか体勢を整えようと空気の無い身体を無理に動かして上半身を起こした瞬間に送り狼の様に追従したアツパー軌道の拳を顎に喰らって吹き飛ぶ。

「まだ気絶してないか……女だからと加減をし過ぎたな」

少女が残像を残しながら稲妻の様に不規則に動きながら迫るのを見て、無手では部が悪いと少し離れた場所に突き立てられた剣に目配せをして、位置を確認する仕草を見せる。

そんな仕草に拾いに行こうとすると少女は気付いて、先回りをするべく、持続的な迅移を発動させる。

「ちよつと遅かったな」

一足先に着いたのは勝武居だった。

勝武居は八幡力を使用した地面。正確に言えばビルの天井なのだが、剣を引き抜いた勢いを利用して、石飛礫の様に破片を飛ばして少女を牽制すると、姫和以上の速度を有する迅移で少女に迫る。

「速い……！」

姫和が自分以上の速度を誇る迅移に驚くが、速さそのものでは無い。

驚いたのは階層で言えば自分の方が深く、場所ならば帝人の方が良い場所を持っている。だが、勝武居のそれは姫和以上の速度を持つている事だった。

「ああ、あつちか」

何かを気付いた帝人に姫和が問い掛けると帝人が解説を行う。

迅移の速度を上げる方法は襲撃者の二人の様に持続的な迅移を習得するか、姫和の様に潜る階層を深くするという方法があるが、もう一つだけ迅移の速度を上げる方法がある。最も時間を掛けるが確実かつ才能なんて要らない方法。それは……

「加速させる物体の速度を速くする」

つまり迅移は動く物体の速度に足し算をするのではなく、時間に干渉する事で速くする掛け算だ。

十で動く武宮か刀使を深い階層の迅移で十倍にして百の動きにする訳だが、元々の十が五十五で浅い階層で二倍だとしても百十となり、速度は速くなる。

「勝武居くんはその方法だよ」

写シを張り直した可奈美が勝武居を援護するべく、二人の横を通り過ぎる。

勝武居の存在は美濃関の中等部の生徒にとつては頼もしく、彼や彼と同じ三河武宮や三河刀使の援軍はそれだけで士気回復の効果があり、士気が上がるという事は精神力も増える、回復する訳でもある。

「どうした！ 写シを張り直さないのでか？」

可奈美が来た事で勝武居は少年との一騎打ちとなり、少年は剣を拾いに行こうとすれば背中を斬られると判断したのか片手だけで戦っていると写シを張り直さないのでかと鎬で弾きながら告げる。

マンシヨンの鉄製の壁を破壊する程の拳を鎬と言う剣の脆い場所で受け止めているにも関わらずへこむ事も無く受け止める剣の硬さに帝人が驚く。

「どんな鋼材を使ってるんだよ……」

そんな帝人の眩きがした瞬間に戦況が動く。

両手で保持しながら鎬で防いでいた勝武居が防御すると同時に踏み込んだ事で距離を詰められた少年の首筋に押し付けられる様に護拳代わりの斧が突き立てられた事で少年の写シが剥がされる。

少年は写シの損傷が激しかった事もあり、剥がれた瞬間に刺激された痛覚に刺激を受けて、顔を顰めながら地面に膝を付く。

「斬れない！ そんな魂の籠もってない剣じゃ、何も斬れない！」

可奈美が少女の突きを躲し、前は弾かれた一撃をより素早く繰り出した事で、一瞬だけ出来た隙を少女はカバーをしきれず、御刀の柄を掴まれた事で、可奈美に御刀を取り払われ、少し離れた場所に放り投げられる。

「動くな。写シをもう張れないだろ？ 無念無想の影響で」

少年は痛みを抑えながら立ち上がろうとする。

立ち上がって写シを張らない状態で戦闘を続行しようとしたが、首元に剣先を添えられた事で動きを止められる。

「覚えてる？ 一回戦で戦った、衛藤可奈美」

御刀を取られた少女は地面に崩れる様に座り込むも可奈美の声を聞いて顔を上げることが、すぐに可奈美から剣を向けられた少年を心配そうに見つめる。

「……………」

少年はこれ以上の戦闘は無意味と判断したのか、背部のコンテナを取り外して、地面に落とし、グローブも少し離れた場所に放り投げて。武装を解除すると、勝武居も武器を鞘に納めた事で少女は目に見えて胸を撫で下ろす。

「あの試合すつごく楽しかった。沙耶香ちゃんの技にずっとドキドキしっぱなしだったんだよ」

「可奈美の言葉を聞きながら立ち上がると可奈美はまた試合をして欲しいと言いながら片手を出す。」

沙耶香と呼ばれた少女はどうして良いのか分からずに固まっていると少年の方でも勝武居に手を差し出される。

「糸見津佳沙だな？ 向こうは姉の沙耶香で間違いないな？」

その質問に津佳沙と呼ばれた少年は頷く。

「……………」

迷う様な素振りを見せた少年に勝武居は落としたコンテナを拾い、地面に無造作に転がった少年の剣をコンテナに納めてから、投げられたグローブを拾って、少年に突き出す。

「見事な戦いだった」

出されたグローブとコンテナを受け取るとコンテナは柄を掴める場所を真上にして身に付け、グローブはポケットの中に入れる。

武器を渡され、戦った所で意味は無いどころか次は命を奪われかねないと判断した故の津佳沙なりの行動だった。

沙耶香は可奈美に手を握られながら笑顔で約束と言われ、沙耶香の中に何かが通り過ぎる。

そんな光景を姫和は敵を斬らずに収めた可奈美の実力に、姫和を守る事を選んだとは言えども、苦戦を強いられていた相手をほんの僅かな交戦時間だが、圧倒していた勝武居の実力に戦慄していた。

時間は少し進んで累の車の車内。

累と合流した時よりも少し賑やかになっていた。

「知っていると思うが、十条帝人だ。助手席に居るのが妹の姫和だ」

片手を差し出す帝人に同じ後部座席に座る勝武居は帝人の手を取る。

「ご丁寧にも。鳥田勝武居です。これから宜しく」

「勝武居くんが来てくれて嬉しいよ！」

勝武居の隣に座る可奈美が嬉しさを表現したいのか、勝武居の首に抱き付く。

勝武居はその抱擁を何か諦めた様な表情で受け取り、抱き返すと言うよりもスキンシップを嫌がる猫の様な素振りを見せる。

帝人は勝武居が可奈美に抱く女の子としての節操を持って欲しいと言う思いの中に、こう言った時に行動と言葉で自分の感情を手段を選ばず表現出来るのも美德となる場面もある故に強く言えず、可奈美の顔は可愛いげのある顔故に男としても複雑な感情を察すると窓から外を見て黄昏る。

平城入学前の姫和も自分にだけはこれを少し軽度にした感じだったなど。

その姫和は携帯を操作してフラインマンと交信をしていた。

「何故、自分達と行動を共にすると？」

「なんと言うか……なあ……」

帝人の質問にどう答えた物かと頭を絞る勝武居。

学長達に話した真実を知る為の口実と同じ理由だが、同年代に話すとなるとどうしても恥ずかしさが勝って言い出せないと言う感じだったが、帝人の言葉がそんな勝武居をフオローする。

「何かを知って、友人を助ける為じゃないのか？」

「!! ああ、そうだ。親友が一人で無茶しようとしてんだ。それを止めるか助けるか考えて、助けに来た」

そう言い切った勝武居に帝人は再び手を差し出す。

「ありがとう。君の様な武宮が居てくれると頼もしい」

「此方こそだ。勝武居と呼んでくれて構わない。帝人と呼ぶがいいか？」

構わない。と再び硬い握手を結ぶ二人。

帝人は助けると言う判断に至った理由が気になったが、恐らくは姫和と同じ物だろうと予想して話を吹っかけない事にした。

男二人が友情を結んでいる前で累が前を見ながら、隣の姫和に話し掛ける。

「どう話？ 纏まった？」

「一応。取り敢えず、合流地点だけは決めました」

姫和が携帯の画面を見ながら呟く様に返す。

携帯の画面には場所と細かい座標の数字が並んでいた。

「私は聞かない方がいいね。そのアプリも削除しといて」

そう言った瞬間に累が盛大な溜息を吐く。

「今頃家は大事だろうな」

累の言う通り、累の部屋があるマンションではパトカーが何台も包囲する様に停車しており、津佳沙と沙耶香が座り込んでいた場所に親衛隊の服を着た人物が現れる。

「鎌府の生徒ね。情報捜査があるから此処で最低限の事情聴取をさせて頂くけど、いいよね？」

現れたのは親衛隊に所属する友衛だった。

そんな友衛に交戦した場所に座り込んでいた沙耶香と津佳沙は頷くだけで答えると友衛は此処で何があったのか、何で此処に来たのか問うと、その返答は友衛にとっては案の定な物だった。

「やっぱり、高津学長か……」

糸見兄妹は高津学長による独断専行により放たれた追撃者で二人は交戦した末にもう直ぐ確保と言うタイミングで見ず知らずの美濃関の生徒の強襲を受けた事で敗北。取り逃がした事を話されて、友衛は大きく溜息を吐く。

友衛の所属する正規の捜索班の作戦はマンションの住人に迷惑が掛からない様に昼間に覆面パトカーで周囲を包囲した後に親衛隊の獅童・此花・苔石・友衛のメンバーで突入、屋上では満月・燕・隼を配置して上方からの脱出を妨害。非常口には夜見を配置して押さえ込んで確保を目指していたが今回の襲撃で可奈美・姫和・帝人は此処を放棄して既に逃走している。

友衛の判断は早かった。

「Nシステムを使って捜索。東京から出る車道に検問設置を要請。急いで!!」
Nシステムとは簡単に言うと、カメラが捉えた車のナンバーを自動で手配車両リストと照合するシステムの事である。

大抵ならこのNシステムで捕捉できるが、途中で別の車に相乗りするなり、乗り換えのなりされると捕捉出来ない故に東京から車で出られる場所に大至急で検問を敷く事で人間の目で捕まえる。

如何に電子技術が発達しようとも最終手段は人間の五感である。

「検問か……」

しかし、検問により封鎖はあえなく空振りに終わる。と言うのも勝武居もこう言った時の警察組織が取る常套手段は熟知させられている。三河武士のやり方を現代ではやろうと思うと、関係組織に根回しする知略か穴を突くか掻い潜る為の知略のどちらかが

求められ、勝武居は後者向けの才能を持っていた。

故に四人の逃走者は徒歩で東京からの脱出を図っており、警察も徒歩で無ければ突破出来ない場所に検問を敷く能力を持ち合わせておらず、四人の東京脱出を許してしまっていた。

「ただ、何処かでヒッチハイクするなりして距離を稼ぎたいな……」

帝人が呟く。

楽をしたい訳では無いが、流石に合流地点は伊豆。

静岡県民がどう思おうと地理的には静岡県であり、東京からはかなりの距離がある。これを徒歩で向かうとなると途方も無い時間を使ってしまう。

そして一行はPAに出てくると嬉しい出来事が起きる。

「伊豆ナンバー……」

伊豆ナンバーのダブルキャブと言うタイプの車が止まっており、可奈美が怖気付く事無く、運転手らしい男性に話し掛けると男性は元武宮だったらしく、自分達の代にあって、ヒッチハイクなどを使って目的地に向かう訓練なのかと言って、勝手に懐かしがる道中までなら乗っていけと言って乗せてくれる事になった。

時間は大幅に遡る。

湘南の海辺に四人の少年少女の姿があつた。

「日差しは最高」

他に海水浴客の居ないビーチに広げたビーチデッキの上で日光浴をするのは背の低い薄桃色の髪をツインテールにした少女がクシヤミを盛大に行う。

「流石にまだ早過ぎたか……」

身体を縮こませて震える少女。

何故、ビーチに他の客が居ないのか。それは至極単純な理由で、気温が上がり切っていないだけである。

「いや。だから言つただろ。この時期に日光浴は死ぬるって」

そう言いながらも毛布を被せるのは200cmを超える巨体に髪の毛は剃っているのかスキンヘッドにして、浅い茶の肌と何処の国の人間かわからない顔の骨格を持つ男だった。しかし、それ以上に目を引くのは彼の体格よりも大きい二本の棒を二つも背負っている事だった。

「ねーいー！」

そんな少女と少年の近くでは日本犬で言う赤毛を薄くした様な体毛とクリーム色の体毛を持ち、ウサギの様に長く垂れ下がった耳が可愛らしいが、尻尾にもホッチキスを思わせる様な顔が付いた尻尾とおよそこの世の生物とは思えない生物がヘディングでビーチボールを打ち返す。

「うりゃあー!!！」

そんな生物が打ったボールにジャンプで接近。見事なまでのアタックを決めるのは絵に描いたような様な金髪碧眼の美少女。だが、あまりにも見事なアタックを見せた事でお嬢様というよりもお転婆娘の様な印象を受けてしまう。

「くうー！」

アタックされたボールをセービングしたのはアルマジロトカゲの後ろ足を無くした代わりか太い腕に鋭くも分厚く太い爪を持つ前足に、琥珀色の甲殻の間からはフサフサ・モコモコとした白い毛を生やした何とも言えない爬虫類の様な生き物だった。

「Nice!!！」

白人特有の真っ白な肌は日光を反射し、光沢のある薄い銀を混ぜた紺碧色の短髪は海の背景に溶け込む様だが、陽を浴びて輝いているので背景に負けていない。そして、ボールを見る目は黒曜石を思わせる黒目と黄金石を思わせる金色の目のオッドアイと

異国感溢れる整った顔の少年がボールをこれまた見事なスパイクで返す。

だが、そのボールは風に煽られて、ビーチデッキの横に立つ、2 m超えの男の顔面にクリーンヒットする。

「Sorry sorry」

「喧しいわ！ 姉さんに当たったらどうやって詫び入れる気じゃゴラアアア!!」

「土下座」

「いきなり綺麗な日本語を叩き込むなんていつも言ってるだろおお!!」

男二人で言い争っていると金髪の少女の携帯に呼び出しの着信音が響く。

「Hai。……ええ、任務アス？ 急ですね」

「知らん。休暇中だと言え」

桃色の髪の少女がそう告げると金髪の少女は笑いながら言われた事を携帯の向こう側にいる人物に投げると桃色の髪の少女の耳元に携帯を持って行き、片耳を手で押さえながら、可能な限りで携帯を耳から遠去ける。

「オラアアアアアアアアア!! 巫山戯んなアアアア!!」

凄まじいまでの咆哮がビーチに響き、様々な物が潮風とは違う風圧に押されて靡くなり、飛んで行く。

「だが、任務と言っても称々切丸が無い。昨日宅配便で送ったからな」

そう言うのはビーチデツキに寝る桃色の髪の少女だ。

彼女も刀使で所有する御刀は祢々切丸と言う巨大な太刀、大太刀と呼ばれる武器だ。

「あ、これっすね」

そう言つて薄つすらと汗を書いた茶色の肌の男が地面に祢々切丸と思しき大太刀が鞘に納められたままの状態で突き立てられる。

「おい。送つておけと言つてたよな？」

面倒くさそうな桃色の髪の少女に茶色の肌の男は眞顔で、急な任務が有つたらどうするか考えた上で発送を見送つていた事を話す。

「これがデコボコキョウダイってイウんですよね？」

「デコボコ姉弟ですな」

金髪の少女と青髪の少年が任務の準備の為にビーチからの撤収作業を始めるが、桃色の髪の少女は働きたく無いとボイコットの姿勢を見せるが、毛布で簀巻きにされて、茶色の肌の男に小脇に抱えて運ばれようとするの観念したのか自分で歩き始めるが、その背中では未練タラタラとも言うべき背中だった。

第十話 矢は番えられる

伊豆半島のとある場所にあるPAにて、四人は降り立ち、揃って頭を下げると運転手も仕事が無ければ目的の地まで直接運んであげられたのにと申し訳無さそうに頭を掻きながら笑い掛けると先を急ぐ様にアクセルを踏み混んで発進する。

「ふうあー。結構疲れたあ〜。姫和ちゃんは〜?」

伸びと身体を回して、長時間座り込んでいた身体を解しながら問い掛けた可奈美だが、姫和はそれに答えず、何か考えている様で、可奈美は不振に思い、再度の呼び掛けをすると姫和の口が動いた。

「可奈美、お前には色々と助けられた、勝武居にもな。そこは礼を言う」

そう言つて二人に頭を会釈よりは深い角度で頭を下げるが、頭を上げると二人の目を見ながら告げる。

「だが、やはり此処で別れよう」

「あの、だから、私も姫和ちゃんと一緒に行くつて」「俺もだ。知るべき真実は帝人と十条さんに着いて行くしか知り得ない。だからついて行くぞ」

二人は拒否しようとも着いて行くぞと告げると帝人が姫和の思いを代弁する。

「申し訳無い。姫和は此処から先は斬る剣が必要だと思っっているんだろう」

姫和の口からは帝人の言葉への肯定を聞き、姫和は更に可奈美と勝武居へ、とある問題を突き付ける。

それは、現代ではそうそう有り得ない問題でもあった。

「お前は人を斬った事はあるか？」

「写シ、じゃなくて……」

「ああ。もしくは荒魂化した人を」

「無い……けど」

可奈美の返答に帝人はアイコンタクトで勝武居に向ける。

勝武居もそんな経験は無く、弱々しく俯いたまま首を振ると姫和が俯きながら告げる。

「近年では人が荒魂化するなんて事は報告されていない……だが、その記録は……」

苦汁を飲まされた様な表情を浮かべながら、自分の御刀の柄を強く握りしめながら帝人が続ける。

その顔は、思い出したく無い事を思い出しながら告げる様だった。

「これは……あくまでも自然発生した物だけだ」

姫和は俯きながら、拳を強く握る。

「だが、少し前。それこそ母の代までは珍しい事じゃ無かった。そして、今でも……」
姫和の顔に悲しげな表情が浮かぶ。

この逃亡劇で始めて見せた悲しげな表情に可奈美は吐き出しかけた言葉を飲み込む。

「……戦闘中に、荒魂に喰われ……」

荒魂に取り込まれる刀使や武宮が居ると言う言葉が朝靄の掛かるPAに響く。

帝人は自分の左手を見ながら、虚しさと悲しさ、後悔と怨嗟の混じった声で問い掛ける。

「なあ、勝武居。少し無礼だが……お前は、可奈美を守る為に荒魂化したあの時の二人を……お前は斬れるか？」

何を言っているかと勝武居が口を開き掛けた瞬間にあの時の二人が何を指しているか悟った。

「舞衣と彗士を、か？」

震えた声を出す勝武居に帝人は頷いてみせる。

「ああ」

帝人の肯定に勝武居は解答出来なかった。もし、此処に二人が来て自分達を殺すつもりで来たならと思つて考えても、あの二人を斬れ無いと直感で感じてしまったからだ。

そして、それと同じ問題は可奈美にも突き付けられており、戸惑いを見せる可奈美に

勝武居は恐怖の混じった声で帝人と姫和に問い掛ける。

「あるのか……斬った事が……」

「私は無い……だが、覚悟はある。今回の折神紫襲撃も荒魂退治。だが、限りなく人斬りに近い。私は折神紫を斬る。それを阻む者も、限りなく私怨に近い動機でだ」

姫和の回答を聞いた可奈美が帝人に視線を移す。

「ある。入学の暫く後から姫和共々、可愛がつてくれた高等部の先輩だった。今でも思い出すんだ。荒魂に取り込まれた先輩の骨に刃を突き立てた感触は鮮明に……」

可愛がつてくれた先輩の人懐っこい笑みを思い出した帝人の瞳から涙が一筋だけ流れるが、それを乱暴に拭うとそれ以上の涙は出なかった。

「荒魂化した人は人で無くなる。人の言葉を使うが荒魂だ……災厄を振り撒く存在になる以上は斬つて祓う他ない……いや、それが救いなのかもしれない……」

帝人の掌から血が流れ、指を伝つて隙間から地面に溢れる。

「荒魂化した先輩の声は仲間を傷つける前から殺してくれと叫び続けていた。俺は先輩の願いを聞いて、心臓に刃を突き立てた。あの日から実感した。武宮、ひいては刀宮と刀使は先祖から続く業を背負い、荒魂を沈め続ける神主なんだ。」

その返答に可奈美は分かっていると告げられたが、その顔は下に伏せており、勝武居は武士が時代に合わせて武宮と言う形になった武宮であり、斬るべきモノが人から荒魂

になっただけであり、神事や祭祀としては荒魂退治を見ていなかった事と現代では人斬りとしての武士精神は教育されていない、残されていない事も合わさり、何も答えられなかった。

「勝武居、可奈美。俺は全てを知らないが、姫和のそれはさつき言った様に、人斬りに限りなく近い荒魂退治。俺のコレも、理由が小綺麗なだけの人殺しに限りなく近いだろう行いの援助だ。褒められた事ではない……」

「だから、此処で別れるんだ。二人には斬れないだろうからな」

そう言って十条兄妹は背中を向けて歩き出すと可奈美と勝武居が同時に待てと言いながら手を伸ばすが、姫和は武器を抜きながら振り向き、抜き身の御刀を可奈美に向けて振り下ろした。

「ぬるいな」

明確なまでに殺意の籠った一撃を何とか受け止めた可奈美だが、姫和から放たれた一撃と刀から伝わった思いに何か寂しさと悲しさに困惑を同居させた表情で茫然となる。

「おいー」

勝武居が姫和の行動を咎めようと自分の劍の柄に手を伸ばそうとすると帝人が振り向きと同時に抜刀術による一撃を勝武居に放つ。

「真実を知りたい。それは結構だが、それだけの理由で付いてくるには、この道は険し過

「きん」

「つ……」

ガチガチと金属同士がぶつかり合う音が響く。

勝武居は鞘から辛うじて抜剣出来た僅かな鎬で帝人の御刀を受け止め、そこから伝わった思いを感じ切ると、帝人に告げる。

「兄なら妹が間違つた道に歩むなら止めるべきではないか？」

「それも優しさだろうな……だが、私は甘い兄の様だ。止めるよりも助けてしまう動きをする。それにもう……戻るに戻れない場所まで来たんだ。お前なら可奈美を連れて戻れるんじゃないか？」

帝人の言葉に勝武居は納得してしまふ。

今の自分なら可奈美だけでも取り戻したと言う構図が出来ると言う帝人の思惑だが、勝武居も一緒に累の車に乗るよりも高津の放つた糸見兄妹と交戦した時点で戻れない立場であるが、それを言えなかつた。

勝武居の心が弱い訳でも、成長していない訳でもない。ただ、帝人の覚悟の重さに勝武居の心が気圧されているのだ。

「お前達は戻れ。戻って、荒魂から人々を守れ」

「すまないな……それと此処まで、ありがとう」

互いに武器を鞘に納めて去って行く十条兄妹を可奈美は御刀の千鳥を抜いたまま、勝武居は剣をゆつくりと鞘に納めると靄に包まれた空を真つ直ぐに見上げながら告げる。

「なんで礼を言つて行くんだよ……憎めねーじゃねーか……よ」

勝武居の涙声の言葉に答える者は居なかった。

機動隊本部がある建物のロビーに舞衣と隼士の姿があった。

「スペクトラムファインダーは部屋の中に残されてた」

突如として消えた勝武居を心配してスペクトラムファインダーに搭載された携帯機能を使って連絡を取ろうとしたが、荒魂探知の機能以外を電源から落としていた勝武居のスペクトラムファインダーが支給された部屋の中に隠すかの様に置かれていたのを、他に置かれたままの様々な荷物から隼士は見つけていた。

「柴田さんから連絡は来た？」

「ううん、手掛かりが無いから難しいって。ただ、みんなに心配しない様については伝えておいたよ」

可奈美に勝武居と親しい間柄の二人が同時に居なくなってしまった事に一抹の不安

を抱く二人に平城の制服を着た女子生徒が近付く。

「岩倉さん？」

姫和と共に刀使の部で御前試合に出場した岩倉早苗その人だった。

「柳瀬さんと柳瀬くんはいつ帰るの？」

「羽島学長が此処に居るまでは、と考えています」

早苗の質問に彗士が答えると舞衣がいつ帰るのか早苗に聞くと今日戻る事になると告げると少し悲しそうな声で、姫和や帝人と帰りたいと告げる。

「来る時は一緒だったし、帝人くんには道中のバスで励ましたりしてくれたから……」

ほんのりと頬を赤らめる早苗に彗士がおちよくろうと頬の肉を上げた瞬間に階段をイラついた感情を隠さない足音と共に『沙耶香』と呼ぶ怒鳴り声が響く。

ロビーから外に出ようとしていた鎌府の生徒、糸見沙耶香の横を通り過ぎたのは鎌府の学長である高津雪那だった。

高津は振り返った沙耶香を通り過ぎたタイミングで嫌に静かに来なさいとだけ告げると沙耶香が付いて来るか確認する事無く、歩き去って行き、沙耶香も高津の後ろに黙って付いて行く。

「確か鎌府の……」

「糸見沙耶香さん、だったか？」

早苗は不思議そうな表情で、隼士は生理的に合わない物を見た様な響めつ面を浮かべ、舞衣は何処か心配の感情に残念だと言う様な感情が混じった表情を浮かべていた。

「所轄に保護されるなんて、どういうつもり？」

そんな三人が居た事に気付かない高津は沙耶香を連れて自室、学長室に沙耶香を入れると怒りを孕んだ声を響かせる。

「申し訳、ありません」

姿勢を正した沙耶香が高津の言葉に弁明せず、ただ謝罪の言葉を並べる。

高津はイラつく感情を表す様に歩きながら、言葉を紡ぐ。

「敵の所在を特定し、奇襲しておきながら討ち漏らしてオメオメと帰って来るとは、どうやら貴女を過大評価していたようね」

勝手に期待を掛けておきながら、その期待を裏切ったと思つたら裏切つたと思わせた相手に八つ当たりしている様にしか見えない高津の行動は、誰もが不快感や恨みを抱きそうだが、沙耶香は感情が無い人形の様子に黙って高津の言葉に耳を傾け続ける。

「くだらない御前試合などに興味はありません。でも、任務の達成率は百パーセント。それが貴女の価値だったの」

高津が素早く沙耶香の腰から御刀を鞘ごと奪い取る。

沙耶香の腰には御刀を帯刀し易くする腰用ジョイントパーツが存在し、そのジョイン

トパーツには鞘を挟み、腰のジョイントパーツに接続する為のパーツを付けたままだった。

普通ならば、鞘ごと取るなら鞘用ジョイントパーツも一緒に取る方が楽なのだが、高津は鞘と御刀だけを取り外した辺りに高津がこの動作にどれだけ慣れているか否応無く分からさせられる光景だ。だが、この動作が何かの役に立つかわれれば武装解除の時しか役に立たない事は明白だろう。

解除するにしても鞘用ジョイントパーツを付けっぱなしでも構わないのでコレは無駄な技能に当たる。しかし、素早く沙耶香から御刀を奪い、抜刀、目前に突き付けた高津の動きは二十年前の大荒魂討伐戦の特務隊に選抜されるだけの実力者であった事でも感じ取れる一幕でもある。

「少し、過保護に育て過ぎたかしら」

自分に言い聞かせる様に告げた高津の耳にノックの音が聞こえる、そのノックの音はやるせない怒りを含んだ音だったが、高津と沙耶香はそれに気付かず、高津は御刀を納めながら、空いていると僅かに声を荒げながら告げる。

するとドアが開けられ、開けられた扉が視界を開かせた事で廊下に居た人物の顔を見る事が出来る様になった。

背中には銃と思しき物体を背負い、明け方の空、夕暮れの終わり時の空を思わせる色

の髪に目は織部色の様な深みのある緑の目をした親衛隊唯一の銃を使う武宮、満月明夜だった。

「紫様がお呼びです。至急、ご同行下さい」

満月に先導された高津は折神紫の部屋に入ると其処には皐月夜見が部屋の脇に立ち、折神はガラス張りの面に向き、外を見ながら口を動かす。

明夜は紫が向き合わずに話すと言う事は虫の居所が相当悪い場所にある時のサインの一つと言う話を友衛から聞いており、無表情であったが、折神の背中から発せられる異様な雰囲気と背中がジワリと汗ばむのを感じずにはいられなかった。

「追撃を許可した覚えはない」

「は、叛逆者の所在を特定致しましたので、お手を煩わせるのも無いかと独自の判断で……」

「雪那。お前は今回の案件への参加を許可していない。故に所在を特定した友衛の情報も渡していないかった。どうやって手に入れた」

折神の言葉に皐月が手元に持っていた書類を動かす音が響き、その後直ぐに皐月の報告が紡がれる。

「データベースに高津学長のID閲覧記録が有りました。恐らくそこから特定した故の独自行動かと思われませす」

「勝手な行動は許さん。貴様はまず、やるべき事をやれ」

「ですが、私は許せないので。紫様に御刀を向けた逆臣が、手の届く所でのうのうとしている事に。何故、わたくしにお任せ下さらないのです」

「高津学長。貴女の行動は紫様の立てた戦術と戦略を崩したと言う事に目をお向きになつていない様ですね。そもそも手の届く場所と申しまし「明夜」！ 申し訳ありません。口を動かし過ぎました」

申し訳ございませんと告げて、頭を垂らす体勢を作るとそのままの姿勢で一步後ろに下がる。

「雪那。もう、いい。下がれ」

折神の指示に高津は振り向くと不満だと言わんばかりに息を吐きながら部屋を出て行くと夜見がほんの少しだけ振り向く様な姿勢を見せ、明夜は頭を下げ続けたまま、目だけで高津が出て行った扉を覗く。

「夜見、明夜」

折神の呼び掛けに夜見は前を向き、明夜は頭を上げた。

「件の者達への追撃は場所が判明次第、行う事とする。夜見は真希、寿々花、童子と共に出撃の準備を行え」

「了解致しました」

そう言つて夜見が通達と出撃準備の為に退出する。

「明夜、今回の無礼だが、不問とする。追撃の場所が判明次第ではお前も出て貰う事になるだろう。準備をしておけ」

「寛大な処置に感謝します。では、準備に入ります」

叛逆者へと向けられた弓は矢を番えられようとしていた。

第十一話 放たれたのは四本の矢

「む、うゝゝん、デース」

伊豆の山間を通る道に黒いバンから降りた、豊かな胸部を強調する様な茶と橙の制服に身を包んだ金髪と碧眼の高校生程の女性が伸びをして長時間座つて凝り固まった身体を解す。

「三人は準備、良いデスか？」

「うおゝい」

そして車の前と後ろに首を回しながら問う金髪の生徒と同じ制服を着た、桃色の長髪が特徴な低身長少女が車の後ろ側から気の抜けた返事を返しながら現れる。

「ういつしよつと、準備完了です」

身の丈を超える獲物を二本も担いだ、2mを僅かに超える巨体を誇り薄茶の肌禿頭が特徴の男は、茶と橙色に色を変更し、見栄えを良くすると同時に戦闘が出来るように各所を改造した水兵服の様な長船の男子制服に身を包んでいる。

「Preparations ^今 ^{準備} ^が ^終 ^わ ^り ^ま ^し ^た ended」

テキサス訛りの英語と共に現れたのは長船の男子用制服に身を包んだ白人の肌に黒

と金の双眸、銀を含んだ紺碧色の髪が特徴な外人の少年だが、より異色を放つのは身に付けた道具の量と道具そのものだろう。

背中に色々な道具を付けたショートボウと矢を納めているコンテナを背負い、両太腿には背中のコンテナと似た様なコンテナにナイフのシースとして使用を可能にしたコンテナを身に付け、腰には何かのケースが二つ、身体を挟む様にしっかりと固定されながら吊り下げられ、腕には何かの皮を使ったアームガードと誰よりも重装備だった。

「ねーねっ!」

「くーっく!」

そんな声が桃色の髪の少女の頭の上から聞こえると巨体の男の頭に巻き付く様に居座る生物からも独特な鳴き声が挙げられる。

頭の上にいるこの世の生物とは思えない二匹の生物のやる気満々と言わんばかりの鳴き声に弓を背負う少年は満足気に頷くと少女の頭に乗る生物の頭を撫でながら口を動かす。

「ネネもククもヤル気マンマンデスね」

二匹の生物は弓を背負う少年の声を聞くと空間に溶け込む様に消えた。
そんな光景に誰一人として驚く事は無く、金髪の少女が前を見据える。

「では、ミッシヨンスタート、デス!」

伊豆で長船の追撃者が行動を開始した頃、鎌倉の鎌府では珍しい場所が大慌てだった。

〈弾薬の使用期限を確認を〉

それは鎌府の学内に併設された弾薬保管庫だった。

その保管庫の前では埃を被った様々な色に塗装された弾薬箱が小山を形成していた。

鎌府の学内にも銃を使う武宮への支給の為に弾薬の保管を行う設備は存在するが、今の高津学長の方針により、刀や剣以外を使う武宮は入学が難しくなった事で、鎌府に弾薬保管の為の設備がある事を知る生徒は少ない。

「満月さん。チエック終わりました」

数少ない銃を使う鎌府の武宮がインカムで指示を飛ばした満月明夜その人だ。

そんな満月に鎌府の中等部生徒がタブレットを手に声を掛ける。

「高津学長が入ってから補充がされていないようで……」

高津学長就任後の入学で銃を使うと聞くと鎌府の生徒達は珍しがるが、満月は銃を手取る前は剣鉞と言う山間部での使用を考慮した鉞を更に狩猟などにも使える様に剣先を剣や刀の様に鋭い物に変えた鉞を小太刀の代わりに大小の刃物を扱う武宮として入学したと言うとその珍しさは変わる。

此処で満月の経緯を話したが、弾の補充がされていないのは、銃の武宮が居なかった

からではない。

「高津学長は元々、刃物以外を使う武宮を入れる気が無かった様ですし、当然ですね」

そう高津は折神紫のお膝元である鎌府に刃物以外を主兵装として使う武宮を入れる気が無く、高津が学長の席に座つてからは銃の武宮は来ておらず、前から居た武宮に対しては予算削減と言う名目で一方的に弾の補充を停止した事で銃を使つていた武宮は他の学校に行くか武器の交換を余儀なくされた。

無論ながら、満月が銃を使うと言う事を高等部入学直後に学長へ届出の書類を出した際に高津は止めたのだが、満月はそれを無視して使用武器を銃へと転向した経緯がある。

その結果として、高津から敵視される事となるが、満月は後悔も反省も無く、逆に銃に転向した事で親衛隊入りを果たしたと言う評価を自他共に下している。

余談だが、補給線を抑えていた高津は銃器から刃物に戻ると目論んでいたが、それは的外れとなる。

何故なら満月は用意を周到にしてから届け出ていたからだ。

「あの、満月さん……」

「? 聞きたい事があるならどうぞ」

後輩からは親衛隊所属である事と銃を使うと言う異端的な存在である満月は鎌府の

先輩からも後輩からも受けが悪く、後輩からは一種の畏怖の感情を向けられている。

「あの、なんで銃なんですか？ 鎌府は補給が悪くて、前まで銃だった武宮も……」

弾の補充が出来ずに転校か武器を変更したと言う言葉を飲み込むとそんな事かと満月は意外そうな顔を見ると端的に告げる。

「簡単です。銃弾の補充が出来るからです」

武宮が使う銃弾だが、他の銃との併用を防ぐ目的で特殊な形状の撃鉄と雷管を使用する訳だが、雷管は武宮であれば意外と簡単に手に入る。だが、難しいのはその雷管を使って、葉莖と炸薬、銃弾を組み合わせて銃弾にする事である。

「？ 貸し出し以外で銃弾なんて……」

そう言う後輩に満月は懐から紺色の合皮製の表紙に猟銃・空気銃所持許可証と金色の字で書かれた手帳の様な物を取り出して見せる。

「!? そう言う事ですか！」

武宮は銃を使うにしても許可さえあれば、誰でも銃を使える。実際に帝人が所持している銃も許可が出された故に買い求めた私物だ。ただし、許可で所持・運用が許されるのは、使用弾薬が九ミリ以下で銃身長が九インチ、つまりは約二十二センチと五ミリ未満の拳銃のみだ。

銃身長が規定よりも長い拳銃や別に弾薬を使おうと思うと別の免許や資格が必要と

なる。

満月の場合は散弾銃を使うので必要となるのは猟銃免許以上の免許だ。

猟銃の所持許可は通常の条件では二十歳以上か国際競技の強化指定選手の中から推薦者のみ。なのだが、此処で武宮と言う存在であるが故に貰える様々な特典が役立つ。

伍箇伝に入学した武宮は精神系統に関わる鑑定や試験、検査を受けて合格を貰う事で十二歳から猟銃に関する免許や資格を取る事が出来る様になるという特典だ。

満月の場合はこの制度を利用して十二歳から挑戦、各種の資格などを高等部入学前の十四歳までに全ての取得に成功している。

この猟銃の免許を持つ事で猟銃を持てる様になる訳だが、武宮となると先ほど述べた拳銃以外の銃。つまりは猟銃を使って荒魂を退治出来る訳であり、許可制には無い強みが出てくる。

そして使用可能火器が増えると言う以外にも、有利な点がある。満月が本当に欲しかったのは猟銃の限定解除とも言える事柄以外の物。

「猟師なら銃弾を自費で買えますから、あとはそれを改造すれば……」

つまりは猟師になる事で自腹を切れるという事で、弾薬は購入できる様になるという物だ。

「まあ、荒魂用弾薬は高いので少し工夫しますが」

満月は更に弾薬を買うのでは無く、武宮としての特典を利用して自作弾丸を使う。

無論ながら全てを自作するのは様々な面で行えないので、まずは猟銃用の弾薬を買い、撃鉄を交換した荒魂用銃器を使って、訓練と同時に空薬莖を制作、空薬莖と荒魂用雷管を業者に送り付けて雷管のみ、雷管と炸薬が詰まった薬莖に変えて貰い、届いた薬莖に自作の弾丸を入れる事で高津に頼らない補給線を確立している。

「確かにお金と時間は多く必要ですけど、高津学長に頼らなくても銃弾が入手出来ますね」

「高津学長が居ても居なくても同じ事をしましたが」

此処まで言っておいてなんだが、満月の弾丸自作の一番の理由は支給される散弾は鉄球をばら撒くタイプのバックショットと言う弾を中心に、巨大な弾丸か鉄球を撃ち出すスラッグ弾、小さな鉄球をフリスビー状に放つ非殺傷性の高いリーンバック弾と言う弾種のみ。

これでは、サイズが合えば大抵の弾は吐き出せると言う猟銃、引いて言えばショットガンの利点を生かし切れない。

その為に弾を自作する為に銃や弾閔連の免許や資格は必須だった。

「さあ、口じゃ無くて手を動かして下さい」

「後はポーチに入れるだけですから」

そう言われた瞬間の明夜は何か嫌な予感を感じると後輩に新たな指示を飛ばす。

「仕事の追加をお願いします。此処の弾薬をヘリポートに持って行って下さい」

「全部ですか？」

全部です。と有無を言わさない剣幕で短く放った満月は携帯を使ってヘリポート要員の職員の準備するヘリの機種の指定と準備の要請を出す。

出し終えた明夜の胸には出撃の予感が渦巻いていた。

伊豆のPAでは朝靄に包まれた可奈美と勝武居が佇んでいた。

勝武居は帝人と打ち合わせた剣を握っていた手を見つめながら、何度も閉じては開き、開いたのを閉じては感触を確かめる様な動作をしていた。

可奈美は抜いたままだった御刀をジツと見つめ続けていた。

二人の脳裏に蘇るのはあの時の二人の言葉に込められた想いと背中だった。

「私、やっぱり付いて行く」

可奈美が誰かに聞かせる訳では無く、呟くと二人が去った方向を見て動き出そうとしたのを勝武居が首ごと振って、顔の向きを変えて見ていると視界に朝靄の中から僅かな

光を反射しながら高速で接近する物体を見つける。

「可奈美!!」

勝武居は和鋼の御守りを使って写シを張り、鞘から愛剣を素早く抜剣して、飛来物と可奈美の間に迅移を使った移動で飛び込み、飛来物を鎬で受け止める。

「なこい!!」

飛来したのは鏃に愚鋼を使った対荒魂と対写シ用の矢だった。だが、その矢は弾かれるとまるで逆再生でも掛けたかの様に朝靄の中に消える。

「ミツケマシター!!」

と言う叫び声と共に矢と入れ替わりで長船の女子用制服を着た金髪の少女が迅移で急接近、上段に振り下ろしに掛かるが勝武居は防御で無く、防御の姿勢から身体を捻る様にして剣を振るい、迎撃に出る。

互いの刃がぶつかり合い、火花を散らすそこに可奈美が迅移を使って接近。勝武居から金髪の少女を引き剥がす為に御刀を横に振るが、金髪の少女はバックステップの後にバク転を行い二人から距離を取ろうとする。が、勝武居は奇襲を掛けた少女は御前試合の出場した選手の一人で、バク転を使った距離の取り方は予想出来ていた。

「甘い!」

金髪の少女がバックステップを始めた頃には勝武居は既に追撃の為の踏み込みであ

ると同時に距離を詰める為の物でもある踏み込みをしており、即座に追撃を仕掛けるが、勝武居の視界に驚愕の光景が映った事で動きを止めてしまう。

「危ない!!」

その隙をすかさず可奈美が埋める。

可奈美が掛け声と共に振り上げた刀は金髪の少女の両足の間をすり抜ける様に飛ぶ、先ほど飛来した矢と同じデザインと材質の矢だった。

可奈美の御刀に弾かれた矢だが、今回は巻き戻ったりする事は無く、金属でも無ければ木やプラスチックでも無い材質の物体がアスファルトとぶつかる様な音を立てて、地面に転がる。

金髪の少女は矢を捌いている隙に安全な距離まで下がると自分の手に息を吹き掛ける様な仕草をすると言葉が吐き出される。

「美濃関学院中等部二年、衛藤可奈美、デスね?」

可奈美は肯定の返事をしながら半身になり御刀をバットを構えるのに似た構えを取る可奈美から横方向に十分な距離を取った勝武居は射手が居る事に舌打ちをしながらも矢と刀からの攻撃に備える様に正眼の構えを取る。

「長船学園高等部一年! 古波蔵エレン!」

身体を僅かに捻り、柄が頭と同じくらいの高さまで掲げる構えを見せる古波蔵エレン

と名乗った金髪の少女の後ろから朝靄から這い出る様に現れたのは眠いのか欠伸をしながらかつらつく足取りに加えて、二メートルを超える浅い茶色肌の巨漢に襟を掴まれる桃色の髪をツインテールにした少女。

二人とも長船の制服に身を包んでいる。

「で、こつちが薫と巧!」

そして、朝靄からもう一人、背中のコンテナから矢を一本外しながら現れたのは銀の混じった紺碧色の髪に黒と金と言う珍しいオッドアイの長船の男子用制服に袖を通す白人の少年。

「でもって、カルロ!」

古波蔵にカルロと呼ばれた少年が矢を番えながら二人に話し掛ける。

「オリガミケにヤイバをムけたフトドキモノ。カクゴはイイデスか?」

そう言って矢をリリースしようとしたカルロだが、引いていた弓をゆつくりと戻しながら首を傾げる。

「? カズがスクない」

「そう言われればそうデスね。十条姫和と十条帝人は何処です?」

カルロの言葉にエレンが構えを解いて首を傾げながら二人に問うと、巨大な鞆と柄を背負う巧と呼ばれた巨漢の生徒が、今更ながらの突っ込みを入れる。

「いや！ それよりあの劍の男は誰だよ！」

勝武居は構えを解かずに答える。

「鳥田勝武居。美濃関学院中等部二年だ！ 帝人と十条さんを追うつもりなら、此処で叩き斬るぞ！」

「姫和ちゃんと帝人くんは追わせない。私が、私達が相手になる！」

その言葉に可奈美もエレンが構えを解いた事につられて緩んでいた構えを直しながら告げる。

「話が早いデース!!」

エレンは言葉と共に先程と同じ構えを取り、カルロも弓を引き絞る。そして、巧は背中の柄を掴むと腕を伸ばして鯉口を切り、そのまま腕を前に回す。

すると背負っていた鞘にはスリットが入っていたのだろう。

抜くと言うよりは取り出す様な動きで二本の刀……では無く、一本の大太刀と大腰鉞とでも呼ぶべき武器が刃を上向きにして現れると巧は大太刀の方を薫と呼ばれた桃色の髪の少女に柄を握らせる様に腕を下げる。

自然体とでも言える様な伸ばされた方をされた腕は薫が少し肩を上げれば届くと言う程の絶妙な位置で柄も取りやすい位置で止まると薫は大太刀を両手で受け取ると巧と共に己の獲物を掲げる様な構えを取る。

「クソめんどくさい」

そう言いながらも薫は巧と同時に写シを張ると可奈美は薫と巧の構えから二人が薬丸自顕流である事を見抜き、御刀の柄を握り直す様に強く握る。

「きええー」「ぶうるうあああ！」

そこまで気迫の無い独特な薫の掛け声とは裏腹に本能的に何か不味いと思わせる巧の雄叫びが同時に響き、大太刀は可奈美に、大腰鉈は勝武居に向けて同時に振り下ろされる。

盛大な地響きが発生し、その音は遠くに居た姫和と帝人を同時に振り向かせる程だった。

「なんて威力……」「凄まじい……」

当然ながらそんな物が落ちて来れば防御では無く回避か逃亡を選ぶ、二人は揃って後退を選択し、薫と巧の射程範囲から大きく逃れるが、先程の一撃を喰らったアスファルトの部分は二人の足元まで窪み、斬撃を受けただろう部分には足元まで切れ込みが走っていた。

「ツチ。避けたかー、受けたらそのまま潰せてたのに」「やるな。初見で躲したのはお前らが初めてだ」

ゆっくりと二人同時に獲物を構え直す為に持ち上げると此処だと言わんばかりに可

奈美が迅移で薫に斬り掛かるが同じ様に薫と可奈美の間にエレンが飛び込み、写シに一時的ではあるが物理的な防御能力を付与する特殊技能、金剛身と言う技でエレンは可奈美の一撃を腕で受け止めて見せる。

勝武居も可奈美と同時に動こうとしたが飛来した矢を弾いた事で初動が遅れてしまい、一步遅れて巧に接敵する為に迅移を使うが、その隙はカルロにとっては十分であり、迅移で飛び込むと同時に勝武居の剣をアームガードで受け止めてみせる。

「嘘だろ!!」

勝武居が斬れ無かったアームガードに驚くのとエレンが可奈美の御刀を横に弾き、蹴りを放つのは同時だった。

可奈美は蹴りが命中する寸前で離脱した事で命中はしなかった。勝武居も可奈美の離脱に合わせて後退し、大腰鉈の一撃に備えて距離を取る。

「はあ!!」

だが、エレンとカルロは追撃に気合を込めた強力な蹴りを放つ。二人は予備動作が長かった事もあって何とか自分達の獲物を盾に防ぐ事は出来たが、予備動作が長かった分だけ威力は強力で二人は大きく吹き飛ばされる。

「金剛身を使ったタイ捨流と体術!」可奈美! 矢だ!!」

同時に起き上がった可奈美と勝武居はそれを狙ったかのように飛来した矢を同時に防

ぐ。

普通ならどちらかが先に防ぐのだが、カルロは普通とは違い、弓に二本の矢を同時に
番え、同時に射出。射出された矢は寸分狂わず二人の眉間を狙って飛来すると言う常人
離れた弓矢の使い手だった。

そして薫と巧の刃が矢を防いだ事で初動が遅れざるを得ない二人に迫る。

二人は素早く後転で一撃を交わしてみせるが今度は素早く振り上げての四連発だつ
たが、二人はサイドとバックのステップにバク転で何とか全弾を危なかしくも回避に成
功する。

「距離を取ったらやられる！」

勝武居の言葉に可奈美も頷き、同時に薫と巧に襲い掛かるべく、迅移を使うが、二人
を阻む様にカルロの矢が迫り、それを防ぐとエレンが接近し、刃と身体を使った攻撃が
放たれ、そしてエレンを援護する様に正確な射撃で矢が飛来し、可奈美か勝武居が距離
を詰めようとすればエレンは引き、その隙間に三本の矢が迫った事で二人は退避を余儀
無くされる。

二人は四人の息の合った高度な連携を前に攻めあぐねると言う状態だった。

「これじゃ間合いが詰められない!!」

可奈美が叫んだと同時に可奈美にはカルロが、勝武居にはエレンが飛び込み、互いに

二人の柄を掴んで捕まえる事に成功する。

「やった！ 捕まえました！」「It was caught！」

二人が同時に薰と巧に攻撃する様に指示を出しながら振り返るとエレンに姫和が、カルロには帝人が上段斬りの構えを見せて眼前に現れていた。

「取り逃したか」「こつちもです」

エレンとカルロは同時に捕まえた二人を解放して退避、エレンは危なかつたと言いながら地面に崩れる様に座り込み、カルロはそんなエレンの前に片膝をついた状態で弓を僅かに傾けて三本の矢を番えて引き絞ったまま待機する。

「姫和ちゃん！ なんで！」「帝人！ 何故、此処に」

「お前こそ、なぜ逃げない」「それはこつちの台詞」

姫和と帝人が同時に吐き出した言葉に可奈美と勝武居は言い澀む。

「これでようやく四対四、デスね」

戦いは新たな展開を迎える。

第十二話 放たれる折神の矢

エレンの眩きと共に帝人が森林部へと逃げる動作を見せると三人もそれを追う様に森林部へと逃げ込む。

銃を使う帝人が逃げた場所と言う事は射手に取ってはありがたい場所と言う事を三人は悟っていた。

事実、追い掛ける長船側もカルロの目が変わった事に気付いていた。

森林の様に遮蔽物が多い場所で戦う事得意とする射手も存在するがカルロはどつちかと言えば平野部や機動戦と言った開けた場所での射撃を得意とする射手でこう言つた森林部は苦手な部類だ。

エレンは大丈夫かと走りながら振り返ると三本持っていた矢の二本をコンテナに戻すとエレンに笑い掛ける。

「No problem」
問題無し

自信満々に告げたカルロが走りながら、引き絞つた弦から指を離して矢を放つ。

放たれた矢は風切り音を作りながら飛翔、一本の木を貫通して、前を走っていた帝人と勝武居、姫和と可奈美に別れさせる。

「嘘でしょー！」

「物によつてだが、できるぞ！」

弓使いが少ない美濃関では木を貫く様な矢は無い。と言う固定概念が有つたが意外にも射手の多い平城では剛弓から放たれた矢は木は勿論だが、その気になれば鉄板すら貫通する矢も存在する。しかし、姫和と帝人は感じていた。

「(一番面倒なのはあの弓使いだ!!)」

二人は平城の弓使いの中には木どころか鉄すらも貫通する弓使いが居るが、そういった弓使いは数本を同時に発射する、僅かな隙間を縫う様に矢を放つ、そして特殊な方法で矢を放つなどは出来ない者が多く、出来てもどれか二つまでだ。

伍箇伝は刀使・武宮を育成する学校であるが故に生徒達を評価し、成績を付ける訳だが、武宮の成績を付ける為の評価基準は武器によつて変わる。

弓の場合は攻撃特化の剛射型、複数の矢を飛ばす複射型、精密な射撃が出来る精射型、特殊な方法を扱う特射型、一般よりも発射感覚が短い連射を得意とする連射型の五つに分ける事で評価する。

カルロの場合は剛射・複射・精射型の三つが確認されると言う弓使いの中ではかなりの実力者である事が伺える。

「行くぞー！」

帝人は己の中にある不安を払う様に叫ぶ。

「おうとー！」

勝武居が帝人の言葉に答えると同時に行動を起こす。

武宮の二人が直角ターンで武器を下げていた巧に襲い掛かる。

それを見た可奈美と姫和も時間差を付けて巧に狙いを付けるが、エレンが可奈美と姫和の襲撃を妨害しようとする前に出た瞬間を狙って、勝武居が方向を再び転換して、エレンの横腹を蹴りつけて、蹴り飛ばすと可奈美と姫和は投げられたボールを追う犬の様にエレンを追い掛ける。

その隙に巧へ帝人の御刀が迫るがそれは薫の切り上げで大きく弾かれ、その隙に巧は峰でカル口をエレンが飛ばされた方角に吹き飛ばして支援に向かわせる。

これにより帝人・勝武居ペア対薫・巧ペアと姫和・可奈美ペア対エレン・カル口ペアの二対二が二つ出来る形となる。

弾き飛ばされたカル口はエレン・姫和・可奈美の頭上を飛び越えて木に背中から打ち付けられるがカル口はその寸前に一本の矢を放っており、その矢が可奈美の動きを止め、エレンを姫和に突っ込める隙を作り上げた。

「つくー！」

姫和はエレンに対して迎撃を選択、御刀を横に振って迎撃に出るが金剛身で身を固め

たエレンの腕に弾かれ、片手で振り下ろされた一撃は可奈美が受け止めるがエレンの横を通り過ぎる様に飛来する矢に姫和が直撃コースだと気付いて後退すると可奈美も無理は出来ないと後退した瞬間を狙っていたカルロが素早く番えた矢を放つ。

「つくー！」

放たれた矢は速度が遅かった所為か姫和には躲されるが、矢を追う様に迅移で移動したカルロに接近を許してしまう事となった。

「舐めるなー！」

腰の後ろから取り出した武器を叩き付ける様に振るうカルロだが、カルロの振りは決して遅い訳ではない。それどころか遠距離主体の武宮の中では脅威的な速度であり、同時に振り方も刀を使う武宮から見ても板についた動作であるが、近接を主体にした刀使の中でもトップクラスに入る姫和には防がれる。

「(このまま!)」

弾いて一太刀加えると腕に力を加えた瞬間に八幡力を使用したバックステップでバックステップと言うには、高い高度を取るそれはバックジャンプとも言うべき物。

そしてカルロが飛び退いて空いたスペースにエレンが飛び込もうとするのを数歩手前で移動を妨害する様に飛び込んだ瞬間に姫和と可奈美の二人は見た一瞬に違和感を感じる。エレンの顔が笑っていた事に……

「!? 可奈美!」

姫和の警告のお陰で可奈美が辛うじてカルロが飛びながら放った矢を防ぐと同時にエレンの御刀を防ぐ事に成功する。

「(上手い……)」

姫和が可奈美を引つ張る事で距離を取りながら、内心で舌打ちを飛ばす。

弾き飛ばした姫和では無く、姫和を助ける為に必ず飛び込むと可奈美の性格を考慮し、エレンを囷に矢で姫和では無く、エレンに意識の大部分が向く可奈美を狙いに行き、万が一にでも矢が防がれるか躲されれば、エレンの御刀か体術が飛ぶ二段構えの備え。

対荒魂戦でも射手が居ると居ないとでは、大きく変わると言うがそれを姫和は矢と刀、拳と蹴りを捌きながら実感していた。

時は少し遡り、二対二の状況を二つ作ったタイミング。

巧と薫はそれぞれの叫びと共に帝人と勝武居に向けて大上段での一撃を放った事で森の中の木はその衝撃に薙ぎ倒され、加害範囲の中心に近かった、もしくは刃に触れてしまった木や枝は木っ端微塵にされるか斬り飛ばされ、盛大な地響きと共に土煙と舞い上がる。

「なんて威力だよ!」

帝人と勝武居は長船の二人の攻撃がインパクトする瞬間に後ろでは無く横に逃げて

いた。

この長船の二人の加害範囲だが、その形状は楕円形であり、縦方向よりも横方向に避ける方が直線距離的に避けやすい事を察していたおかげで被害を受けずに済ませる事に成功する。

「距離を多く！」

体勢を整える為に勝武居が片手武器の取り回しが効き、片手での保持が楽と言う特性を生かした新体操の様な動きで大きく距離を取ると帝人も勝武居の判断を察して同じ様にバク転やステップで大きく距離を取る。

この二人を相手に距離を取れば負ける事は把握しているが、取り過ぎれば互いに攻撃の手段が著しく下がる事も勝武居は分かっていた。だが、巧と薫もその弱点は把握しており、勝武居と帝人が思いもなかった方法で解決を図っていた。

「投げたあ!!」

帝人の声が森に響く。

薫は迅移を使って半歩だけ距離を詰めると巧は勝武居が糸見兄妹戦で使ったのと同じ八幡力の滑空移動を迅移で加速させる高速迅移により十字状に展開すると薫の太刀投擲から一拍おいて巧も大腰鉈を投擲。

「これで！」

そのサイズと十字砲火と言う状況に二人は驚きながらも勝武居は伏せて回避し、帝人は迅移で加害範囲から逃れてから、迂回する様な軌道で薫の方に突貫を掛ける。

「ねー!」「くー!」

背後でそんな声が聞こえて振り向いた帝人に首を振った勝武居は揃っていつの間にか現れた人間の顔の程のサイズを持つ見た事の無い哺乳類の様な生き物と爬虫類の様な生き物に驚く。

哺乳類の方は投擲された大太刀を、爬虫類の方は投擲された大腰鉈をそれぞれ、尻尾で掴むと気合の入った鳴き声と共に元の持ち主である薫と巧に投げ返す。

「荒魂?」「知らん!」

勝武居の問いに哺乳類の投げた大太刀と爬虫類の投げた大腰鉈を腰を曲げた事で辛うじて回避した帝人は目の前を通り過ぎる二本の刃を見ながら叫ぶ。だが、完全には回避し切れなかった様で前髪の写シを僅かに斬られる。

それと同じ時にエレン・カル口対姫和・可奈美の戦いに変化が訪れる。

「ヤー!」「っ!」

カル口の放たれた矢を可奈美が弾き、カル口に姫和が突貫するとカル口の援護の為にエレンが飛び込んだ瞬間に姫和はシオルダータックルを使ってエレンとカル口を引き剥がした。

その瞬間に姫和は気付いてくれと目だけを動かして帝人を見ると偶然にも腰を曲げた状態から起き上がった帝人が姫和の目を見て姫和の意図を察する。

「Sit!」

カルロがエレンと離されたと察した時にはエレンを助ける為に矢を番えたが、既に遅く、射線を塞ぐ様に可奈美が立ち、エレンは木に背中から打ち付けられた際に息を吐いてしまった事で動きが止まり、その隙に姫和の御刀が首筋に向けられた。

「動くな」

その光景に一瞬だけ固まった薫と巧だが、帝人が迅移で巧の背後に素早く移動すると同時に撃鉄を起こしたニューナンブM60Cの銃口を背後から、貫通すれば心臓に着弾する位置と角度で押し付けた。

巧は銃口を押し付けられた事で固まり、その隙に勝武居は油断無く剣を薫に構えて薫の行動に備える。

「今度の刺客は長船か。何故、この場所がわかった」

勝負は互いに決した。

そう判断した姫和はエレンに御刀を向けたまま問うとエレンは不敵な笑い声を上げてから答える。

「それは秘密デス」

エレンがそう告げた瞬間に姫和の足元で何かの鳴き声と齧り付いた様な音が聞こえた事で目だけを足元に向けると両足の脛に大太刀と大腰鉞を投げた生物が二匹、嘯み付いていた。

「なんだ？ 荒魂!？」

「コイツらの言う事を聞くみたいだな」

姫和の言葉に銃口を向けたままの帝人が答える。

「荒魂を使役か……質問に答えろ。さもなくて……」

姫和がエレンの首筋に刃を近付け、帝人は巧の背中に銃口を更に強く押し付けるのを見た可奈美と勝武居は二人の名を叫ぶと二人を揃って目的の為ならば、阻む物は全て倒すと告げる。

「チヨ、チヨット待つてクダサイ!」

「話す気になったか」

「エ〜ット、もう少し、あと五秒ほど……」

いやに正確な時間指定に可奈美と勝武居が疑問に思い、肩越しにエレンに向き直った瞬間にジェットエンジン特有の剛音と共に何かが落下して来る音が聞こえたと思った瞬間には、地面に何かが落下し、水柱の様に土が巻き上げられる。

帝人と姫和、可奈美と勝武居は迅移で素早く退避するも土煙に可奈美と勝武居が揃っ

て咳き込みながら前を見るとそこには地面に突き立てられたSR-71と言う航空機に酷似した形状の黒い物体だった。

「S装備運搬用コンテナ……」

突き立てられた物体は武宮や刀使なら誰もが見覚えのある物だった。

「荒魂殲滅用の装備を……」

帝人の声に姫和も帝人と同様の危機感を抱く。

S装備。正式名ストームアーマー。

装着者の身体能力と迅移や八幡力、写シの性能を向上させる事で荒魂との戦闘を効率的にかつ有利に進める装備だ。対荒魂用のワードスーツと言えばわかり易いだろう。

「S装備なんて私、研修で一回しか着た事無いよ！」

便利なS装備だが、開発途中で稼働時間に制限があるなど運用性に難がある事と、生産・維持のコストがバカにならないと言う理由で配備数は少なく、管理局のみしか運用しない装備であり、数も少ない事から管理局が許可を出した場合のみ、コンテナに積まれて、現場に届けられるシステムで運用している。

「その前身のB装備なら何回かあるが……」

そんな便利なS装備を賄うべく作られたのがB装備、正式名ブリーゼアーマー。

S装備が出るまでは介護や救助用ワードスーツからの改造品だったこつちが主流

だったが、S 装備とは違い身体能力の補助と外付けの装甲による防衛力の強化が図られただけの物でパワードスーツと言うよりはパワーアシスト付きの鎧や甲冑で管理局からは S 装備運用のコスト捻出の為に退役、民間に放出された。

勝武居はその放出品の一部を何度か着ていたが、それは三河武宮と言う特殊な出で立ち故だが、それは追々に語ろう。

兎も角として S 装備到着はそれを知っていた長船側には有利であり、長船の三人に装着された事で戦況は逆転してしまっていた。

「お色直し、完了デス！」

自信満々の S 装備装着済みのエレン。

「アーマード薫、見参」

肩に大太刀を背負いながら告げる S 装備装着済みの薫。

「It's a climax from here!」

S 装備装着済みの状態で矢を弓に番えた自信に溢れるカルロ。

「これで形勢逆転だ」

鼻で勝ち誇った様に笑う土汚れが目立つ長船の男子用制服のままの巧。

「何故に一人だけ付けて無いんだよ！」

巧を見た勝武居が流石にこれには突っ込んだ。

一個で二個を入れられるコンテナが二つ落ちて来たなら誰だつて四人装着すると思
うが、たつた一人だけS装備はおろかコンテナ到着の際に回避がギリギリだったのか土
煙で服を汚して出て来たら、流石に敵であろうと突っ込まずにはいられない。

「サイズがないんじやああああ!!」

勝武居の突っ込みにたつた一人だけS装備を付けていない巧が叫ぶ。

S装備は多種のサイズ調整は自動で行われるがサイズが大き過ぎたり小さ過ぎると
着られない。

じゃあ、エレンの様な巨乳の刀使はどうするんだよと言う話だが、此処で問題になる
のがエレンのおっぱいと巧の様な雄っぱいの材質の差である。

おっぱいなら脂肪が主成分なので押せばある程度は潰れるので窮屈感さえ我慢すれ
ばいける。だが、巧の雄っぱいは筋肉が主成分なので押しても潰せないので身体ではな
く装備そのものの調整が必要となる。

ならば、専用装備。なのだが、此処でS装備のコスト的な関係で専用装備は用意出来
ない故に共用となるのだが、巧の様な体格は日本ではレアなので用意した場合の対費用
効果が少ない。故に巧が着れるS装備が無い。

色々書いたが短く纏めると『巧の様な体格に合わせて作ったS装備なんて使い道少
ないから作るだけ無駄』である。

「そうか……それじゃあ、第二ラウンド……」

勝武居の言葉と同時に姫和と可奈美は御刀を正眼に構え、勝武居は剣を腰と腹で包む様に持つ構えを作り、帝人は身体を半身にして御刀を身体と同じ様に向け、銃を片手で保持してサイト越しに相手を睨む。

「開幕だ!!」

勝武居の叫びと同時に四人は迅移を使って前以外の場所に高速移動する。

「え、え? え!」 「Wa t t? Wh y!」

突貫して来ると思っていたエレンとカルロは面食らい。

「おい! 主役メカの活躍シーンだろうがぁー!!」

伊豆の山中を薫の叫び声が響き渡ったのと同じ時間の鎌倉の管理局本部の司令所では困惑が包んでいた。

横須賀基地からS装備運用コンテナの射出要請があつたかと言う報告が届いており、司令所の中で執務に当たっていたメンバーは伊豆にS装備射出を指示していない事を知っている。

そもそもとしてS装備運用コンテナはミサイルの発射設備を流用しているので滑走路などを使った離陸とは違うので大抵は自衛隊や米軍の基地などから発射される訳だが、自衛隊も米軍も今回のコンテナ射出は把握していなかった故にこの様な情報が報

告された事で困惑が司令所を包む。

一緒に送られた画像もピンボケしているが可能な限りで編集したのか、運搬用コンテンツのそれが写っていた。

「正確な位置は？」

友衛がPCを操作するスタッフに問うと直ぐに正面の大型ディスプレイにその位置が表示されると扉が開いた音が聞こえて司令所で仕事をしていた全員が振り返るとそこには皐月夜見が廊下から司令所に入って来た直後だった。

「獅童さん。此花さん。苔石さん。紫様より出動命令が出ました。ご準備願います」
親衛隊の出撃が決まった瞬間には呼び出された三人は直ぐに司令所をでる。

このメンバーは満月と違い準備には然程の時間が掛らないのと襲撃後にいつ再襲撃があるかわからないので既にある程度の戦闘準備は済ませていた事もあり、直ぐにでも出撃出来る状況だった。

親衛隊の四人は連れ立って本部を出るとヘリポートへと続く車道の脇を歩きながら、此花が口を開く。

「今になってわたくし達を出すなんて。紫様も随分勿体付けましたわね」

そんな独り言の様に呟く此花の言葉に、苔石が答えた。

「紫様も何か考えがあつての事だろう。俺たちが気にする事ではないだろう」

「そこはお考えがお有りであると言うべき所ですわよ？ 礎々石さん？」

「まだ、敬語に慣れんな」

そんな言葉に此花は苔石の会話に獅童はもつと別の事を気にしていたらしく、此花が喋り始めた事で話をする雰囲気になったのか獅童が目を見ながら話し始める。

「君が紫様のお側を離れるとは珍しい」

その言葉に君と言う言葉で指された人物である皐月が口を開く。

「索敵には私の力が役立ちます」

皐月がそう答えた直後に此花も気になっていたのか肩越しに皐月の方を振り返り、前に歩きながら問い掛ける。

「結芽や葉結、童子と明夜は居残りですか？」

「燕さんと隼さんが出ると不必要な血が流れますし、友衛さんも出るとあの二人の面倒と紫様の護衛に穴が出来てしまうのと、彼の本来の獲物は今回の出勤場所だと扱い難しいです」

「今回は森林と山岳地帯だったな……明夜は？ 紫様は彼に出撃命令を出していないのか？」

獅童が意外そうな表情で皐月に肩越しに振り返って聞いた瞬間に此花の口が動いた。

「真希さん、手が震えていますわよ？」

「寿々花こそ、足取りが覚束ないが？」

「夜見も震えているが大丈夫か？」

「それは苔石さんもでしょう……」

四人の脳裏に満月が親衛隊入りを果たしたエピソードが鮮明に蘇ると震えが一層小刻みになる。

満月は軽度であるが親衛隊入り寸前に、この四人の心にトラウマを植え付けていた。

「やめましょう。彼を森と山と川に放り込んではいけません」

「そうですね。精神衛生的に大変よろしくありませんものね」

「ああ。寿々花と夜見に同意見だ。これ以上は本当にやめよう」

「彼が味方になった事と時の移ろいに感謝しよう。本当に……」

親衛隊では珍しい完全な意見一致と言う光景が出来た所でようやく皐月が獅童の問いに答える。

「伊豆の森林地帯とわかった瞬間に一番に名指しを受けました。そもそもの話ですが、紫様が山、川、森での親衛隊出撃案件で彼を出さなかった事は一度もありません」

「そうだったな。それで？ 肝心の明夜は？」

「そう言えば途中で合流すると思ってましたけど……」

「どうせもうヘリポートで弾薬の積込作業してたりしてな！」

トラウマを忘れたいと言わんばかりに皐月の言葉に乗る三人はようやくヘリポートに着くと弾薬の詰め込み作業を終えた瞬間の満月が居た。

「準備は終わっています。後は移動中に出来ますから」

全員の準備が済み、パイロットは親衛隊搭乗のヘリコプターを操縦出来る事への喜びをやや興奮した様子で告げるとヘリコプターは離陸。鎌倉の地を離れて、伊豆へと向かう訳だが、その間の時間を無駄に過ごす様な人物は親衛隊には居ない。

「あり得ないですわ」

「何か？」

到着後の行動の擦り合わせや作戦会議を行うが今回は索敵攻撃の為に決める内容が事務的な事が多かった事もあり、直ぐに終わってしまうと此花が思い出した様に告げると満月がいち早く反応した。

「折神家管轄外のS装備が存在するなんて」

「そうですか？ 以外と多いですよ。S装備を運用して維持が出来る組織は」

満月のその言葉に獅童が食って掛かる。

「折神家と管理局以外にアレを開発、運用出来る組織など無い！」

「そう開発と運用が出来るのは折神家と管理局だけです」

獅童の言葉に満月は正しいと告げる。

「私が言ったのは運用と維持です。完成品を購入して、修理と整備をしながら運用出来るだけです」

兵器と言うのは配備するだけで使える訳では無い。

高性能な物となれば当然ながら維持する為の財力や科学力、工業力なども問われる。何よりも問われるのは高い費用を掛けて導入したとしてそれがちゃんと使えるのか、消費する費用以上の効果があるかだ。

S 装備を運用しているのが折神家と管理局だけなのは、メリットに対してデメリットが多過ぎる上に大き過ぎるからだ。しかも複雑なので導入した場所で改造や改良も難しいので現在の S 装備の性能では大部分が稼働時間が十分と短過ぎる事と整備性も悪く、汎用性も同時に乏しいと言う理由などで対費用効果が高い B 装備の方が主流である。

「この維持、運用に開発が入ると改良や改造、発展なども出来ます」

これ以上深く解説すると面倒くさいのと長くなり過ぎるので言いませんがと続ける。と苔石が満月の言葉に頷く。

「俺達の実家も S 装備の運用を考えていた」

苔石の実家は世界中の海運・空運・陸運に深い根を持つ苔石運送を中心に複数の事業を手掛ける財閥だ。

そんな苔石財閥の持つ企業の中に荒魂向けの民間軍事警備会社が行う様な業務を行う場所があり、そこがS装備を運用する計画が出たは出たが。

「実際に運用と維持は出来たがな……その高い金払って用意する意味がその……」

高価なS装備よりも安価なB装備の方が旨味があるとしてB装備に流れた経緯がある。

苔石は話題を転換したのか口早に次の言葉を吐き出す。

「S装備の運用だが、舞草ならあり得るだろう。造反分子といえど管理局内の存在なんだから」

「ですわね。紫様は、十条姫和達が舞草と接触すると踏んで泳がせていた。と言う事かも知れませんか」

その後は長い時間の沈黙が降り掛かり、彼等の鼓膜を叩くのはヘリコプターを飛ばすメインローターの駆動音のみになった時、満月は思い出した様に積み込んだ弾薬箱に手を伸ばし、開けると中に満載されていたショットシェルを私物のタクティカルジャケツトや各種ショットシェルホルダーに詰め込む作業に入る。

地味ではあるが、持ち込む弾丸の多い今回は仕事量が多い満月だが、誰にも手伝ってとは言わず、他のメンバーも手伝いを申し出たりはしなかった。

彼は戦闘中、何処に、どの弾を、どの位入れたかを思い出す暇は無いと考えており、更

にその状況に最も合う弾丸を即座に判断、取り出す為にも、頭では無く身体で覚える為に自分の手を使って詰める。

どの位経ったのか詰め込みをしていた本人ですら、わからない時間が経つと全てのホルダーに色取り取りのショットシエルが詰め込まれていた。

満月は肩から胸・腹・背を覆うタイプで、親衛隊の制服と同じ色使いのタクティカルジャケットを制服の上から着込み、腹と胸の間に設けられたホルスターに自分の使う銃にあつたマガジンを二つずつ納め、マガジンを収めたホルスターに付設されたショットシエル用のホルスターにもショットシエルが収められており、ここだけで十六発入りマガジンが八つとシエルが十六発。

更に満月は自分の身体に弾薬を取り付けて行く。ショットシエルを納めたホルダーを両腕・両二の腕・両太腿・腰とそれぞれのホルダーをそれぞれの場所に取り付けて行く。

これで両腕部だけで三十二発に合わせて、両太腿の四十八発と腰の六十発で合わせて百四十発。

此処で更に銃本体に三十二発入りドラム式マガジン一つにマガジンと薬室で十五発と合計で二百九十五発である。

そして、そこに腰の後ろには空マガジンを入れる為の大型のダンプポーチが一つ付け

られるのだが、それが手こずっているのか中々付けられない満月を見かねた皐月がダン
プーチだけは取り付けて上げると、満月は恥ずかしさから頬を僅かに赤らめながらお
礼を告げるとそれを隠すかの様に顔を背けてしまふ満月。

「舞草との戦闘も考慮しておいた方が良いでしょう」

皐月がそう言うのと全員が真剣な表情で頷いたと同時にヘリコプターは伊豆の峠道に
作られたP Aに対して、横付けする様にホバリングを行い、苔石と満月がP Aに飛び移
る様にヘリコプターから降り、飛び移る後発のメンバーを補助して、全員が雨の降りし
きるP Aに立つ。

そして静岡県警所属の特別祭祀機動隊の車輛がヘリコプターと入れ替わりで現れる
と同時に素早く指揮所の設営を行うが、指揮所の設営が終わる頃には時刻は夜と言える
時間になっており、道路を照らす為の街灯が指揮所とそこに居る人員を僅かに照らす。

「ようやく動くけるな」

先程まで自分の武器が雨で濡れていないか確認し、拭き上げていた苔石がテントの中
から現れる。

「明夜は既に山の中です。ご注意を」

救護用テントから皐月が現れて既に明夜は此処に居ない事を告げると外で設営の様
子を見ていた此花が手を翳しながら告げる。

「ちようど、雨も上がりましたわね」

此花の言葉に腕を組んで立っていた獅童が此処に居るメンバーに命令する様に告げる。

「さあ……山狩りだ」

五本の矢は放たれた。

第十三話 放たれた矢は親衛隊五席

「追つてこないね……」

息を荒げた可奈美が背後を見ながら告げる。

「S装備は稼働時間に難がある。追えないが正しい……かも」

空を見る様に顔を上げて息を荒くする勝武居が告げる。

「それでも追い掛けて来たら逃げられない」

帝人が呼吸と体勢を整えて告げた途端に雨が降り始める。

「強くなりそうだ……何処か雨宿りを」

呼吸を整えた姫和が手を翳しながら首を振って雨を凌げそうな場所を探していると可奈美が売店だった廃墟を見つける。

中は手が入れられていないのか既にボロボロだったが、台風が来たとしても崩れはない程度には新しく、四人は此処で雨をやり過ぎす事にする。

四人は中に入ると自然に姫和と可奈美、帝人と勝武居と二対二に分かれ、姫和と可奈美は一階の外から見えない位置の床に座り、勝武居と帝人は見張りと言う観点から二階へと上がる。

二階に上がり、窓から目だけを出して周りを伺い、暫くは追っ手もないだろうと判断すると壁に背中を預ける様に床に座り込む。

二人の間には沈黙が落ち、雨が降る音が唯一の音として鼓膜を揺らしていると、帝人が勝武居に声を掛けた。

「何故……逃げなかつた？ 俺たちを売る様に降伏すれば」

まだ、情状酌量の余地があつた筈と言う帝人の言葉は素早く繰り出された勝武居の裏拳が額に直撃した事で止められる。

「お前の剣を受けてわかつた。三河武宮や刀使の大人と同じ物だと」

帝人は額を押さええながら何を言いたいと思ひながらも、それを胸の内に仕舞ひ、先を無言で促す。

「お前の剣は守り抜く為の剣にしか無い、重みを感じた。何かを守る。土地とそこに住む全ての人を守る三河の剣とは違う。けど……」

勝武居が少し気恥ずかしそうにしながら告げた言葉は帝人を驚かせるには十分だつた。

「愛する家族を守る為と言う理由で振るわれる剣に、俺は少し憧れを感じた」

「は？ どう言う意味だ？」

肩越しに勝武居は振り返り、鉛色の空を見上げながら、今までの自分を振り返つたか

らこそ溢れた独白の様な声で、勝武居は言葉を紡ぎ始める。

「物心ついた時から三河武宮と三河刀使が居た。特祭隊の警官や武宮と刀使よりも速く、B装備の鎧を着て現れる、あの人達の背中に憧れて目指した。父も母も、祖父も祖母も、三河の地を守り続けた武宮と刀使だった事も三河武宮を目指した理由だった……」

「三河武宮。と言う名の力を得る事が、いつの間にか目的になっていた。違うか？」
帝人の言葉にそうだなと自虐的な笑みを浮かべながら、勝武居は帝人の方に顔を向ける。

最初の理由はその背中に憧れて、目指した理由は親がそうだったから、もう一つは親の意志を継ぐ為。その為に三河武宮を目指した勝武居だが、その為の手段に三河武宮と言う道を選んだ筈が、自覚しないままに三河武宮になる事が目的に成っていた。

そして、帝人の剣を受けた勝武居は気付いたのだ。三河武宮と三河刀使の背中に憧れた本当の理由。

「守りたい物を守り抜こうと決意し、覚悟した者だけが持つ、あの背中の美しさに惹かれたんだ」

勝武居が帝人に身体ごとと向けると、剣を自分の横に置き、昔の武士がした様に両手を床に付けて、深々と頭を下げる。

「お前の剣から大切な事を思い出させてくれた上に気付かせてくれた。俺の剣には意志では無く、意思が無かった」

帝人は勝武居の行動に慌ててやめると告げるが、勝武居はそのままの体勢で言葉を繋げる。

「俺はまだ、強くなれる。目的が間違っている事に気付いた」

勝武居が顔を上げる。

「三河武宮の力はあくまでも目的を達成する為の道具で、目的にはなり得ない。そして、三河武宮の力は守る為に振るべき物だ。俺はあの人達の背中に並びたい。だから、三河の人と地を守りたい。だけど、俺は未熟な身なんだ。三河の人と地を守るなんて出来ない。自分の血で汚すだけだ」

だから。と勝武居が帝人の制止が来る前にもう一度深々と頭を下げる。

「十条帝人について行かせてくれ。大事な事をついさつき思い出して、気付いたばかりのこんな未熟な武宮だが、可奈美や舞衣と隼士、そして十条姫和と十条帝人と言う友人だけは守り抜きたい」

勝武居が顔を上げるとその目に宿った決意や覚悟の帝人が言葉を飲み込んだ。

「その為には、守る為にあんなにも重い剣を振るえる、十条帝人について行く必要がある」

だから、ともう一度だけ深々と頭を下げ、その頭は床に付いた。

「連れて行つてくれ。十条帝人。貴方が……私を側に置いてくれる限りだけで、構わないから」

帝人は目を瞑つて勝武居の両肩に両手を置く。

「俺はかの天下人の様な器は無いし、お前が言う程に強い訳ではない。お前が望む道を歩かないかもしれない。それでも良いなら……」

帝人が勝武居の両肩を持って上体を起こさせる。

「勝手に着いて来れば良い。そして、ついて来るなら、お願いがある。もしも俺が間違つた道を進み始めたなら、殴つても止めてくれ」

勝武居は帝人のこの言葉の意味を悟つた。

自分の歩く道を着いて来るなら妄信的に着いて来る従者の様な人間では無く、自分の事を殴つても止めて正しい道に止めてくれる親友の様な存在であつて欲しいと言う事を。

「帝人……」

「自分もまだまだ未熟だ。間違ふしわからない事も多い。でも、俺から学べる事、奪える事があつたなら好きに持つて行つてくれて構わない。俺もお前からそうさせて貰う。共に、同じ場所に行く為に……改めてだが、よろしく頼む。鳥田勝武居」

姿勢を正して真つ直ぐに出された手を勝武居持つて同じ姿勢を作つてから真つ直ぐに握り返す。

この瞬間から二人は友であると同時に協力者と言う関係を捨て、親友であると同時に好敵手の関係へと成つた。

一方で森の中では手頃な木の下で雨宿りをする長船の四人が居た。

「で？ どうだった、あいっらは」

「能力的には問題ナシデス。アトはー、カルロはどう思いましたか？」

エレンが薫の問いに答えると側面で木に背中を預けながら弦の張りを確認していたカルロが口を開く。

「相手の実力を状況を見れる。向こう見ず？ と言う物では無いですね」

カルロが長年日本で暮らして来た。と言うよりも公用語が日本語な環境を幼い頃から経験した様な日本人と同じ日本語で話し始める。

「お前はどう思った？」

薫が木の裏側に立つ巧に問う。

「俺に聞かないでくれ。人を評価出来る頭は無い」

巧の問いを聞いたエレンが薫にどう思ったか問い掛けると、薫が鉛色の空を軽く見上げながら告げる。

「ただの向こう見ずじゃないし、全員が全員でストッパーを持つているな」

長船の四人がそれぞれの意見を出し合い、意見の一致を行うと雨が降りしきる中で木の下から出て、話題に上った四人を探しに出る。

長船のメンバー四人が探している事を知らない話題の人物四人は雨が止み、濡れた峠道を満月の明かりだけが照らし始めた時刻に雨宿りしていた廃墟から抜け出していた。

「この月明かりなら動ける。行きましよう、兄さん」

満月の明かりに照らされた道に三人が出ると可奈美と姫和の雰囲気が変わった事を帝人は感じ取れた。

「雰囲気が変わったな。二人共」

「そう言う兄さんこそ、勝武居との雰囲気に違いがある様に思いますか？」

わかるか。と帝人は肩を竦めると勝武居が笑いながら、男の友情は意外と速く繋がる上に固くなり易いすいんだと告げると帝人が上手い事を言うと言いたいのか、無言で突き出した拳を勝武居も察して拳に自分の拳を突き合わせる。

「こんな所で仲良く雨宿りしていたんデスね……」

雨の中で行動していた。と言う様な疲労を感じを漂わせているエレンだが、長船の制服を着る四人の制服には水を多く吸った服に見られる肌には張り付いている様にはなっておらず、少し雨の中を走ったらこうなるだろう程の吸水量だった。

姫和や帝人、可奈美と勝武居は知らないが、長船は沖縄も活動範囲にしている関係かマンガローブや海辺、下手をすると海上で迅移を使って跳ねながら戦う場合もある為に刀使と武宮の制服の上着は吸水性が悪く撥水性の高い生地を使っている。しかし、デザインの関係でどうしても中のカッターシャツが露出するがそつちは、巧が雨が止んですぐに全力の水切りを全員分行った事である程度は乾いている。

それでも全員の髪は濡れ切っている辺りに雨の中で行動したのがわかる。

「さてつぎの……」

可奈美の言葉で片手サイズの近接武器を持つメンバーが抜刀もしくは抜剣の構えを見せ、弓のカルロも腰にぶら下げた武器の一つに手を伸ばした。ただ、大太刀と大腰鉞の二人は黙って成り行きを見つめる様に立つ。

暫くは抜くか抜かないかと重苦しい沈黙が支配する中で突如として、銃声とは違う乾いた爆発音が一つ響く。

「おめでとうございマース！」

「お前からうかくー」

「あれ？ 火薬が……」

「ヌレてマス……」

突然のクラッカーに合格と言う言葉が帝人・勝武居・姫和・可奈美の思考回路を停止

させるには十分だったらしく、姫和と帝人にクラッカーに仕込まれていた紙帯が降りかかるのは気にしない程だった。

「巫山戯るなよ！ 一体何者だ！ 俺達の邪魔をしてお前らは！」

「これ以上邪魔をすると言うのなら、今度こそは本気で！」

抜刀する帝人と姫和を可奈美と勝武居が止めに入るとエレンが放った後のクラッカーを向けながら、ニヤリと笑うと石廊崎は逃げないと告げる。

その言葉に二人が剣を構え直す。エレンはそんな二人を見て真剣な顔付きを浮かべる。

「お答えするその前に……」

姫和と帝人が本気の構えを見せた瞬間。

「マズはコレを片づけちゃいマスね」

「山でのポイ捨て、ダメ、ゼツタイ」「ねっ」

エレンの言葉に長船の四人はクラッカーの後処理を終えるとエレンが手を叩いて埃を落としながら何処まで話したかと問い掛けると勝武居が何も話していないと全員の言葉を代弁し、姫和と帝人はこの四人に戦うつもりがない事を察して御刀を鞘に納める。

「えっと、エレンさんと薫ちゃん、巧さんにカル口さんでしたっけ？」

可奈美の言葉に薫がちゃん付けで呼ばれた事で体格の事で歳下と見られたと感じた薫が立ち上がって抗議するとエレンはさんよりもちゃんが良いと告げた事で、可奈美は改めて二人をちゃん付けで呼んだ事で薫はちゃんで確定したと肩を下げるとカルロが口を開いた。

「合格は文字通りの意味です。あなた方四人は舞草の試験に合格しました」

「もくさ？　と言うか日本語上手い！」

カルロの日本人でも訛りを感じさせない日本語に可奈美が驚いていると今度は勝武居が口を開いた。

「日本刀源流の地の事だな。五箇伝の生徒なら大抵は知っている。授業ででるし、中部の最初の試験では確定して出て来る問題だ」

勝武居の言葉に帝人が繋げた。

「もう一つとしては折神紫に対する叛逆者集団、都市伝説か、紫反対派の政治家がでつち上げた噂か何かとは思っていたが……実在したのか？」

「折神紫率いる変革派に争い、御刀と刀使、武宮をあるべき姿に取り戻す為の組織としては、ナイスなネーミングでシヨ？」

背中下げた御刀を見せる様な体制から戻ったエレンの言葉に可奈美が姫和と目的が一緒なのか確認の様に問うとエレンはそれを笑顔で肯定する。

それに可奈美は何処か喜色が籠った声で姫和に話掛けるが、姫和は御刀に手を添えたまま、舞草か……と漏らす。

「ファイマンと言う名に聞き覚えはあるか？」

「あのアバターは似合っていないから、いつも辞めろと言ってますネー」

その言葉に姫和は試験と称して、人をいいように試す奴らを信じられるかと言いながら御刀を抜こうとした瞬間に柄を帝人に抑えられる。

「落ち着け、舞草は言つてしまえばテロリスト同様に反社会組織だ。新しい人員を入れるにしても、色々試さなければならぬだろう」

「それだけじゃない。刀使も武宮も荒魂を使役するだと。それでは折神紫と変わらないじゃないか！」

姫和に言葉に薫と巧は違うと真つ向から否定。荒魂と呼ばれた、チンチラサイズのねねとねねと同じサイズのトカゲの様な外観のくくが抗議する様に鳴き声を上げる。

そして薫と巧がペットだと主張、姫和が戯言を言うなど声を荒げた瞬間に可奈美と勝武居がねねとくくと触れ合いを始めてしまう。

ねねとくくがだらしのない顔で触れ合っているのを見て、毒気が抜かれた姫和と帝人にエレンが話し掛ける。

「ひよよんとていはいは薫の御刀、袈々切丸と巧の御刀、吼々割丸の由来をご存知ですか

！」

エレンの言葉に姫和と帝人は突然つけられたあだ名を鸚鵡返ししてしまい、質問への返答が出来ずにいるとカルロが口を動かす。

「大昔に栃木の二荒山神社の近くで暴れていた柵々と言う妖怪。まあ、普通に考えて荒魂ですね。を一人で……まあ、当時の益子の巫女さんが懲らしめたですよ」

「うん？ 荒魂なら斬って、祓うだろ？ この二匹の因果関係がわからんのだが？」

勝武居の言葉にカルロは慌てないで下さいと前置いて続ける。

「吼々割丸は男体山に住み着いた吼々と言う龍を退治した時に背中を割って出て来たと思われています。まあ、和鋼製の御刀なので多分ですが、吼々の和鋼だと思います。ここで面白いのはどちらとも栃木県の話で両方ともその荒魂を滅ぼさ無かった事ですね」

「補足するとねねとくくは荒魂デース。が、同時に柵々切丸、吼々割丸の代々継承者と常に共にある守護獣でもありマース！」

カルロとエレンの言葉に姫和と帝人が荒魂と人の共存。しかも守護獣を担っている事に驚く。

薫は守られた事は無い、巧は守られたと言うより助けは受けるがとエレンの言葉の一部を否定する。

「未だ荒魂や隠世は不明点が多く、ねねとくくはその解明の手掛かりとして、特異ケースとして上から認められているんデス」

ねねとくくが鳴き声を上げて「そうだとアピールする。」

「そんな馬鹿な話が」「それに見てください」

そう言つてエレンとカルロが自分のスペクトラムファインダーの画像を見せるとそこには荒魂の反応は一切無く、姫和の持つスペクトラム計も反応していなかった。

「ねねとくくがno problemなの。ワカッテくれましたか?」

エレンの話が終わると同時にねねとくくが可奈美の胸に飛び込む。

可奈美はそれを受け止めて、腕と胸で転がるくくとねねにくすぐりたいと言いつつも笑い声を上げる。

「姫和ちゃん。この子達、とってもいい子だよ」

可奈美が勧めるの様に腕を前にほんの少し動かすとねねとくくが姫和、特に胸部を見ると二匹共にかっかりだと言わんばかりの表情と鳴き声を上げる。

「は?」

「そうそう。ねねとくくはビックなバストが大好きデス」

「そして将来デカくなる女の可能性を嗅ぎ分ける」

それを言われた瞬間に姫和が御刀を抜くのを帝人が羽交い締めにして防ぐ。

「落ち着け姫和。胸が小さい方が和服とは似合うから。胸がある奴は胸でやればいい。無い奴は無い奴にしかできない事をすればいい!!」

兄として言っている事を言っていない気がするが、姫和にそれを突っ込む余裕が無く、兄の拘束を振り解こうと暴れる妹にまずい事に成りかねないと本能で察して必死に止める帝人を周りは笑いながら、もしくは如何しようとして置いてけぼりにされた様な表情で成り行きを見ているとねねとくくが何かを感じたのか可奈美の胸下から離れ森の方には何かを警戒する様な体勢を作って警戒や威嚇をする様な鳴き声を上げる。

「荒魂だ！ 囲まれているぞ！」

姫和の掌に乗せたスペクトラム計が四方八方に伸びており、完全に包囲されている事を悟る。

エレンとカルロはそれを聞いて自分のスペクトラムファインダーを見るが、荒魂は周囲に居ないと表示されているのを確認すると訝しげな視線を手元のスペクトラムファインダーに投げる。

「ねねー!!」「くくー!!」

「おい！ねね！ 待て！」「くく！ 止まれ!!」

ねねとくくが揃って森の中に走り出すと薫と巧がねねとくくを追って走り出してしまい、エレンとカルロが止めに入ろうとするが突出した小型の荒魂に邪魔を受けて、後

退を余儀無くされてしまう。

「凄い数、なんでこんなに!」

「知るかよ! ただ厄介、つて!!」

荒魂の群れが逸れた六人を飲み込まんと高速で移動するのを見たエレンとカルロ、帝人と姫和、反応がギリギリで間に合った可奈美はステップやバク宙を使いながらなんとか退避出来たが、退避の方向を誤った勝武居が群れに飲まれる。

「勝武居くん!!」

「助けるのと話は後です。まずは此処を突破しないと!」

可奈美の言葉にカルロが叫ぶと同時に腰から引き抜いた特殊警棒を取り出して手首のスナップだけで完全に伸ばし、音に反応しただろう荒魂を叩いて払い退ける。

カルロの特殊警棒は黒い愚鋼製で先を尖らせた事で殴打が出来るエストックの様な物になるが、普段は弓のスタビライザーとして使用している。

「Sit! It has been cut off!!」

荒魂の強襲を捌ききったカルロだが、味方内全員から分断されてしまった事を適当な木に突き立てた特殊エストックとでも言うべき自分の獲物にぶら下って荒魂の群れが足の下を通り過ぎるのを待つ。

「In a radar, without reaction……」

手元のスペクトラムファイnderを見て眩く。

彼のスペクトラムファイnderはつい先週に更新したばかりの最新型。

荒魂の探知に難があつた初期型とは比喩物にならず、探知範囲にいるなら大抵は探知するのだが、今回はそれが無かつた。

「Super black」

折神家も管理局も紫の手に完全に掌握されていると悟つたカルロはこれからどうするべきか頭に手をやって、思案の海に沈んで行く。

「来なくなつた……」

群れに飲まれてしまつた勝武居だが、なんとか抜剣をして、交戦しながら群れを横切るなり、斬り払いながら後退をしたりと致命傷を受けないようにしながら移動していたのだが、とある場所に入った瞬間に群れがまるでそこに近付かない様にしつともそこから出させないと言わんばかりに激流の壁を作つていた。

「うん？」

そんな荒魂の群れの中に妙に月明かりが反射する場所があるなど思つたその瞬間に銃声の様な乾いた音と共に火の花が咲き、勝武居の写シに穴が空いた。

「ッ!？」

反射と本能で大きく飛び退いた勝武居に対して、小型の荒魂の群れの中で銃撃の犯人はほくそ笑んだ。

何故か？ 簡単だ。勝武居の飛び退いた場所には犯人が仕掛けたトラップがあり、勝武居はそのトラップに無警戒だった事、突然の銃撃に平静を知らぬ間に失っていた事で、トラップのワイヤーに引つ掛かり、ワイヤー作動式のクレイモアの爆発に巻き込まれてしまう。

クレイモアの爆発に森の木々が震え、土煙が晴れた場所には写シを穴あきチーズにされて、ゴミの様に転がりながらも写シを剥がし切られ無かつた勝武居がそこに居た。

「どんなに警戒心のある獣も、今そこにある危機を見れば、潜在的な危機には察せなくなります」

小型の荒魂の中から親衛隊の制服に親衛隊カラーリングのタクティカルジャケットを羽織った親衛隊と思しき人物が現れるが、声が布と茶色のフルフェイスマスクを着けている所為で男か女か勝武居にはわからなかつた。

そんな勝武居にもわかる事はあつた。

荒魂の中から写シを張らずに出て来た事、そして空のショットシェルを機関部から排出しながら一歩づつ確実に近付いて来るその行動は明確なまでの敵意がある事を悟る

と写シを張り直すと同時に立ち上がる。

「(親衛隊が相手……腹括るしか無いか……)」

劍を片手で持ち、もう片方の手に劍の鑄を乗せる構えを見せる。それを見た親衛隊の射手も銃を槍の様な構えで持って構える。

「美濃関学院中等部二年！ 鳥田勝武居！ いざ、推して参る!!」
「親衛隊第六席、満月
明夜」

同時に名乗りを上げると同時に劍と銃劍がぶつかり合った。

「追つて来ない？ どう言う事だ？」

「わかんない。けど、なんだか……」

「此処まで追い込む事が目的の様だ」

川辺の岩場まで逃げて来た姫和と可奈美、途中で偶然にも合流を果たした帝人は岩場まで来た途端に執拗なまでに追い掛けていた荒魂達が追つて来なくなつた事に不審な感情を抱く。

姫和は帝人にそこまで荒魂が計算した動きをする筈が無いと告げるが、帝人の此処まで追い立てる為に動いていた。と言われる方がしつくり来る状況証拠は揃いきつてい

た事も有り、姫和の反対の声は何処か自信が足りない印象だった。

「勝武居と長船の連中はどうなったかな？」

「確かに少し心配だよね……」

「これも奴らの差し金かもしれないぞ」

姫和の言葉に可奈美はやっぱ信じられないかと問い掛けるが、姫和は何も答えずに来た方向を睨む様に見つめる。

「そつか。じゃあ、利用しちゃえばいいんじゃないかな？」

暫くの沈黙がおり、川のせせらぎだけが聞こえるだけの空間になった三人の周囲に放たれた可奈美の言葉は嫌に響き、その内容は帝人と姫和にえ、と困惑の声を上げさせるには充分過ぎた。

「姫和ちゃんの目的の為に必要ならそうすべきだと思う。そもそも、私もそのつもりで連れて来てくれたんでしょ？」

可奈美の言葉に姫和と帝人は何処か能天気やマイペースとも言える可奈美が放った言葉の内容に油断はできない奴と認識を改めた。

「でも、今は私の事、少しは信じてくれてるよね」

「はあ!?!」

「だからね。エレンちゃんや薫ちゃん。巧さんやカル口くんの事も信じられる様になる

よ」

自信満々に告げる可奈美に姫和と帝人は無言になったのを可奈美は未だに信じてくれているのかと不安にかられ始めた頃に姫和がさあ、どうかたと告げた瞬間に誰かが歩いて来るのか、石がズレる音を聞いて全員が御刀を抜く構えをしながら音のした方向を見る。

「流石は夜見。良い仕事をしてくれる」

「ええ、お陰で苦も無く叛逆者を捕らえる事が出来ますわ」

「一体、どうやったんだ？ 是非とも知りたいが……無理だな」

歩いて来たのは親衛隊の制服に身を包んだ三人の男女だった。

「少しばかり、おいたが過ぎた様だね。後輩」

「あなたのお友達のように手加減は致しませんわよ」

「恨んでくれて結構だ。そう言う道を歩いている」

可奈美が親衛隊と戦う事になると察した瞬間に話を聞いてくれと懇願するが、先頭に立っていた親衛隊メンバーが御刀を抜いた事で話など出来ない状況だと可奈美が口を閉じた瞬間。

「親衛隊第二席、獅童真希」

抜いた御刀を構えると同時に写シを張った事で戦闘は避けられないと帝人が御刀を

素早く抜き放つ。

「同じく第三席。此花寿々花」

御刀を上段に構える此花の続き口を開いたのは三人の黒一点だった。

「親衛隊第四席。苔石礎々石」

苔石が名乗りを終えると同時に迅移と抜剣を行い、奇襲を掛ける。

この瞬間を持って、満月が照らす伊豆山中において、親衛隊と叛逆者達による開戦の火蓋が切って落とされた。

第十四話 親衛隊第六席対未熟な三河武宮

「ぐうう……」

伊豆の森に苦しそうな声が響く。

場所は満月と勝武居が接敵した場所からそう遠くない地点で、足に突き刺さった愚銅製の釘を括りつけられた木の枝を引っかくと同時に銃声が鳴り、銃声が鳴ったその一瞬の後に肩に音速で飛来した釘が突き刺さる。

「抜きますか……まあ、当然でしょう」

小型の荒魂の中から勝武居の行動に満月は満足そうに頷く先で勝武居は釘を力任せに引っかくがその瞬間に写シが大きく抉れるように損傷した。

満月の銃から放たれる銃弾用に強化し、改造、改良を施した釘は凶悪の一言だ。何故なら、満月の放つ釘は写シと言う物を深く考慮した元に作成されているからだ。

まずは元にした釘だが、ホームセンターや用品店で売っている様な真つ直ぐな洋釘では無く、場所次第で太さが変わる和釘と言う日本古来の釘を元に貫通しない様に工夫しつつも、安定翼を兼任できる形状に加えて写シは僅かな損傷なら自己修復出来ると言う特徴を利用すべく、命中時は大したダメージを与えない様に工夫しつつも、和釘の中央

部分には魚のヒレの様なパーツを掘り加える事で写シが自己修復した時にヒレが食い込み、返しとなつて抜きづらくし、力任せに引き抜く事で写シか肉体を損傷させる。

そして、貫通しなかつた場合は写シが剥がれた瞬間に肉体にも影響を及ぼす為には抜か無ければならないが、飛んで来た方向では頭の部分が妨害して抜きにくく、逆方向に引つ張れば写シか肉を抉り、摘出は戦闘中だと時間や手間、写シや肉体へのダメージには逆方向に抜くのと変わらない。

良く言えば合理的、悪く言えば非人道的な弾丸だ。

「クソ!! ムッコは奴の土俵か!」

引き抜いた事で弾丸の設計思想を察した勝武居が周りの状況を見回した事で満月の戦い方を知り、悪態を吐き出す。

周りは罨だらけで身動きが取れない状況を作り、罨を仕掛けた範囲外から銃撃で持つて攻め立て、着弾する弾丸は貫通しない故に引き抜かなければならず、引き抜けば大ダメージ、抜かなければ写シを罨か銃撃で剥がされれば肉体に物理的なダメージを与える。

そして罨を仕掛けた場所以外は小型の荒魂が群れを成す事で封鎖、満月は群れに危害を加えられない事を利用して群れの中から銃口だけを出して攻撃出来る目隠しの役割を為し、勝武居が攻撃に転ずれば群れは防壁の役割を担う。

守れば颯り殺し、攻めれば削り殺し、逃げれば嵌め殺しと言う四面楚歌な状況だ。
「(どうする!!)」

勝武居は状況をすんなりと受け入れ、此処から死中に活を求めて、思考を走らせる。
そして脳が導き出したのは剣を斜めに鎬を相手に見せる様に構えて、細長い盾の様な構えを見せる。

これは三河武宮育成の段階で大人の武宮が放つ矢を防ぐには切り払うよりも鎬で防いだ方が良くと言う勝武居の経験に銃弾と矢は別物と言う固定概念を、銃弾も速度が違うだけの矢と言う発想の転換が一瞬の閃きにより生まれた事で払拭したからこそ出来た構えだった。

そして次なる行動に攻めると言う案が浮かぶがこれを勝武居は一蹴する。と言うのも勝武居の武器はタイムマンでのインファイトと波状攻撃には強い反面、集団戦には弱く、特に面制圧力の求められる小型荒魂の群れには向かない。

一蹴の理由にはもう一つ、索敵能力の差だ。

銃は剣以上に視覚に依存する武器だ。それを荒魂の群れに互いを目隠しをされた状態にも関わらず向こうは命中弾を生み出して来た。群れに飛び込む前に銃撃の迎撃、群れに飛び込めば荒魂の群れと銃撃、さらに視界不良故に接敵も難しくなる事も考えると群れに飛び込む事になる攻めを選べなかった。

「逃げ……ダメだ」

逃げて場所を変える事も取りやめた。

罨を回避するには罨の知識が求められるが、勝武居にはその知識が少な過ぎた。

どの様な罨が有り、どの様に仕掛けるのか、どんな位置が効率的か、仕掛け方をどう変えれば嵌めやすいかなどを総合的な水準で求められる。無論ながらこれは仕掛ける側も求められるが、トラップエリアを作成し、そこで戦うと言う事は最低限の知識がある相手となる以上は逃げる事もままならない。逆に動けば罨に引掛かる事に成りかねない。

今は防御しか出来ない足腰と腕に力を入れ直した瞬間に銃声が鳴った。そして前方からある程度の迅移なら捉える勝武居の目がいくつもの愚鋼製の小さなベアリングボールが飛んで来るのを捉えた。

「!?」

釘では無く、ばら撒かれた鉄球に防御しきれず、いくつかは写シを貫通して背後の木の皮の一部を抉った。

勝武居は知らないが、満月の武器はショットガン。その特徴は弾薬の規格さえ合っしまえば大抵の銃弾は撃てる点にある。そしてその多様性は距離を選ばぬ万能さへと繋がる。

先程まで放たれた銃弾は遠中距離用の弾丸、そして防御を損ねた銃弾は中距離用バツクショットと言う散弾の銃弾。

勝武居は反射的に後退を選び、満月は荒魂の群れの中に居たまま釘の銃弾を使って追撃、勝武居は釘なら防げると確かな感触と散弾は距離が開く程に威力が下がると言う知識が後出しで過ぎる。

「しまった!!」

そして同時に不味いと思いつく。

首を振って着地予想地点を見た時に斜めに走る銀色の細い橋を見つめる。

勝武居はこれが罠のワイヤーだと悟ると同時に空中で無茶な体勢変更からワイヤーを切断して事なきを得たが、満月が一步先を行っていた。

張っていたワイヤーはトラップエリアでも奥の方だった事と気付いて回避した際に足が踏み付けるだろう位置、空中から無茶すれば引つ掛かるだろう位置に光を反射しづらくする為にモスグリーンに塗った糸に掛かってしまい、罠が作動。

弾丸に使っていた釘が刺さる様に括り付けた木の枝の束が勝武居に襲い掛かる。

「ぬぅおー」

そして勝武居は何とかダメージを軽減しようと僅かに跳んだ瞬間に罠が直撃した事で大きく吹き飛ばされ、荒魂の群れに飛び込んでしまう。だが、この事態は満月には予

想外であると同時に不運でもあった。

本来なら勝武居が喰らった罫は地面との抵抗を考えて目標に刺さる筈だったのだが、防御姿勢でぶつかつた勝武居は大きく吹き飛んだ事で自分の居る荒魂の群れに飛び込ませてしまう事になる。

「ハの機に」

しかし、満月は射手だ。不測の事態に対しての対応力が求められる仕事をしている事も確かだ。

群れに飛び込んだならば群れの中での戦いをしてしまえば良いだけの話。

眩きと共に満月の銃から散弾が放たれるが、勝武居もがむしやらかな回避行動で回避に成功するが回避した先には小型だが、荒魂が存在する。その小型の荒魂の攻撃も受けて徐々に発射方向を見定めると賭けに出る。

鎬を見せる構えから被弾と荒魂を恐れずに突進を敢行。荒魂の攻撃に削がれる様に写シがダメージを喰らうがそんな事は無視して突き進む。

無論ながら満月からの銃撃もあるがそれを音がしたと同時に最小限の回避行動で被害を最小限に留めつつも接近すると雄牛の構えと言うドイツ剣術に見られる剣を顔の高さに掲げ、切っ先を相手に向ける構えを取る。

「せえい!!」

そして迅移で逃げられる前に接近。苦し紛れに放たれた椎の実型の巨大な弾丸、スラッグ弾と呼ばれる弾丸は必死の回避行動で回避。雄牛の構えの利点を活かした上方から重力の力を乗せた突きを放つ。

「!?」

だが、突いた場所に満月はおらず、小型の荒魂が集まって銃を支え、遅発信管で作動させて発射した弾丸だった。

現に勝武居の剣先は銃を支えていた荒魂の群れを突いて祓っただけだった。

そして満月は群れの中を弧を描く様にして勝武居の背後に移動。無音のまま迅移で高速接近を行い、銃剣としても利用出来る打刀程の満月の剣鉞が迅移の接近で生まれた運動エネルギーのみを活用した刺突により、勝武居の肩に刃が突き刺さった。

「ッ!?!」

肩に致命傷を喰らった勝武居だが、そのお陰か幸運にも荒魂の群れがアイスが溶けるか様に形を崩し始めた。

「まさか……」

この現状に満月は思い当たる事があるのか急いで剣鉞を肩から引き抜き、戦場からの離脱を選択するべく、軸足から感性を使ったターンで方向を変えようとしたが、荒魂が溶けた後に出来た赤茶色の水溜りに足を滑らせてしまう。

「貰ったぞー！」

今度は勝武居の雄牛の構えから放たれた刺突が満月の胸に突き刺さった。

満月は不意を突かれた事と初めての被弾が十分なダメージだった事に息を短く吐く事しか出来なかった。

勝武居は素早く剣を引き抜くと同時に横振りの予備動作へと入り、満月が咄嗟に腕で腹を守ろうとする直前に振るい、防御される前に腹に一撃を加えるがそのまま振り切る事はせずに鏢の方のみを前に傾ける事で傷を当てつつも切断しない様にしてから、剣を滑らせる様に抜いた。

満月の身体は斬られた事で本能的に身体から力が抜けてしまい、その隙を突いた剣での足払いで満月の身体が宙に浮いた。

「ハア!!」

気合の声と共に勝武居のシオルダータツクルを喰らった事で満月の身体が吹き飛ぶが助走なしのシオルダータツクルで人を飛ばせる距離などたかが知れている。

直ぐに地面に落ちた満月だが、その写シは剥がされ、生身の身体のまま地面を転がる。勝武居の写シも今までの被弾にシオルダータツクルによる衝撃で剥がれてしまったが武器を油断無く構えている。

「……他の七人は私よりも遥かに強い……」

満月は剣鉈を投げて回避を強要させた隙に迅移で銃を回収。躲されて木に突き刺さった剣鉈も回収すると戦場から迅移による高速移動をもって離脱した。

「……………少し休憩……………」

追い掛ける気は無いと言うよりも追い掛ける力が無い勝武居は無茶な戦い方をしたのと最後の構えは力が残っていない勝武居の精一杯の虚勢であり、満月が完全に離脱したと判断するとその場で眠る様に倒れた。

勝者も敗者も居なくなつた戦場に、地面に倒れる剣の音が儂く響き、落ちた剣は月明かりの反射で鈍く光り、奮闘した持ち主を慰める様に顔を優しく照らすのみだった。

第十五話 謎多き親衛隊対荒魂と共にある巫女と氏子

時間を遡り、ねねとくくが群れに飛び込んでから数分程経った時刻。

「困ったペットだ。いつも俺を困らせる」

「ねー」

そうだったかと鳴くねねに薫が昔にねねが先走って迷子になった事を引き合いに出すとねねとくく、巧さえも何か思い当たる節があつたのか短く息を吐いた声で抗議の声を上げた瞬間に木々の間から荒魂の群れが小規模な土砂崩れのように現れた。

薫と巧は何とかねねとくくを確保するも完全に追撃体勢になった荒魂達に追われており、ねねとくくが接近に気付いたのか備える様に鳴き声を上げ続ける。

「きえー」「はっ！」

巧から投げ渡された柵々切丸を叩き付ける様に振るって荒魂の群れを切り裂いた薫と斬り払う様に吼々割丸を振った巧だが、群れはそれだけでは無く、後から後から雪崩の様に四方八方から迫り来る。

「ちいー！」

横からの群れを横の大振りで祓って見せたが、隙を見せた背中に別の群れが襲い掛か

る訳だが……

「しゃおらー!」

そこは巧の上段斬りにより祓われるが別の群れが大声を上げた巧に狙いを定めるが、巧は地面に突き刺さった鉞先を起点に棒飛びの様に飛び上がる事で回避、着地の際に自然と抜けた大腰鉞を腰を基点に円を描く様に振るう。

薫はその場にしゃがみ込んだ事で被弾せずに済んだが、荒魂の群れはそうはいかず、大腰鉞の一撃を諸に喰らった事で相当数が纏めて祓われ、付近の木も何本かは斬り倒される。だが、それでも数が多いのか後から後から雪崩の様に小型荒魂の群れは迫り来る。

「し、かた、ないな」

薫が面倒臭そうに言いながら立ち上がり、袂々切丸を掲げて薬丸自顕流特有の掛け声と共に振り下ろそうとしたが、小型の荒魂の群れが剣の中腹に纏わりつく付く事で剣を振れない様になっていた。

「ええい! くそ! うつとしい」

身体に力を込める薫。

「な!!」

声と同時に力任せに叩き付けられた事で刃の場所に纏わり付いていた一部の荒魂だ

けが祓われるが、残った荒魂は他の荒魂の群れと合流して波状攻撃を加えんとする。

「やらせるか!!」

巧の大腰鉈により一部が祓われ、薫も大振りな一撃で大部分を祓うと同時に何本か木を倒す。

「しまった!!」

だが、斬られた木により拓けたルートが出来てしまい、そこから一つの束の様に出来上がった荒魂の群れが迫り、何とか迎撃しようと自分達の獲物を振るうが、大振りな獲物は面制圧には強いが連続攻撃が求められる場所では向かない。

細かい群れを幾つかに分ければ波状攻撃には強いが一発が強ければそれだけで全て祓われてしまう。なら、より大きな群れを正面からぶつける方がある程度は犠牲になつたとしても射程外から迫る後発の荒魂が攻撃を当てられると荒魂は踏んだのだろう。

「ぐうー!」 「があー!」

そして荒魂の思惑通りと言うべきか、遂に薫と巧がねねとくくを連れて吹き飛ばされ、背後にあつた崖から落下した。

「補充……しない」と

夜見が戦場から離れた場所、明夜が仕掛けたトラップエリア中心に設けられた広めの空白地帯に夜見は月明かりに照らされながら、閉じていた目を開き、腕捲りをして外気に晒された自分の生腕に自分の御刀、水神切兼光の刃を滑らせる様に這わせる。

世界的に見ても日本の御刀は切れ味が良いとされ、その中でも夜見の持つ水神切兼光は最上大業物と刀の中でも最上級品に名を連ねる名刀であり、愛刀家である上杉謙信の貯蔵の刀の中から卓越した鑑定眼で知られた上杉景勝が上杉家御手選三十五腰として厳選した内の一本だ。

本物かどうか調べる方法は無い為には上杉謙信が握った水神切兼光がどうか証明する方法は無いが、事実として夜見の持つ御刀は水神切兼光として管理されているのはその見た目や作りだけで無く、切れ味も最上大業物として扱っても文句は言われないだけの出来があるからこそ。

そんな刀で撫でる様に生腕を切れば当然ながら人間の皮膚などいとも容易く切断しうる。

そして切れた傷口からは血、と言うには赤く無い赤茶色の少し粘度が高い液体が流れ、その液体からは黄色と赤の目が浮き上がる様に現れ、夜見の顔を見てから噴水の様に傷口から噴き上がる。

「行きなさい。あの方の御為に」

夜見が人間に出来ない事をして、時の鎌倉では、夜見が逃亡者を捕捉したと言う情報が届き、友衛は『そう』と言う言葉を机に両腕を付きながら悔しそうに呟いた。

「(本当ならあんな力を使つて欲しくない……けど……)」

友衛は親衛隊全員にライバルであるが同時に形は違えど、広義的に言えば友愛とも言える感情を抱いている。

夜見や明夜にはその力や身体の特徴故に憂いと共に心配という感情を誰よりも多く抱いており、今回の報告も夜見が決して人に言えない様な力を使つたからこそだという事を把握してしまつたが故に隠し切れない行動だつた。

そして離れた部屋、鎌府の学長室ではこつそりと仕掛けたマイクから拾われた皐月が逃亡者を捕捉したという情報に皐月の秘密を知る高津は悔しそうに親指を噛む。

「(夜見、碌に御刀も使えず、奪つた御刀を我が物顔で使う半端者の分際で……)」

高津の脳裏に浮かぶのは皐月が水神切兼光を得るに至つた経緯。それを思い出した高津には皐月に対する怒りと共に満月と糸見沙耶香の顔だつた。

「(一刻も早く、アレを完成させなければ……紫様の為に生き、紫様の為に死ぬ。最強最高の刀使を)」

高津が思案するその時に糸見沙耶香の居る部屋に珍しい訪問者が現れていた。

「糸見沙耶香さんでいいかな?」

呼ばれた糸見は顔を向けるとそこには意外も意外、柳瀬彗士が訪れていた。

糸見は彗士の訪問に内心では警戒するが表に出さずに黙って見つめてみると彗士は人懐っこい笑みを浮かべながら話だけに来た、それ以外はするつもりは一切無いと語る。

糸見としては殺しに来たというよりも完全な夜更けに女の子一人で居る密室に年頃の男が入って来れば本能的に警戒心を抱く物だが、彗士の放つ隠しごとや嘘が付けない馬鹿真面目な雰囲気を見て警戒を解く。

彗士も御曹司という立場からか人の感情には機敏で糸見の内心も何となく何かモヤモヤとしながらも掴んでいた。そんな中でそれが完全に無くなり文字通りの無になると警戒心は無いという事で対面に座り聞き出したい事を早速ではあるが聞き出し始める。

というのも勝武居や可奈美は無事なのかという程度だった。

糸見もそんな彗士の質問に言葉少なく答え、可奈美と勝武居は無事だった事を聞けた彗士は目に見えて胸を撫で下ろした。

「あ、ごめんさない。沙耶香さんの前で言う事ではないですね」

「別に勝てなかった事は事実だもの」

これで会話が終わってしまい、彗士は気まずい沈黙に苛まれる。

「え、ええつと……沙耶香さんは鎌府の生徒ですよ。自室には戻らないんですか？」
「この部屋を出るなと命令を受けたから」

そんな命令を下すには一介の教師ではまず無理だろう。出来るとすれば学長の高津のみ。

隼士が確認の意味も込めて、高津の名を出すと糸見は黙って頷いた瞬間に糸見の身体がビクリと一瞬だけ僅かに跳ね上がった。

隼士の目にこれまで感じた事の無い静かな怒りの炎を見たからだ。しかし、その炎は規模に見合わず直ぐに鎮火され元の目に戻る。

糸見は気のせいだと言い聞かせると隼士が懐を探り始めていた事に気付く。

「動かないでね」

そう言つて、左頬に張られたのは瘡蓋の代わりにこなす様に作られたタイプのバンドエイドだった。

優しく張られ、確かめる様に優しく張られた場所を撫でた隼士の指が離れる。

「ああ、白人用の奴が良かったかな？」

隼士の持っていたのは色を調整して日本人の肌に馴染むような色合いのものだったのだが、幸か不幸か糸見の肌は普通の日本人よりも白い肌だった事もあり暗い部屋だと僅かに色合いが違ふとわかってしまう。明るい部屋なら尚更だろう。

「別に。気にしない」

そう言った瞬間に糸見の腹から虫の声が出た。

まさかの自体に糸見はほんのりと頬を赤くした所為で張られたバンドエイドが浮かび上がり、隠しようがなくなってしまうと隼士がジップロック付きの袋とリボンで止められた女の子が贈り物で使いそうな袋の二つを取り出して、糸見に渡す。

糸見は両手に乗せて貰ったそれを眺めると二つともにクツキーの様な物が入っており、恥ずかしさとは別の意味で頬を赤らめる。

「考えたくない時や忘れたい時、頭を空っぽにしたくて作ってたら作り過ぎてね。リボンの方はお姉ちゃん、ああ、舞衣の事ね、が作ったんだ」

渡すとそろそろ出ないと怒られるからと退出の為に席を立つた隼士だが、扉を開ける直前に振り返る。

「そうだ。また、あの二人と戦う時は遠慮なくやってあげてくれ。それと食べたら感想かれると嬉しいな。久し振りだから上手く出来ているかわからないから」

ばたりとドアが閉まると糸見は暫くの間ではあるが閉まったドアを見つめながら、頬に張られたバンドエイドに手をやると片手に乗っていた袋を見つめると指でリボンを解く為に摘む。

「……………」

が、解くのを戸惑う様に動くを止めるとジップロックの付いた袋の方を開けて中に入っていた菓子を一つ取り出して口の中に入れる。

「……………」

クッキーだと思つて食べた菓子だが味と食感が今まで食べたクッキーとは違う事に首を傾げると今度はリボンの袋の方の菓子を口に含むと食べ慣れたクッキーの食感だった。そして、もう一度ジップロックの方を食べる。

「美味しい」

クッキーとは違う食感に味だったが糸見の顔に女の子らしい笑みが浮かんだ。

そんな微笑ましい時間が発生した鎌府から伊豆に視点を戻せば絶賛絶体絶命の人物が居た。

「ねねねね……………」

ねねとくくが苦しうに鳴きながら、傷付いた身体に鞭を打っていた。

「くそ！ 俺とした事が」

崖から偶然にも伸びていた木の根に噛み付いて辛うじて落下を防いだねねとくくだが、ねねの尻尾を掴み、手首にくくの巻き付いた薫が零す。

巧は既に落下しており、ドンと崖下で鈍い音が鳴っていた。

「ねね……………」

薫の脳裏に過去の出来事を思い出す。

幼少期にはよく家の近くの山間部で遊んでいたのだが、そこには毎回の様にねねとくくが付いて来ており、家から離れすぎると鳴いて戻る様に促すのだが、その時は年頃もあつてか反抗期でドングリを投げ付けて刀使は荒魂をやつつけるんだと自慢げに話し、偶然にも見つけた荒魂を追い掛けて崖から滑り落ち、遭難した経験があつた。

「いつも助けられていたな……」

そんな薫を助けたのはねねとくくだった。

ねねとくくに連れられて家へと戻ると両親からは心配したんだと怒られた。

巧は探しに行くので父が止めて聞かないからと囲炉裏の上で簀巻きにされて吊るされていた。

「ねね、くく。しっかりと捕まれ」

「くく……」

巧が落ちた方を鳴いて心配するくく。

「あいつが崖から落ちた程度で死ぬか」

「そうだけ。くく」

薫の言葉に続いた聞き慣れ過ぎた声があった方向を見た瞬間に全員が固まった。

そこには自力、八幡力を使わずに吼々割丸と祢々切丸の鞘を担いだまま口ツククライ

ミングして来た巧が居た。

「無事だったのか」

「ああ。写シのまま落下だからな。さ、行くぞ！」

薫は八幡力を使って、巧は自力でもって、二人と二匹は崖を登り切る。

登り切った際にねねとくくが疲れたと言わんばかりに鳴くが、薫と巧は立ち上がる。

「正直……舞草なんて……」

エレンと巧に付き合っていただけというのも言葉を飲み込んだ薫が肩に祢々切丸を担ぐ。

「俺も少し、本気出す」

確かな戦意を目に灯した薫の隣で巧も戦意を目に輝かせながら指の関節をバキバキと音を鳴らす。

小さくも確かな戦火が渦巻き始めた伊豆から少し離れて鎌倉に視点を戻そう。

「紫さくま、あゝそくぼく、って葉結だけ？」

満開の笑みで親衛隊の執務室兼待機室であると同時に折神の執務室に入室するがお目当ての人物では無く、隼がソファーに靴を脱いで寝転がっており、上半身だけ浮かべて燕の姿を見る。

「紫様なら禁足地だよ」

隼の言葉に詰まらなそうにしながら隼の寝転がるソファアの向かい側に置かれたソファアに座ろうと身体をソファアに対して水平から直角にした瞬間を狙って跳び、その勢いを利用した突きを隼に放つ。

「おっとー！」

だが、放った突きは隼の抜刀と共に柄頭を峰に当てられた事で上に跳ね上げられて失敗に終わる。だが、燕は上に跳ね上げられた勢いを回転運動に変えた事でテーブルに着地すると同時に肩から刃を逆さにした突きを繰り出せる態勢に即座に作り上げる。

「ッフ」

しかしそうやって素早く放った突きだが、御刀の鎬の部分で防がれる。普通なら此処で燕は薙ぎ払いに変える算段だったが、隼の防御はどうあがいても薙ぎに移行したとしても射程外で意味が無い。それでも燕はダメージを与える為で無く、次の攻撃に移行する為の薙ぎに移行し、素早く縦振りに移行する。

隼はそのまま御刀の角度を変えるだけで防ぐと燕は隼の御刀を削る様に振って罅迫り合いから脱する。

燕は素早く刃の向きを変えて掬い上げるような機動で振るうが、その一撃も角度を変えただけで防がれてしまう。

燕は罅迫り合いをせずにそのまま御刀を上まで持って行き、振るおうとした瞬間を

狙って隼は自分の御刀の剣先で燕の御刀を弾く様に振った事で燕は理想とは程遠い機動で振るわされてしまう。

そして、隼は御刀の柄を回転させた事で刃を返す手間を省いて腕を引くだけで燕を斬れる様にして振るうが、燕はジャンプで回避して見せる。

「貰ったあ!!」

ジャンプの際に天井を蹴れる様に逆立ちの様な態勢を作っていた燕は天井を蹴ると同時に隼に御刀の突きを重量と脚力を混ぜた一撃を放つが両手に持ち直した御刀で突き出された燕の御刀を巻き付く様に振るった。

「うへえ」

そして巻き付ける様に振るった刀を起点に合気道と同じ様な理論で燕の落下機動を前方方向への投げに変えて、ソファアの後ろ側に背中から落下させる。

刀のみの親衛隊メンバー内で斬り合つて一番強い奴は誰? という問いをすれば返ってくる答えは結芽か葉結と答える。その位には突出した強さを誇る二人。

それは先程の攻防を見れば一目瞭然と言えるが葉結が先程の攻防はソファアに下半身を伸ばし切り、上半身を起こしたまま腕だけの機動で結芽の攻撃を防ぎ切り、あまつさえ背中から床に倒した実力を見れば葉結の方が強そうだが、何故に葉結と結芽が並ぶのかは追々で語るとしよう。

「もお！ また勝てなかつたあー！！！」

ジタバタと悔しがる燕を隼がソファアの上から覗き込む様に見つめる隼は元のスベックが違うから仕方ないだろうと告げる。

確かに男と女、写シなどの刀使・武宮ならば男女差などないが今回の二人は基本技能を使っていない。

故に身体的な差が出てしまう。

「そんなに暇？」

「あんな弱い子達、私だったら直ぐにやつつけちゃうのに！」

「紫様は小難しい事を考える。出すべき時は出してくれるさ。良い子に待っていればだけど」

「本当！ なら良い子で待つてる！」

何かと結芽の手綱を握るのが上手い葉結だった。

暫く時間を進めた伊豆の山中。

所々で荒魂が祓われてしまっている事に気付いた皐月は自分の腕を御刀で切った事で傷口から伊豆に大量発生している荒魂を生み出した瞬間に影が現れる。

「とんでもないな。人間が荒魂を作った……いや、生んだ……？」

「か、溜め込んでいるか……畏に守られたヘタレならやりかねん」

巧と薫、その肩に乗るねねとくくだった。

この二人と二匹は満月の仕掛けたトラップの数々をねねとくくが先行偵察をしながら解除なり避けるしてここまで来ていた。

「お前、確か親衛隊の奴だよな」

「悪趣味が過ぎるな折神家よ」

二人からの言葉に腕から荒魂を出し終えた皐月がゆつくりと確かな口調で告げる。

「親衛隊第五席、皐月夜見。成る程、あなた方は舞草の人間の様ですね」

「知るかよ。ただ、身内が世話になったんでな」

二人が同時に自分の獲物を地面に叩きつけた事で地響きが響く。

「その借りを返しに来ただけだ」

「そうですか」

皐月が再び自分の腕を切りつけ、傷口から荒魂を呼び出す。

「どうぞ、御随意に。私はただ……」

皐月が写シを張ると同時に新たに出された荒魂が大きな群れを成して襲い掛かる。

「壊すだけです」

迫る群れに薫が最初に叩き付けを放つ事で群れの先頭集団を祓い除けるが、中腹の荒魂が迫る。

「ぶ、るうあああああああ!!」

だが、その群れはタイミングをずらした巧の一撃で祓われ、さらに衝撃波が最後発の群れを振り払って見せる。そして衝撃波で散ってしまった群れを腰の稼働を生かした振りで薫が祓い、大腰鉈を素早く持ち上げた巧が更に細かく散った群れを大腰鉈を振るっているとは思えない程の連続振りで祓い切って見せる。

最初の交戦では場所が場所故に出来なかつた巧の本気の吼々割丸捌き。

それはその肉体と八幡力を使った乱舞。無論ながら振り方がなっていないそれは斬るには適していないが吼々割丸は壊れた大太刀を吼々討伐用に叩き割る為の大腰鉈に急ピッチで改造された武器。

振り方がなつて無かろうと鉈特有の重量と刃の付け方により相手を叩き割る事に適している。

叩き付けるだけでもその重量と持ち主のパワーで叩き割る様に切れ、横に振ればその速度と重量、切れ味で叩き割る様に切る。そしてちゃんと振るえば大太刀の如く斬る事も出来る。

臯月は大きな群れを作つて巧に放つても巧は自分を軸に重量バランスの悪さ故に回る

コマの様に回りながらその群れを切断し続け、切り祓われた事で逸れてしまった群れに薫がジャンプで身体ごと称々切丸を振って切断する。

「なら……」

臯月は腕を何度も切りつけて荒魂の数を増やすと大きな群れを一つとそれを護衛する様に小さな群れを幾つか張り付かせ、薫には幾つもの小型荒魂の群れを差し向ける。

コマ回しで大規模な群れを攻めさせている内に直上から小型の群れを叩き付けて巧を鎮圧、小さな群れは予備と薫が制空権を抑えられない様にする為の捨て石だった。

「姉さん!」「巧!」

巧の声に薫も同じ考えだったのか巧に自分の称々切丸を投げ渡し、薫は一時撤退、その隙を突かんとする群れだが、小型の荒魂。それも脆いタイプなら棒振り芸の巧でも充分過ぎる。

そこからは正しく信じられない光景が生まれた。

「ハアツ! ハアツ! ハアツ! ハアツ! ハアツ!」

月明かりを反射する珠鋼製の鈍色に輝く銀の刃と和鋼製の光沢を放つ銀の刃の二本が、丸で円を描く様に振るわれ、まるで結界かの様に荒魂が刃よりも先に行く事が許されない。

「どおりやつ! せええりやつ! ブルアツ!」

皐月は巧を避ける様に指示を出して先に薫だけでも倒そうとするが、巧の脚力によるジャンプ移動で刃を振るつたまま移動し、薫に向かう荒魂が次々と祓われて行く。

「ブルアアアアアアアアウ!!」

最後の群れを切り祓うのと皐月の荒魂の原料は皐月の血液だ。今回の戦いで使い過ぎたのか身体をフラつかせながらも何とかそれを抑えるがその隙に巧は両手も獲物で地面を抉って土煙を起こし、皐月の視界を奪う。

不調を抱えたままの事とこの不調で何処かの荒魂を維持できずに崩壊したのを感じるが、索敵と包围に放っていた荒魂の一部が同時に祓われた事で何処が祓われたのか、何処が維持できずに崩壊したのか把握が出来なかつた事に顔を顰めた瞬間。

「貴様の死に場所は！」

土煙を何かが高速で突っ切つて来るのを悟り、万が一の為に残っていた荒魂の群れを差し向けるが差し向けた荒魂全てを祓って現れたのは高速で回転しながら飛び込んで来た吼々割丸だった。

皐月は荒魂の制御で意識を無意識に引き過ぎた事に今更ながらに気付き、その事に感づいた事で更に身体を硬直させてしまい、防御と判断を下す頃には防衛出来ない位置まで吼々割丸は来ており、本能と反射で回避行動を取ったが間に合わず左手の写シを切断されてしまう。

「きいええええええええええ!!」

そして、片腕を失った皐月に巧に投げられた事で加速した薫が空中で回転しながら迫り、皐月の写シを真つ二つに斬り裂いて見せる。

「ッ……………」

「此処だあ!!」

皐月は度重なった写シへのダメージが精神的に來たのか、地面に膝を付いてしまう。そして巧は皐月の背後に突き刺さった吼々割丸を抜いて、峰側で叩いて気絶させ様とした瞬間に巧の背中に何かが突き刺さった。

そして巧がそれを見る為に肩越しに振り返った瞬間に巧の背中が爆発。

巧の写シは爆発四散し、その爆発により巧は大きく吹き飛び、その余波は薫すらも吹き飛ばすが、皐月は地面に低い姿勢で居た事と巧の巨体が遮蔽物になった事で強風にこそ煽られるが、ダメージは無かった。

続いて気の抜ける様なボンッと重なった火薬の爆発音が鳴り、地面に鉄の缶が転がり込んで来て周りに色付きの煙を焚き、ばら撒く。

「血の使い過ぎです。撤退しますよ」

倒れる皐月を小脇に抱えながら戦場を離脱するのは満月だった。

戦闘中に荒魂が溶ける様に消えた事で皐月の戦闘と溶ける様に消えた現象から苦戦

をしていると察した満月が勝武居との戦闘から離脱すると同時に常時で迅移を使った移動で救援に来たと言う経緯だ。

「今は休め」

戦場から満月が臯月を連れて離脱した頃には煙幕も晴れており、追いかけてしようとした二人だが、薫は疲れから追うにも追いついたら戦闘は難しいと諦め気味なのに加えて、巧が写シを木っ端微塵にされた影響か気絶しており追うにも追えない状況故に此処に留まる事に決めた。

「あれ？」

その瞬間に気が抜けたのか薫も地面に倒れてしまい眠ってしまう。爆発でそれなりの距離を吹き飛ばされたねねとくくは二人の状況を見て近くで眠る。

この戦場でも勝者と敗者は曖昧なまま終結した。

第十六話 伊豆での戦い

「親衛隊第四席。苔石礎々石」

苔石が名乗りを終えると同時に迅移と抜剣を行い、奇襲を掛ける。

「ボサツとするな！」

苔石の奇襲も寸前で割り込んだ帝人の蹴り上げにより防いだが、地を這う様な体勢から放ったこの蹴りは帝人の視界を帝人自身で塞いでしまい、此花の接近に気付けなかった帝人に此花の突きが突き刺さり掛けたのを姫和が弾いて、可奈美が此花と交戦に入る。

獅童が此花とは逆サイドから攻撃を仕掛けるも姫和がこの攻撃に対応する間に帝人は後転で2人から離脱すると蹴られた苔石も復活した瞬間に帝人に向けて迅移で迫る。

帝人も苔石の迅移の速度に対応する為に迅移を使ったバックをしながら、両手で御刀の刃を掴んだ変則ガードで対応するも、連続突きが放たれた事で可奈美からも姫和からも離れた位置で交戦する事になる。

「はあ……」「ふうー」

連続防御で息をする隙が無かった帝人が肺に溜まった二酸化炭素を吐き出す様に息

を吐くと苔石も連続攻撃により溜まった二酸化炭素を口から排出からの換気をする様に息を吐き、吸う。

前者は生命の危機を出した故の反射、後者は生體的に致し方なくと言う物でどちらが良いかは月とスッポンだろう。

バシヤリと小川の水が弾け飛ぶ。

此処は姫和と獅童の戦場。

冷たい水が流れる小川を足場になっている影響で水飛沫が剣戟の音と共に舞う。

「はあー」

獅童の一撃を受け止めた姫和だが、獅童の流派は神道無念流と言う真を打つと言う事を基本に一撃一撃に渾身の力を籠める力の流派である事と姫和以上に身体的に恵まれた獅童の一撃は受け止めた姫和の体勢を崩すには十分過ぎた。

「貰うよ」

横一閃に放たれた斬撃だが、姫和は『無理に防御するくらいなら腕一本でも犠牲にして逃げた方が良い』と言う帝人の言葉を瞬間的に思い出して、防御を放棄すると同時に左手を犠牲にして離脱する。

斬られた腕は綺麗な平面の切り口を残して川へと浸り、ガラスが碎ける様に碎けて消えた。

もしも此処で無茶な体勢のまま防御すれば、姫和の身体は防御ごと切り裂かれていただろう。

最悪の事態を避ける為に最小の犠牲を払うと言う兄の言葉も捨てた物じゃないと再認識すると同時に片手になった姫和から獅童に迫る。

「片手ですうにか出来るか？ 舐められた物だね」

劍戟の音が綺麗に重なり、何とも言えぬ音色と川のせせらぎに混じって二人の少女の掛け声が飛び交う。

姫和が飛び込んで来た獅童に対して片手で振った御刀だが、その一撃は既に獅童に見せた技でもあり、獅童はその一撃を難なく受け止めた。

「ソレはもう……見たー！」

力任せに弾いた姫和の腕が戻る前に御刀を振り下ろす獅童。姫和は体勢を崩されていたからか回避を行う暇もなく、左太腿を切断される。

「姫和ちゃん！」

斬られた事で写シが切れると同時に川に倒れた姫和を岩の上から心配する可奈美に向けて親衛隊の此花が操る御刀、九字兼定の刃が迫る。

「余所見をしている余裕があつて」

振り上げの一撃を咄嗟に防いだ可奈美に向けて此花は返しの一撃を放つもその一撃

さえも防いだ可奈美に此花は流れる様な動作で防御に使った可奈美の御刀を峰で削る様に動かして突きを放つ。

可奈美はその突きに対して御刀を振るう事で軌道を大きく外す事で回避するが此花はソレはやられ慣れているのか素早く振るい上げる動作で斬りに掛かり、可奈美は反撃の一撃を防御にしざるを得なくなる。

可奈美は目の前の此花が鞍馬流を使う相手だと太刀筋や構えから瞬時に把握した事で下手に打ち合う訳には行かず、一旦ではあるが迅移で後退する。が、まるでそこに移動するのがわかっていたと言わんばかりに追隨した此花の掬い上げる様な一撃を可奈美はただのバックステップで回避する。

「(私の迅移に合わせて迅移を發動した!?! まるで……)」

「いつ迅移を發動させるか知っているみたい、と言う顔ですわね!」

飛び込んだ上段を一撃を可奈美が防御すると直ぐに刀を引いた此花に可奈美は素早く御刀を振ろうとしたが中段と上段では技の発生スピードにどうしても差が生まれてしまう。

再び上段から此花の斬撃に可奈美は御刀を肩に添わせる様に傾けて受け流すと今度は横から刃が迫る。可奈美はその一撃にも対応して見せた事で此花の連撃が止まった。

「その程度ですの?」

此花の挑発に可奈美は乗らなかつた。

鞍馬流は鎧と手首の使い方に注目した『巻き』と言う技が特徴的な流派であり、相手の刀を巻き落として無力化する事も、巻いてから突きを放つ事で必殺の一撃にもなる流派だ。

何も答えない可奈美に此花が先程以上に狭い間隔で攻め立てる。

変に刀をぶつけ合えば巻かれる。それが分かっている可奈美は刀を前では無く、縦にする事で巻かれない様に、万が一鎧が触れても巻かれにくくする防御一辺倒の構えを見せていた中でも可奈美はチラチラと姫和に意識を向けており、その可奈美の行動が自信家な一面のある此花のプライドを酷く刺激した。

「わたくしは取るに足らぬ相手とでも！」

言いたいんですの！　と言う言葉と共に放たれた大振りの斬撃に可奈美が立ったまま後ろに交代させられるが、斬り結んで居た場所が岩の上だった事もあり、僅かな段差に踵を取られた瞬間に僅かだが構えを解けてしまった。

「ぬうお！」

貫つたと平突きを放とうとした此花に苔石がぶつかって来た。いや、帝人に投げられたと言うべきだろう。

苔石はそのまま此花を巻き込んで岩の上に倒れるがそのまま停止せずに転がって身

体同士が絡まない様にし、倒れ方がそこまで派手じゃなかった此花が可奈美の攻撃に備えて立ち上がると可奈美は体勢を整えて突きを放っていた。

「あー！」

が、可奈美は此花の復帰タイミングを計り間違えたのか鞍馬流の特徴とも言う『変化』に捕まってしまった。

そして此花はそこから必殺とでも言うべきだろう突き技との混合技を放とうとするが、此処でムキになり、此花の肩と可奈美の肩を土台に飛び上がって、帝人に向かう苔石の体重に負けて2人は重心が傾いてしまい、此花の突きは軌道がズレて不発に終わり、可奈美も反撃は難しいと判断すると地面を転がって離脱する。

「うどおりやあー！！！」

苔石が空中で回転して回転エネルギーと落下の際に生まれた運動エネルギーを乗せた上段を放つ。

帝人は防御をすれば潰されると判断してボックスステップで回避する。それはムキになろうとも今までの経験と本能が苔石の身体を動かしたのか、叩き付けた剣と着地の衝撃で巻き上がった水を突き抜ける様に繰り出された神速の突きが着地の際の一瞬の硬直を課せられた帝人の肩に突き刺さる。

「させるかー！」

そのまま横に振ろうとした苔石だったが振られる前のさらにバックステップで剣を引き抜き、口に御刀を咥えたまま新体操の様に身体を回しながら更に距離を開ける。

苔石は追撃の為に剣を引きながら迅移を使ったが、帝人も迅移を使っており、2人は川の上で衝突、交戦距離に意図せず飛び込んでしまうが、苔石はその特殊な出自故か喧嘩慣れしており、素早く斬撃を放つ。

「っー」

帝人が右手で柄を、左手を峰に添寄せた変則防御で防ごうとした。だが、苔石の頬が刃と刃がぶつかり合う瞬間にニヤリと笑う。

帝人がそれに気付いた瞬間には既に遅く、苔石の刃が帝人の刃を削る様に動き、互いの刃が擦れた際に生じた火花を払いながら進み、防御ヲを通り過ぎた瞬間に突き技を放つ。

「はあー！」

だが、帝人も負けておらず、抵抗が無くなった瞬間を狙って刃を振るったが、苔石の右手に付けられたガントレットから鉄扇の様に広がった小さいラウンドシールドに受け止められる。

「残念だったな」

帝人の体に剣を突き立てた苔石はそのまま剣を振られた事で写シを斬られた。

帝人は写シが解ける衝撃で川に倒れ込むのと、苔石が剣を構え直して叩き付ける様な突きを放つ準備を終えたのは同時だった。

「終わりだ」

躊躇いのない突き技が放たれようとした瞬間に苔石の右半身が何かに押される様に傾いた。

「は？」

苔石は体勢が突然に崩された事に驚き、何か違和感を感じて右肩を見た瞬間に夢でも見ているか様に声を吐き出した。

苔石の右肩に捻れた様な口が開いていた。そして、それを確認した苔石の意識が外れた隙に写シを張り直し、同時に順次加速では有るが三段階迅移を使って離脱する。

「はい」

苔石は此花に注意を飛ばそうとした瞬間に胸と鳩尾、そして腹に何かが貫通した事で遅まきながらにコレがカルロの矢だと悟る。

それと同時に帝人は可奈美を防御ごと飛ばした此花の背後に移動して首を即座に斬り落として此花を撃破する。

「ええ？」

此花は視界が突如として角度が変わった事で声を漏らし、追撃が無くなった可奈美は

自分の御刀を投げて突撃する姫和を迎撃しようとした獅童に姫和ではなく、投げた御刀への対処を強要する。

「つくー！」

そして獅童は目が良すぎたのか飛んで来る御刀を顔の横に両手で掴んで支える様な構えだった事から可奈美の御刀を下から上へ弾く様な軌道で振ってしまおう。

そして姫和は懐にしゃがむ様な体勢を作りながら潜り込んでいた。

「がら空きだ」

そして獅童は姫和の言葉で自分が御刀を防いだ事で身体の防御が解けていた事に気付いた瞬間には胸に姫和の御刀が突き立てられた。

「E s c a p e !!」

カルロが手招いた方向に向けて3人が離脱する。

此花は追撃しようとするが、牽制に放たれたカルロの矢に気圧されて動きを止めてしまい、恨めしそうな目で森の中に消える矢を見つめる。

「長船の中にいた弓使いだな」

「……………か……………？ ………………れ……………のか……………」

「真希さん？」

苔石は自分を貫いた矢の一本を左手に、利き手の右手に携帯端末を握りながら獅童へ

と近づくと遅れて近付いた此花共々に獅童の異変に気付いた。

「斬られたのか……紫様の刃たる、この僕が！」

姫和は密かに堪忍袋の緒を切っており、静かに怒れる獅子。だが。その獅子を鎮める物も居た。

「落ち着け真希。暴走する気か？」

そう言つて額にデコピンを喰らわせる苔石。

親衛隊と言う組織はその出自や目的から全く普通と言う組織では無い。故に互いが互いに何かしらと気に留めている。

これが互いに互いを警戒する要因だったが、満月の介入によりソレが今の様な繋がりになっている。

満月が居なければ今の親衛隊は居ない。と言うのが第1席から第5席までの見解だ。

獅童は苔石の警句を聞き入れて、目を閉じながら大きく深呼吸を繰り返して気を鎮めると立ち上がる。

そんな獅童を見て満足気に頷きながら携帯端末を弄る。

「あ、苔石だ。すまんが包囲網を頼めるか？」

「既に放っています。取り逃がしたんですね」

携帯端末の操作ミスかスピーカー機能がONになっていたのか携帯端末からは静か

ながらに確かに怒りと呆れが混じった声が聞こえた瞬間に3人があ、これは不味いなと悟る。

「あの苔石さん……夜見にお電話している筈ですわよね？」

「その筈……」

そんな話を話している此花と獅童に苔石は無言で携帯端末の画面を見せる。そこには確かに皐月夜見の表示がされていた。

「夜見はどうしましたの？」

〈夜見？ ああ、彼女なら今私の膝枕で寝てます〉

「任地で何をやってますの!!」「夜見に何をしてたんだ!」「エッチな事したんですね!」
〈無茶をして血液と……が不足になっていただけです。それとやましい事は何一つしてないですよ。輸血を終えた瞬間から動き出そうとしたので止血が済むまで寝かしつけているだけです〉

では、一件が終わり次第ですが、お話が有りますので逃げないで下さいね。と言い残して電話が切られる。

戦地だった場所に集まる親衛隊3人の冷や汗が頬を伝って幾つも滴り落ち、川へと飲み込まれて消えて行く。

願わくば今の自分達を支配するこの恐怖を植え込んだ人物が自分達の冷や汗と同じ

様に水に流してくれる様な出来事が有れば良いなど神に願わずにはいられなかった。

伊豆の地に朝日が朝靄を貫いて降り注ぐ。

この地で激戦が行われたとしても時間は変わらずに流れ、朝は変わらずにやって来る。

そんな伊豆の小さなPAに陣を構えた親衛隊の臨時前線基地に朝靄の中から一人分の人影が浮き上がる。

「何者だ。そこで止まれ！」

89式小銃で武装した親衛隊指揮下の警官が人影に銃口を向けながら命令する。

「あやしーものではありません。通りすがりの刀使デース」
軽く両手を上げながら笑い掛ける古波蔵エレンだった。

第十七話 伊豆での戦い 第二幕

「長船共学園高等部一年古波蔵エレン」

黒い防具にナイトブルーの服を着た特殊部隊所属の警官からアサルトライフルを向けられるエレン。

「御前試合に出場していたな」

苔石が押収した生徒手帳を見ながら告げると獅童も腕を組んだまま威嚇する様な鋭い目付きのまま問い掛けるが、苔石もエレンが敵である加工性を考慮してか左手の拳を握りしめている。

「おお、お恥ずかしい、不甲斐ない結果でシタ」

「見え透いたお惚けですわね」

此花が一蹴する。

折神紫が政治的な仕事を行う際には助手兼護衛として付いていく事もある此花は相手の言動を見切る能力は此の中では一番高い。

「あのー……そろそろ手え降ろしてもいいデスか？ あなた達と戦うつもりはコレッポッチもありませんカラ」

その言葉に信用ならないと言う目を向ける親衛隊の3人。

「携帯と御刀は一時的だが、預からせて貰う。酷く取り扱わない事は約束しよう」

刀使も刀宮も自分の獲物は大切にする。

珠鋼や和鋼の御刀は使用者を鋼側が選び、選ばれるだけでも世間からはある種での英雄的扱いだ。そんな御刀達を使用者達は敬意の様な物を抱く場合が多い。

仮に心鋼や愚鋼の武器だったとしても先祖代々の品だったり、地元神社などに奉納されていた物だったり、職人の誇りが詰まった物、自分のお金で買った物であったりと愛着や誇りがある為に乱雑に扱われる事を嫌う。

苔石は心鋼造の御刀を使う刀宮として、他人の御刀などに対しては最低限の接し方がある。と考え、それを実践している。

此花や獅童は流石に敵である可能性が高い相手に丁重すぎる対応に思う所が無い訳では無い。だが、互いに生まれが違えば譲れない場所も違う事を明夜の発言から理解しており、呆れと共にこれが苔石礎々石と言う人物なのだと安心感にも似た感情を抱きながら何も言わずに苔石に武器と携帯の回収を任せる。

「ふあゝ、手が痺れましたゝゝ」

「で、こんな所で何をしていた」

獅童の言葉にエレンは御前試合での結果から学長に怒られそうなので、叛逆者を捕ま

えに來たと言うが親衛隊の面々は疑いの眼差しを向ける。
「これは少し、詳しく話を聞かなくてはならないな」

苔石の言葉で一旦はエレンへも事情聴取は御開きとなったが苔石はテントに戻ろうとする獅童と此花の肩を叩いてテント裏に連れて行く。

「こんな場所に連れ出して、どうしたんだ？」

「そうですね。何かお話がありますの？」

2人からは少し珍しいと言う視線を投げられた苔石が直ぐに口を開いた。

「単刀直入に言う。彼女の尋問は俺が行う」

その言葉に2人が息を呑んだのが苔石の目に移って直ぐに獅童が怒気を投げ付ける様に睨む。

「君も聞いていただろう。今回の作戦の全権指揮は僕にあると」

「聞いている。だが、作戦は生き物。常に臨機応変にだ」

「2人とも落ち着いて下さい。権力で我を押し通すのは真希さんらしくありませんわよ？ 礎々石も言葉を選ぶか増やして下さい」

苔石が何を言わんとしているのか悟った此花が2人を手で制する。苔石は獅童の堪忍袋の緒に触れる様な事を言うなどと言う意味を込めて、獅童には苔石が言わんとしている事があるのだから落ち着けと言う意味でだ。

「すまん。だが、2人は今回の敗北で……心が乱れていないか？」

後半の言葉に再び獅童と此花が息を呑み、さらに身体をビクつかせる2人。と言うよりも親衛隊の半分を占める4人は特殊な出自故に後半の言葉が秘める意味は他の人間の物に比べると遥かに重い意味を秘めている。

「特に獅童。その目をあの女に見せるつもりか？」

そう言われた獅童が何かに気付いて、目を閉じて深呼吸をする。深呼吸を終えるといつもの獅童に戻る。

「やはり、貴方に任せますわ」

そう言つて苔石に対して背を向ける此花。

その目は先程までの獅童と同じ様に赤銅色に輝いていた。

それを知識で知る苔石は不用意に人前に出ず訳には行かないと再認識しながらエレ

ンを閉じ込めるテントへと歩を進める。

「(あれが人体実験の影響か?)」

そんな親衛隊を見ていた人物が1人いた。

目立つ色合いをした長船の制服を泥や土、草や木の枝で隠したカルロだった。

場所は親衛隊の本陣からかなり離れた場所を携帯可能な程に小型化された電子双眼鏡でよく見える距離の木の根元。

そして電子双眼鏡越しだが、しっかりと親衛隊2人の目が赤銅色に輝いているのを確認した。

その光景はバツチリ録画済みだが、ぶつちやけ編集ででつち上げたと言われてもおかしくない映像だった。

「(これだけじゃ証拠は心許ないな……)」

折折家が行う人体実験の証拠を押しさえる。これも今回の件で派遣された長船の4人に与えられた任務だった。

エレンは懐に潜り込んで物的証拠を。カルロはそんなエレンの意図を携帯端末に届いたメッセージから察して脱出の際の援護の為に直ぐに行動に出来る位置に移動して待機していた。

今回は隠密性確保の為に少数で動く為に薫と巧には姫和達を目的地までの案内をさ

せている。

「あ、4席が聴取で2と3席は別行動か」

離れている為に此処まで来るとは思えないが一応の為に獅童と此花の行き先を確認するカルロだが、自分とは関係ない場所に移動すると判断すると本陣と獅童、本陣から此花へと順番に観察しながら次の手を考える。

「乗り込むのは論外だな」

相手は本陣、しかも罨師とも言うべき満月が控えている場所故に侵入者に対する罨が掛けられている可能性もある。

無論ながら味方が掛かる可能性もあるが予め教えておいて近づかせない、躲し方を教えるなどをすれば問題無い。

罨とは無さそうな場所に仕掛ける物であると同時にあるかもしれないと言う情報だけでも相手に制約を掛けられる存在だ。

それに弓とナイフ装備だけのカルロが乗り込んだとしても罨の有無に関係無く数の暴力で制圧されかねないし、親衛隊5人とぶつかり合うだけの余裕も実力も無い。

「やるなら1人ずつ確実にだが……」

3人か4人くらいには不自然さが出てしまうから警戒されて余計にエレンを危険に晒す事になる。

カルロが森の中で考えを纏めようとしているのと同じ時間のテントの中では空になったコンビニ弁当の容器がエレンの前に置かれていた。

「いやー、コンビニ弁当は付け合わせの漬物まで温めるのがネックデスネ」

「それは俺も同意だ。漬物は常温か冷たいのに限る。まあ、たくあんを熱いご飯と食べるのは許そう」

「ワカリマス！ 熱いご飯に漬物の塩っ気がベストマッチデース！」

何故か漬物談義で盛り上がる2人。同じ価値観の人間と出会えた故か何処か友情の様な物が繋がった様に感じつつも苔石が仕事だと切り出す。

「伊豆山中に放たれたコンテナだが……逃亡中の3人が用意出来る代物では無い」

コンテナ。それもただの箱型コンテナでは無く、S装備搬送用に作成されたジェットエンジン搭載の特別製のコンテナだ。

「？ 1人は出来そうデスが？」

エレンが問い掛けると苔石はファインダーを開くと誰の事だと伺う。わかっているがそれをこちらからは出さない。

意味もなくファインダーを捲る所作をしているとエレンが口を開いた。

「トリダ？ カムイって読むんデスカね？」

「鳥多勝武居。確かに彼は愛知県の三河地方を中心に展開する総合企業、徳川財閥の血

縁関係にある家に、末席だが名を連ねている」

徳川財閥。

武宮や刀使を組織として機能するだけの人数と設備、システムを民間で保有する数少ない財閥の1つだ。そして極少数だがS装備の運用に必要な設備を一通り保有するだけの財力と技術力がある組織だ。

苔石は苛立ちを示すかの様にファインダーを音を立てて閉じる。

「だが、それは無い」

言い切る苔石。

親衛隊、と言うよりも友衛は鳥多と言う名字を聞いてから直ぐに素性を調べさせた後に家族と徳川財閥に対して何か連絡はあったかと問い合わせると直ぐに『真実を知りに行つてまいります。関係をお断ち下さい』と短く毛筆で書かれた手紙を寄越して居た事が確認された。

これにより今の彼は今の自分達には関係無いとして振舞っていると返答された。

実際に獅童の前に家主である父親が来た上で手紙と自身の口から言われた言葉と目に獅童は嘘はないと判断した。友衛も獅童の嘘を見抜く能力は評価しており、獅童の言葉を受け入れた。

「用意出来るのはお前……いや、お前の保護者だ」

「確かにパパとママはS装備開発の責任者デス……ですケド……」

「開発者が射出までは出来ない……なら祖父なら？」

その言葉にエレンは目を見開くが、すぐに戻して戯けた様子で祖父は行方が分からずコンタクトも出来ないと言つてのけるが、目を見開いた時点で苔石にとっては嘘であると見るには十分だった。

「まあ、俺たちは腐つても司法機関だ」

これ以上の取り調べは時間の無駄と判断したのかファイルを小脇に挟んで立ち上がる。

これが実家での裁量ならもう少しやりようがあつた苔石だが、流石に今の『親衛隊』の苔石礎々石では出来ない。

「話したくないならそれでいい。ただ、此処に来た他の長船の生徒だが……無事は保証しない」

「待つてください」

テントを出て行くこうとする直前にエレンが呼び止める。

「薫と巧、カル口は無事なんですか？」

「さあな。仕事なんだ、手心は加えられん」

そう言い残して、テントを出た苔石に此花が近付いてくる。

「先程ですが、一般の方から山の中を走る制服姿の女子生徒と男子生徒の姿を何人も見たと言う通報がありましたわ」

「こんな場所を制服姿で……ね。まっ、高確率で奴らだな。夜見と明夜の状態は？」

「夜見はまだ休ませるべきという意見を明夜から貰ってますわ」

「ならば、明夜には夜見の護衛と治療で待機して貰う。どうだ？」

「わたくしもそれがよろしいと思いますわ。彼女はいつも無理しますから……」

「よし！ 真希を連れて来よう。今度こそ……そして一網打尽のこの好機を逃す訳には行きませんわね」……台詞を取るのやめてくれ」

そう講義する苔石に此花は懐かしさと可愛らしさが混同した微笑みを浮かべる。

「貴方はいつもそうですわ。熱くなると短絡的になって読み易くなるんです。それで何回も私や真希さん、童子さんに負けてますわよね？」

親衛隊入隊まで御前試合では苔石を含めた親衛隊の第1席から第4席の4人が常連になっており、4人が4人をライバルと認めているが苔石だけが全戦全敗している。

それでも熱くなった苔石が放つ強さを相手に残りの3人はギリギリでの勝利を飾っており、その実力を認めざるを得ないと言うものだった。

「さ、行きますわよ」

苔石に声を掛けて歩き出した此花を苔石は両手を見つめながら握ると後を追いか

た。

第十八話 伊豆での戦い 第三幕

「なんだ……これ……」

獅童を呼びに来た苔石と此花なのだが、獅童がおる場所は意外にも早くわかった。というよりも周りの木々が薙ぎ倒されるように倒れていた。

切り口が綺麗な場所から自重に負けてへし折れたような切り口なので切りつけたのが原因で倒れたのだとわかるが、余計に絶句するのはその惨状を獅童が言われて気付いたと言う反応だった。

「で？ 何の用だ」

冷ややか。そんな言葉がピッタリな獅童の言葉に苔石も同じ様に感情を殺した声で答える。

「仕事だ。ここから東側で五箇伝の制服姿の一団を見つけたと連絡が入った」

「直ぐに出るぞ」

御刀を鞘に納めながら歩く出した獅童をジト目で見つめる此花と流し目で見やる苔石。

「呼びに来たのは私たちなんですけども……」

「一応だが、前線指揮官はアイツなんだ」

苔石が此花の肩を籠手で叩いて先を急がせる。

既に警官側は準備を終えており、いつでも出動可能な状態だった。獅童はその状況に満足そうに頷くと素早く指示を飛ばして、部隊を3つに分けて2つを追撃班に残り1つを本陣守備兼エレンの見張りに残して獅童は此花と苔石を連れて本陣を後にする。

「そろそろ行動開始、デスね」

踵の金具が外れる様な音がすると小型のピッキングツールを仕込んだ小箱がせり出し、それを掴むと肩の関節を外して腕を前に動かし、音も無く運転席に座っていた武装警官に手錠の鎖で首を絞め、身動きをさせない状況を作り、素早く沈める。

内部を除く警官が居ない隙にピッキングで手錠を外すとゆっくりと音を立てない様に扉を開けると矢が二の腕に突き刺さって倒れる警官2人を見つける。

「ッ！ きん ン ン」

装甲車の後ろから現れた小銃で武装した警官と目があったエレンだが茂みから迅移で飛び込んだカルロに口元を抑えられる。

「ぬん ン ン ン ン ……」

そして首筋にスタンロッドを押し付けられて気絶する。

「() っちはまさか……」

「麻醉」

容赦の無い攻撃と矢が刺さった警官を見て殺したと思つたエレンだが、警官2人は寝息を立てているのを確認するとホッと息を吐く。

知人が人殺しになるにはエレン出なくても避けたい所だ。

「あ、これ」

懐から携帯を取り出し、矢筒に無理矢理で押し込んで越前康継を渡すと早く巧達と合流しようとしてエレンの手を取るが、エレンは首を振つてそれを断る。

「まだ、やるべき事がありマス」

救護テントの幕をキツク張つて、中を覗けな無い様に注意を払つた満月がジュラルミンケースから赤銅色の液体が入った注射器を取り出す。

臯月は向かい側のベットに腰掛け、後ろに回つた満月に対して髪を上げて、此処に刺してくれと言わんばかりに頸を露出させる。

「ごくん……」

そう言つた満月だが、刺す直前に躊躇した様に動きを一瞬だけ止めるが、臯月に気付かれる前に頸に針を突き立て、中の薬品を流し込む。

臯月は投与された薬品の作用なのか苦しそうな呻き声を上げるが、直ぐにそれを潜めて何とも無い表情を浮かべる。

「……………」

刺し終えた容器を別の使用済注射器を入れる密閉容器に入れようとする満月だが、臯月に何か言いたい事があるのか、作業の手を休めるが諦めた様な表情の中に、何処か悲壮な表情を混ぜた様な何とも言えない表情を浮かべると作業に戻る。

臯月も注射器の入ったジュラルミンケースに向き合つて、使用後の作業をしながらも、満月の表情には気付いており、臯月も臯月で後ろめたさと後悔を混ぜた表情の中に何処か諦めを漂わせる表情を浮かべるが、直ぐに自覚して無表情に戻すと正面出入口から出て行き、満月も裏口の近くに置いた、再使用防止用の箱に入れると同時に近い方の出入口である裏口から出て行く。

「なるほど……薫が御刀を向けた理由はコレですネ」

「ノロか……」

ソレを知る為にあの注射器を頂くんですよと言いながらしやがんでいたエレンが立ち上がるとカルロも日本に来てはまでシーフかよと愚痴りながらも律儀にエレンに付き合うべく、テント内に侵入する。

目的のジュラルミンケースは意外にも診療台の横に置かれた机に無防備に置かれて

いた。

エレンが御刀を抜いて警戒している間にカルロがジェルミンケースを開け様と試みる。

意外にも鍵やダイヤルは無く、いとも容易く開けられるが、中には一本の注射器も入っていないかった。

「エレン！」「カルロ！」

素早く布に向けて一閃するエレンと腰に挿していたホルスターからフィツシユナイフを抜き放つとテントの外へ投げる。

エレンの御刀が布ごと裂いたのは小さな蛾を想起させる荒魂。

「人が悪いデスね。気付いていたのなら一言言っておきなさい」

「紫様に仇なす方々にそのような配慮の必要を認めません」

カルロのナイフはテントの帆を突き破って、帆の向こうで何かの金属に当たった音が響く。

「挟まれたか……エレン」

「分かっています」

迅移で素早く位置を交換するとカルロは素早く展開させた弓に矢を番えると速射で臯月に放つて牽制、エレンはその隙に正面出入り口から脱出を図るが、出た瞬間に尻餅

を着いた体勢でも猟銃の銃口を向けていた。

「金剛身ですか……」

銃声が鳴るが、その時には金剛身を使っていたエレンの身体にフレシエツト弾が弾かれる。

スラグ弾かバックショット弾なら威力でバランスを崩す事が出来ただろうが、満月は確実に当たった上で致命傷を与える事を考えてフレシエツトを選択していた事が仇になつてしまう。

「セエイ！」

エレンの横蹴りが銃身を捉える。

八幡力も込めた蹴りは普通の銃身なら凹ませるか歪ませる事くらいは出来る筈だが、満月の銃身は歪みもしなければ凹みすらもしなかった。

「一体、何製アスカ!!」

「貴女が知る必要は有りません……」

正三角形を描く3本ある銃身の中心の一本から炎が連続で吐き出されるが、3発目は飛び込んだカルロの踏み付けで地面のアスファルトを抉るだけで終わる。

「Go!!」

銃身を地面代わりにサマーソルトキックで満月を蹴り飛ばすと足元に落ちていたナ

イフをダイレクトキックで蹴り飛ばして森の木に突き刺すとエレンは迅移を使用して森の中へ移動すると同時に皐月が御刀を構えながら出て来る。

カルロがそれに気付くと八幡力で大きく跳びのきながら、3本の矢を放つて牽制する。

皐月は同時に放たれた矢の1本を突き上げるような動作で弾くと身体を横向きにして矢を躲す。

カルロの矢は取り出し易くする為に鏃の形状は楔形では無く、針の様な鋭利な棘でギリギリを通り過ぎても、直撃コースで無い限りは擦り傷も付けられない。

カルロは車道に着地すると同時に矢を番えて、射ると同時に後ろへ跳躍する。射られた矢は立ち上がって銃口を向けていた満月に銃剣での迎撃を強要させ、追撃を取り止めさせる。だが、皐月が先行して車道に躍り出ると森に着いたカルロが矢を放つ。

「逃すとも……」

木に刺さった自分のナイフを抜いて森の奥へ逃げようとするエレンとカルロの上を通り過ぎる様に放物線を描いて飛んで行く物体。

その物体が2人の手間に金属音を奏でながら落下すると黄色いガスを周りに吹き始める。

「エレン!」「カルロ!」

迅移を利用して、左右に迂回する事でガスを避けた2人だが、それよりも速い速度の迅移でガスを突つ切る形で移動していた皐月と満月。

最短距離を移動した事で皐月はエレンと、満月はカルロと接敵する事に成功する。

皐月が上段から放つた一撃をエレンは横一閃で弾き、振り抜いた刀を素早く角度を変えて縦に一閃する。皐月はその一撃に一步後退する事で避け、横の一撃を放とうとするが、エレンはそれを読んで迅移で後退するもそれを見越した皐月も迅移を使うと同時に踏み込み、一閃する。

「ぐっ……」

何とか耐えたエレンが受けた衝撃でバックステップ、同時に迅移で後退するがそれすらも読んでいた皐月は追撃、エレンが何とか用意していた、攻撃を受けない為だけの防御を深甚流の特徴でもある突き上げる動きで崩すと刃を返して上段から斬り付けるが、エレンもみすみす斬られるつもりはない。

上から刃を叩き付けて触れさせるとそこから力任せに応力を与えて軌道をズラすと言う芸を見せる。皐月は予想出来なかった行動をされた事とエレンの行動に動揺し動きを止めてしまうと同時に身体の側面がガラ空きになってしまう。だが、刀は皐月の御刀を上から押さえ付けており、普通の刀使ならば隙にならない。

「っぐっ！」

エレンの放った蹴りを肩に喰らい、蹴り飛ばされた皐月が苦しそうな声を小さく、短く森に響かせる。

エレンの修める流派はタイ捨流。古武術とは思えないアクロバットな動きに体術を組み込んだ、見方次第では異端的とも言える流派。当然ながらエレンもタイ捨流を修める者として体術も修めている。

エレンは飛ばされて体勢を崩した皐月の隙を突いてカルロの救援に行こうとするが、エレンの迅移に対して速度で超える皐月は追い付き、斜めに御刀を振って牽制する。

エレンも救援には行けないと即座に判断して一旦は距離を取るが皐月は追撃を選択。エレンは迫る皐月に御刀を横に振るって迎撃に出るがまたも突き上げられ、素早く『つ』の字を描く軌道で横振りを放って来る。

「つぱ」

エレンは後退して回避すると森の中を走って移動しよとすると枝や幹を蹴る事で高速で動き回り2つの影が通り過ぎるタイミングで右の影からは3本の影が高速で飛んで行った。3本の影の正体は矢、つまり右の影の正体はカルロだ。

その3本の矢に対して右の影、満月は左に横跳びして回避し、素早く照準を調整して、バックショット弾を放つもカルロも右跳びで回避するがバックショット弾は近くの細い枝を吹き飛ばし、その破片が写シを張ったカルロの身体に叩き付けられる。

カルロも負けじと量では無く質で勝負するつもりなのか、放った3本の矢を回収する為に方向転換する。

満月はこのまま横に移動すると思ひ込んでおり、満月に背後を取られたが所詮は矢、木は貫通出来ないし幹を盾にする様に移動するがカルロは貫通性重視の射法で矢を放った。

放たれた矢は風切り音上げながら飛翔し、幹を貫通。満月のギリギリを通過し、写シが張られた親衛隊制服に一筋の切れ込みを作る。

「ただの弓使いではない……みたいですね」

そしてまたも2人の男がさながらドッグファイトの様に追ひ掛けっこをする2人の少女の頭上で枝や幹を蹴って飛び回る。

2人の少女の片方、皐月もはエレンの横に張り付くと刀を横に振って一撃を加えんとするとがエレンは刀を立ててその一撃を防ぎ、縦の一撃を放つが皐月は減速する事でその一撃を避ける。

「っ」

加速の為に踏み込んだ足を一撃を放つ為の踏み込みに兼用し、両手持ちで攻撃を放ったエレンに速度と威力が籠った袈裟斬りを放つ。エレンはそれを防衛しその抵抗で減速、さらに皐月が行った加速と踏み込みを同時に行い、同様に威力と速度の乗った斬り

払いを仕掛ける。

「ハアツ！」

その一撃を防いだ皐月だが、体勢を崩し。そしてその隙を逃す様なエレンではない、素早く横蹴りを放ち、皐月を蹴り飛ばした。だが、皐月も唯ではやられるつもりはないのか飛ばされながらも手首付近を斬る事でエレンに蛾の様な荒魂を送り付ける。

大量の荒魂が自分目掛けて一目散にやって来る現状に苦い声を上げて苦い表情を作るが身体は直ぐに動き、サイドステップで距離を調整し、一直線に突っ込んで来る荒魂に対して腰に構えた御刀を横に振り抜き、群れを1つ斬り払う。

「フーン！」

そして返す刃を縦に振り下ろして2つ目を斬り払う。それでもまだ幾つかの群れが迫る。

「いい加減に！」

エレンが荒魂の群れに襲われる少し前、空中では弓のパーツで言う所のスタビライザーの様に取り付けられたスタンロッドで飛び込んで来た満月を殴りつけようとする。しかし、当然ながら互いに空中で武器を当て合えば落下する。

「これではキリが無いデス。やはり、元を断つしかありません」

左右から迫る群れを素早く2連続攻撃で払ったエレンは二撃の勢いを利用して反転、

背後から一撃を加えようとしていた荒魂の群れを切り裂きながら走り、元である皐月に迫る。

そして、エレンが皐月に突撃をするのと同時に2人は地面に落下するが転がって威力を以外した満月が素早く銃口を向けてバツクシヨット弾を放つがカル口も素早く弓からスタンロッドを取り外すとダーツの様に投擲する。

「ぐうえー！」

バツクシヨット弾は有効射程ギリギリだったがカル口に命中。

「あゝあゝあゝ」

スタンロッドも満月に命中する。そしてまさかの電撃に叫び声を上げた満月に気を取られた皐月にエレンは隙を突いての横一閃を放つが、皐月も本能で危機を察したのか何とか防御をするが、咄嗟だった事もあり、体勢をまたしても崩してしまふ。

「(彼なら……)」

それでも仕留め切れなかったエレンは二撃目を加える必要がある。仕留め切れなかった事に悔しがる様な息を吐き、呼吸を止めると今度は逆方向から追撃の横一閃を放つが、満月なら大丈夫だと信じた皐月に隙はなく、その一撃をちゃんと防がれてしまふ。

「はあー！」

それでも流れはエレンに寄っており、エレンのこの流れで仕留める気にいるのか勢い

で下がろうとした皐月に嘯み付く様な軌道で御刀を振って一撃を当てんとする。

その嘯み付く様な一撃も何とか防いだ皐月だが、今だに続くエレンの連続攻撃を相手に防ぐよりも流れを変えるべきと判断したのか斬撃を抑えると同時に飛び退き、荒魂を自分とエレンの間に飛び込ませて目隠しを行う。

「やつてくれますね……」

皐月がエレンを相手に交戦している間に満月も身体に触れるスタンロッドを投げて、自分の身体から引き剥がしながら、早く立ち上がれねばならないと思う満月だが、口以外が電撃の所為か思う様に動かない。

スタンガンなどの電撃性の武器は写シを張った相手には無意味で有る。が、長船では神性が宿った金属に電流を流して当てる分には荒魂には効かないが、写シを張った相手には効く事が判明した。

そして舞草はこの研究結果から来るべき日には刀使・武宮と戦う事もあると想定しており、刀使・武宮との交戦が想定される任務では携帯を許可する武器としてスタンロッドを採用した。つまりはカルロの持ちつつスタンロッドは対刀使・武宮装備と言える品物である。

対するカルロも落下時に下手に落ちた所為か周りに矢を入れるケースが腰から外れ、中の矢が周りに散乱しており、その中心で本人は落下の衝撃で受けた痛打の所為で動き

が鈍い。

2人は痛みを無理矢理に押し込めながら立ち上がる。

満月は銃を杖代わりにながら、カルロは何にも頼り事無くゆつくりながらも立ち上がり、握っていた弓と矢をゆつくりと構えると、揺れる弓を何とか制御しながら、立ち上がるとうとする満月に矢を放つ。

「くう……」

少し離れた場所では荒魂で目隠しをした隙に皐月がエレンの場所がわかつているかのように上段斬りを放つも、咄嗟にエレンが防御の体勢を作って鏢迫り合いに持ち込み、ワザと斜め前方に踏み込んだ事で渾身の力を持って攻撃していた皐月を前方、エレンからすれば斜め後方に受け流されるのとカルロが矢を放つのは同時だった。

「……ッア……」

動かない身体を無理矢理に動かして、放たれた矢を銃床で受け止める。木製の銃床に突き刺さった矢をそのままに銃弾を放つが、カルロは地面に倒れ込む様に動いて銃弾を回避する。

「はあ!!」

そして銃弾を回避したカルロと同じタイミングで受け流された皐月にエレンは気合の声と共に半回し蹴りで脇腹を蹴って吹き飛ばす。

此処は体術も修めたエレンと剣術だけの皐月が持つ引出しの数の差が如実に現れた結果だった。

「フッフッフ。刀使が得意なのは剣だけとは限りませんヨ」「長船の武宮をナメるなよ……親衛隊……」

脇腹を抑える皐月と胸を矢に貫かれて膝を突いた満月にゆつくりと立ち上がりながら荒い息を吐くカルロだが、エレンと共に満月と皐月から紡がれた言葉に2人は不可解な物を聞いたか所為か思考回路の動きが止まる。

「足りない……」「また……」

皐月の身体から写シが解かれて、実体に戻ると同時に皐月は自身の腰に手を回して何かを探り始める。

「もつと……もつと、力を」「あの世界……また失うのは」

握り込む様に掴まれた太い試験管の様な物体にエレンは見覚えがあった。

あのテントの中で見た赤銅色の薬品を入れた注射器だった。

「うっ、はあ……あ」「二度とごめんだ!!」

注射器を迷う事無く首筋に刺した皐月と太腿に刺した満月が同時に親指でボタンを押し込んだ。

何かが噴射される音が小さく響くと皐月の口から苦痛を伴う様な声が漏れ、満月は叫

びながら刺した事で苦しそうな声こそ出なかったが、異物を身体に入れたからか表情が歪む。

皐月の右目の内側から何か盛り上がると共に周りに蛾の荒魂が大量に溢れ出すのと満月の左目に皮膚を突き破る様に割れた仮面の様なものが現れるのは同時だった。

2人の身体は人間にはあり得ない異物に引つ張られる様に立ち上がる。

「つ、角……鬼デスか」

夜見の右目から生えた黒い突起物にエレンは構えを解いて、一歩だけであるが後退りをする。カルロも言葉こそ出なかったが満月の異物さに気圧されたのか身体が半歩だけだが、退がる。

「あの日の……贖罪の為に……」「あの日の……感謝の為に……」

皐月はエレンにだけ、満月はカルロにだけ聞こえる声で呟くと皐月と満月が同時に動き出す。

刀使とは言えない存在になった少女と武宮とは言えない少年が手負いの長船刀使と長船武宮に襲い掛かる。

第十九話 伊豆での戦い 第四幕

皐月は蛾の様な荒魂をエレンにけしかけながら自分もエレンに向けて接近するとエレンも迫る荒魂を素早く斬り払いながら接近し、満月も銃弾を片手保持の銃から放ちながら一直線で迫るとカルロも身体から痛みが引いたのかジクザクに迅移をして銃弾を躲しながら弓を投棄してナイフを引き抜く。

「手加減無し……」「こつちも本気で……」

上段に構える皐月に肉薄したエレンが御刀を振り下ろされる前に右拳を握り、踏み込みと身体の捻りを加えて打ち込まんとする。カルロも銃弾を回避して肉薄する直前に満月は銃剣を叩き付ける様に振り下ろして来るがカルロは素早く迅移を使ったバックステップで回避し、満月が追撃の為に銃を横薙ぎに振るう予備動作を見せた瞬間に自分の身体を折りこませるかの如く飛び込んだ。

「ダスよ!!」「行くぞ!!」

エレンの拳は皐月が振り下ろすよりも速く皐月の鳩尾を捉え、森に殴られた音が響き渡り、殴られた皐月は殴られた衝撃で短く息と共に声を漏らす。満月も完全なゼロ距離に潜り込まれればどうする事も出来ず、カルロの肘打ちの要領で突き出されたナイフを

腹に突き立てられる。

「はっ……ワタシの必殺鳩尾砕きが!」

写シを張っていない皐月に御刀での攻撃では無く、肉弾による制圧を選択したエレンだが、結果は被害らしい被害は無く、御刀をいつでも振り下ろせる体勢のまま片手で保持した皐月がそこに居ると言う物だった。

完全に殺す気で来ていると判断したカルロは自分も殺す覚悟を決めてナイフを満月の腹に突き刺そうとしたが、満月はカルロの手を握り込む様にして刺突の防いでおり、片手で銃剣を横薙ぎに出来る姿勢のまま固まっている。

「ふうん」「ふうん」

エレンは皐月が片手で振り下ろした御刀に斬られた事で地面に座り込み、カルロはまさかの相手に恐怖の感情を抱いてしまったのか何歩分か後退してしまい、それで距離が開いた隙を突かれてバックショット弾を喰らってしまい、その衝撃でエレンの横まで吹き飛ばされ、地面に倒れ込む。

「コレは少しばかり厄介デスね……」「コレはかなりbat caseな状況だ……」

それぞれの相手を見ながら呟く2人と遅れながらにエレン闘争の情報が入った獅童、此花・苔石は装甲車の車内だった。

「古波蔵が逃げた」

「はい。現在、皐月隊員と満月隊員が後を追っています」

助手席の警官から報告を貰った獅童が溜息を吐くと此花が口を開いた。

「良いではありません？ 狐が尻尾を出してくれたのですから……いいえ、彼女は狸の方がお似合いかしら？ それに」

此花と獅童が苔石の方に向くと苔石は頷く。

「ああ。索敵と追跡では親衛隊一の実力を持つ夜見と閉所と捕獲に親衛隊一の実力を発揮する明夜だ。そう易々と逃す奴らでは無いだろう」

苔石が懐から取り出したジツポの火を見ながら呟いたのと同じ時間、場面は伊豆の森に戻すとそこでは木を背に腹を抑えて荒い息を吐くエレンとそのエレンを守る様にナイフを両手に逆手で持ったカルロが荒い息で立っていた。

「もう、写シも張れませんか……お覚悟を」

そう言つて御刀を振り下ろした皐月だが、それをカルロが左のナイフで弾き、右のナイフで首元を刺そうとするが満月が横合いから突き上げる動作でナイフから皐月を守り、銃床でカルロの頬を殴ろうとした瞬間に満月の身体が大きく吹き飛び、皐月が迫る影に気付いて満月と同じ位置まで大きく飛び退く。

何事だと固まる2人の前に立ち塞がる様に立つ2つの大小の影。

片方は小さい背丈に似合わぬ大太刀を背負った桃色の髪をツインテールにした女性

らしい影と浅黒い肌に筋肉隆々の大きな身体とその身体で振るう事を前提にしたかの様な巨大な大腰鉈を背負った男性の影。

2つの影は共に長船の制服を纏っている。

「薫!」「巧!」

「2人とも生きてるな?」「2人とも生きてます?」

その影を見たエレンとカルロが同時に叫ぶと2人は同時に生きているかの確認をする。

その通りでございます

「はいデース」「Exaactly」

「じゃあ、金剛身」「じゃあ、舌噛むな」

薫と巧の2人から不可解な声を貰ったエレンとカルロはへ? と疑問に思いながらも目の前に迫った衤々切丸の峰を見たエレンは全てを察して反射で腕を構えて防御の姿勢を作ると触れる瞬間に金剛身を発動させ、巧はカルロの胸元を掴むと持ち上げて、腕を振る予備動作を行う。

「ホームラン!!」「フルスイング!!」

「ば……バカアアア……!!」

後ろへ大きく吹き飛ばされたエレンと後ろへ大きく投げ捨てられたカルロが地面を何度も呻き声を上げながら転がって仰向けに転がるとそこには偶然にも丁度いい場所

に立っていた勝武居と可奈美が2人の救助の為に膝を地面に付ける。

「だ、大丈夫？ エレンちゃん」「カルロさん、無事か？」

「カナミン!?! 何でこんな所に居るデスカ!?!」「カムインもどうしてこんな場所に?」

カムインでなんだよと言う突つ込むを置いておいて目の前の戦場に目を向ける。

そこには巨大な獲物を構えた薫と巧ペアと御刀を油断なく構える姫和と拳銃を構える帝人ペアが居た。

「変な勘違いはするな。私は、私の戦うべき相手を見極める為に来たんだ」

決意に満ちた声で告げる姫和だが、帝人の手は変に力んでいる事を銃を取り扱う満月と弓を扱うカルロだけが悟った。

それは迷いを押し殺しながら武器が揺れぬ様に構えていると言う事に。

「荒魂に呑まれた……」

人を殺したからこそ出来た人殺しの覚悟。だが、決してその人格は人殺しを容認した訳では無い。それに荒魂に呑まれた人であろうとソレを荒魂として見切れない所も未だに僅かだが存在する。

普通……いや、世話になつた者を手に掛けた者であろうと帝人は未だに未熟な中学生の身体、精神は少なからず身体に引つ張られる。何よりも生きた人間に荒魂を入れると言う非人道的な行いを前に恐怖に近い感情を抱いていた。

「行け！ 此処は俺たちが受け持つ。2人を連れて行け！」

それでも武宮として、何よりも守る為に戦う。そう言った歳下の武宮の顔を見た事で折れ掛けた精神を繋ぎとめて叫んだ帝人の言葉に勝武居は帝人の覚悟を感じて可奈美の肩を無言で叩いてからカルロを肩に抱いて走り始める。

可奈美も勝武居の行動に負傷したエレンを下げた方がいい事も理解しつつも後ろ髪を引かれる思いで撤退を開始すると撤退する2人の援護の為か、峰に手を添えて叩き突く構えを見せる巧が八幡力を使つて、高速跳躍に任せた移動を迅移で加速させて親衛隊の2人に迫る。

満月は無言で銃口を向けて、巧の迎撃に動き出すが迅移で側面に移動した帝人が銃身に拳銃弾を当てて外らせようとしますが、狙撃に向かない拳銃での射撃を外してしまい、銃口を横にズラすには当たり所が悪かったのか僅かしか横にズラせ無かった。

「充分」

しかし、巧にはそれで充分だった。

正中線をズレたスラグ弾は吼々割丸の鎬で防ぐと同時にその衝撃を回転機動に変更した上で遠心力を乗せた一撃を見舞う。

「ブルウアアアアアアア!!」

全力の大振りの一撃だが、満月はそれを最小限で回避した上で銃剣での刺突を仕掛け

ようとするが、横合いから飛び込んで来る影に気付いて、動くを止める。

「きいええええええええ!!」

女性らしからぬ猿が叫ぶような声を上げながら巨大な白刃を抱えたまま木を蹴つて高度と機動力を手に入れた上で迅移を使った加速で迫りながら、縦回転の遠心力を乗せた叩き付ける様な一撃を加える。

「……」

満月は薬品による荒魂化の影響か息を吐く事無く大きく飛び退くが、帝人からの銃撃を警戒して全周警戒をしていると案の定、銃声が響き、3発の銃弾が飛来する。

2発は銃剣で弾くが1発は迎撃出来ないと判断してか身体を傾けて回避する。

回避された銃弾はそのまま空気の抵抗を貫きながらも飛翔し、小型の荒魂で形成された群れを切り裂いた姫和と鏢迫り合いをする皐月の背中を掠める。

写シを張っていないかった皐月は突然の背中の痛みに力を抜いてしまい、鏢迫り合いをやめてしまい、身体の内自由を取り返した姫和が皐月を足払いで転ばせると素早く上段の構えを見せる。

姫和に人を斬る事に対する抵抗は無い。それがわかる程に一直線の斬撃を地面に座る皐月に向けて振り下ろさんとするがその一撃は迅移で飛び込んだ満月の突き上げで弾かれ、姫和の腕の間に出て来た隙間から銃床で殴打して数歩下がらせると素早く銃を引

き戻して、腹に銃剣を突き刺し、銃撃の反動を使つて素早く引き抜くと迫る薫と巧に腰溜めで銃口を向ける。

薫と巧はすぐに散開するが射線上に存在し、巧の身体で銃口が隠れていて、反応が遅れた帝人に放つたスラグ弾が命中。右手に持っていた拳銃を破壊し、同時に右手首を吹き飛ばす。

「くそー！」

悪態を吐くと同時に左手で剣を抜くと同時に投げ捨て、迅移を使つて投げた御刀に追い付き、左手で順手持ちすると素早く横合いから斬り掛かる。

「がっ……」

「肩借りるぞ」

満月は銃を立てて銃剣で防御すると同時に帝人を蹴り飛ばすが、蹴り飛ばされた帝人を足場に飛び上がった薫に巧が袈々切丸を空中で投げ渡して、重量に任せた縦の一撃を叩き付ける様に放つと満月は未だに起き上がれない皐月の胸元の服を掴むと八幡力を使つて片手で持ち上げると同時に脚にも八幡力を使つて大きく飛び退く。

「逃すとー！」

後退した場所に写シを張つたばかりの姫和が突貫と同時に放つた突き技に咄嗟に反応出来た満月だが銃剣での防御は間に合わないと銃撃での迎撃を選択したが、咄嗟の事

戦いの中でも感情という物が稀薄に見えた皐月の感情的とも言えるその叫びは全員が耳を塞ぐには十分過ぎる高さで、汚れた手で満月と自分が持っていた薬品の入った注射器の全てを首筋に押し付け、注入する。

苦悶の声を小さく上げていた薬品だが、満月がやられた怒りからか苦悶の声を上げる事無く全てを受け入れると目から突き出ていた角が脛を開ける様に裂け、中から黄色と黒の目玉が瞬きして外界を捉えると即座に赤く輝き、皐月の身体中から蛾に似た荒魂が大量に溢れ、その群れは螺旋を描きながら狼煙の様に高く舞い上がった。

その異変は遠くにいた獅童・此花の兩名は身体の中から感じた異変で感じ取り、苔石は飛び出す様に装甲車を出た2人を追って外に出た事で荒魂の狼煙を見てその異変に始めて気付いた。

「あれは……」

「なんだよ……」

「夜見!! 明夜!!」

その光景を見た苔石は直ぐに原因を察した。

「あいつら……まさか制御出来ないレベルで投与を……」

「それなら急がないと行けませんわね」

「ああ。先に行かせて貰うぞ!」

親衛隊が最短距離で突っ切る為に森の中へと飛び込んだ。

3人の心の中には2人の仲間が取り返しのつかない事になっていない事を祈る思いで一杯だった。

第二十話 伊豆での戦い 第五幕

戦場から少し離れた位置に居た可奈美とエレン、勝武居とカルロにも皐月の異変を異様な存在感として、感じ取る事が出来る事で4人は逃げる足を止めて振り返ると茂みから足止めを買って出た4人が現れる。

「何? 何が起きたの?」

振り返った可奈美とエレンの前に何かから必至に逃げる様に走る姫和と帝人、薫と巧が現れる。

「帝人! 何があった!」

そう叫んだ勝武居に帝人は早く行け、逃げる手振りを加えながら叫ぶと同時にこの場の全員を飲み込む様に周りの景色が灰色に染まり、奥からは赤いオーラを漂わせた皐月がゆつくりと歩いて追い掛けて来ていた。だが、変化は皐月だけで無く、可奈美やエレン、勝武居とカルロに水中にいるかの様な息苦しさを感じ、地面に倒れてしまう。

「ッ! 写シを張れ!!」

写シを張った自分達が無事で張っていない4人が呻いているのなら写シの有無がそうさせているのだと気付いた帝人が叫ぶと4人は写シを張る事で息苦しさを解放さ

れるがその息は異様なまでに荒い。

追いついた皐月の赤く光る片目がまるで獲物を探すかの様に動いて、姫和を捉えると皐月が御刀を振り被つて一目散に姫和を目掛けて駆ける。

「ふっ」

姫和は皐月に対して上段での迎撃を選択したが皐月はその一撃を大振りの一撃で弾き、斬り返しを放つがその一撃は咄嗟に飛び込んだ帝人が防ぐと同時に鏢迫り合いに持ち込んだタイミングで薫の御刀が上段で迫るもバックステップで回避される。

「ヌンッー」

バックステップで回避した皐月に巧の横振りでの一撃が薫の頭上を通り過ぎて迫るがその一撃を身体を横に捻らせて回避し、同時に踏み込み、捻りを戻す勢いで薫を斬り、さらに回転して巧の腹を斬り裂いた。

この攻撃を食らった薫と巧は2人揃って気絶してしまふ。

「くっ」

姫和が上段斬りから斜めに払って防御を崩しに掛かるが皐月はそれを受け流して防御を崩させず、姫和は横に振りながら速く大きく横に距離を取り、袈裟斬りを放ちが皐月はそれが読めていたのか姫和が攻撃しようとする同じタイミングで袈裟斬りをを放っており、姫和がその勢いに負けて横に流される。

「っ……」

体勢がほんの少し崩れたタイミングで皐月から上段斬りを放たれるが後ろに下がる事で姫和は回避するが、皐月は素早く掬い上げる様に振り上げた刃で姫和に斬り掛かる。

姫和も咄嗟に防御するがそのパワーに負けてしまい、大きく吹き飛ばされる。

それをカバーする為に帝人から皐月の足を目掛けて突きを放つが、皐月は突き上げるように御刀を振って防御すると同時に帝人の身体をノーガードの状態を作り出して平突きを肩狙いで放たれる。

帝人はそれを辛うじて身体を捻らせる事で避けたが平突きは刃の方向に避けてしまふとそのまま横薙ぎに移行される技。

帝人は咄嗟の事で刃の方に避けてしまい、横薙ぎの追撃を何とか御刀を立てて防御する。

「はっ……」

金属が割れる様な音が響くと同時に帝人の視界に皐月の御刀の刃が根元近くに入り込んだ自分の御刀を捉えると即座にバックステップで逃げるが皐月がその瞬間には振り抜こうとしており、皐月の御刀は帝人の御刀を切断した上でその首へと伸び、僅かながらに首を搔つ斬った。

「くう……」

帝人を退けた皐月が明確なまでの殺意を含んだ刃を姫和に押しつける様に振るう。

押し付けられる様に振るわれた御刀を弾こうとした姫和だが、皐月は弾かれる前に鏢に己の御刀を食い込ませる事で弾け難くし、そのまま刃先を首元に押し付けようと刃を動かそうとする。

姫和は八幡力で押し上げる様に抵抗するが皐月は体重を乗せながら八幡力で押し潰そうと迫る。

姫和は皐月の押しに負けて地面に倒れるが鏢迫り合いを崩したりはしない。だが、確実に刃が姫和の首元に迫ろうとする。

「姫和!!」

武器を無くした帝人だが、肉体でも引き剥がす事は出来る。姫和を助ける為に手を伸ばした瞬間に荒魂の群れがまるで意思を持った斬撃の様に飛び、帝人の両腕を切断し、背後でUターンを行うと返す刃で胸を背後から貫いた。

「カハア……」

胸に來た痛みと圧迫感で息を吐き、そして大き過ぎる精神的ダメージは気絶となつて帝人を地面に倒す。

このタイミングで気絶から復帰した薫と巧は直ぐに行動を起こし、薫が姫和の救出に

巧は帝人を灰色の空間から放り投げて出そうとする。

放り投げられた帝人を予め退避していたカル口とエレンが何とかキャッチし、それと同時に薫の峰打ちが皐月に命中するが、片腕で防いだ皐月が大きく吹き飛ばされるがその際に荒魂の群れが回転しながら迫る槍の様に薫へと迫る。

「やべ」

振り抜いた姿勢ゆえに動けなかった薫を助けたのは勝武居の横一閃だった。

邪魔された荒魂の群れは勝武居へと全ての群れが勝武居へと迫る。

迫る幾つもの群れに勝武居は臆する事は無く、自分から迫った上で最初の群れを左振りで斬り破い、振った隙を突こうと迫る次の群れに刃を戻す動作を取り止めて突き技を放って祓う。

「勝武居！ 右だ！」

薫の言葉に答える暇すら惜しいと腕を引きながら身体を回して回転斬りで迎撃し、正面に戻る際に回転しながら掲げていた剣を振り下ろして正面から速度重視で突っ込んで来る群れを倒す。しかし、正面から来た群れは幾つかに別れ、回復しきれない姫和に狙いを定める。

「させるか!!」

姫和を助ける為に迅移で移動して停止の足を踏み込みに下から上に引き上げる様な

動作で攻撃を当てて1つの群れを祓うと同時に姫和から背後に迫る群れの存在を知らされるが、勝武居は予め知っていたと言わんばかりにその場で旋回して上段斬りで祓い、勝武居を迂回して姫和に迫る荒魂の群れに迅移で飛びながら移動し、片手で振り抜いた剣で斬り祓う。

「!?!」

その群れは囷。

本命の存在が螺旋を描きながら高速移動で姫和に迫り、姫和は息を呑みながらも咄嗟に剣を構える。

勝武居もアレでは無理だと判断して移動するが、普通なら身を挺して守るしか出来ない。

「え……」

姫和が見た光景は左手で保持した剣を振り抜いた姿勢の勝武居とその周りに飛び散る荒魂だった大量の泥色の液体。

勝武居の剣は剣に剣と一体化した斧頭の護拳を付けた武器だ。勝武居は右手を振り抜いた姿勢から右手首だけを駆動させて剣先を身体の前まで移動させると剣先を左手で握り、護拳の斧で荒魂の群れを叩き斬っていた。

残心の姿勢から素早く柄を両手持つと手と腹で抑える様に剣を保持し、肩を臍月に突

き出し、脚を開いた姿勢を作つて皐月の次のアクションに備える。

皐月は御刀を指揮棒の代わりの様に勝武居に突き付けて荒魂の群れを再び放つ。

「ツ……!!」

放つた直後に何者かの気配に気付いて荒魂群れを呼び寄せると自分の周りに竜巻を巻く様に動かして迫っていた物体を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた物体は姿勢を整えようと手足をバタつかせながら飛んで来た方向へと吹き飛ばされる。

「アグウ！」

派手に地面に転がった物体、苔石が地面に叩きつけられた時に短く悲鳴を上げながらも転がって皐月から距離を取ると苔石を守る様に獅童と此花が立ち塞がる。

「夜見だけ!」

荒魂の周りに纏わせ、片手で御刀を握る皐月を見て獅童が叫ぶ。

「明夜さんは一体何処に……」

此花は満月の姿を探すがこの付近に満月の姿が無い事を把握した瞬間に皐月の荒魂が此花に迫る。

「それよりも此奴を止めるぞ!」

不意を突かれて防御の為に御刀を構える事しか出来なかつた此花だが、前転で群れと

の距離を詰めつつ立ち上がり様の斬撃で苔石が群れを跳ね除けながら話す。

獅童も此花も味方である存在を攻撃した事で暴走状態であると判断せざるを得なくなったのか御刀を握り直すと同時に腕に力が籠る。

「苔石！」

交戦の意思を見せた3人に皐月は荒魂の群れを放つと同時に獅童が苔石の名を叫ぶと苔石が剣を顔の横に掲げながら踊り出る。

最初の群れを身体の捻りを加えた片手での突きで祓うと両サイドから迫る群れを確認した苔石は右手で保持した剣を右に振るい、その遠心力に乗せて振った左手の籠手の機能を発動させながら振るう。

右手の剣は剣としても性能で荒魂を祓うが、左手は鉄扇の様に装甲が開き、一定間隔で施されたホホジロザメの歯を模した刃を付けられたラウンドシールド、シールドブレードとも言える武器で斬られた荒魂が祓われる。

皐月は一方向からは苔石を倒せないと判断したのか今度は四方八方から時間差も付けながら荒魂の群れを放つ。

「そーうだ！ それでいい!!」

苔石は寒気がする程の荒魂を前に獐猛な笑みを浮かべると同時に振り向いたままだった右手で上段斬りで前の群れを祓い、両腕をラリアットの要領で突き出しながら回

転し、6方向から迫っていた群れをほぼ同時に祓う。

まさかの出来事に突入タイムリングのベストタイムを崩された後詰め群れが突き技から左回転斬りで2つの群れを捌くと回転斬りの勢いで加速しながら迅移で残りの群れと臯月に迫る。

臯月は迎撃の為に群れを差し向けるが前方の群れは右斜め下斬りから右横振りのコンボで祓われ、時間差で接敵した群れも左捌い上げで斬られ、第二陣も逆手持ちにスピンドで持ち変えると同時に投げた剣で迎撃される。

そして空いた右腕にも左手の同じ物が展開されると迫る荒魂に自ら接近、左腕のシルドブレードを横薙ぎに振って撃破、振った勢いで回転して横から来た群れを同じく左腕で斬り祓い、右腕で背後に回っていた群れを斬り、正面に捉えた群れに右腕を振り上げる一撃で祓う。

「後ろは！」

背後からゆつくりと極力音を立てずに迫っていた群れだが、回転機動を中止に動いていた苔石の視界に偶然にも入っており、存在が気付かれた群れは奇襲を失敗させるどころか自分から回転で振り返ると同時に跳ね上げられたシルドブレードに飛び込んで斬られてしまう。

攻撃直後の苔石に別の群れが突撃を敢行するが、身体を横にズラして紙一重で回避す

ると横を通り過ぎるタイミングで回転機動を起こし、躲した群れを斬り付け、そのままもう一回転で別の群れを切断し全滅させる。

全滅した事で視界が泥色の液体で塞がれた苔石に液体を突き破って多めの群れが迫るが苔石は落ち着いて右腕の一撃でダメージを与え、逃げたタイミングで左ストレートを放つて退ける。それでも残る群れだが、苔石は距離を取った事をいい事に回りながら追撃し完全に被い斬る。

全ての群れを祓った苔石が皐月に迫るが皐月は自分の身体に隠す様に荒魂の群れを3つ隠していた。

「暴走しているが理性的だな……」

最初の群れを躲して2つ目の群れを右腕を振りながら飛び上がりながら被い、右足が着地したタイミングで僅かに飛びながら左手で躲した群れが反転した群れを祓う。3つ目の群れは左腕の勢いで回転してカウンター気味に攻撃を当てて祓う。

「理知的では無いが」

護衛が無くなつた瞬間に獅童と此花が皐月に斬り掛かる。

皐月の事を知る3人は戦闘開始前にアイコンタクトで皐月が最後の策と思しき行動をするまでは攻撃に参加せず、苔石だけが正面から迫り、尚且つ派手に動き回っている隙に獅童と此花は別れて森の中を迂回して皐月の背後に移動した上で奇襲を掛ける作

戦の実行に移していた。

なお、この作戦は移動中に決めていた事である。

「はああ！」

此花から斬り掛かるが皐月は片手で強く此花の御刀の鎧を叩き付ける様に振って此花を弾き、弾かれて体勢を崩した此花にカウンターの斬り返しを放とうとする皐月の腕が止まる。

「俺の武器を忘れたとは言わさんぞ」

自分の御刀を抑え付けられた事を皐月は低い声で発する苔石の声を聞いて初めて自分の御刀の刃先に目を向けた事で理解した。

苔石の籠手に鉄扇の機構を利用して格納されている盾だが、2つの鉄扇が重なる事で盾を形成するのだが、手甲の上で重なるパーツのみがソードブレイカーの様な意匠をしており、相手の武器を絡める・破壊などに適している。

そんな苔石の稼働盾に挟まれた御刀を引き抜こうとする。だが、相手の武器を絡めて奪う、拘束する為の武器とも言えるソードブレイカー2振りに挟まれた御刀は抜けず、その隙に獅童の接近を許してしまう。

「夜見！！」

獅童が呼び掛けと同時に皐月の額に柄頭を思いつき叩き付ける様にぶつけて気絶

させようとし、苔石もそれを助けようと皐月を背中から押せる事で衝撃が外に逃げ難くする。

摺り足で少し下がった皐月を見た此花と獅童が順に距離を取ると改めて御刀を構え直し、苔石も拘束を解いて下がろうとした瞬間に皐月の身体が苔石の背後に捻り込ませるかの様に動き、苔石の背中を斬り付ける。

「ツウ……」

咄嗟に右腕で防いだ苔石だが、その斬撃に吹き飛ばされて木に背中を強かにぶつける。

吹き飛ばされた苔石に意識を割いた獅童に皐月が斬り掛かる。

「夜見！」

罅迫り合いで防いだ獅童が呼び掛けるが皐月は荒い呼吸と虚ろな目で獅童を見るだけで特にコレと言った反応を見せない。

この状況に変化をもたらしたのは此花だった。此花は獅童の名を呼びながら峰打ちで皐月の首を攻撃する。

世界的に近接武器としては軽い分類に入る日本刀だが、それでもそれなりの重さはある。

それを高速で首を殴られたのだ。当然ながら常人であるならばダメージは相当なも

のだろう。だが、皐月は殴った此花に罅迫り合いをする獅童を足払いで浮かせると地面に落ちる前に御刀を動かして罅迫り合いをする獅童を叩き付ける様に動かして2人を転倒させる。

「はあ……はあ……」

起き上がりとした獅童の鳩尾を踏み付けて身動きを奪い、同時にもう片方の脚で御刀を握る右肘を踏んで攻撃手段を奪う。

皐月は見下す様に倒れた2人を視界に納めると御刀を突き刺す様に振り落とす。

「間に合った……」

が、その剣先を皐月に背中を斜めに晒した姿勢で飛び込んだ苔石が右手の掌で防ぎ、皐月と正面に向き合う為に身体を捻った勢いで上へと引き上げる。

「オラア!!」

殴られる事に慣れているプロのボクシング選手でも下手な時に喰らえばそれなりに上にはダメージを喰らう肝臓への一撃。それを狙った苔石の左ブローはガラ空きになった皐月の胴体、肝臓を的確に捉え、意識や訓練を積んでいなかった皐月はそのダメージにたたらを踏んで下がる。

目に見えるダメージを与えた苔石だが、得たのは皐月を倒した結果では無く、首筋に何かが食い込んだ痛みでは無い異物感。それは写シが剥がされる程では無いが、写シが

ダメージを受けたのと全く同じ異物感の正体に気付いた頃には視界は斜めり、皐月が視界から消えた頃になって漸く自分が袈裟斬りにされた事を悟つたと同時に首を掬い上げられる機動で斬られた。

写シに大きなダメージを受けた苔石は写シが剥がれながら地面に膝をつけてその場で倒れ、皐月は倒れた苔石を放つて、漸く立ち上がった獅童と此花に視線を向けた瞬間に銃声が響いた。

「あ……」

銃声が響いた方向を見る獅童に肝臓の部分に銃弾が当たったからか、身体から何かが高速で飛び出し、飛び出したのが魂か何かだったのか身体を捻りながら倒れる皐月を見て獅童の名を叫ぶ此花。

獅童は銃声の主が満月だと分かると鬼の形相で満月に詰め寄るとするが、満月は獅童が詰め寄ろうと向かってくるのを見ながら木を背にゆつくりと倒れるのと同時に灰色の空間が無くなる。

「満月!! 君は何をしたのか!」

わかっているのかと言う言葉は此花が肩を抑えた事で飲み込んだ。

「撃ちたくない気持ち。いいえ、夜見さんを想う気持ちが一番強いのは明夜さんですわ」
そう言って止める此花に獅童は満月の顔を見て皐月を撃つた事への怒りを沈めると

苔石が腹を押さえて座り込む満月の隣に肩を貸して移動させた皐月を座らせる。その行為は瀕死の恋人同士を近くに座らせる様な行動だが、それをされた2人はそんな事に気にしてられない程に痛みで表情を崩している。

「どうすればいい?」

「ノ口の強化薬の投与を」

そう言われた苔石は薬を出せと無言で此花と獅童に手を差し出すと取り敢えず持っていたと言う程度だが、4本の薬を貰うと2本づつ撃ち込む。

「肝臓やられているな」

それで良く生きていたなと思いつつ話し掛けると強化薬に鎮静剤の効果があるのか痛みが和らいだ顔で満月が話す。

「ええ。これが夜見だったら死んでますね」

肝臓は太い血管が集中した脆い臓器だ。

衝撃や斬撃で損傷すれば大出血を起こした故のショック症状、下手をすれば命に関わる部位だ。

それを刀で刺されたにも関わらず、此処まで自力移動した上で銃撃を加えられたのは一重に満月の存在が特異であるがこそだった。

「正直に言うとうちの能力が超再生でなければ死んでましたね」

ノ口の強化薬だが、効能は身体能力の強化に写シや八幡力に関わる精神力などの強化だ。しかし、時には副産物として特殊な能力を与える事があり、皐月は荒魂の生産と使役、満月は傷の回復速度の上昇で今回の怪我で有れば数分もすれば動けるくらいにはなり、腕が斬られても切れた腕を押し付けければ自然に繋がる。

「皮一枚で繋がった腕が完全に繋がっていた光景は一種のホラーでした」

漸く回復した皐月が腹を押さえながら言葉を吐く。

満月が衛生兵の役割を持つ人間の性なのか身体の具合を第一声に吐き出すと皐月が苔石と此花にジト目で見ながら首、特に腹が痛いと言えりと名指しを喰らった2人は揃って目を背ける。

頭へのダメージは然程なかった事に気付いた此花と苔石に皐月から背けた目で睨まれた獅童も2人から視線を逸らすと同時に満月に話し掛ける。

「明夜の診断は？」

空気を変えたい獅童の言葉にそこまで言及するつもりも皐月への戦闘行為も理由がわかっている満月は特に振り返したりせせずに答える。

「取り敢えず、首のダメージも怖いですが、礎々石と自分のリーンバックで喰らった肝臓へのダメージも怖いですね」

「リーンバックだったか」

満月の言葉に苔石が合点がいったと言う様に呟く。

リーンバックは暴徒鎮圧などに使われる銃弾で致死性の無い銃弾だが、その威力はベニヤ板を容易く凹ませるくらい威力を孕んでいる。そんな物がダメージを負った腹にクリーンヒットすればノックダウンくらいはするだろう。

「帰ったら2人共々精密検査ですな……」

突如として獅童の顔の横を通り過ぎ、苔石と此花の間を縫う様に通り過ぎる満月の銃剣の様に搭載されていた剣鉈が満月の手から投げられる。だが、満月の剣鉈は拵を外した莖長のサイズが約88cmもあればその威圧感は凄まじい。

そんな刀剣とも言える剣鉈を写シを張っていない状態で縫う様に投げられた3人は批判を満月に叫ぼうとした瞬間に人ならざる悲鳴を聞いて振り返る。

「文句もアレを倒してからです」

脚に刀を生やした溶岩の様な身体に赤銅色の甲殻を持った巨大な蛾が5人を片方に剣鉈が刺さった真つ赤に輝く黄色の複眼で見つめており、5人はそれぞれの武器を構える。

第二十一話 蛾の荒魂

親衛隊の5人の前に現れたのは6本の脚が刀の様な形状に変わった巨大な蛾の様な荒魂に御刀を向けながら真希が地面に座る夜見と明夜に戦えるかと目で問う。

「いけます」「やれます」

確かな足取りで立ち上がる夜見と新しい弾を筒型弾倉と箱型弾倉を入れながら立ち上がる明夜に真希は満足気に頷く。

「寿々花と礎々石はボクと来てくれ」

真希が走り出すとそれを追う様に寿々花と礎々石も御刀を構えながら走り出したと同時に荒魂は字にはするにも余りにも口にするにも難しい名状し難い鳴き声を上げながら羽を動かすと夜見が放っていたのと同じ荒魂を生み出して3人の行く手を阻もうとした瞬間。

バンツ、バンツと乾いた銃声が2回鳴り、何かの金具が動いた音が小さく鳴った直後にまたも同じ銃声が2回響き、3人を拒もうとした荒魂の群れは赤黒い液体へと変わり、伊豆の地面へと降り掛かった。

「制空権は取らせません」

蛾の大型荒魂は明夜が一番の脅威だと認識したのか駆け寄ろうとする3人には6本の足にある刀で受け持つと判断し、小型荒魂の群れを大量に作り上げると明夜の頭上から逐次投入で攻撃する。

銃に装填出来る銃弾には限りがある。群れを逐次投入させる事で再装填の隙を与えずに明夜を圧殺するつもりだった。

「明夜さん！」

道中で数個は斬り祓った真希達3人だが、相当数の群れを明夜に送り込ませてしま

う。それに対して明夜はベルトやポケットに携帯した弾丸を補充しながら睨みつけるがその頬は微笑みで歪んでいた。

「ご安心ください！」

滑り込むと同時に振った横振りで最初の群れを祓い、斬り上げで次の群れを祓う。

第一陣が夜見に祓われた事で作戦が崩れたが、大型荒魂は慌てずに夜見に幾つかの群れを差し向けて足止め、その間に明夜に群れを差し向けて撃破するつもりだった。

「おどれは何処を見とんじや!!」

目の前から礎々石が叫び声を上げながら跳び、自身の剣を突き出す。

大型荒魂は右足の一本で弾き、左足の一本で斬ろうとするがその一撃は礎々石の籠手

で防がれるが打ち落とす事には成功する。しかし、その隙を待っていたと背後から真希、斜め下方正面から寿々花が飛び掛かる。

「貰いましたよー!」「取った!」

命中を確信した2人だが、大型荒魂はまたも名状し難い鳴き声を上げると羽から荒魂の群れを作つて真希へ、正面の寿々花には振り切つていなかった4本の足の内の2本を交差する様に防ぎ、残りの2本で寿々花に対するカウンターを素早く狙う。

「掛かりましたわ」

普通の刀使、武宮なら貰つてしまう一撃だが、寿々花は防がれてカウンターを放たれると理解した瞬間に腕に八幡力を掛けて、跳び退く事で回避すると同時に真希が向けられた荒魂の群れごと大型荒魂の背中を斬つた。

「作戦は成功ですわね」

「いや、失敗だよ」

寿々花が御刀を構え直しながら呟いた言葉に真希は着地の衝撃を逃がし切り、曲げた膝を伸ばした真希が淡々と答える。

寿々花の立案した作戦はこうだ。

まず、寿々花が前方から接近する事で足での対処を強要させ、背後の真希には群れで対処させる。

荒魂の群れの動かし方は夜見と似通っている事を察した寿々花は背後からの奇襲から群れで防ぐ動くをする筈と踏んでいた。そして同時に群れで肉壁を作られても真希の神道無念流から放たれる渾身の一撃なら群れごと本体を斬れると確信もしていた。

事実として、真希は群れごと背中を斬り裂いたが主目的は一撃を加える事ではなく浮遊を行なっていると思われる羽を斬って地上戦に持ち込む事であり、真希も羽を狙って放った一撃は群れで機動がそ逸れた事で背中を斬り裂くだけで終わってしまう。

軌道が逸れたそれでも背中をバツサリと斬れたのは真希の実力に高さに加えて、荒魂が即座に逃げに徹して、旋回上昇で高度を上げたのを見るに荒魂の防御力の低さ故だろう。

「あの高さまで逃げられると大変ですわね」

そう呟いた寿々花の残響を掻き消すかの様に爆音が鳴り響いた。

離れた位置にいる真希と寿々花ですら耳を押さえたくなる様な爆音に近くに立っていた夜見は耳鳴りからか少し蹲っており、超至近距離で明夜が弾丸を装填する隙を作っていた礎々石は耳を抑えながら悶えており、肝心の明夜はイヤーマフを何処からか取り出しており無事だったがその姿勢は反動を押さえた言うよりも流した様な姿勢で片膝を立てて座っていた。

初めて聞く銃声を産んだ銃弾に真希が一体どんな銃弾なんだと思った瞬間にバシヤ

りと大量の液体が撒かれた音の後にドサリと重量物が落ちて来る音で我に帰ると片羽に大穴が開けられた大型荒魂が地面で起き上がろうと踉いていた。

「明夜、よくやった！」

「なんちゆう弾ぶつ放してくれとんじゃ!!」

礎々石は文句を言いつつも復活して悶える荒魂を斬る為に走り出すがその足取りは少し覚束なかった。犯人の明夜は真希と礎々石の言葉と共に内部のガス圧で排出された薬莖は地面に巻き散らかる荒魂の残骸でもある液体に触れるとジユワリと一瞬で蒸発させて湯気を僅かに生み出す。

「それがスピノサウルスですか」

地面に転がった黄金色の薬莖を見て夜見が零した。

発射された銃弾の名はスピノサウルス。ジンバブエのハンター達が求めた対猛獣用の護身用銃弾、テイラノサウルスを明夜の銃に単発手動装填が出来るギリギリのサイズに縮小しつつも破壊力維持の為に火薬の種類も考慮して大音量を撒き散らしが銃弾の速度を損なわない工夫を凝らし、弾丸も拡張型弾丸という特殊な弾丸を使った明夜の最高傑作の1発だ。

「もう弾切れですがね」

通常の銃弾を装填し直しながら夜見の漏らした言葉に答える明夜。

重量から来る素材の多さと火薬などの価格の問題で数発しか持つておらず、毎回持ち込む銃弾だがその役割は精神的な御守りの様な役割だ。だが、その威力は充分以上の一言で荒魂に再生の余地を与えない程の加害範囲を与える。

後方で次の行動の為に準備をする中で前衛を張る親衛隊3人が斬り掛かるが、大型荒魂も抵抗の為か足の刀を向ける。

関節がノ口で出来ている為か蛾の脚の関節からしたら無茶な方向に動かして迎撃を行う。

真つ先に接近した真希に上から突き刺す様な軌道で振るわれる。真希はその一撃をバックステップで凌ぐと同時に脆い関節を狙ってバックステップの際に引いた腕を突き出すように上へ斬撃を放つが、腕を素早く動かされた事で刀同士が当たってしまう。

逆サイド、つまり負傷した複眼の方からの接近で寿々花が迫る。大型荒魂もそれには気付いており、同じ様に突き技で迎撃に出る。

寿々花も相手の一撃を見極めて自分の御刀を沿わせる様に当てて、逸らそうとするが大型荒魂は脚を捻り、峰側から突き上げる様に刀を振って寿々花に一太刀浴びせようとする。

「甘いですわ」

大型荒魂に突き上げられる前に手首の駆動で相手の上を取り、巻き技で刀を下げさ

せ、突き上げる様な軌道でノ口で構成された関節部から切断する。

「集団戦に弱いな」

大型荒魂は一本に集中し過ぎた寿々花を確実に倒すつもりで一本を上方から、もう一本をノ口を集中させて関節部を伸ばし下方から攻撃する。この攻撃に振り切ったばかりで隙を潰せなかつた寿々花だが、遅れて到着した礎々石が横向きに回転を加えながら通り抜けざまに上に脚を切断、落下しながら下の脚を切断する。

「ウオラア!!」

そこで終わらせないのが苔石礎々石という人間だ。

左籠手の一部、鋏とソードブレイカーを兼任するパーツのみを残して肘側に格納した事でマンゴーシユ様な形状に変えて腹の部分に突き立てる。

そして鋏の部分を180度を開きながら飛び退く。

飛び退いたと同時に血の代わりに群れを祓った後に撒き散らされる液体が吹き出し、一帯を汚す。

腹の一撃で動きが鈍った隙に真希が脚を甲殻ごと断ち切った事で地面にいる間は不味いと判断したのか切れた腹と損傷した目から大量の群れを吹き出して、竜巻の様に動かす事で3人を弾き飛ばす。

「待ってましたよ」

弾き飛ばした事で同士討ちの心配が無くなった明夜が残った僅かの弾丸、それこそ種種など気にしない半自動装填による連続射撃により荒魂の群れは液体へと変わり、貫通力の高いフレシエットやスラグ弾が本体に風穴を開けて行く。

大型荒魂は名状しがたい叫び声を上げながら逃走を選択したのか身体を後回しに翼を再生させ、高高度に逃げようとした瞬間にスピノサウルスを吐き出した銃口から弾丸が吐き出され、羽が花の形を象った様に抉られた。

「RIPスラグ弾……相変わらず殺意が高いですね」

夜見が明夜本人から教えて貰った知識を言葉で漏らしながら、作戦の為に前に出る。

RIPスラグ弾。

Radi cally Invasive Projectile（劇的な侵襲力をもつ弾頭）の頭文字をとってつけられた特殊な弾丸を使ったスラグ弾だ。

これは流体の目標、人体やノコで形成された荒魂に命中するとホールソーに似た弾頭が開き、ホローポイント弾やダムダム弾の様に内部の加害範囲を増やし、そして中央の弾頭を固定するコアの弾頭が貫通力を産む弾丸となる特殊な弾薬だ。

元々は流体に当たれば非貫通性の高い弾、ある程度の硬度を持った目標には貫通性の高い弾という目的で作られた弾で小型の荒魂相手でも貫通などしないが今回の大型荒魂の羽が薄かった故に千切れてしまった。

「的撃ちですね」

落下する大型荒魂に対してRIPスラグ弾を連射。その悉くが荒魂の体内へ侵入を果たし、まずはホールソーに似た弾頭が体内を丸くくり抜いた後に弾頭が花を散らす様に飛び回って傷を広げて、コアとなる弾丸が更に奥深くへ傷を生み出して行く。

大型荒魂は羽への攻撃はされていなくても閉わらず、飛ぶ力を失ったのか地面に着地。穿たれた傷からは汚水とも言える液体が留めなく垂れ流される。

命中の度に上げていた名状しがたき鳴き声も今は弱々しく鳴き、文字通りの虫の息。2 mから3 m級を超える荒魂の討伐は難しい分類に入るが武器の殺傷力が強ければ以外と楽に討伐出来る事もある。

「トドメは任せます」

RIP。それはRadically Invasive Projectileの頭文字だが、その殺傷力を考えれば墓標などに刻まれるRest In Peaceを彷彿とさせる。そして明夜の言葉を聞き、夜見が荒魂の顔面に突き刺す様な一撃を加え、突き刺さった御刀を引かずに、片手で振って頭から抜いた事で傷は広がり、空いた左腕で顔に刺さったままの明夜の剣鉈を引き抜く。

「終わりです」

叩きつける様に斜めに振られた一撃が頭を砕け、斬れるという特殊な傷をつけながら

斜めに断ち切れ、荒魂は液体へと変わる。

その死骸とも言える液体を見ながら礎々石が呟く。

「ただの荒魂じゃないな……夜見が召喚した奴でもないだろう？」

通常の荒魂ならば、討伐後はマグマの様な色合いのノロと禍神の御守りや対荒魂銃弾の原料となる外骨格が残るが今回は外骨格はおろかノロさえも残っていない。

「彼女の血で出来た荒魂です」

フラリと倒れる夜見の身体を背中から支える明夜。夜見の血で出来た荒魂と言う事は今の夜見に流れる血に量も少なくなっている。強化薬により造血能力は強化されることがそれでも軽い貧血を起こした様だった。

そんな2人を見た礎々石としては新しい疑問が生まれる。

本人も自傷行動や敵からの攻撃など関係無く負傷により出血した血を荒魂として使用する能力が夜見にある事を知っている。だが、m級の荒魂は召喚出来ない記憶があり、今回の荒魂はそのm級の荒魂だった。

「そう言えば夜見が撃たれた時に何かが飛び出ていたな」

真希だけが確認出来ていた内容だが、夜見に対して明夜がリンバック弾による鎮圧をした際に夜見の身体から何かが異物が入った故に逃げ出そうとした影があった。

その影が今回の荒魂ならば納得が行く真希だが腑に落ちない事もあった。

それは夜見の肝臓を撃ったからと言って身体から荒魂が飛び出すのかと言う内容だった。

それを真希が口に出すと寿々花は明夜が自分達の界限では奇天烈な弾丸を多く作る人物であり、何か目的があつて作った弾丸を使ったのだろうと予想し、どうなのかと問い質せば明夜も勿論だと言つて弾の解説を始める。

「あれは100パーセント和鋼のみを使つて作つたりーンバック弾です。りーンバック故に殺傷力こそ有りませんが荒魂のスペクトラム化の解除などの利点があります」

「つまりはノロの強化薬を入れ過ぎた場合に無力化出来るか？」

「そう言う訳です。何かあつた時の抑止力として作成した銃弾ですが……」

そう言つた瞬間に鳩尾を押さえながら倒れそうになつたが背中に夜見を背負つていると言う事実が明夜を振るい立たせて倒れるのを直前で耐えるが、それを心配した真希が夜見を、寿々花が明夜の肩を持つと礎々石が鳩尾までシャツを捲り上げる。

目の前で男性の胸元まで捲り上げられた光景を見た寿々花は顔を赤くしながら視線を背ける。だが、礎々石の視界には鳩尾の部分を青紫に変えた明夜の身体だった。

「自分に撃つたな」

「ええ。自分も危なかつたので」

刺される以前に打ち込んだ強化薬により夜見同様の暴走症状を自覚した明夜は暴走

を精神力で押さえながら自分にゼロ距離射撃で和鋼のリーンバック弾を発砲した事で抑え込む事に成功した。しかし、その代償に内出血をしてしまった。無論ながら止血は自然治癒で治ってこそいるが一度出た血が逆再生の如く戻る訳でないので青紫に変色してしまった。

そして写シを解いた事で今までの生身で受けた痛覚を感じた事で倒れかけた。強化薬は傷を治せても痛覚を止める鎮痛剤の効果は低いのだ。

「さっきみたいな奴は？」

お前にも出ただろうと服を戻しながら問う礎々石だが、自分は出なかったと明夜は無言で首を振るとある事を思い出した。

「叛逆者の彼等は何処に？」

伊豆山中に『あ』と魔抜けた声が幾つも響いた。

第二十二話 伊豆から帰って

「何が用事だが？」

刀剣管理局の中でも秘密が多い部屋の1つである特別医務室の一室にやけに響く男性の声。

その声は医療機器が吐き出す無機質で規則的な音しかないこの空間では酷く異質であった。

声の主が首を回せ左を見ると顔の半分を隠す様に包帯を巻いた女性が首を右に向けていた。

伊豆での作戦を終えた直後にこの医務室へと叩き込まれた上で検査を終えた明夜と夜見だ。

「なにが懐がしいなって」

その言葉に男性側は何が懐かしいのかわからず、なんと答えようかと思案する為に顔を天井に向けてると女性が何を言いたいのか理解した。

「あの時も夜見と一緒にだった覚えが」

目を瞑ってある日の事を思い出す明夜。それは中等部の出来事であり今の2人から

して見れば愚かな時間とも言えるだろう時間。だが、それが有るからこそ今の自分達がいる。

2人は同じ秋田県生まれで、夜見の祖父母の実家がある集落で僅か1歳にして天涯孤独となった明夜が夜見の実家にいた時からの付き合いで、周りも兄妹、姉弟扱いしなかつた為に幼馴染とも言える関係を築いた面白い例だった。

「鎌府さ入学」

2人は経緯こそ違うが刀使と武宮と言う似た存在に興味を持つて秋田から鎌倉の地に訪れ、鎌府へと揃って入学した。それが2人を引き裂く始まりであった。

「アレは誇らしかつたんだども、同時さ悔しくも恨みもした」

夜見も同じ事を思い出していると思つたのか独り言の様に呟く。

鎌府へと入学した2人は御刀、ないしは対荒魂が行える武器を持つておらず、他の同じ境遇の生徒と共に鎌府管理の鎌府預かりの御刀から適合する御刀との適合検査を受ける事から始まつた。

そして御刀である水神切兼光に唯一、高い適合を示したのか明夜だけだった事で周りは騒然とした。

珠鋼造りの御刀は基本は女性にのみ適合する。だが、例外と言う物は何事にも存在するのかがごく稀に男性でも適合者が出て来る場合がある。

これもまた2人の仲に亀裂を入れる1つであり、更なる不幸は鎌府の寮は2人1組での使用なのだが、その部屋割りの決め方は同じ程度の適性と実力の者同士。性別は一切の考慮から外している事だ。

これは実力の近い者同士を一緒にする事で競争心を生んで更に優秀な刀使・武宮の育成を図ると言う者なのだが、明夜ほど剣術が出来ないが適合が高い者はおらず、夜見ほど剣術に優れるが適正がない者はおらず、部屋を一緒にする事になる。

此処で普通ならば、明夜は剣術修行、夜見は御刀探しののだが、雪那の強行により明夜は早々に現場に赴く事になった事で夜見との明確な差が出来てしまう。

片方は鎌府学院、片方は現場で生活リズムがガラリと変わり2人は部屋ですら顔を合わせる事は稀になり、互いが互いに負い目を感じた事で徐々に疎遠になっていた。

「今の関係始まったのは高津学長の言葉さ領いでがらでした」

適合する御刀が無かった夜見に雪那はノ口の強化薬投与を進める。それこそ本人以外が聞けば夜見の足元や願望を知った上で刺激を与えて領かせる誘導尋問にも似た下衆な行為にも見えた。

そんな雪那の甘言に悩むと願望を持つ夜見は領いた。

そして明夜も中等部3年に上がってもなお上達が自覚出来ない己の剣術の未熟さに悩みや怒気を持っており、寝る間を惜しんで剣術修行をしていた。

誰にも見られない様に出撃の度に増える身体中の怪我を隠すと同時に痛み止めを騙し騙しながら、たった1人で夜の山の中で修行に明け暮れていた。

「あの頃の無知な自分は今でももしよしいんだども、無知だったがら今がある」

そう言つて顔を夜見に向ける明夜。

スペクトラムファインダーに荒魂の反応を見つけた明夜はその場で即座に荒魂の出現地点へと向かう。その場所では蜘蛛型の大型荒魂が出現していた。

自分の腕の上達を目指し、この年頃の男子故の思考か無謀にも大型荒魂に1人で挑んだ明夜。当然ながら結果は苦戦どころか明確な死のイメージが常に脳裏を掠める戦いを強いられた。そんな明夜が大型荒魂の後ろに迅移で回つたと同時に大型荒魂の前の小型の荒魂の群れが襲つた。

「それで視力の殆どごとく失つた」

同時の明夜にはわからないがそれは夜見の能力で生み出された荒魂の群れだった。明夜は夜見の身体から荒魂が現れた光景を見た事で一瞬だけパニックに陥り行動を止めてしまい、その隙に大型荒魂が無茶な軌道で脚を振るつて明夜の写シを剥がされた上で追撃の脚が左目を抉り、夜見の荒魂の流れ弾が右目に損傷を与えた。

「明夜の悲鳴どごとく聞いた私は、荒魂の制御どごとく失つて自分も深く傷付けだんでしたね」

同時は制御の習熟期間だった夜見は荒魂を祓つたが制御を失つた荒魂に身体中を斬

られた事と召喚に血液を代償とする事も相まつて貧血で倒れた。

その後は2人とも今いる部屋に担ぎ込まれる。そしてそれが仲直りのキツカケにもなった。同時に夜見の贖罪の始まりだった。

「あの日の此処で、明夜がら水神切兼光にご譲られだ」

目の負傷を調べた結果が、左目の消失に右目の大幅な視力低下により日常生活すら難しいレベルまで下がってしい、明夜は当然ながら武宮を諦めなければならなかった。

その事実を医師から突き付けられた明夜は不気味なただ落ち着き払って、頷くと雪那から大型荒魂と1人で交戦した上で引退を迫られる程の負傷しながらも撃破。その功績から名誉除隊となった事を告げられた。

その結果に明夜は夜見に水神切兼光の適性検査を受けさせて欲しいと願い出て、それが承認された。夜見も強化薬の投与のおかげか、或いは前の持ち主である明夜の願いを水神切兼光が受け取ったのか夜見は水神切兼光を使って写シを張る事が出来た。

銘付きの御刀、それも水神切兼光。認められて嬉しいと思うだろうが、夜見には喜びは無かった。

何故なら刀使や武宮に取って自分の武器と言うのはとても大切な物。それを譲られた経緯が経緯故に奪った様な物で、手渡しされたことが夜見の心の内を余計に占めた感情は罪悪感だった。

「夜見の努力は知ってました」

それでも託された御刀に恥じぬ様にと剣に、荒魂の制御術を必死に高めた故に親衛隊入りを果たした。それでも対荒魂専門故に対人戦での実力は低い。荒魂戦ならば親衛隊の名に恥じない実力を有していた。

「それは私もです」

そして夜見も明夜が辛うじて残った右目の視力を特殊な電子眼鏡で補いながら武宮科に在籍していた経験を活かすために衛生科へと転向すると同時に半分は夜見専属の衛生科生徒として過ごしながら現在の銃を使える武宮の為の勉強を並行して行うと言うかなりの無茶をしていた。

「それで私は貴方に「気にしねあで下さい。感謝してらんだ」

銃器の所持や使用の免許を手に入れた明夜だが、武宮になるには視力が邪魔だった。電子眼鏡も電力が切れれば使えなくなると言う弱点もあり、そんな不安定な人間を武宮として従事させるには問題があった。

右目は特殊な義眼で直せるがその手術はロシアで多額の金が必要で出来なかった。雪那は新しい被験体としての思惑を持って、夜見は明夜の目を治したいと言う一心で強化薬を目薬として処方する事を勧めた。

結果として明夜の視力は充分以上に復活し、銃器を扱う武宮として明夜は振り返り

た。これが明夜の返し切れない恩赦の始まりだった。しかし、夜見は明夜に対して強い負い目を背負ってしまった。

「んだども、貴方の目どい……」

「この左目のどいどいが？」

明夜が右目を閉じて夜見を見つめる。

その目は任務中の緑では無く、黒目の部分が赤銅色に輝き、白目の部分が黄色の目だった。

それを見た夜見が目を伏せる。

明夜の人ならざる左目。その正体は失った左目のあつた場所にスペクトラム化した残った視神経の一部に寄生した寄生性眼球型荒魂だった。そして右目も常に赤銅色に輝く目になってしまった。

明夜は強化薬との適合性が高かったのか左目が再生すると同時に荒魂化してしまつたのだ。普段をそれを隠す為にファクションと言うカバーストーリーを作つた上で黒目を緑に、白目を青紫にしたカラーコンタクトを、右目には黒目を緑にしただけのカラーコンタクトを掛けている。

「このまなぐ、意外にも役さ立ってらんだよ」

そう言って両目を細めて笑う明夜。

明夜の左目だが、意外にもノ口をそのまま利用したスペクトラム計と似た様な事が出来る上に視覚情報で位置を教えてくれるので狙撃にも使えるなど様々な恩恵があった。

そして夜見が何か言おうとした時に明夜が静かにと指を唇の前に立てた事でそれが遮られ、明夜は手慣れた手つきで素早くコンタクトを身に付けた瞬間にドアが開かれる。

「明夜様!!」

そう言つて扉を開け放つて現れたのは肩に短刀を携え、翡翠を思わせる薄い緑色の長い髪が特徴的で鎌府の制服に身を包んだ美少女、龍石清妃だ。

その身体付きは正面から見れば、細過ぎないが肉付きが良い訳でも無いと言う体形だ。しかしに側面から見れば12歳の中等部1年とは思えない程にその双丘は豊かだ。

「貴女ですか」

夜見の言葉に臯月の存在に気付いて、物腰柔らかく夜の挨拶を投げる。

入学当初から性格面と勉学面で雪那に目をつけられた事が原因で機密計画に関わつた事で孤独な中学デビューを果たしてしまった彼女だが、明夜と紆余曲折があり、今では自称で満月明夜の助手を名乗っている程に彼を陶醉し、心酔し、傾倒している数少ない人物だ。

それこそ珠鋼造りの短刀だった武器が全くの別物に変え、武宮となり、その武器が武器故に普段から持ち歩く事が多い刀使や武宮と違い、必要で無い時はロツカーに入れっぱなしと言う珍しいタイプだ。

「すみません、夜見様。夜見様も同室だと教える前に走り出してしまい……」

申し訳無さそうに出来てきたのはクール系イケメンの黒髪を短く纏め、濃い紫色の瞳が特徴の男子デザイナーの鎌府制服を着込んだ上で腰に脇差と大型拳銃を下げた生徒、びとくなるみ尾藤成宮だった。

彼も清妃と同じ理由で鎌府の機密計画に関わった武宮であり、現在では夜見の助手として正式に配属されているが、夜見との付き合いは夜見が親衛隊入りを果たした上で紫の護衛を務める様になるとその補佐を能力と容姿を理由に清妃と共にこなすようになってからだ。

明夜とは紫の暗殺を試みた海外の殺し屋との戦闘で銃器に対する考え方や姿勢、使用する上での練習などで関わり合う様になる。

余談だが、その殺し屋は成宮を目印に壁ごとテイラノサウルスでぶち抜くと言う荒技で明夜が両脚が太腿から抉り千切れた事による半殺し（反動制御が仕切れずに極至近弾）にしている。

「何かありましたか？」

「検査結果が出ましたので、お持ちしました」

そう言つて両腕で検査結果を渡す清妃から検査結果を記した書類を受け取つて中身を読む。

「数週間近くは入院ですかね？」

「だと思ひます。肝臓ですから」

多少の知識がある清妃も頷く。医者としては数週間も入院しなくても良いが出来れば長く様子見をして欲しい。と言う思ひに加えてもう一つ。

「まあ、一週間で動けるでしょう」

「「お医者様の言う事は聞いてください」」

病室を抜け出し始める時間を伸ばしたいと言う思ひの方が大きかった。

第二十三話 伊豆での後始末

「報告を纏めると第五席と第六席の負傷による生じた隙を突かれて叛逆者は逃走、二席の救助により完全に見失ったと」

親衛隊第一席こと友衛童子がそう言つて、顔に手をやる仕草を見せるとそれを見た親衛隊の3人、真希・寿々花・礎々石は怒つていふと思つたのかビクリと肩を震わせる。

親衛隊の中で滅多に怒らないが怒つた時が一番怖いのは童子だ。それこそ怒気ではなく殺気をぶつけて来たと錯覚する程だ。

童子に対して若干ながら震える3人は叛逆者達を完全に見失つた事で撤退。震える3人は童子に報告の為に司令室へと赴き、強化薬の事を羽島・五條両学長が在席中の為に省きながら報告する。

精密検査の為に高度医務室へと担ぎ込まれた明夜と夜見に礎々石が恨み言を言おうとしたが、それよりも先に童子が言葉を漏らした。

「私も行くべきだったわ」

まさかの言葉に真希が若干ながら、それこそ人と多く接する学長の2人でなければ気付けない程に小さな震えを交えた声で怒つていないのか問うと童子は顔を隠していた

手を退かすとそこには微笑みを浮かべていた。

怒っているから微笑を浮かべているのでは無い、それはどこか慈しむ様な、労を労う様な柔らかく、優しい雰囲気から出る微笑だった。

「現場に居なかつた私がとやかく言う資格はないでしょ？ あなた達はその時に最善だとした行為を判断して、即座に行動を起こした」

「簡単そうだけど実際は凄く難しい事なのだ」と逆に褒める童子に待ったを掛ける声が響く。

「それでも叛逆者の全員を逃しましたわ」

お叱りを受けるべきだと言う寿々花に童子は首を振って否定する。

「仲間を連れて、誰一人と失わずに生還する。これが当然だけど、一番難しい。あなた達をその一番難しい任務をやり遂げた」

だから怒る点は何もない。そう言つて全員の顔を見渡す童子だが、そこに焦りはない。

向こうの主目的はあくまでも自分達の主であり折神紫の首。であるならば、補足出来なくても問題は無い。

「何かお考えがある様に見えますけど？」

ホツと息を吐く2人を置いて寿々花が童子に声を掛けると童子は笑つて作戦がある

訳じゃないけどと吐いてから、手元の緩くなった緑茶で喉を潤して話し始める。

「寿々花はジェリオ・ドゥーエの爆撃機用兵理論は知っているかな？」

「？ 存じ上げませんわね。ですが、名前を聞けば中身は何となくわかりますわ」

へえ、と短く先を促す童子に髪を掻き分けた寿々花が自分の予想を語る。

「爆撃機と言う事は空軍ですわ。どちらかといえば陸軍的な私達には関係無いと思いませんけど、貴方の事ですわ。何かあると言う事ですわ」

「前半も後半も正解。戦略爆撃に関する理論なんですけど、内容は纏めると簡単。攻撃側は何時、何処を攻撃するか主導権を握れるから防御側は不利な状況に立たされざるを得なくなる」

童子の言葉で言う攻撃側は舞草。防御側は親衛隊だ。それを理解した寿々花は直ぐに探して攻撃を仕掛けるべきだと言おうとするが童子が笑顔で手を向けてそれを止める。

「面白いのは戦争と違って攻撃目標が少ない事。そして重要なのは何処を攻撃されるのか選択肢が多い事」

童子の言葉に首を傾げる寿々花に童子は答える。

「向こうの攻撃目標は紫様の一点のみ。そして何処を攻撃されるかわかっているなら防御側は有利になれる」

舞草は既に『何処を何時叩くか自分達が決められる』と言う優位を無くし、『何時攻撃出来るか決められる』と言う優位と言うには難しい状況だ。

そして何処を攻撃されるかわかっている自分達は罫を張って、待ち構えて置けば向こうから飛び込んで来るので慌てる必要は無いと言う話だった。

それを話しながら童子は拳を握る。

向こうから殴られ、逃げられ続けているのは、今度がこつちから殴らなければ童子自身も腹の虫が治らないというものである。

「まあ、先制攻撃出来る利点は捨てがたいから情報収集はするけどね」

そう言つて蠱惑的な笑みを浮かべる童子に寿々花は見惚れる。

銀に肌色が混じつた長い髪に顔の輪郭も男性の様な角張つた物と言うよりも女性的な丸い顔立ちに近い中性的な見た目、そして笑う事が多い故に丸い目付きと隠しきれない優しさの雰囲気は真希とは違うベクトルでイケメンと言つて良く、寿々花の様な女性を魅了するには充分だった。

言っている事は恐ろしいの一言を吐き捨てた童子の耳に扉が開く音が聴こえて視線を向けると薄紫が混じつた黒の長髪に琥珀色の瞳の美人が現れる。その胸は豊満であつた。

「紫様」

童子の声に反応して他の親衛隊メンバーも紫の存在に気付いて、佇まいを正し、礎々石以外は右手を左胸の上方に添えながら僅かに頭を下げ、礎々石は肩幅を超える程度まで足を開いてから両膝に両手を付けて頭を下げる。

1人だけ違う作法をしていると浮いて見えるが、この中でそれを指摘するものは居ない。と言うのも親衛隊ではお辞儀などの作法を一律に定めていない。

これは剣術とも深く精通する刀使と刀宮（武宮の前身的存在）の時代からの伝統でもあり、流派が違えば当然ながら作法にも違いがある。それを1つの物に限定してしまいと違う作法を使う者からの反感を買いかねない。

故に現在でも生まれや流派からそれぞれの作法を尊重している。のだが、流石に時代が進めば理解者も増減する為に放送されるなどの公的な場では童子や真希、寿々花の礼を基本としている。

暫くは礼の体勢だった童子だが、礼を解くと紫の横まで移動して真希と寿々花、礎々石の3人から聞いた報告を頭の中で整理しながら、両学長に聞かれても良い言葉を選んで報告を上げる。

「成る程な。2人の容体は？」

「第三席、お願いします」

童子が聞いていない事の為にこの中で一番そう言った情報が話せる人物、寿々花を童

子は指定する。

「第五席が片目の損傷に合わせて肝臓部への数回に渡る強打により数日から一週間の検査入院、第六席は重傷により一週間から三週間程の検査入院を予定しておりますが、お医者様によると場合によっては伸びるとのことです。2人の命に別状はありません」
「そうか。まあ、2人が無事だったのは幸いだった」

特に怒る様子も無く告げた紫の様子に親衛隊の4人は密かに安堵の息を吐く。既に童子が叛逆者達を全て取り逃がした事の報告をしており、それを理由にお叱りを受けると思っていたからだ。

流石に叱れると覚悟していても叱られたくないのが人間の心情と言うものだ。

「2人にはちゃんと養生する様に伝える。特に、第六席、には、だ」

第六席を強調する紫。

第六席、つまりは明夜だが、親衛隊入り前は結構な無茶や強行軍を単独で敢行する人間で親衛隊入りしてからもその成りこそ潜めているが万が一でもこの瞬間に舞草が攻めて来た場合は迷う事なく出撃する事は紫には目に見えていた。

「美濃関学院、平城学館の学長は現時刻をもつてこの特別任務から解任する。それぞれ自分の職務に戻れ」

「はあ」「はい」

両学長が去ろうとしたのと同時に紫は童子に目を向ける。

「それと第一席は鎌府学長をよく止めてくれた」

「勿体ないお言葉です」

この作戦中、何かと押し寄せて来た鎌府の学長を紫から委任と言う形でも全最高指揮官の肩書きを背負った童子が自ら対処し下手に暴れまわられない様に目を付け、下手に上がれせないように裏で表で休む間もなく動いていた。

紫は横目で2人の学長が部屋から出て行くと声のトーンを変えて呟くように吐いた。

「それと第一席、お前の言う通りだ」

童子はどう言う事だと身動きをせずに推理している間に紫が答え合わせだと言わんばかりに続ける。

「二羽の鳥はまだ此方の掌の上にある。案内して貰おうではないか」

刀剣管理局客人用ヘリポートでは二機のヘリコプターが待機しており、その内の一機、平城学館の校章が底面に描かれた機体がヘリポートの上でローターを回していた。

「ほな、江麻ちゃん。あんま無理せんといてな」

意味深げに平城学館学長のいろはが送った言葉に美濃関学院学長の江麻は不思議そ

うな顔をしつつも離陸したヘリコプターを見送ると自分の学院の生徒2人、舞衣と彗士を連れて歩き始める。

江麻にはまだやるべき事が此処に残っている為に未だに美濃関学院には帰れず、かと言つて生徒の2人も時間が時間の為に可奈美と勝武居の追跡が出来なくなつた状況になつても帰るに帰れない為に此処に残る事になる。

「待つて、誰か来る」

折神家の屋敷前の道を歩く美濃関の三人だが、何かに彗士が気付くと2人の前に出ると掌を突き出して、止まる様に指示する。

景観を考慮しているのか灯籠しかないこの道は明かりと明かりの間に暗闇があり、不審者が待ち伏せするにはうつつつけの環境だ。

彗士は何があつても行動できるように自分の御刀の柄を掴んで腰を下げる抜刀術の構えで待ち受ける。そして暗がりから出て来たのは此処数日の間に見知ってしまった顔とも言ふべき鎌府学長の高津雪那と糸見津佳沙だった。

「貴様……」

抜刀術の構えを見せる彗士を見た雪那が不快感を隠さずに告げた言葉に彗士は無言で御刀を背中に戻すと無言で頭を下げ、江麻の後ろに立つ舞衣の隣に立つ。

何も言うつもりは無い。そんな態度を示す彗士を見た雪那は彼の教育者たる江麻に

何か言おうと思うがそれよりもやるべき事があるとして何も言わずに通り過ぎようとする。

〔雪那……〕

通り過ぎる寸前に江麻が内心で呼び掛ける。それは何処か変わってしまった戦友を想う気持ちが届められていた。

すれ違う、もしくは完全に隔てられてしまった、千切れかけの古い繋がりを抱く大人達と違い、新しい繋がりを深めようとする子供達が同時に存在した。

〔津佳沙くん〕

通り過ぎてから呼ばれた津佳沙が振り返る。その声と顔には声を掛けられた事に対する疑問で埋められていた。

呼び止めた舞衣は双子の沙耶香と同様に別室の謹慎部屋に入れられていた津佳沙が出られた事に良かったねと告げれば、津佳沙はこの時の受け答え方がわからないのかうんと短く答える。

〔沙耶香はまだなのか？〕

〔うん。でも、直ぐに出られると思う〕

〔そうか……明日にはお姉ちゃん、舞衣も自分も帰るから。一言言っておきたかったんだが……〕

「私から伝えておく。それとクッキー、美味しかった」

そう言う津佳沙に舞衣と隼士はお礼とまた機会があればご馳走すると言って、先を歩いていった江麻との距離が空いている事に気付いて去ろうとすると津佳沙が舞衣の袖を遠慮げに掴む。

掴まれた舞衣は振り返ると津佳沙が携帯を取り出して、何か言おうとしているのに気付くと舞衣は何も言わずに近距離限定の通信で自分の連絡先を送った瞬間に津佳沙は雪那から怒鳴る様な呼び掛けをされて小走りで去ってしまう。

「相変わらずね、雪那」

雪那の様子を見て江麻が呟いた瞬間に携帯から着信が届き、その着信者の名前を見て珍しい者を見た様な表情を浮かべる。

「貴方から電話なんて珍しいじゃない」

「あ、江麻先輩ですか！ 覚えてますか？」

軽い声に江麻は嫌な事を思い出した様な顔をする。

「貴方も覚えているわ。ついでにこう言う時の嫌な思い出もね？」

「そうですか。20年前の貸しは覚えてますよね？ 今、その貸しを返して下さい」

「それでいい思い出なんて一つもないんだけど？」

そう言う江麻だが、その声には了承の意を含ませており、電話の主は了承の意をしつ

かりと汲み取っていた。

この電話が物語を再び大きく動かす。

第二十四話 青みを帯びた世界に消えて

リクライニングシート横たわった津佳沙。彼の視界には眩しい程の照明が埋め尽くす。

「津佳沙。私が見出した最高の器の一つ……これは紫様より直々に鎌府が」

懐から一本の試験管を雪那が取り出す。中身はノ口に似た輝きを放ち液体になにかの浮遊物が浮かんでいた。

「いや……この私が命じられた大いなる研究の成果」

雪那の声に反応したかのように内容物が生き物の様に試験管の中を動き回る。

不気味にも程がある物質をどうするつもりなのか、試験管に別のパーツを取り付ける雪那。

「この力を満たした時、貴方と言う器は完成するの」

試験管の先を首元に近付ける。

「何も考えず、感じる事もない」

首筋の何処に刺そうか狙いを定めるかの様に試験管の先が動く。

「ただ、紫様に仇為すものを討つだけの武宮として」

そのままでは刺せないと判断したのか津佳沙の顎を掴むと横を向かせて首を晒させる。

津佳沙はいつも通りと言うべきだろうか。特に抵抗を見せる事無くされるがまま。そんな反応に満足したのか雪那が頬を釣り上げながら首元に針を刺して中身を津佳沙の体内に入れる。

「あ……ああ……」

身体に入った物体は即座にその仕事を開始する。血液を介して脳へと侵入した試験管の中身に入っていた物体は脳を作り変えるべく、内側から脳にへばりつき、作用を開始する。

その過程で津佳沙の脳内に納められた情報の1つが瞬く間に消えた。そしてその情報が消えたのを津佳沙が自覚した。

それは先程の舞衣との会話の際に見た舞衣の優しい笑顔とも言える顔だった。それを辛うじて思い出せた瞬間に津佳沙はもう忘れたく無いと強く願った。

そしてその願いは打ち込まれた物体に対する強い拒絶反応となり、津佳沙の中から追い出そうとするが、当然の権利だと言わんばかりに打ち込まれた物体も抵抗した事で頭が爆発するとも言うべき激痛を感じた津佳沙が横たわる椅子の上で暴れる。

「嫌だ………忘れた………ない………うし………く………い」

打ち込まれた物体が何であるか、本能で悟った津佳沙は自分の武器を条件反射で引く手繰る様に掴むと即座に窓ガラスを割って、青みを帯びた黒い空へとその身を投げ出して何処かへ飛び去って行く。

その背中には誰もいない場所に自らをいち早く隔離しようとする様だった。

親衛隊3名の奇襲を受けるも親衛隊の目が仲間である皐月に向いた事で一行は密かに離脱。カルロが予め呼んでいた潜水艦に海上から乗り移り、紺碧の海に潜行する事で目視での監視を掻い潜った。

無論ながら海上保安庁と海上自衛隊の警戒網を警戒した帝人だが、その心配は無いとカルロが自信ありげに頷いていたので、一旦ではあるが帝人は警戒を解いていた。

「なあ、くくは何処に？」

とある金属で固められた一室に武宮が互いに互いの身体に包帯を巻き合っている中で帝人が居るだろう生物が居ない事に気付いた。

「この中なのは確実だろうか？」

勝武居が首を傾げる。

潜水艦と言う限定的空間に加えてそれなり以上の深度で航行している潜水艦から出るのは超小型荒魂であるくくー匹では難しい。

「士官用の部屋に固まっていたよな？ 刀使」

巧が何かに気付いた瞬間に、カルロと呟いた本人である巧が走り出した。

「あんの！ チチノポリトカゲ!!」

それदनにかを察した勝武居も走り出し、帝人もその数歩後ろを早歩きで追い掛ける。

先頭を走りカルロがくくの奴は居るかトアを蹴飛ばす様に開けた瞬間……

「Ah……」

カルロの目の前に広がった光景は体に包帯を巻く為に上半身に一糸も纏わぬエレンだった。

当然ながらその豊かな火山の火口部もその付近も視認してしまい、しかも言い逃れは出来ない現行犯である。

頼みの綱だったククだが、可奈美の足に手慣れた様子で口と尻尾を巧みに操って包帯を引つ張っていた。

カルロは最後の頼みと顔を向けるが狭い潜水艦の廊下に長身の巧は屈まなければ部屋の中の確認すらもままならず、勝武居と帝人は巧が防波堤となりカルロには見えてお

らず、当然ながら2人にも中の光景は見えない。

「A h……A h……A h」

刀使達も突然の事でフリーズ。1番の被害者であるエレンですら、A hとカル口同様に繰り返すが取り敢えずと言うべきかシャツだけでも羽織って火山の隠蔽を図る。

「……カ」

そして取りあえずの隠蔽をした辺りで脳に余裕が出来たのか状況を把握してエレンが行動を起こした。

「こんの……バアカア……！！」

左手で胸元を押さえながらも見事に全体重と全可動域の勢いを乗せた右ストレートがカル口の顔面に直撃させた事で殴り飛ばす。

殴り飛ばされたカル口を僅かな視界で捉えた勝武居と帝人は直ぐに撤退、巧も足音で気付いたのか直ぐに撤退する。

3人は呻き声すら上げられない様なリンチをエレンと姫和と薫から喰らうカル口を捨てて行つた。

「もうちよつと雰囲気とかタイミングとか……」

一通り（カルロがボロ雑巾ないしモザイク加工を行わねばならない程度）はボコった3人が手当てを再開、体に何周も包帯を巻いたエレンがカルロの身体を爪先で軽く小突きながらぶつぶつと小声のマシガントークで訴えるが、当の本人は白目を向いて倒れるだけである。

「ようこそ、ロサンゼルス級原子力潜水艦、ノーチラス号へ。君達の乗艦を歓迎しよう……What is it, this?」

一応の手当てを終えた武宮が乗艦の挨拶の為に司令室へと赴くと白い服を着た如何にも偉い人ですという雰囲気を発する男が声を掛けてくるが、カルロが倒れそれに対して特に行動を起こさない他メンバーに目を点にして固まっている。

「えつと……艦長だとは思いますが、何方でしょうか？」

勝武居の言葉に我に帰った男が口を開いた。

「おつと、sorry sorry。私はレオス・古深川。アメリカ海軍所属の大佐で、そのカルロのfatherだ」

その言葉に勝武居は床に膝をついて頭を垂れ、エレンは『その言葉は真実ですよ』と笑顔で頷く。だが、この中で唯一、帝人だけが気付いた。この男から漂う尋常でない程の硝煙の匂いに。

「貴方はまさか……」

その言葉にレオスが被せる。

「47だ。色々しているからな……それは置いておいて、ファインマンが呼んでいる。カルロを置いて行って構わない。衛生兵に預けるからな」

カルロは父に引き摺られて医務室へと連行され、他のメンバーはファインマンと呼ばれる人物がいるであろう研究室へと向かい、中に一言だけ断りを入れながら入る。

「ハハハ……私一人の研究室が中々賑やかだね！」

そう言いながら機材の物陰から顔を出したのは白髪に青い目が特徴的な一人の老人だった。しかし、外人故かよく動くタイプなのか老人にありそうな動けなさそうな雰囲気を感じない。それどころか第一線で動けるだけの身体能力は維持していそうな印象を受ける。

老人は一同の顔を見渡してから身体を完全に物陰から出させる。その身体には軽いシャツが身に付けられていた。

「お会いできて光栄だよ、たった4人の反逆者諸君。まさに今日と言う日は完璧になった」

そう言って笑いながら近付き、握手を求める男性にエレンと薫、巧以外は、彼が一体誰なのかと分からずにポカンとしている。

それでも礼を欠く訳には行かないと勝武居が彼の手を握る

「我々を拾って頂き感謝します」

「いやいや、それは艦長に言うべき言葉だよ。私はついて来ただけに過ぎないからね。それにこちらとしても、三河武宮の力を借りることが出来て、実に嬉しいよ!」

三河武宮を知っている事に勝武居の頬が自然とほぐれる。

「なあ、巧、誰なんだ?」

「まさか……貴方があのメツセージ相手ですか?」

帝人の言葉で復活した姫和が声を上げると巧が我が物顔で語り始める。

「その通り、この私こそが泣く子も黙る有名人。その名は……」

手でパスを示した瞬間。

『『リチャード・フリードマン』、S装備の生みの親で私のグランパ、デース!』

巧がパスを渡した人物では無く、エレンが答えてしまう。

「Oh No!?! ネタばらしとは酷いじゃないか?!?それよりも……:会いたかったよ我が愛しの孫よ!!」

外人ゆえかオーバーなりアクションを取ってから仲良さげにキャッキヤと抱き合い、喜ぶ2人に誰もが呆気に取られていると帝人がとある台座に置かれた物に目を止める。

「これは……:S装備?」

「コレをエレンちゃんのお爺さんが作ったんですか?」

可奈美の言葉にフリードマンはカラカラと笑うと感謝しつつも慈しむ様にS装備のバイザー部を撫でながら告げる。

「私だけでは無いさ。多くの研究者や技術者達の力に加えて、様々な分野の人間達が様々な力を出し合って、S装備は完成した。三河武宮も実は関わって入るんだよ」

「？」

フリードマンの最後の言葉に勝武居は聞いたことが無いと首を傾げるのを見るとフリードマンは頷いた。

「さて、どうして私がS装備を作れたのか、舞草に居るのか。それを少し語ろうかな」フリードマンの言葉にこの場に居る全員が耳を傾けた。

潜水艦から海へ出て、さらに陸へと向かい、時刻は幻想的で優しい銀の光で太陽光を反射する満月が天高く昇る時間に場所は鎌倉にある折神家客人用別館の縁側。

その壁に凭れかかって、空を見上げる2人の小さな男女が居た。

少女の方は肩が白みを帯びた桃色、胸元から太腿までは薄い桃色、膝から先は赤紫色の浴衣を、その隣に座る少年は肩が白みを帯びた青色、胸元から太腿にかけては薄い青色、膝から先は紺碧色の浴衣を2人ともしっかりと身に付けていた。

時間的に考えれば湯浴み後に涼を取っている様だった

「やっぱり、美濃関の空とは少し違う」

満月が浮かぶ星空を見て呟いた少女、舞衣の言葉にその弟である彗士もその言葉に頷く。

「ゾリンゲンの空とも違う」

彗士は心にもう一つの故郷とも言える町の夜空を思い出していた。

彼がこの日本という土地が来たのはほんの1年前、美濃関学院中等部への入学がキツカケだった。

舞衣は彗士の言葉を聞くと月から沿う様に壁の側に置かれた取っ手の付いた黒いハードケースに目を向ける。

本当ならここに彗士は居るべき人物ではない。いや、居る筈のない人間だった。ここに来た理由を両親は知ってこそいるが、舞衣を含めて妹達も彗士が日本に帰って来た理由を知らない。だが、舞衣だけは感じ取っていた。

その理由は部屋の中にある硬いケースの中にある事は悟ってこそいるが聞く勇氣も開ける勇氣も無かった。

それをしてしまうと自分の知る彗士が居なくなってしまう様な気がしたからだ。

「そうだ。可奈美ちゃん達はどうしてるかな？」

「死んではないじゃない？ 勝武居も居るし」

そう言う事じゃないんだよと言いたい舞衣だったが、なんと言えば正答なのか分からずに苦笑いを浮かべると舞衣の携帯から着信を知らせる音が鳴った。

「こんな時間に」

不快、と言うよりは驚愕が伺える声で振り向いた舞衣が部屋の中に入れっぱなしだった携帯を取りに動く。

「え!? 津佳沙くん!」

携帯の画面に表示された相手を見た瞬間にさらに驚きつつも電話機能を作動させて耳に当てる。

「もしもし」

舞衣の言葉がしっかりと電話の主に届いた。だが、返ってくるのは息を荒く繰り返すだけの音。さらにそれは走った故の酸欠という物では無く、何か命に迫る様な危機に瀕した時にする様な粗々しく、荒々しい物だった。

そんな呼吸を舞衣も初めての対荒魂の実戦で経験しており感じ取った舞衣は優しく落ち着く様に声を掛ける。少なくとも電話を掛けたと言うことは目の前や近くに敵が居ない事は確かだからと予想したからだ。

「あ、の……」

荒々しく、粗々しい息遣いの中で辛うじてながらコンビニの自動ドアの開閉時に聞くチャイムと店員のありがとうございましたの声。

恐らくは音源から離れた位置に彼は居る事は舞衣に想像できた。

「たす……や、り……いいい」

電話は向こう側から切られた。

舞衣が何だったのだと首を傾げながら隼士にこの事を伝えようと縁側に目を向けると隼士が立ち上がって月を見上げていた。

「隼士……」

いつの間にか。そうとしか言えない程に静かに浴衣から美濃関学院の制服へと着替えていた隼士がゆつくりと身体ごと、顔を舞衣に向けた隼士の手には携帯出来る熊除けの鐘に近いサイズではあるが明らかに何かが違う鐘が握っていた。

「Der Jagd……Bei Nacht」

隼士は舞衣の変化に気付いていないのかその鐘を鳴らした。カランカランと乾いた金属音が響く。

その音が響いた後に隼士は八幡力を使って飛び上がり、舞衣は刀使や武宮の一部だけが持つ特殊な能力の1つ。明眼を無意識に発動させながら飛び去った隼士を目で追ってしまう。

「ッ……!?!」

明眼で覗いた彗士の背が消える世界に舞衣は荒魂戦や対人戦とは違う恐怖を感じずにはいられなかった。

血の気が引き、青褪めた人間の肌を思わせる星空とその隅から身体や二の腕に投げナイフを巻き付け、布で口元と鼻元を隠した狩人の出で立ちの彗士の遠い背を仄かに……

「紅い……っ……き……」

鮮血で彩られた月が幻想的で狂気的な明かりで照らし出していた。

第二十五話 夜に出逢う者達

「ッ?!?!」

刀剣管理局の司令室で友衛が職員が調べて来た様々な情報を精査していると突如として感じた異変に素早く身体を背後に振り向かせながら御刀の柄に手を伸ばし、硬く握り込んでいた。

「どうかしまして?」

それを一緒に情報整理していた此花が驚き、どうしたのか不安そうに問い掛ける。

「貴女は……貴女は何も感じなかった?」

「いえ……まさか、もう!」

既に舞草の人員による攻撃を受けているのかと言う此花だが、友衛はそんな感じでは無いと首を振って否定する。

友衛にはわからなかったが、友衛の感じた違和感とは強者が自分と同じ技術と思想、道具と運用法で戦う同レベルの強者が突如として湧いて来た時に感じる一種の虫の知らせの様な感覚だ。

戦う為の技術、武術を得ればこうした超感覚と言わなければならない。大抵

は気の所為で済ませられる、と言うよりもわからないウチは気の所為で済ませてしまうのが人間だが、ソレを始めて感じた友衛はコレに不信感と不安感、そして恐怖感を感じていると扉が乱暴に開けられる。

「津佳沙の捜索に協力しなさい！」

入ってくるや否や扉を乱暴に閉め、高圧的態度で告げた鎌府の学長である高津雪那に同時は好感など皆無な視線を送る。それどころか未知の感覚を味わった直後の所為か貴様に関わっている暇はないと目で訴えていた。

無論ながら、高津学長にそんな事を察する事も出来なければ、察する気もない。故に友衛は言葉にする。

「無理です」

曖昧な回答では無い。拡大解釈も出来ないほどに明確な返答で返す。

「今、何と言った？」

「無理ですと申しました。予想するに鎌府の問題です。そんな事に我々は人員を割ける訳にはいかないと申しています。高津学長。」

「そもそも私達の使命は紫様をお守りすることです。鎌府女学院内部の問題に介入する権利も義務もありませんわ。」

友衛は意思を感じ取った此花が援護射撃を撃ち込むと高津学長は激昂した。

「紫様の為ならなのおさらよ！沙耶香と津佳沙こそが紫様の両腕にたる相応しき存在、反逆者如きすら捕まえられない、あの無能達とは違うのっ!!」

高津学長が吐いた『あの無能達』と言う言葉に2人は誰の事かすぐに察しがつき、此花も友衛も目元をキツくし高津学長を威嚇する。百戦錬磨とも言える2人からの軽いと言えども本気に近い威嚇に一線を退いて長い高津学長は圧迫される。

「親衛隊っ!! 紫様の為にも、早急に津佳沙を連れ戻しなさいっ!!」

「……………残念ながら、ご期待には添えられません。それに沙耶香という生徒がご自慢ならば、沙耶香に任せれば宜しいのでは？」

「友衛、貴様っ!!」

「お静かに。紫様の心筋を悩ますのは高津学長とて、不本意なのでは無いでしょうか？であればこそ、鎌府のみで搜索して下さい。」

此花の言葉により、諦めたのか高津学長は汲々指令室から退出する。その心中には迷いを生じていた。

傀儡人形になるはずだった津佳沙が逃げた事で沙耶香に同じ薬を打ち込んで追わせる事に躊躇いがあった。かと言って打たずに追わせれば実力は拮抗している2人ではドーピングした津佳沙に沙耶香が返り討ちにされかねない。

故に親衛隊で質と数を揃えようとしたがそれは叶わなかった。だが、高津学長のこの

行動はある人物を助ける結果となる。

「ごめんだけど、此処を任せていい？」

友衛のこの言葉に此花が不思議がる。このタイミングで席を外すと言う友衛は今まで見た事がなかったが何か理由があると悟った此花は友衛の憂いを断つ為に力強く頷く。

「ありがとうございます」

「礼には及びませんわ。新しくした武器の試し振りも必要でしょうし」

「気付いていたんだと自分の御刀を鞘に納めたまま抜刀可能状態へと持って行きながら告げる友衛。

刀身を想像させる鞘こそ変わっていないが鐔の部分が大きく膨らむと同時に角張った鐔とは何か違う物が付いていた。

「ただ……」

「ただ？」

何か含ませようとする此花に友衛が聞き返す。

「結芽がうるさいと真希さんから苦情が来ますから、葉結と一緒に連れて行って上げて下さいまし」

「……わかった。少しだけ、此処を任せます」

そう言つて足早に去る友衛。

自分にだけ感じた違和感に此花の見せた燕を連れて行けという自分の身を案じての言葉に友衛は何も言わず、隠された意図さえも受け取つて消えた。

「何かございまして？」

消えた筈の友衛が扉から申し訳無さそうに顔を出したのを感じた此花が髪をかき上げながら問う。

「やっぱり言つておこうかなつて。ありがとう」

此花の返答を待たずに小走りて去つて行く友衛に此花は何処に向ければいいかわからず、何とも言えない感情を抱く。

「まったたく……まあ、良い殿方を黙つて送り、待つのも、良い女性の甲斐性かもしれないわね」

誰かの車のヘッドライトが近付いてくる度に津佳沙は身体を縮こませてその明かりに照らされない様に逃げる。

高津学長から何かの薬品を注射器で入れられた事で感じた何かの喪失感。最初は思いうちや記憶と言う物だったが、徐々にもっと別の大切な物が無くなりつつあると悟り始めてから、出来る限り鎌府から離れて、見つかりにくい路地裏の暗闇へと隠れた津佳沙。

「……………」

ふと思ひ、連絡先だけ聞いた美濃関の刀使、舞依の番号に掛けて見たが、今の自分の姿を考えると助けてとは言えずに直ぐに電話を切ってしまった。

右半身。その殆どが黒く硬質で無機質な爬虫類を思わせる鱗に覆われており、鱗と鱗の間からは紅いマグマの様な明かりが漏れ出しているソレは荒魂のソレ。見られる訳にはいかず、隠す様に暗闇の奥に奥に逃げ込み、左半身で蓋をする様に隠れていた。

「見つかったら……………見つかったら……………」

間違いなく荒魂として斬り殺されるだろう。そう認識した瞬間に荒魂の身体の面積が激痛と共に増える。

負の感情をもって増える事は把握していても、本能的恐怖が荒魂の活動を活性化させる。

激痛に僅かに声を漏らした瞬間、両サイドから影が挟み込んだ。

「みーつけた」

楽しげな声がした方向に顔を向ける津佳沙の目に見慣れた人物である親衛隊第七席の燕結芽、逆方向を親衛隊第一席の友衛童子が埋めていた。

「……荒魂？」

チャキンと少し控えめな鯉口が切られる音が響く。その音は何処か躊躇いを覚える音だった。

「イヴオウ！」

速すぎるが故に無音の斬撃で背中の中から武器を抜いて友衛に斬り掛かる津佳沙だが、友衛もその一撃を受け止めて見せる。

抜かれた御刀は姫和が折神紫を始めて襲った時の御刀とは全くの別物だった。

巴型と静型の薙刀を混ぜた大振りであるが反りは深くも浅くない形状の打刀サイズの御刀を担ぐ様に構える。

「いきなり!!」

止め切った友衛の口が開いた瞬間に津佳沙は八幡力は使用せずに気を悟られる事なく、友衛を建物の壁に練り込ませる。

「童子おにーさん!!」

燕が童子への追撃を見せた津佳沙に背後から奇襲を掛けるもそれがわかっていたと

言う様な最小限の動きで回避しながらカウンターのアツパーで燕を打ち上げる。

「ふルウー！」

そして津佳沙は燕の右手を持って地面に叩きつけると同時に地面と荒魂化した腕で燕の頭をサンドイッチにして燕の写シを張った頭を粉碎する。

このタイミングで復活した友衛が壁を三角飛びで飛び跳ねて高度を稼いで生んだ落下速度を乗せた唐竹割りを放つが寸前に身を引かれて荒魂化した腕だけを斬るに留まる。

「浅いー！」

御刀を油断なく構えた友衛と虚ろな目の津佳沙が睨み合いをすると突如として津佳沙側から迅移で逃走を開始する。友衛も追おうとしたが、自分を軽く置き去りにする速度に追撃を辞めようと決心した瞬間に半身に痛むを感じて蹠ると復活した燕に介抱されながらその場を後にする。

「一体何処に……！」

コンビニ周辺から探し回る舞衣は両手では数え切れないコンビニ付近を搜索しており、焦りが見え始めた頃。

「焦っちゃダメ」

近くの公園で焦りを鎮める為にベンチに腰を落ち着けて深呼吸を繰り返す。

一先ず落ち着いたと思いいベンチから立ち上がったタイミングで背後の茂みに何か落ちて来る音が響いた。

「スペクトラムファインダー……」

落ちた物を警戒してスペクトラムファインダーを取り出した舞衣だが、反応は出ず、ゆっくりと近付くと茂みを斬り裂きながら舞衣の目と鼻を掠める様に刃が通り過ぎた。

突然の事に尻餅を付いた舞衣に茂みの先から影が飛び出し、舞衣の腹に抱き着く。

突然の事にパニックになる舞衣だが、抱き着いた影から確かめる様に何度も自分の名を呼ぶ、か弱く、縋る様な声が聞こえた事で母性と姉性とも言うべき物を刺激されてパニックから復活する。

「津佳沙くん!! え!!? ええ!!」

変わり果てた姿でまるで想像出来ない行動を起こしている津佳沙にパニックとは言わずとも混乱する舞衣だが、行った行動は見事なまでに平常通りだった。

「クツキー、食べる?」

「……食べる」

人に見つからないだろう場所に移動した舞衣と津佳沙。

津佳沙は舞衣から貰ったクツキーを、御刀と融合してしまい使えなくなった右手の代わりに左手だけで大事そうに持ちながら、ハムスターの様にゆつくりと味わって食べている。

津佳沙の身体は首元から下の右半身と両足が完全に荒魂の身体のソレになりつつあり、人の身体を保っている部分が津佳沙が人として生きられる制限時間を示している様に舞衣は感じずにはいられなかった。

「津佳沙くん！」

最後の一枚を食べ終えたタイムリングで舞衣が津佳沙を跳ね除けて暗闇から迫った白刃を受け止め、八幡力で弾き返す。

弾き飛ばされた影は軽やかな動作で地面に降り立ち、刀を腰から斜め下に向ける構えを取る。

「沙耶香ちゃん……」

「舞衣？」

舞衣の出現に驚きながらも御刀を納刀する沙耶香を見て、交戦の意思は無いと判断して舞衣も御刀を納刀すると舞衣の背後に隠れていた津佳沙が顔を見せる。

「津佳沙……」

「お姉ちゃん……」

舞衣の身体から半身を出すと否応無く沙耶香に荒魂の身体となった津佳沙も現れる。荒魂化しかけている津佳沙を見た沙耶香は御刀を無言で握り直したがそれを舞衣の力強い言葉が抑えた。

「沙耶香ちゃん！ 自分が何をしようとしているのか、わかっているの！」

津佳沙を斬ろうとした沙耶香を叱る舞衣。

荒魂になろうとしている津佳沙だが、荒魂の様に無差別で人や物を襲っている訳では無い。だが、それ以上に舞衣には自分の身体に抱き着きながら自分の名を呼ぶ津佳沙からは生きたい、死にたくない、助けて欲しいという気持ちを感じずにはいられなかった。「何故、荒魂を討つのが刀使の仕事」

「それは正しい。けど、けどね……仕事だけで命を奪うな！」

舞衣の本気の怒気。荒削りで不完全なそれだが、沙耶香を怯ませる別の凄みがそこにあった。

「目の前の荒魂に御刀を向けたつもりでも、その御刀は人に、津佳沙くんに向けてるんだよ！ 沙耶香ちゃんの弟じゃないの！」

「……荒魂は荒魂。いずれ危害を加えるかもしれない」

「そうかもしれない。けどね、ううん。だからこそ、仕事で斬っちゃいけない」

御刀から離れかけた手を沙耶香はもう一度握り直す。今度こそ離れない様に。それを見た舞衣は思い出して流す涙を流しながら沙耶香に言葉を投げる。

「仕事で斬ったら、沙耶香ちゃんも糸見津佳沙という存在を斬った責任を背負えない」

活人剣と殺人剣。

生かす為に振るわれる剣と殺す為に振るわれる剣を区別する為の言葉だ。何方とも大き過ぎる覚悟と多過ぎる責任を伴う。

そして舞衣は殺人剣を振った者を知っている。その責任も。だからこそ沙耶香には殺人剣を振って欲しくない気持ちがある。舞衣にはあった。覚悟も責任もない殺人剣は空虚で残忍でしかないからだ。

「糸見津佳沙という一人の命を背負えないんだよ」

舞衣の言葉を聞いた沙耶香の手が御刀から外れる。脳裏に蘇るのは津佳沙と過ごした幼少期からの記憶。

両親の居ない二人にとって、互いが互いにただの身内で済ませられない関係になつていく。

そんな相手をただ教えられた使命や言いつけられた命令だけで荒魂を斬ってきた。そして今回の津佳沙も今まで通りに斬ろうとした。その行いに始めて恐怖した。

「私は……私は、一体どうすれば」
「やっと思つけたー」

舞衣が言葉を投げようとした時に木の裏側から燕が現れる。その目は怒りに揺れながらも探していた物を見つけた時の様に輝いていた。

第二十六話 無邪気なキョウケン

「童子おにーさんを倒したんだもん。強いよね！」

話などしない。そう言わんが如く迅移を使った接近と同時に平突きを放つが津佳沙はそれがわかつていたのか完全な不意打ちに閃ならず、燕の平突きを躲すでも弾くでも無く、まだ人間の形を留める手の指を八幡力で強化して摘む様に受け止める。

「やるねー」

防がれたなら蹴って引き剥がす。

燕が肘を曲げて接近、蹴りを加えようと足を蹴り上げようとしたが、蹴り出す足は踏まれていた事で動かなかった。

「嘘でしょー！」

驚いて息を言葉として吐き捨てた瞬間に津佳沙が御刀と一体化してしまった荒魂の腕で燕の鳩尾を殴り付けて、飛ばす。

鳩尾を最悪のタイミングで殴られた事で息が出来ずに苦しみながらのたうち回る燕を放つて津佳沙は無念無想を発動して逃げる。

それを見た舞衣は直ぐに迅移を連続使用して追い掛け、沙耶香も無念無想を使って追

う。

津佳沙に対して沙耶香は着かず離れずの距離で追い掛けるお陰で遅い舞衣でもかろうじて見失わずに追い掛けられる。

建築物の上を飛び跳ねる様に逃げる津佳沙とそれを追う沙耶香、その沙耶香から引き剥がされない様に追うそれは目撃者から見れば小型の荒魂を追う刀使に見えただろう。

そして津佳沙が建物が無くなった空白地帯、わかりやすく言うのであれば何処かの神社の境内に入った瞬間に背後から燕に斬り掛かられる。

「早っ」

復活速度と追跡速度に驚きながらも交代しながら、フェイントを混ぜた燕の一撃もフェイントを無視して本命のみを確実に最小限に防いで見せる。

「なら!!」

フェイントを組み合わせた攻撃も誘導もされず、惑わされもしない津佳沙に燕は連続攻撃で応戦するスタイルに変更するべく、距離を取り、即座に平突きของ構えをもつて迅速での接近を行う。

「うわあ……」

その一撃に津佳沙は荒魂の身体がまばらに現れた腕の荒魂部分で弾く。

「なんちゃって」

弾かれた燕だが、弾かれる瞬間に自分も後ろに重心をツラした事で蹴り技を放つが、津佳沙は燕の御刀を弾いた時から蹴りの軌道になるだろう場所に自分の武器を立てて待ち構えており、燕はそれに気付いた瞬間に蹴り足を即座に逆回転する為のキツカケに変えて回し斬りを放つ。

津佳沙は燕がその一撃を放とうとした瞬間には既に燕の足の射程範囲ギリギリまで逃げており、燕が当たると思つて放つた蹴りは津佳沙の制服を掠めるのみだった。

「嘘ー！」

ギリギリの回避を狙つた津佳沙の策略である距離感を逆手に取つた戦術は燕が遭遇した事の無い戦い方故に一本取られ、津佳沙から上段斬りを貰う羽目になる。

「舐めないでよー！」

それでも12歳と言う若さで実力のみを持つて親衛隊入りを果たした燕は津佳沙の上段を斜め下方にいなして見せ、横に一閃するがそれもわかっていましたとばかりに腕の動きすら見ずに津佳沙は屈んで髪数本を犠牲に回避。同時に軸足で無い方の足首を切断しに掛かる。

「いひひ」

燕がニヒルに笑うと津佳沙は八幡力を使って飛び退る。津佳沙の居た場所には燕の御刀の刃先が陣取っていた。

燕が自分の足を囀に掬い上げる様な軌道の突きで仕留めるつもりだったが、津佳沙はそれを察知したのか即座に飛び退いた事で事なきを得る。

迅移で追い掛けて追撃に出た燕だが、津佳沙から横振りの迎撃を喰らうが御刀を立てて受け流し、お返しとばかりに刃を倒して横に一閃するがその時には既に腰を屈めて回避の行動を津佳沙は起こしており、さらに身体に回転エネルギーを当てて回転しながらの斬撃を放とうとしていた。

それに燕は急いで後ろに迅移で逃げる事で距離を取ると回り込む様な軌道で迫るが、津佳沙はそれはわかっていますとばかりに身体を回しながらの斬撃を繰り出し、それを燕はしやがんで躲し、そのまま迅移で駆け抜けて御刀を構え直す。

「(こんな戦いしたことないよ……)」

相手の防御を破れないなら連続攻撃で反応が追い付く前に仕留めるつもりだった燕。事実、防御を捨てて攻撃一辺倒になった際の燕の連続した斬撃の鋭さと正確さ、さらに連射速度と攻撃速度は親衛隊でも群を抜く物。だが、津佳沙にはそれが通用しない。

「(どれも読まれてる?)」

無論ながら攻撃のみに特化すれば手痛い反撃を貰う。事実として親衛隊全員との総当たり制の模擬戦でその経験はあった。

獅童や友衛や此花からは一瞬の隙を突いて攻撃された。その時はその一撃を辛うじ

て躲した上で一時撤退、再度の猛攻で勝ちを拾った。

苔石からは攻撃を耐えながら少し劣る攻撃速度だが、連射速度はさらに速い攻撃を喰らわされながらのダメージレースで自ら逃げなくては行かなかった。

皐月は常に射程外に身を置かれる様に逃げられしまい、皐月が場外に出てしまった上での勝利だったが実戦では障害物が無い限りは何処までも逃げられる。

満月はそもそも射程外に入れさせない様にベルト給弾式フルオート散弾銃とんでも代物で封殺してきたのでそもそもその話で論外。

隼は変則ガードでスタミナ切れになるまで耐えられて敗北している。

今回の津佳沙の様に戦闘で言うところの『読み』で挑んで来たのは皐月だけだが、皐月の読みとはまた違う物を津佳沙は使っていると燕は判断した。だが、それに対応出来る経験を燕は持つておらず、不幸にも天才故の経験不足と言う弱点を露出してしまっていた。

「ふルウー！」

完全に両腕が荒魂化した津佳沙が石畳を自分の武器で削りながら迫つて来る。対して燕が取った行動は防御をすると同時に八幡力で弾き飛ばした。

それでも勢いは叩きつけられる程では無かった為に難なく着地した津佳沙だが、着地した瞬間に乾いた大きな音が2回ほど鳴り、津佳沙が両膝から崩れ落ちた。

「じゅ…………う…………」

燕の手には3本の棒が突き出ただけの真四角な物体が握られており、その物体から青白い煙が細く吹き出していた。

燕が暇だからと満月に勝ちたいと龍石や尾藤に愚痴った際に銃の扱いを教わっていた。

教わった当初は銃が重いと言う理由で使わなかった燕だが、先ほど使用した拳銃は満月が鎌府の学生時代に先輩から継いだ『逼真鎌府変態技術同好会』（会員は龍石と尾藤を含めて9人、満月は親衛隊入りと同時に退会）が開発したばかりの新装備、WHKD22LRだった。

余談だが、WHKD23LRの命名法は脇に入る箱型弾倉と回転式弾倉を持った22LR弾を使う拳銃と言う意味で脇に入るをローマ字打ちした際のWと箱型からのH、回転式のKで弾倉のDで短縮してそこから使用弾薬の22LRをくっ付けただけである。

写シの膝が撃ち抜かれて身動きが取れなくなった津佳沙の肘に22LR弾を叩き込んで肘を砕いた燕がゆつくりと近寄り、写シが解けた津佳沙の首元につき青江の刃先を添える。

「こうなった人間は斬るしかないんだよね」

一瞬の迷いを見せた燕だが、同時に友衛から言われた命令は生きて連行しろ。燕には

わからなかったが、友衛の燕を人殺しにはしたくないと言う思いからの命令であり、燕もそれを無視して行動を起こそうと言う気が起きない程の気迫を負傷しながらも発していた。

それでも煮え湯を飲まれた相手だ。四肢の切断くらいは許してくれるだろうと御刀を振り上げた瞬間を狙ってましたと言わんばかりのベストなタイミングで沙耶香が飛び込み、横の一閃を放つ。

燕はその一閃から逃れる為に津佳沙から離れてバックステップ、それを追って沙耶香が上段から振り下ろすもそれを身体を僅かに捻りながら半歩下がる事で燕は回避する。

「ふっ」

斜め上方に振った沙耶香の一撃を身を屈めて躲した燕が一步を踏み込んで腹を狙った横振りを放つも沙耶香はその一撃を数歩下がりながら避け、同時に御刀を自分の脇に戻し、籠手内の要領で反撃する。

「ハア！」

だが、燕はその一撃を打ち上げて逸らすとそのまま上段斬りの構えに持って行き、振り下ろす。沙耶香も見え見えの一撃を貫う様な刀使ではないと言わんばかりに身を逸らす事で回避したが掬い上げる様な突きには流石に迅移を使って大きく後退する。

「ハハハ」

楽しくて仕方ないと燕が狂気を感じさせる笑い声を次々と繰り出される剣戟を受けながらも上げる。対する沙耶香は迷いと言うよりは自分の中で御刀を振るう理由を失いながらも、それを感じさせない太刀捌きで燕の攻撃を捌き続ける。

「凄……」

少し離れた位置でそれを見ていた舞衣が声を漏らす。

「やるねー、沙耶香ちゃん。でも、こんなんじゃないよねえ？」

まだ先がある。それを見抜いた燕が挑発する様に告げると沙耶香は今のままでは勝てないと刃先を腰から斜め下後方に向ける様な構えにゆっくりと移行して、その身体を極彩色に輝かせる。

無念無想を発動させた証だった。だが、直ぐに沙耶香の身体から極彩色の輝きが失せる。

「あれ？ やらないの？」

燕がガツカリと言う様に告げる。この時の沙耶香は姫和と帝人に奇襲をかけた時、可奈美との偶発的戦闘で言われた『そんな魂の籠ってない剣じゃ、何も斬れない』と言う言葉を思い出していた。

「ちよつと物足りないけど、時間が勿体無いからもう……決めるね！」

飛び上がったの上段斬りに対処できなかつた沙耶香がまじまじと迫る燕のにつかり

青江の刃を見る。

死を確実視した生物が己の命を奪う物をただ黙って見るのと同じだった。死の瞬間とはそう言う物だ。

「ふう」

短く小さく吐かれた息の音と共に飛び込んだ舞衣の御刀、孫六兼元がすっかり青江の刀身を受け止め、沙耶香を救う。

「てえやあ!!」

舞衣は受け止めて直ぐに柄側を押して刀身を傾けた事で燕が斜めにズレるがそこでむざむざと着地させる様な愚行を舞衣はしない。

刃先が動かせる様になったタイミングで八幡力を使用、今までの舞衣からは想像出来ない叫び声と共に弾き飛ばした。

受け流しと見せかけて吹き飛ばす。これは勝武居が身長の高い相手が変化を持たせる為に飛び上がった瞬間に良く行う方法である。本当なら此処で刃先を持って鏢で一撃を加えるのが勝武居のやり方だが舞衣の拵と装備はそれに対応していない。

「おっと」

投げ飛ばされた燕だが、辛うじて空中でバランスを整え、着地するのと舞衣が御刀を鞘に納めた際の金打ちの音が鳴ったのは同時だった。

「たあ！」

そして舞衣が投げた相手への追撃の手段は決して無い訳では無い。勝武居の様な剛の剣では無い、躲す事も避けることも出来ない一撃必殺の一撃、言わば速の剣とでも言うべき居合斬りが放たれる。

理論上は最速の一撃を放てる居合斬りに流石の燕も後退を余儀無くされ、御刀を正眼に構え直す。

「ビツクリした、おねーさんもちよつとはヤル人みたいだね……本当にちよつとだけね」

声音が変わる。そして迅移の速度が一瞬だけ速まり、平突きが舞移の胸、詳しく言えば心臓の位置を的確に突き刺さった。

「まだまだ、いくよー！」

そして燕は御刀を抜く為に腕は無く足を動かして舞衣を蹴飛ばし、同時に沙耶香に当たって2人を倒そうとする。

これに沙耶香が飛ばされるが、舞衣は受け止めて寸前の所で留まったが、燕からの容赦の無い連撃に晒される。

「もおー、結構しぶといねー」

舞衣もここまで連続した攻撃を繰り返す剣士との戦いはした事が無く、よく手合わせ

をする可奈美や勝武居や隼士は舞衣と同様に読みを戦術の軸に据えている。それでも舞衣は背後に居る沙耶香を守る為に引く事無く、燕の御刀を防げる物だけ防ぎ続ける。

それでも命中する物は命中する。舞衣の写シは強度こそ高いがそれでも金剛身の様な防御力がある訳ではない。燕の御刀で斬られる度に写シのカケラが飛び散り、徐々に舞衣の身体から写シが肌蹴て行く。

「もう、もういいよ！ 私が、私が殺されればいいだけ！」

燕の攻撃に晒される舞衣を見た津佳沙が舞衣を守りたい一心で叫んだ言葉だが、舞衣はその言葉に苦しそうに大丈夫だからと告げる。

「どうして……」

津佳沙が目を背けるが、沙耶香だけは舞衣の背中を見ながら告げた。

「私は、沙耶香ちゃんや津佳沙くんよりお姉ちゃんだから……理由なんてそれだけで充分！」

苦しそうな声から一転して嬉しそうな声に変わる舞衣だが、それは虚勢もいい所だった。それでもその声を聞いた沙耶香が何か熱く空っぽだった何かを埋めて行く感覚は痛みとなって沙耶香にそれが何かを認識さえ、沙耶香は痛みに耐える様に胸元を押さえる。津佳沙も胸の中央部分を押さえつけられ、息苦しさを感じながらもそうさせている原因を失いたく無い思いで必死に立ち上がろうとする。

「くうー！」

舞衣の片腕が宙を舞い、ついに舞衣の写シが解け、舞衣は肩で息をしながら斬られた腕を片腕で庇う様に立っていた。

そんな舞衣に燕が御刀の刃先を向ける。

「もう、おしまいかな？ だったら……お休みの時間、だよね!!」

燕の突きが放たれた瞬間に、御刀の鎬を絶叫を上げながら津佳沙と沙耶香の御刀が挟み込んで止める。

「私はこれを……」

2人で燕と鏢迫り合いを行う2人の叫びが重なる。

「無くしたくない!」

顔も右半分が荒魂化しており、無事なのは顔の左半分しかない津佳沙に沙耶香は驚く事なく2人同時に燕を押し退かせ、沙耶香が上段から斬り掛かりそれを燕は短い息を吐きながら防御すると同時に荒魂化して尖った脚となった津佳沙の足が腹を蹴る。

これには短く苦痛の声を上げながら後退して津佳沙から距離を取った燕だが、逃がさないとはばかりに沙耶香が追撃に出る。大した燕は呼吸が整うまではと防御のみに気を配るが沙耶香の大振りの一撃が燕の防御を弾いたのと同じタイミングで沙耶香の背中と鞘の間を縫って津佳沙の手持ち武器が燕の肩を叩いて吹き飛ばした。

「沙耶香ちゃん、津佳沙くん……」

「うん、平気……」「ダ、い……じよ、ブ」

荒い息を繰り返す2人に燕の狂った様な笑い声が届き、燕が飛んで行った方向を見ると燕の衝突により窪んだ石燈籠に背中を預けていた燕が立ち上がるうとしていた。

「いいよ、いいよ。沙耶香ちゃん！」

一瞬で沙耶香の懐に潜り込んだ燕が袈裟斬りを放ち、沙耶香がそれを払う、払われた刃を即座に右からの横振りに変えた燕の一撃を沙耶香は御刀を立てて鏢迫り合いに持ち込もうとするが失敗、津佳沙が背後に回ると燕はそのまま回転斬りで津佳沙に攻撃、津佳沙が防御した瞬間に腹を蹴って引き剥がし、沙耶香の振るった横一閃をしゃがんで回避するとそのまま沙耶香を上空に蹴り上げ、迅移で追い越す。

「ふああー！」

気合いと共に放たれた上段斬りを諸に喰らった沙耶香が落下した事で蹴られて体勢を崩していた津佳沙に命中、2人が纏れる様に倒れた瞬間に沙耶香の写シが剥がれる。

燕は沙耶香の写シが解かれたとしても落下の勢いを乗せた突きを放とうとする。

「沙耶香ちゃん津佳沙くん!!」

舞衣の叫び声が夜の境内に木霊すると沙耶香の前に影が覆い被さった。

「つ、か、さ……」

沙耶香に被さったのは咄嗟に体を上に持って来た津佳沙だった。燕の御刀を背中から受け、身体の正中線を抜けた刃先を沙耶香に当たらない様に掴んで止めている。だが、胸と手から流れる粘り気のある泥水の様な液体が沙耶香の制服を汚す。

「やあー！」

抜けないと判断した燕が平突きから以降可能な薙ぎ払いで津佳沙の指と背中を横に斬り裂いて御刀を抜く。

その際に津佳沙の口から絶望と恐怖を孕んだ獣の慟哭が上げられた。

「本気出した瞬間にこれか……思った程じゃないね」

刃に付いた津佳沙の体液を払いながら告げる燕に沙耶香に倒れ込まない様に斜めに倒れた津佳沙の肩を必死に揺らす沙耶香、そして突然の事に某然として立つ事しか出来ない舞衣。

「やだよ、やだよ……津佳沙、津佳沙……」

何度も呼び掛けようと、何度も揺らそうとも反応が無い津佳沙に沙耶香も絶望と恐怖の慟哭を上げる。

「!! なにー！」

燕が嫌に不自然な空気の流れを感じて大きく飛び退いた場所に月明かりを反射する

無機質で芸術性のカケラもない一本の刃が映り込む。そしてその刃を携える男も。

「やつと聞こえた……」

「彗士……」

舞衣の言葉に現れた男、彗士は手からスローイングナイフを燕に投げる事で返礼とした。

第二十七話 狩人の武器

「やつと聞こえた……」

ゾリンゲンイエーガー。彗士の様なドイツのゾリンゲンと言う地にて、刀使や武宮の様に荒魂と戦う存在である、無論ながらゾリンゲンに限らず、ドイツに加えて欧州各国にも似た存在は呼び名はそれぞれに存在する。だが、ゾリンゲンイエーガーはその中でもその考え方と装備は特異とされる。

最新科学を適用した武器を多く使用するが荒魂の探し方は原始的なまでの己の足か仲間との連絡、もしくは荒魂と遭遇した事で発した恐怖の叫び声といったものでスペクトラムファイндアーの様な物を使わないか、使いたがらないと言う事である。

荒魂を探す方法に最新技術を使うのは否定的かつ懐疑的だが、己の武器には積極的に使うと言う矛盾を抱えた存在でもある。

今回、彗士の到着が遅れたのもスペクトラムファイндアーを使わなかった事と津佳沙がスペクトラムファイндアーに反応しなかった事、何よりも恐怖からの叫び声が無かったからだろう。

「彗士……」

舞衣からの呼び掛けに言葉でなく、風切り音で答えた返答の投げナイフを燕が御刀を動かして構えるだけで弾く。

「何を！」

投げた問おうとした燕の両目を狙った投げナイフが2本迫る。隠蔽投合と言う第一射に第二射を隠す様に放つ技の事だ。

今回は夜だった事と投げたナイフが暗闇に溶け込み易い色の赤だった事もあり、燕は気付かずに第一射を弾いたタイミングで構えを解いており、回避以外に取れる選択は無かった。

「っー」

身体を傾けて躲した燕の肩と背中を携帯鎌とでも言うべき小さな鎌が斬り裂いて飛んで行った。

隼士は隠蔽投合をした後直ぐに湾曲を描いて飛んで行く折り畳み可能な携帯サイズの鎌を投げて躲した燕に一撃、いや二撃与えていた。

「ならー」

距離を取っていたらやられる。そう判断した燕が距離を自ら詰める為に迅移を使う。その行動に隼士は足元に突き立てていた波切會凛殿を掴む。

燕は使い慣れ、同時に最も信を置く迅移の突進と共に放つ平突きを放つ。対して隼士

も最も信を置く技、相手の突き技に対して上下に波の様に動いて螺旋を描いて相手の懐に逆に迫り、刃を振らずに相手の腹に添えるだけの動きで対応する。

足は動かさず、関節の筋肉の稼働のみで動くこの技、彗士を含めた一部にゾリンゲンイエーガーに取ってはごく当たり前の技、故に名は無い。だが、名無しと侮つてはならない。

動きの起点となりやすい踏み足や摺り足も無い為に相手は相手の動きを読み難い。更に攻撃の為に腕を引くと行つた予備動作も無い為にこれが攻撃だと悟る事も難しい。

「浅いか……」

咄嗟に平行移動した事で腹を僅かに開かれる程のダメージで済ませた燕にまたも投げナイフが2本、胸と目を狙つて迫る。

燕は顔への一撃を傾けて回避すると続いて迫る体を狙つたナイフは身体を回転させながら横にズラして回避、回転が終わると同時に踏み込み、迅移での平突きを放つ。先程に比べると距離は短い。距離感を掴まなければ難しい彗士の先程の技は使えない筈と燕の天才的感性と剣術の才能が未知の技に対して正答を導き出していた。

「ツシー」

彗士は回転運動で平突きを回避すると同時に回転に合わせて振つた腕の御刀で燕の首を斬り落としに掛かった。だが、燕もそう来るだろうと彗士が回転したタイミングで

身体を屈め始めており、隼士の斜めに振り下ろす様な一撃を髪数本の犠牲で済ませると屈めた身体を回して足を斬り裂きに掛かる。

隼士はそれを飛び上がって回避するが、燕は屈めた身体を伸ばしながら掬い上げる様な平突きを放った。それに隼士は咄嗟に取り出したナイフに見える物体を左手で投げる。

燕は片手で御刀を保持したまま身体を傾けて回避行動を起こすが片手にした事で減速した御刀の鎬に投げた左手の掌が乗り、左手を基点に八幡力で飛び上がって落下のタイミングで右手の御刀を逆手に持ち変えて、そのまま落下の軌道で燕の腕を切り落とすに掛かる。

「甘んぶよー」

身体を捻って回避、更にその捻りを回転運動に変えて抉り込む様な横薙ぎの一撃に繋げる。隼士は身体をリンボーダンスの様に曲げてその一撃を回避する。

「そーに」

燕は即座に返しの刃を僅かに斜め下に向かう軌道で振るうが、隼士は膝を落として倒れ込む様に身体を動かして、地面と刀の軌道の間が存在こそするが普通では逃げ込まない安全地帯へと逃げ込んだ。

そして隼士はリンボーダンスをした瞬間に燕の一撃を飛んで躲していた際に投げた

武器を回収、地面に突き刺さっていたそれを燕の首を目掛けて投げる。しかし、燕はその武器を彗士から視線を外さずに回避して見せ、回して持ち変えた御刀を突き立てる様に振る。

「つとー」

彗士は燕の刃先を両腕の二の腕に下げていたナイフで挟み込む様に抑え、八幡力で軌道を無理矢理の変更を加えて事なきを得た瞬間に燕の右胸を貫いた物体が彗士の腕に掴まれる。

「えっ？」

何が起きたのかわからなかった燕が背後に目をやった瞬間に彗士がブレイクダンス様に回って燕を蹴飛ばすと間髪入れずに先程投げた武器を統合、更にそれを追い越す速度でスローイングナイフ、スローイングサイスを数本立て続けに投げる。

どのナイフも速度が微妙に違う。1発を回避すればその先を潰すように投げたナイフが迫ってくる。

最初に被弾するだろう武器は先程も投げた武器を追い越す速度のナイフだが、これを迎撃しようとするれば横側から迫るサイスに命中する。故にこの攻撃はバックステップでサイスから逃れる位置に逃げ、迫るナイフを弾いて、先程傷を受けた武器に対しては防御は間に合わないの、そのままギリギリで躲すと同時に姿勢を低くして彗士に迫

る。

「その劍！ 受けられないでしょ！」

御刀。と言うには形状が可笑しい。恐らくは心鋼の劍と判断した燕は波切曾凜蔵が薄刃で受けに適さない劍と判断して罅迫り合いに持ち込もうとする。防御ごと叩き斬るつもりだった。無論ながら受ける劍で無い事は誰よりもコレを鍛えた彗士が知っている。

「なら、受ける劍を」

受けれないなら受け用の劍を持てば良い、太腿から赤銅色のナイフ一振りを引き抜く。

それはナイフと言うには反りが深過ぎ、刃先が柄の方向に大きく湾曲して迫る形状のそれは正しく三日月の様な形状が特徴的な彗士オリジナルの禍神の御守刀、三日月短劍だった。

湾曲した刃を持つ峰側でにつきり青江を受けた彗士、湾曲した面に刃を当てられ燕のにつきり青江は湾曲方向に沿う様に動き、湾曲した刃と柄の間に設けられた突起に抑えられる。

「ッ！！」

八幡力とは違う強い波状の力を受けてたたらを踏んだ様に動きを止めた燕に膝蹴り

を放とうとする彗士を見て引いて逃げた瞬間に胸を貫いた武器が今度は腹を貫いて彗士の手に戻った。

2発も同じ武器から攻撃を受けて初めて燕はその武器の形状を見る。

「ブーメラン……?」

「正解だよ。まあ、ターンじゃなくてストレートで戻る奴だけ……」

彗士の左小指に引つ掛けられて保持されたモントズイツヒエルナイフと共に摘む様に保持された武器は航空力学の進歩によつてもたらされた直線に飛んで戻つて来るブーメランだった。

「私達の武器は時代と共に変わる……変わる事に恐れを抱かないからだ」

「そう言つて! 私と打ち合うのが怖いだけでしょ!!」

燕が懐から自身のWHKD22LRを抜いて、射撃しながら迅移で迫るが彗士は放たれる銃弾を正中線をズラすだけの様な回避で躲し続けて、燕の接近を待ち構える様に身体を波に揺れる海草の様に揺らし続ける。

燕は片手で保持したにつかり青江を平突きで今日一番の速度を持つて突き出した。が、それを待つていたと彗士の小さな呟きを燕にする間こえなかつた。

突き出された燕の右手の外側に退避した彗士だが、その右手には素早く持ち変えた三日月短剣が握られていた。

三日月短剣の鏢とも言うべき突起を隼士は燕の右手首に引つ掛けると左手に握った波切曾凜敵の柄をつかり青江の鎧に乗せて、燕の方に下側へ巻き込む様に動かして、燕の手からにつかり青江を落とさせる。

デイザームと呼ばれる相手の武器を奪う、捨てさせる戦闘技術だ。

隼士は武器を捨てさせられた事に驚いた事でそのまま脇を斬ってくる三日月短剣の存在に気付かず、脇を大きく抉られよう様に斬られる。

それでもやられないと左手に握ったWHKD22LRを突き出して発砲するが撃つと意識した瞬間には、既に隼士は射線から身体を外しており、仕返しとばかりに三日月短剣の突起の裏側に左手を添えて、燕の左手を抑え込み、素早く大きく湾曲した刃を生かして首を掻つ切った事で写シが剥がれる。

「やああ!!」

燕が吠えると同時に剥がれた写シを再展開、即座に蹴り上げを放つ。その瞬間に隼士の視界に燕の肌着が見えた事で羞恥心を刺激され動きが固まった瞬間に蹴り上げと共に打ち上げたにつかり青江が燕の手元に落下し、スカート越しに隼士の心臓を突き刺した。

それでも写シが剥がれない様に膝を付きながらも耐えた隼士に対して、燕は平突ききの追撃を首に目掛けて繰り出す。隼士は肘打ちで峰を叩く事で軌道を逸らすと同時に迅

移と膝の駆動を八幡力で強化しながら放ったシオルダータックルで距離を作ると左腰に下げていた波切曾凜蔵一本分と変わらぬサイズの箱を叩く。

「はあ!!」

シオルダータックルの際に両手持ちしていた波切曾凜蔵の超振動刀機構を作動させると速度だけを求めた左手での掬い上げる様な軌道で振るう。

振るわれた刃は燕の右手を切断し、空けた右手で左腰の箱が開いた事で露出した柄を掴んで、居合斬りの要領で燕の腹を斬り裂いた勢いで身体を回しながら倒れ、素早く八幡力を使った蹴り上げで燕の顎を蹴り上げて空中に投げる。

「スウ、スウ……スウ、スウ……スウ、スウ……」

隼士は速く、小刻みに息を吸い、肺に空気を溜める。時間にして数秒、燕が重力に従って落ちて来るまでの時間。

燕も何とか迎撃しようとするが隼士が抜いた右手に握る剣の美しさに目を奪われ、見惚れてしまう。

形状こそ波切曾凜蔵と同じだが、その刀身は隼士の性格と趣味嗜好とは相反する芸術的な物だった。

蠱惑的で魅惑的な月明かりを純銀の様な光沢で反射しつつ、その鋼自身も薄い青に輝く刃紋の無い薄刃の刀身。

白金をそのまま研いで作ったと言つても良い刃だが、燕は視覚的に捉えられる芸術性を持つてしても、隠しきる事など到底出来ない禍々しさに本能的に気付いてしまい、その身を震わせる。

そして……落下を止めるすべが無い燕は彗士の剣が届く場所、彗士の攻撃範囲に入つてしまう。

「ッ」

息を止めて右の剣で胴を一薙ぎ、間髪入れずに左の御刀を突き刺してから斬り上げに連動して捻りを加えながら振り切り、右の御刀を斜め上に斬り上げながら回転運動を行い、左の御刀で一薙ぎしてもなお止まらずに回転、両手の御刀で当時に左から右に斬撃を当てると即座に刃を返してX字に斬つてから同じ軌道で斬り上げる。それで終わる剣戟の嵐ではない。

斬り上げを放つてから僅かなインターバルも挟まずに両手の御刀を腹に突き刺して、右の御刀は上に、左の御刀は下に振るい、素早く掌で回された御刀は逆手に持ち直されて燕の腹を斬り、その勢いは回転運動に変わり、回転運動からの角度を変えた撫でる様な斬撃で燕の写シに痛々しい傷をつける。

それでも終わらない剣戟の嵐が燕に続けて吹き荒ぶ。

斬り払つた後の両手の御刀は追撃に腰から両手を前に払いながら斬り、戻す動作で脇

腹を引き斬ると素早く右の御刀を斬り上げた後に同じ軌道で斬り下げ、左の御刀で弧を描く様に振った後に下に向いていた右の御刀を上げて上段斬り。更に左の御刀で腹を突き刺し、腹に御刀が命中したと同時に燕の膝の裏側を蹴って跪かせ、右の御刀で首を撫で切りながら大きく後退する。

後退して御刀を構え直す隼士だが、今まで無呼吸で連続攻撃を浴びせていた事もあって息が荒いが円軌道を重視した撫で切る様な斬撃中心だった手数の劍戟は燕を倒すには行かなかつた。

「今度はこつちも番だよ……おにーさん……」

劍戟の嵐を耐えきつた燕がW H K D 2 2 L Rを構えたが、身体を覆う写シが溶ける、と言うよりも腐り落ちる様に剥がれて行く。

「どくきりぞりんげん毒切曾凜厳……写シを斬れば腐り落ち、荒魂を斬れば溶け落ち、肉を斬れば確実な死を静かに与える」

写シを張り直す燕だが、張り直した写シも徐々に腐り落ちる様に剥がれて行くのを見て、これ以上は危険と判断すると迅移で撤退する。

暫くは奇襲に備えて構えていたが、その心配は少ないと判断すると隼士は両手に御刀を持ったまま倒れる津佳沙に駆け寄ると津佳沙の目も弱々しく開けられると舞衣と沙耶香が興奮気味に津佳沙の名を呼ぶ。

「荒魂化しかけている……」

津佳沙の状態を一目見て判断した隼士が地面に膝を突いて津佳沙に聞くべき事を聞く。

「写シは張れるか？」

津佳沙は頷いた。

「このまま死んで楽になりたいなら首を振れ、苦痛を受け入れて人として生きたければ頷け」

津佳沙は迷う様に数秒だけ止まるが、首を縦に振った。

「最後、終わったら何したい？」

掠れた声が飛んで来る。最初からそれしか無いと言う様な即答だった。

「ま、い……く、き……」

途切れ途切れの言葉だが、この場にいる全員が何を言いたいのか理解すると隼士が毒切會凜敵を逆手に掴むと心臓を刺す為に刃を寝かせる。

「抜くまで写シを張り続ける。生きたい、生きたい理由を忘れるなよ」

もしも写シが溶ければ死にかねないと言う言葉は飲み込んだ隼士の言葉に津佳沙は言葉に了解したと言わんばかりに写シを張る。

隼士は行くぞの言葉も無く津佳沙の心臓に毒切會凜敵を突き立てる。

「ッ!!」

津佳沙に襲い掛かる耐え難い激痛と苦痛。津佳沙は身体を暴れさせるが沙耶香と舞衣がそれぞれ、左右半身を押さえ込みながら手を握り、彗士は波切會凛敵の鞘を津佳沙の口に咥えさせて舌を噛み切らない様にしつつ耐えろ、頑張れと目で訴える。

「もう少し……」

どれだけ経っただろうか、無関係な人間なら一分も満たない時間だが当人達には1時間にも感じる時間が経った時に彗士の顔半分以外を覆っていた荒魂の甲殻や鱗が溶ける様に剥がれ落ち始める。

彗士は更に体重を掛けながら毒切會凛敵に搭載された超振動刀機能を作動させて更に深く突き刺すと津佳沙の口から彗士の鞘を弾き飛ばしながらトカゲの様な荒魂が飛び出す。

「あれが……」

「津佳沙に取り憑いた荒魂だ」

舞衣の言葉に彗士は素早く毒切會凛敵を抜きながら答えると沙耶香が親の仇を見る様な目をしながら御刀を構えるが、それを彗士が沙耶香の顔の前に手を翳して止めさせる。

「大丈夫だよ」

そう言った瞬間にトカゲの荒魂は彗士の顔を見ながら憎らしげに吠えるが、その身体が徐々に溶け落ちかけのアイスに似て徐々に形が留められないのか身体を崩壊させていた。

最後に強く憎らしげに吠えると全てのノロが骨格から剥がれて禍神の御守りの原料となる骨格だけになると重力に従って落下、地面に落ちた衝撃で骨格はノロへと戻り少し広い範囲に撒き散らされた。

「骨格が手に入らないから使いたくなんだよ」

猟果の証として骨格を持ち帰りアクサセリーかナイフに変える事が伝統のゾリンゲンイエーガーに取って骨格が手に入らないから毒切會凜敵は好ましく無い。

それでも対刀使・武宮戦では軽く斬り付けるだけでも充分以上の脅威となる。

「あなた達」

突然の声に彗士と沙耶香が御刀を構える。が、現れたのは美濃関の羽島学長だった。

羽島学長の目は外骨格の無い荒魂だったノロの水溜りの次に毒切會凜敵に向けられた。

毒切會凜敵の話を知る羽島学長は一瞬だけ悲しそうな顔をするも直ぐに何処か嬉しそうな顔を浮かべる。が、刀使と武宮の4人に向けた顔は真剣そのものだった。

「あなた達は直ぐにここを離れなさい」

如何して此処に居るのか問う前に真剣な声で告げた言葉に4人は自分達の疑問を後回しにして、境内の外で静かに待つ柳瀬家の執事である柴田に連れられて、横付けされた車に乗り込む。

「全く……無茶する子の後始末ばかり押し付けられるわね」

羽島は携帯を取り出すと履歴からある人物に電話を掛ける。

「真庭さん。貴方の言う通りにしたわ……ええ、匿うだけでいいわ。貴方も教育者ならわかるでしょう？」

車が走り去った方向に羽島の顔が向く。

「此処からはあの子達で決めさせるべきよ。成長の瞬間と言うのはね」

電話の主からの何かを聞かれたのか驚いた表情を浮かべた羽島は少し笑いながら告げる。その笑みは怒っているから浮かべられる様な物だった。

「腹を括った女に言う言葉じゃないわよ。それに貴方が巻き込んだでしょう？ 後で覚えていなさい」

電話が無言で切れた。

羽島は仕方ないと言う様に溜息を吐くともう一度、子供達が去った方向を見やる。

「頑張りなさい」

聞こえる筈のないエールだが、車で眠りに落ちていた4人の頬が同時に緩んだ理由を

知る者は当人以外には知り得るはずが無い。

第二十八話 再会と隠された話

柴田の運転する車に揺られていた隼士が車が止まった瞬間から無くなるタイヤの揺れが無くなった事を感じて何度目かの覚醒を果たす。

「……到着ですか?」

「はい。隼士様」

柴田の返礼にそう言う言葉遣いは辞めて欲しいと言う含みを持たせた苦笑いで隼士は答える。

隼士の生活の殆どは6歳から12歳までの6年間、ゾリンゲンイエーガーの教育施設のギルドと呼ばれる場所で顔も知らない人間達と修道院の様な共同生活をしながら修行していた為に如何して人と共同する事に慣れていても人を仕う事に慣れていない。

端的に言えば、実家の柳瀬家の様な頼めば誰かがしてくれる生活は慣れないどころか好きで無かった。

自分の事は自分のみか、自分と手伝ってくれる人でやりたがるのが隼士の生活スタイルだ。

「!!??」
「沙耶香ちゃん、着いたよ」

いつの間にか津佳沙と沙耶香が入れ替わっていた事に驚きながらも特に何かした覚えは無いので直ぐにお越しに掛かる。

「け、い、しゅ？」

「そうだよ。お姉ちゃんも起きてね。ついでに津佳沙くんも」

肩から優しく沙耶香を引き剥がすと舞衣の肩を叩いて起こし、津佳沙は脛を軽く足作で小突いて起こす。

「いたい……」

「もうちよつと優しく……」

ギルドで弟分にやっていた様な起こし方に津佳沙が寝惚けた目で痛みを訴えると直ぐに目を覚ました舞衣が彗士の行動を優しく諫める。だが、サブカルチャーで見る様な兄弟の様な行動に舞衣の頬は僅かに緩んでいた。

「柴田さん。此処は何処ですか？」

舞衣が周りの景色を見ながら尋ねる。

周囲を緑の山々に囲まれたドが付く程の田舎の集落の近く、それも此処からは歩道も殆どは整地だけで済まされた様な道だけが続く様な場所。

「申し訳有りません。私も詳しくは……」

そう言いながらも、経度と緯度で現在地を教える柴田に舞衣も彗士も緯度と経度で教

えられても困ると突っ込んでいると背後に坂から人が走る様な音が聴こえて彗士が左腰の波切會凛敵を引き抜き、津佳沙が拳を構える。

「舞衣ちゃん!!」

「可奈美ちゃん!!」

見知った相手に津佳沙は直ぐに拳を解いて腕を下げるのと溜息を吐きながら彗士が御刀を鞘に戻すのは同時だった。

直ぐに舞衣に抱き着き、話したい事が多過ぎるのか全く整頓されてない話題を話したい事がいっぱいあるの一言で済ませる可奈美に舞衣は微笑みながら私もいっぱいあるよと優しく可奈美を受け入れる。

そして、可奈美の興味は直ぐ傍に居た沙耶香に向き、沙耶香も合流する事に喜びながら両手を握り上下に振る所為で沙耶香の顔が驚きと呆然で面白い顔になっているのを舞衣は助ける事無く笑って見守る姉の様な顔になる。

「よ、久し振りだな」

「元氣そうだな」

男同士の再会を祝う様に勝武居は自身の御剣みつるぎを彗士も波切會凛敵の方を軽く抜いて、互いに打ち合わせて金打を鳴らすと津佳沙の存在に勝武居が気付いた。

「あの時の様なケンには振らないよな?」

「うん。舞衣と隼士から道は教わった。後は自分で」

勝武居の意味深な言葉に津佳沙は頷きながら答える。

誰かと同じ道を歩く事は出来ない。でも、その道への行き方や歩き方は参考に出来る。自分の道を持つていなかった、その為の情報すら持つていなかった津佳沙にとつては道を見つけ方を教わっただけでも大きな気付きである。

「そうか。此処には他にもいっぱい居る。きつとお前……津佳沙の助けになる」
「ありがとう、勝武居」

固い握手をする2人は女子達の姦しい再会とは違う雰囲気があった。

「ウエルカーム。舞草は4人を大歓迎しますねー」

そんな一行にエレンの声が響き、帝人・姫和・薫・巧の4人もエレンと一緒に現れる。舞衣を見たねねとくくが同時に舞衣に飛び付こうとするがそれを先に予見していた巧が2匹の首根っこを掴んでいる為にねねとくくが弱々しく庇護欲を駆り立てる様な声を上げるが舞衣には通用せず、姫和に思う所があるのか少し引き気味な雰囲気で姫和を見やる。

帝人と隼士は勝武居が帝人を信頼し信用する眼差しを向ける事から隼士も彼に信を置く事にした。

信用し信頼する者が信用し信頼するなら、自分もまず信用し、信頼する。信用と信頼

の関係は自分の献身から始まる物だと隼士は考えているからだ。

隼士と帝人が固い握手を結ぶ近くで再会と合流を一行に黒塗りの車がフリードマンの運転で近付くと、後部座席から1人の女が降り立つ。

「舞草にようこそ、若き刀使に若き武宮たち。折神、朱音と申します」

折神。その言葉を聞いた瞬間に隼士が毒切會凛敵の箱を開けて、柄を掴み掛けるのを勝武居が必死に手を掴みながら、仲間どころか舞草の幹部クラスの人物だから大丈夫だと説得すると直ぐに手を離して無礼を認めて頭を下げる。

「構いませんよ、そう思うのも当然でしょう……少し場所を変えましょう。あなた達にもお話ししましょう……20年前の事を」

「ん？ ちょっと待てくれ」

20年前の相模湾岸大災厄。その隠された真実と忘却された2人の英雄、十条帝人と

十条姫和の母である柗箒と衛藤可奈美の母である藤原美奈都の存在。そして相模湾岸大災厄の元凶とも言える大荒魂、タギツヒメの存在とそれを鎮める心中技の存在。

それを知らされた全員の中でカルロにはある事が引つかかった。

「その英雄2人が神風特攻したんだよな？」

確かめる様に告げるカルロ。

その言葉に朱音は確かに頷き、箒の心中技である真の三段階迅移を美奈都が寸前の所で助けたと僅かな訂正を行う。

「じゃあ、舞草が今から討とうとしている折神紫は何だ？」

「タギツヒメだろ？ 助かったって事は効力が薄くなる訳だろうから、力を削いだけだろう？」

勝武居の言葉に朱音は再び頷いて無言で肯定する。

「タギツヒメは恐らくですが、姉に憑依する事で消滅を免れたのでしよう。そして……」
言い淀む朱音に彗士が続ける。

「荒魂に憑依された者は人間としては死に、荒魂が人社会に紛れ込む為の皮になる。普通通わな」

彗士が隣に座る津佳沙を見やる。

「稀に荒魂に対抗してまだ人間として生きている場合がある。そうであれば、やり方次

第ではまだ助かる。前例は此処に居る訳だが……」

「じゃあー!」

可奈美が立ち上がるが、彗士は至って真顔で答える。

「20年……そうだな、20年も副作用の強い抗がん剤を毎日欠かさず自分の意思で打ち続けられるか?」

口外に既に荒魂になっているだろうと告げる彗士に朱音は2年前の拝殿、その奥で内に潜む何かと対話している時の姿を見た事があると話す。

「それを聞いた私が。ひいじゃないな、十条箒に助力を願った」

襖が開けられるとそこには1人の仕立ての良い服を着こなした男性が立っていた。

「舞草の幹部の1人でその朱音と同様に創設者の1人である指織蒼^{ゆびおりそう}だ」

その自己紹介に彗士とカルロ以外の武宮が僅かに腰を上げた。

現在では刀使と武宮の教育施設は公的には五箇伝しか無いが大昔、それこそ日本国が大日本帝国だった頃は天皇家を荒魂から守る為だけの刀使や武宮、当時は刀宮を育成する名家が存在した。

それが 指織家であり、指織家出身者の実力は一線を超える実力者であり、優れた強者を指織の実力者と言う様に折神家と同様に諺や謳い文句の元にもなる程の名家だが今では皇居警察お抱えの指導係としてその名が有るだけで一般人には指織家の名が知

られている事は稀である。

「どうして指織家の人間が舞草に……」

どちらかと表社会でも異界に近い天皇家が関わる以外は早々に関わらず、関わっても影に隠れるか影に徹する指織家がこうも表からも裏からも関わるのかが不思議だった帝人が言葉を漏らす。

「そうだな。十条帝人、君の疑問を晴らそう。20年前の大災厄は刀使が活躍したと思われているが、当然ながら武宮も活躍した」

一息の間を開ける。

「あの最悪の中でも楽しい一時はあった。重い話の後だ少し軽い話をしよう。二度と戻らない、だが輝かしい時だったあの時間……」

また一息の間が置かれた。

「隠された訳では無い、隠れてしまった戦いの話を」

第二十九話 隠れた話

20年前の江の島。普段は観光客で賑わうこの場所だが、今は観光客の楽しそうな声では無く、男達の怒号とこの世のならざる叫び声が響く。

その中の1人に身体を巻き付けて狩りを行う蛇を思わせる骨張った顔にオールバックにした黒髪と武術をする上で鍛えられた身体を持った男がいた。

「だえらあ!!」

ナナフシの顔を輸送機のT型尾翼の様な翼を頭頂に生やし、牙の生えた丸みのある化け物の顔に変えた生物とも言える存在、荒魂だ。超常の存在である荒魂だが、そんな荒魂相手に抜き手をぶちかます。

「ふうん!!」

顔の中心に己の腕を突き立てると肘を曲げて側面に回った男は首を断ち切らんとばかりに手刀を叩き込んで化け物の首を切断する。

「なぐさ菜草!! 後ろー!」

荒魂を首を切り落とした事で倒した男が残心を取ると鰻に似た別の荒魂が背後から襲い掛かるのを見た同じ年頃だが、日本人の身体にの男が呼び掛けると裸足の足の甲で

側頭部を蹴って、噛み付きの軌道を変えさせる。

「真庭先輩！」

「わかつてるよ！」

菜草と呼ばれたオールバックの男の声に、肩で赤い髪を切り揃えながらも前髪だけはバンダナで止めて視界を邪魔しない髪型の緑の瞳に頬から顎に掛けてのラインが細い何処か学者然とした青年が答えると同時に弓の弦が空気を震わせる音が鳴った。

真庭と呼ばれた男が持っていたのは一丁のボウガン、放たれた矢はしっかりと蹴飛ばされた荒魂の頬を貫いた。

「綺羅先輩！ 足りてない!!」

荒魂が倒し切れていない事にボウガンを使う武宮である真庭に、色白の素肌にな性的な顔立ち、アクアマリンの青い目に色白の肌と目と同じアクアマリンの美しい髪を僅かに土で汚した少年が叫ぶ。

「わかつてるよ！ 相楽！」

その叫びを聞いた綺羅は、ボウガンのレバーを3回、素早く動かして弦を引き、固定式弾倉に入っているボルトを発射位置で固定させる。

真庭綺羅のボウガンは1発つつ弦を引き、それからボルトを装填するタイプで無く、上部に設けられたレバー操作を一定回数だけ行くと空気圧により弦とボルトを発射可

能な状態へと移行させるタイプだ。

「動くなよ!!」

綺羅の言葉と共に放たれた3本目のボルトは三角形を描く様に突き刺さり、荒魂が名状しがたい叫びを上げると三角形の内側のみが弾ける様に周囲にノ口を撒き散らながら物言わぬ残骸が地面に倒れる。

神社などの神聖な場所で祈禱を受けた綺羅のボルトは命中の仕方により荒魂のスペクトラム化に作用して荒魂を祓う訳だが、三角形の着弾は周囲にノ口を撒き散らしてしまふ。

「蒼様!!」

「聖良、使えー!」

20年前の大災厄に参加した指織蒼が荒魂に囲まれたのを見たアクアマリンの少年、聖良に手刀で首を切られたのと同じ種類の荒魂の首が円盾と細身の剣、レイピアを持ち、黒髪を短く切り揃えた丸み帯びた童顔の男から投げ渡される。

「くれな先輩! ありがとうございます!」

投げ渡された頭を片手で掴むと蒼のいる方向に向ける。

「っふ」

掛け声と共に指を動かすと片手で掴んだ頭が勢い良く飛んで行き、同じ頭を持つ荒魂

に命中し、機能停止に陥らせる。

結月聖良。空掌により荒魂の残骸を掴み、真空に空気が入った際の気圧変化により発射、互いにぶつける事で荒魂を行動不能にさせる武宮の1人。

腰には対荒魂用の特殊電撃警棒を装備しており、祓うと言うよりも行動不能に陥らせるのが仕事だ。

「五條先輩！ 高津先輩！ 手伝って!!」

「理玖の奴!!」「羽島!!」

夜明け直後の空を思わせる瞳に耳元を残してザツクリと刈られた土ホコリの付いた茶色の髪。顎の線は細いが眉毛は顎とは対照的にくつきりしており、意思の強さを感じさせる少年が髪を靡かせ、その瞳で蒼の危機を捉えながら、穂先に捻れた刃を持ったダブルアックスを掲げながら走り出すと同時に叫んだ。

その言葉に聖良に荒魂の首を投げ渡したレイピアを持った武宮、五條くれは。そして高津菜草がダブルアックスの武宮、羽島理玖を追い掛ける。

蒼は救援に気付いていたが何も言えなかった。と言うよりも礼を言う暇もない程に荒魂が殺到していた。

鰻に似た荒魂を分厚い氷の様な水色の刀身を持った太刀の平突きで撃破、横から迫る顔に翼を生やした化け物顔のナナフシ荒魂に横薙ぎの一閃で祓う事に成功するが別の

ナナフシの荒魂に押さえつけられてしまう。

「くっ……らああ!!」

八幡力を使つて無理矢理に斬り裂いて自由を得た蒼だが、それまでは身動きが出来ずに隙が生じてしまい、背後と両側面からの攻撃に対応出来なくなつてしまう。

しまったと言いながらも、なんとか武器を構えようとしたが間に合わない。だが、その3匹を後方の一体をくれはが串刺しにして受け止めて、完全に制止させると素早く引き抜いて甲殻を躲す様に刃先で斬りつけて祓う。両側面の荒魂は菜草の拳で顔を碎かれ、理玖の斧を叩き付けられた上で穂先を突き立てられて祓われる。

「少し深呼吸して下さい」

鬼瓦に車輪と虫の様な足を4本付けた様な荒魂に空掌の技の1つである真空を使つた攻撃で甲殻を支えるノ口だけを弾き飛ばして行動不能にする。

「助かったよ……」

深呼吸を行なつて息を整えた蒼を先頭に石階段を上がる。

蒼・綺羅・菜草・くれな・理玖・聖良の6人が受けた命令は大荒魂を鎮める為に出撃した特務隊8人から発光信号で撤退を伝えられた際に撤退が難しい為にこの6人を追加で投入、撤退する特務隊を護衛するのが仕事なのだが、荒魂の数が多い故に今だに合流出来なかつた。

「うわあ……」

石階段を上がった先で大量の荒魂の残骸を踏み付ける五体満足の様々な荒魂の群れを見て蒼が台所でゴキブリを見つけた様な顔を浮かべる。

「行くしかないだろう……」

菜草が真つ先に走り出し、背後から百足に取り付いただらう荒魂の尻尾を掴むと八幡力を使って振り回して数体を行動不能にするとその内の一体の残骸を聖良が回収して弾き飛ばす事で遠方の荒魂を無力化すると付近の荒魂が気付いて2人にその牙を向ける。

「全く……」

作戦も何も無い動きに呆れながらも蒼が迫る荒魂の一体の首を上段斬りで切断、流れる動作で掬い上げる軌道に変えて栗鼠を凶悪化させた様な荒魂の腹を切り裂くとそのまま回転斬りで複数の荒魂を同時に切断する。

蒼が作り上げた荒魂の残骸を縫う様に移動するくねなが鞘にしまっていたレイピアを引き抜く。

レイピアと言うよりもトレンチナイフを大型したかの様な形状でナックルガードと刀身は美しい乳白色の和鋼で生み出していた。

最初に目を付けたのは背骨の先に剣鉈の様な形状の尻尾を生やした甲冑の肩のパイ

ツを手を変えて動く二足歩行の荒魂だった。

荒魂はその二本の手足の片方で叩き付けを繰り返すがそれを寸前で身体を回転させて回避すると同時に叩き付けた腕を殴って大きく凹ませると同時にヒビ割れを起こさせる。

「グギャアアアアア!!」

「痛みなんて感情があつたのか……」

殴られた事で痛んだ腕を振って鳴き叫ぶ荒魂にくれなが驚きながらもまたを抜けて、剣鉦のような甲殻を尻尾を切断して背骨の様な甲殻を駆け上がって後方から首を指して絶命させると八幡力を使って跳躍、次の荒魂の頭部に着くと背中を滑って移動、首元を刺し、また八幡力を使った跳躍と同時に抜き、別の荒魂に正面から飛び移り首元を刺してまた八幡力の跳躍で離脱するを繰り返して次々に一撃で仕留めて行く。

理玖は最初の荒魂に斧を叩きつけて祓い、そのまま横に振ってもう一体にダメージを与えると抜いた勢いで振り向いて別の荒魂に斧で殴り付ける様に振ってダメージを与える素早く武器を回して殴り付けた荒魂に八幡力を使った石突での刺突で距離を取らせると同時に後ろに突き出して穂先に後方の荒魂を刺すと抜けない様に捻りながら八幡力を使ってハンマーを振り下ろす様に振って石突で突いた荒魂にぶつけて行動不能にさせる。

「邪魔だ!!」

自分の身体を軸に風車の様に回転して周りの荒魂を次々に両断、開いたスペースに棒高跳びの要領で飛び上がると鎌首を上げた蛇型の荒魂に真つ向から斧を叩き付けてこれを両断した。

「結月、そこは危ないぞ」

スタンロッドで動きを封じた荒魂のノロを吹き飛ばすと同時に綺羅からの警告を聞いてバックステップすると曲射で放たれたボルトが地面に突き刺さる。

次弾の装填を急ぐ綺羅に車輪と鬼瓦が合わさった荒魂が突進を行うが飛び上がった回避すると同時に頭頂部に受け継がれ、心鋼へと変わった三十年式銃剣を突き刺して撃破、その際に生まれた残骸に立つと再びボウガンを構えた。

「蒼！ 目の前の荒魂を退かしてくれ！」

良く通る綺羅の頃に蒼は柄頭と八幡力を使って荒魂を突き退かす、荒魂が地面に足を突き立てて耐えようとするが、それを突如として飛び込んだ菜草の蹴りが関節部を破壊して阻止する。

綺羅は荒魂が退けた瞬間にはボルトを発射しており、ボルトは弧を描く様に戦場の上を突っ切つて、地面へと垂直に突き立つ。

それを見た菜草は綺羅の思惑を察したのか直ぐに行動を起こし、次に綺羅が打ち込む

だろ、う付近の荒魂を蹴散らしに掛かる。

最初の荒魂に正拳突きをぶつけて頭を砕き、その隣の荒魂に回し蹴りをぶつけて身体を砕くと、間髪入れずに中段正拳突きで荒魂の頭を凹ませると凹んだ場所に抜き手を突き刺す。

「ぬうおおら!!」

そのまま抜かずに腕をハンマーの様に振って横から迫る荒魂にぶつける。

ぶつけられた荒魂は粉々に砕けた際に生じた破片を気にする事無く、菜草に喰いつかんとムカデの荒魂が突進で迫る。が、菜草は慌てる事なく、腕を回す様に振る。

振られた腕は荒魂の側頭部に当たるといわず様に斜め後方に向きを変えさせる。

いなした先には、聖良の空掌砲によつて飛んで来た大型荒魂の包丁の様な角が突き刺さつて撃破されるムカデの荒魂。

「回し受け、お見事です!」

「当たり前よ。あらゆる受け技に要素が含まれる手回し受け、受け技の最高峰だ!」

聖良の賞賛に回し受けの素振りをしながら口を動かすと蒼の叫び声が戦場に響く。

「撤退する特務隊だ! こっちに寄せろ!」

蒼が小型の荒魂を上空に斬り飛ばしながら出した指示に理玖とくれなが立ちほだかる荒魂を蹴散らしながら合流に為の道を作る。

理玖は穂先の刃と斧に八幡力を使つてパワーで潰して行くが、くれなは的確に甲殻を躲しつつも体内に存在する荒魂を荒魂として形を取らせる核と呼ばれる柔買う甲殻を的確に貫いて撃破して行く。

「現世の向こう、陰世の千里万里から今日も荒魂が迫り来る」

準備を終えたのか綺羅が蒼の護衛を受けながら、手を組んで何かの呪いの言葉を紡ぐ。

「虚仮威しの荒魂か、身の程知らず荒魂か、はてはこれはこれとはこれこそが真の荒魂か……」

綺羅に迫る荒魂を特務隊の新見紗南が御刀を横に振つて斬り払うがその残骸が綺羅に当たりかけるのを菜草が空掌でキャッチ、別の荒魂に放ちながら注意しろと言葉を投げるが。

「荒魂に挑む巫女と氏子はかくも多彩な技で抗う、非力な己は言葉を武器とする、掲ぐは祝符、謳うも祝符、授ける影は紅色の異形……」

綺羅の言葉に何か不味いものを感じたのか周囲の荒魂が綺羅に迫るがそれを特務隊と救出隊のメンバーが壁となつて綺羅を守る。綺羅は周りを意識していないのか、それともそんな余裕は無いのか言葉を紡ぐ事に集中する。

「倒し倒されを幾度と無く繰り返すも変わらぬ明日が来る……」

ついには視界外からも荒魂が綺羅を倒そうと挑み来るが、終わるが見えた事で各員の振るう刃に、手に、足に鋭さが戻り、増す。

蒼が地面を滑りながらいくつかの荒魂を両断すると腕と足に力を溜めながら、綺羅の言葉を邪魔しない程度に綺羅同様の呪いの言葉を紡ぐ。

「この手にこの意味がある。我を見よ我を見よ」

荒魂の目標が綺羅から蒼が変わると蒼が太刀に振られる様に動き、接近する荒魂の顔を切断する。

「己の意義をこの言葉に乗せる。その意味を、その想いを、力の限りに……紡ぐは呪符、宣ぶは呪符、重ねれば……」

綺羅の言葉が確実に進んで行く度に荒魂の意識が蒼から綺羅に戻って行く。

綺羅の直上から垂直落下する翼が棘の生えた鎧の様になり、嘴だけが異様に発達した姿の鳥の荒魂が現れるが、結月が寸前で御刀を突き刺して止めると聖良が空掌で回収、ムカデの荒魂に嘴から当たる様に飛ばして撃破する。

「己の意味を打ち立てて表演って見せるは剣戟」

力任せの動きから一転して太刀を太刀と思わぬ舞う様な動きで荒魂を斬り破う蒼の剣戟。

その舞うような剣技に魅了され、自ら斬られに行く様に荒魂が集まる。

「ついには変わる明日が為、いざや問わんこの力、我らが生きる空の高く、天より高き場所に居ずるやんごとなき柱が一柱、イツキシマヒメに届かせん……」

いい加減不味いと荒魂も本能で理解したのか決死隊と言わんばかりに綺羅を喰らわんと空から陸から、正しく四面楚歌の如き有様になると蒼の言葉に力が增える。

「勝ちにも負けにも等しく価値は無く……我を見よ！ 我を見よ！ と叫んだる！ 紅の影は挑戦者故に此処へ来る！ 刃を振るう氏子のその周りへ!!」

綺羅の詠唱も最後に近づいたと判断した蒼の詠唱に荒魂が綺羅から蒼に再び移ると蒼は円を描く様な軌道を中心にした広範囲に及ぶ斬撃で場所を関係無く、荒魂の身体を甲殻ごと切断して行く。

刃に付着した荒魂の血とも言えるノロは遠心力により飛び散り、ノロの放つ紅色の光が蒼の剣舞を彩る花吹雪の様にも見える。

「告げます！ おおまえのこのなにおいて、ともどもきこしめさんと！ よろずのひとにあらたまに、あまねくしろしめさんと！ よろずのひとにぎたまに、かくつくさしめたまえと！ あらたなるうつしよがため、かくかしこみもうすこと！」

綺羅は手を組んだ手を一瞬だけ外し、即座に空気を震わせる程早く、強く手を合掌する。

「恐美畏美白す」

綺羅の言葉に鍛えるかの様に地面に突き立てられたボルトが光り、地を這う様に光線を発すると六芒星が作り出され、六芒星の中にだけ、青い稲妻が不差別的に降り注ぐ、無論ながらその中に居る武宮や刀使にも降り注ぐが一切のダメージは無く、逆に御刀などの神性が宿るものに雷が帯電したかの様にバチバチと音を立てる青白い光が此処にあつた。

菜草だけは全身に帯電したいた。

「いつ見ても菜草がすげー」

「当たり前だよな」

綺羅の言葉に菜草が天地上下の構えを作りながら答える。そんな彼等と彼女達の前には今だに大量の荒魂がひしめいていた。

「ボルトは？」

「は？」

結月の言葉に綺羅はお前は何を言っているんだと言うように短く答えると紗南から気絶している雪菜を受け取り肩に担ぐ。

「タマなし」

「それはしようがないと思うよ」

理玖の言葉に江麻が優しく突っ込みながらも武器を構え直す。

「ほな行こうか？」

「せやな。死ぬ覚悟は？」

いろはは死ぬ覚悟は出来ているが、死ぬ気は無いと目で語る。普段は細目で閉じている様に見えるいろはだが、こういう時に開く目は誰よりも心強かった。

「祝句が切れる前に突っ切るぞ!!」

蒼が誰よりも早く駆け出し、荒魂を斬り祓う為に肩に担いだ。

「そこから必死過ぎたのと時間で曖昧だが、無事に拠点まで戻れた訳よ」

そう言つて話を区切つた蒼に若い武宮と若い刀使、特に勝武居と津佳沙が驚く。

「身体に神性帯つてるってどう言う事？」「カラダニヴィンセイヤドウルツテオンドウル
デイスカ！」

勝武居の口調が可笑しい事になっている事に気付いた可奈美が一言だけ断りを入れ
ると鞘を付けたままの御刀で頭を殴つて正気に戻す。

勝武居とは幼馴染に間柄故にこういつた突発的事態への対処法は心得ていた。

「ま、まあ……此処は諸説ある……が、神秘性が一番高いが、一番有力な説がある」
その蒼の言葉に全員が耳を傾ける。

「殆どの体術系武術では極めた者を神として扱う場合があるだろう。あるいは優れた人間の腕を神の腕と称する場合もあるが……」

この言葉に全員が思う場合があるのか頷いてみせる。

「刀や剣も鋼を鍛えて武器とするという言葉通り、武術家も身体を鍛えて武器とする」

「だから、強い想いを持って鍛えられた身体は、心鋼と同様に神性を帯びる場合がある」
隼士の言葉に蒼は強く頷くと隣の真庭学長が語る。

「ウチの旦那も凄かった。詠唱使いなのに銃剣術では右に出る者はいなかった」

何処か懐かしむ真庭学長の言葉に、同じ長船の所属である薫・巧・カル口の表情が曇る。

彼等は綺羅の現状を知っている。綺羅はそれから発生した荒魂事件でS装備の実験運用中にS装備の不具合により下半身不随を後遺症で残す程の大怪我を負っており、今では権禰宜の仕事しながら長船で技術者兼科学者として活動している。

「真庭綺羅って凄い武宮だったんですね」

雰囲気を変えようと舞衣が話し掛ける。

詠唱術を使った荒魂討伐は普通の武宮や刀使には出来ない。基本的に先天性の適正と共に剣術以上に覚える事が多い事に加えて、そこまで実戦的でない技術という事もあり、今では全滅しているのでは無いかと言われる程に珍しい対荒魂用の戦闘技術だった。だが、使えれば声が届く範囲に居れば荒魂を一撃でノ口に戻せる戦闘技術である。しかも、記録に残る詠唱術の神主は腕っ節は良く無い。

「同時に当時から宮掌くじょうでもあった。真庭神社と言えはそれなりに名の知れた神社だ。それと同時に由緒ある神社である」

蒼の言葉に首を傾げる勝奈美と勝武居に長船のカル口以外の3人がその訳を話す。

「真庭神社は血筋を辿ればとある宮家の血筋に辿りつくくんデスよ。それと同時に対荒魂の舞や神事を専門にしてきた神社であり、一家相伝で管理している今では珍しい神社の一つデスね。折神紫が刀剣管理局のトップになってからはただの神社デスけどネ」

「ただの神社って、昔は違ったのか?」

勝武居の言葉に今度は薫が話し始める。

「昔は特型荒魂って呼ばれる特殊な荒魂のノ口を専門に祀っていた神社だったんだよ。真庭神社の神主は殆どが詠唱が使える。使えなくても神性を帯びた武器を使える。まあ、今は刀剣管理局のノ口を一極集中して管理する様になってからは詠唱が使える人間は減ったがな」

「ノ口を祀る事に何か意味があったんですか？」

隼士の言葉に巧は首を振る。

「荒魂化させない以外の意味が有ったかは分からん。だが、真庭神社は数少ない特殊だった荒魂のノ口を祀る神社だった。それに加えて何か特別な意味や何かがあったのかも知れない。ただ、ノ口を祀る場所が減った事で詠唱を使える人間が産まれにくくなったのも事実だ」

巧さん言葉が終わると同時に朱音トリチャードの口が開く。

「一極集中管理が始まると同時にS装備などの技術を含めた様々な荒魂の外骨格の加工方法などが発表されました」

「まるでどこから出てきたのかわからない物や同時は存在すらしないだろうと思われるいた技術もね」

蒼がパンパンと手を叩き、全員の意識を集める。

「流れで吐いちやつたけど、そう言った事で不審に思った朱音様が自分に声を掛けて、2人で色々な場所に声を掛けて舞草を立ち上げた。君達にも協力を願いたい……」

真剣な表情から一転して、人当たりの良い笑顔を浮かべる。

「真実と思っていた事が嘘だったショックや色々とあって疲れているだろう。今日はゆっくりと心身を休めると良い。返答はそちらのタイミングで構わない。時間は多く

は無いが、無い訳じゃない」

話は終わりだと言ってリチャードが立ち上がる。エレンとカルロが回収したアンプルの調査があるからだ。

残された各校に学生刀使や武宮もここから先の身の振り方を考えるのとやらねばならない作業もあり、次々に立ち上がる。

朱音と蒼は生徒達を見送る為に共に屋敷の外に出ると姫和と帝人、可奈美の3人を呼び止める。

立ち止まる5人を満月の幻想的な青白い光が優しく照らす。

「私はこうも思うのです。もし紫の作戦が成功していたら……美奈都さんと篝さんが戻って来なかったら、あなた達は此処に居ませんでした」

朱音が3人の顔を見渡す。

「今、あなた達が此処にいる事、私はそれが、あの2人の本当の願いだったんじゃないかと。紫の事は私と此処にいる舞草がなんとかします。だから……」

朱音の言葉に姫和は考え込むかの様に俯くが、帝人は何も言わずにそれを見るだけだった。

「千鳥は美奈都、小鳥丸は篝が適合していた御刀だ。そしてそんな御刀が娘達を選んだ。感慨深いものがある」

蒼は御刀から感じる他の御刀とは違う何かを心の内にしまいながら告げる。まるで自分の心を内を悟られない様にする様に。そして蒼の目線は帝人に移る。

「貴方にお渡ししなければならぬ物があります。無用な長物になる事を祈る反面、もしも使えれば貴方のお祖父さんと同じ力を得るでしょう」

含みのある言葉だが、それは朱音にしかわからない深意があった。残りの3人にはまだ経験が浅いのか？蒼が上手いのか感じ取る事は出来なかった。

それが何か気になる帝人だが、まだ後日に渡すと蒼は背中を向けて残った仕事を片付ける為に朱音を連れ立って去って行く。

一体、なんなのかそれを知らない帝人と姫和は互いの顔を見つめ合うだけだった。

「今から20年前って……」

「学長が現役の時代……」

「知らない技と武術……」

「凄いの一言だった……」

隼士・津佳沙が寢床の準備をしながら今日の話を思い出す。

「私はこれからどうすればいい……？」

津佳沙の覇気の無い声。隼士はこんな声を聞き慣れていた。ドイツに居た頃に自分のことで悩む同年代の狩人を多く見ていたからだ。隼士の会ってきた狩人は皆が皆、今の津佳沙の様な声で話していた。

「さあ……」

隼士自身も迷っていて、どんな言葉を投げればいいか分からず、突き放す様な事を言っつてしまい、自分に罪悪感を抱く。

「私は戦う事しか出来ないから、でも……みんなの役に立ちたい」

津佳沙の言葉に隼士がくつくつと滑稽な物に遭ったという風に笑い、己が滑稽な存在になったかの様に嗤う。

「どうすればいいかは自分で決められるんだ。お前が戦う事しかできないならみんなの為に戦えばいい。それが自分でいいと決めたなら」

津佳沙の言葉に隼士は自分の師匠でもあったマイスターの言葉を思い出す。

『どうすれば大丈夫かじゃない、自分の意思でどうすればいいかを決める。それが狩りだよ』

懐かしくも頼もしい言葉を思い出すと、ドイツのマイスターの事を思い出す事は苦痛でしかなかった彗士だが、何故か苦しさを感じない。

「彗士？」

「なんでもないよ。ありがとう」

津佳沙が首を傾げると分からなくてもいいと頭をクシヤクシヤと撫でる。自分にマイスターがしてくれた事を津佳沙にする様に。

彗士は何となくわかつていた。津佳沙が戻つて来た事がそのキツカケなのだ。

「辛気臭い顔をしてんじゃねーぞ!!」

勝武居が彗士に枕を投げ付けて、顔面に命中させる。

「ぶっ殺してやる!!」

手元の枕を勝武居に投げ返す彗士だが、勝武居はこれをしゃがんで回避すると後ろのカルロの顔面に命中する。

「ほう。枕投げですか」

「長船枕投げ大会入賞の俺が相手だ!!」

その後は時間を忘れて枕投げ大会勃発。そこに蒼が注意に来るが楽しそうだった為
に飛び入り参加。

夜中になつても続いた枕投げに五月蠅いと言いながら舞衣が居合斬りで彗士の腰を

切断、津佳沙には沙耶香から静かな注意を貰い、巧は薫の袂々切丸の殴打を喰らって沈み、カルロはエレンの鳩尾砕きで沈み、蒼は朱音に柔術で倒された上で和鋼の短剣を突き刺して止めた事で中止される。

なお、殺気を感じて写シを張ったお陰で全員が助かった。

第三十話 一夜明けて

舞草の隠れ里、その早朝に少年少女の叫び声と金属同士が当たる澄んだ音が響く。

「っー！」

だが、時に声にならない痛みにも苦しむ声が聞こえる。

「フ」

苦しげな声を出した少女の腕には大きく湾曲したナイフが絡め食い込む様に刺されており、軸足を払われると同時に腕のナイフからひっくり返される様に背中から地面に倒れる。

倒したのは茶に黒の混じった短髪に深緑の目が特徴な男子、柳瀬隼士だった。

「はあー！」

隼士に羽織とカッターシャツを合わせた様な制服デザインの長船の女子生徒が片手での突きを繰り返すが、隼士はそれを横目で確認した瞬間には正中線を揺らさずに回避、同時に向き合う。

隼士は左手で相手の御刀の鎬を押して下に倒すと同時に予め抜いていた湾曲したナイフ、三日月短剣に見受けられた出っ張りを手首裏に引っ掛ける。

引つかかった瞬間に鎬を掴んで居た手を相手側に押し御刀を奪うとそのまま相手の脇に存在する動脈を切断する。

普通なら血が吹き出す瞬間だが、写シを張っている刀使だった為に写シが剥がれるだけで済む。

「舐めるな！」

「そつちです」

倒された刀使が両手で保持した御刀で突き技を放つも彗士は三日月短剣の出っ張りに左手を添えて相手の腕に引つ掛け、ウェーブというインナーマッスルを使った体術で大きく突きの軌道を変えるとそのままガラ空きの首に手を添えたままで斬り付ける。

斬られた刀使の首は引つ掛かれ抉れた様な傷を残しながら倒れると、彗士は振り向き様にナイフを投合。

第一投はストリートで可奈美と鏢迫り合いになっている刀使の肩を貫通し、第二・第三投は真上に投げ、第四投は携帯投げ鎌を湾曲な軌道を描かせて投げて勝武居の背後に回った槍の長船武宮の膝関節のみを切断する。

「ナイスだ！」

片膝を突く様に倒れた長船の武宮に長めの髪を後ろで一房に纏めた整った顔立ちの少年、勝武居は容赦無く御剣の中腹を首に突き立てると素早く長船の武宮を飛び越えて

刃先を掴む。

「ぬん！」

白い髪にアメジスト色の瞳が美しいまだ幼さを感じる丸い顔立ちの武宮、津佳沙が勝武居の動きを察して自分が戦っている武宮の刀を腰を曲げて回避すると足を掴んで倒すと同時に胸に勝武居の護拳兼斧の部分が突き立てられる。

「やあー！」

そして自分の相手が無くなった津佳沙は自分と同じ白い髪にアメジスト色の瞳を持つ刀使、沙耶香から距離を開けた刀使の頭を後ろから空中回し蹴りを当てて転倒させると落下の勢いを乗せた踵落として写シを剥がす。

「そーいー！」

フリーになつた勝武居は黒い髪に赤い瞳と強い意志を感じる武宮、帝人と切り結んでいた長船武宮の足を柄と斧の間で引つ掛けるとそのまま引つ張つて転倒させると背中を踏み押し付けながら、御剣を空中に回転させながら投げて柄に掴み直すとそのまま首を切断する。

「らああー！」

帝人は切り結んでいた武宮が転ばされた瞬間には自身の妹であり、長い黒髪と同じ様に赤く輝く瞳が意志の力を感じる刀使、姫和と鏝迫り合っていた刀使の脇腹を御刀で

刺し、そのまま振り抜きながら側頭部を回転式拳銃で銃撃して石橋を叩くような動きで撃破する。

「きいええええ!!」

長い桃色の髪が特徴的な低身長 of 刀使、薫の叫びと共に振るわれた身の丈に合わない大太刀の一撃をサイドステップで回避した長船の刀使だが、背中に帝人の銃弾を喰らった事で動きを止めてしまった隙に横薙ぎの一撃でやられてしまう。

「ぶうらああああああ!!」

浅黒く焼けた肌に筋肉隆々の肉体、そしてそんな肉体だからこそ振れるだろう巨大な腰鉈を携えた武宮、巧は同じ体格で大剣を振るう長船の武宮を相手に上段斬りを放っては空中でぶつかり合い、バックステップで下がってまたぶつかり合うを繰り返しており、ごく僅かな空間だが衝撃が逆っており近付きたくても近付けない空間が出来ていた。

「シネエエエエ!!」

「ほっ」

長い金髪にサファイアのような様な碧眼に隠しきれない巨乳を誇る刀使、エレンが鬼気迫る相手の突きを上手く柄頭で受け止めた瞬間に津佳沙の爪先が鳩尾に命中して崩れ落ちるとエレンが胸元を蹴り飛ばし、地面に転がった瞬間に飛び上がった沙耶香が空中で御

刀を下向きに振るってトドメを刺して写シが剥がれる。

舞衣と戦っていた刀使には彗士が投げたナイフが空中でぶつかり合って垂直に落下、両肩を切断された事で膝を突くと舞衣は唾然として立ち止まってしまふ。

「動いて!!」

彗士が叱責すると同時に背中に回って首に三日月短剣の形状を生かした斬撃で首を刺し貫くとそのまま引き抜いた勢いを使って回転、残った筋肉隆々の武宮が巧から離れた瞬間に投げナイフを投げて撃破する。

「そっまで!」

監督役の長船の刀使が訓練を止めると頭を搔く。

「一人一人の質は悪くない。連携も出来るが……出来るんだが」

納得いかないと言う風に言い淀む。

彼、彼女らは最初の頃こそ集団戦の訓練であり、指揮役に任命された舞衣の指示に従う様に動いていたが、舞衣からの指示が何かしらの理由（舞衣が戦闘に集中し過ぎで指示が出せない・周囲の音が五月蠅くて指示が拾えない）などで勝手に動き始める津佳沙と沙耶香が発生。

さらには津佳沙と沙耶香の触発されたのか集団戦経験の多い彗士が三日月短剣を使って無双、それを怒られてからは自分の出来る事を常に認識しつつ周囲を確認して何

をした方が良いのかを自己判断して自己決断で動くと言う、通信手段が無い野良で参戦しているプレイヤーのみで構成されたオンライン対戦の様な戦いを見せてまでも無双。

そして彗士の動きと考え方を聞いた奴が自分の周囲数名のみだが周りを見て勝手に動き始める。なまじそれなり以上の実力者揃い故にその結果は先程の通りだ。

「二対集でも強い、と言うかそつちが強い彗士が数人を同時に相手取って数の優位を作り出して、彗士が相手取って手が空いた奴が別に奴の援護に走って、各自で勝手に動いて各個撃破……」

日本では主攻撃手・主防御手・主遊撃手・指揮手の四人に加えて指揮手以外に副手を付けた四人から九人の部隊を編成し、各人を指揮手が指揮を行ない、全員で一個体を撃破する戦略が取られる。

これが最も効率を重視しつつも安全性を取った戦術だからだ。

対して彗士の勝手な行動から始まった今回の訓練の連携は味方の一人に負担を強い状態を作る事で、他のメンバーに数的有利を作り出して、負担を強いられた仲間がやられる前に完全な数の有利を作り、援護を行い、敵戦力を各個撃破すると言う物だった。確かな穴があるが各個撃破の思想は悪くは無い。が、日本の刀使・武宮からすれば常識から逸脱した戦術だ。

対してこれを最初に始めた彗士はドイツ、詳しく言えばゾリンゲンでは普通に取られ

る戦術として受け止めてしまっていた。

ゾリンゲンイエーガーでは基本的に仲良く武功争いの様な状態で見つけた荒魂は単独戦闘が主流故に単独戦闘を安全に行う、手練れが取り逃がした相手には集団で挑むが基本的には個々が好き勝手に動きながらもヒットアンドアウェイを暗黙の了解で動くと言う物で指揮手がない状態での戦闘が主流だ。

彗士のやっつけている事も集団生活で指揮者がいなくても互いに互いを理解した上で勝手に動くと言う無言の連携で成り立つ物である。

「なんやかんやあるが、一番の問題は……」

監督役の刀使の視線がが倒された刀使を起こす舞衣に向けられる。

「彼女の自信の無さか、あるいは性格か……」

実際にこのメンバーで唯一指揮手向きだった舞衣が性格か自信が無いからかオドオドとしており、指示が飛ばない事が多々あり、その状態でもなんとか勝とうと各々が独自に動き始めてしまった事がそもそもの始まり。

「惜しいよな……」

指揮手以外はそれなり以上の人材が揃っている。故に指揮手である舞衣の至らなさが浮き彫りとなり、それがさらに舞衣を傷付ける。

「まだやるわよ!!」

「なんか目的変わってる気が……」

長船の武宮と刀使が何故か火が付いたのか訓練している側では無く、訓練をつけている側が続行を主張し始めた光景にその元凶の1人である彗土が突っ込みを入れる側では抜刀した沙耶香とファイティングポーズを取る津佳沙がいた。

「お願いします」

「お、サーヤンとツーヤンはヤル気ですね」

「マジかよ……」

そう言いながらも付き合う薫だが、まさか朝食を抜いて昼食休憩を挟み、長船側が勝ち越す夕方の時間までやらされるとは思っていなかった。

「ああああ……」

訓練を終えた夕方の温泉。源泉掛け流しの浴場に身体から生気が抜ける様なカルロの声がこだまする。

「基本は弓だと乱戦参加はやめた方がいいですね」

共に温泉に浸かる帝人の言葉にカルロはそうだなあと気の抜けた声を発する。

弓の真髄は何と言ってもその汎用性の高さで静音性と静穏性に優れた武器である事だが、ネックとなるのは連射が効く武器で無いので乱戦での戦いに向かない事だが、それをカルロは解決している。

「ナイフと警棒術が上手いよな」

「あと、弓で殴ったりとかしてた」

帝人の言葉に温泉に浸かる勝武居と巧が続く。

別の武器の携行と弓そのものを頑丈にする事で防御くらいは出来る様にしている事。

カルロの弓の材質は一般的なものの故に写シを張ることで殴ったり出来る。無論ながら写シを張った状態で防御しようとする弓ごと斬られる場合もある為に殴打が命中するその瞬間に弓にも写シを張ると言う器用な事をしている。

「それよりもあいつらの乱戦での輝きっぷりが凄いなって」

そう言つて視線を身体を洗う2人の少年に向けられる。

「彗士、痛くない?」

「ああ? これ?」

津佳沙の心配そうな言葉に右腕を僅かに上げながら彗士が告げる。服で隠れていたが、彗士の身体には大小様々な傷跡とも言うべき物が夥しい面積に広がっていた。

それこそ無事なのは一部の正中線上と顔、腰回りの正面くらいな物である。

隼士の身体を覆う跡はゾリンゲンでの狩りで負った傷の治癒跡、何よりも早急に正しい処置がされた後に最高の治療をされた火傷の治癒跡が残っていた。それでも、ドイツで大きく発達した、外傷に対して早急な治療を求めた治療行為の副作用とも言うべきか火傷跡とはまた違う跡がシミの様に皮膚に浮き出ていた。

「痛くはないよ」

本当なのかと心配そうに上目遣いで見る津佳沙に大丈夫だよと言いながら温泉の暖かいお湯を身体に被せる。

「消そうと思えば消せるんだけど……」

津佳沙の身体は先に洗ってしまっているので直ぐに浴槽に向かう隼士を津佳沙がペタペタと湿った足音を鳴らして付いていくと隼士は源泉が流れ込む場所から離れた比較的新ルめのお湯が溜まる場所に浸かる。

津佳沙も跡を追う様にその隣に浸かる。

「自分への戒め……もあるけど……思い出みたいなものだね」

自分が未熟であるが故に身体に傷が付く。ゾリンゲンイエーガーが写シを張れるのは己の力で荒魂を狩る事に成功した証であり、それまでは写シ無しが前提条件で荒魂と戦闘する。無論ながら八幡力も何も無い。

身体の傷は死ななない様に写シが張れるベテランが援護してくれたからこそこの程

度で済んでいる。だが、狩場に出るにも前提条件として己で鍛えた刃が心鋼に変わるほどの逸品であると同時に刃としての品質もメイドインゾリンゲンを誇れる程の物を鍛えたと言う実績が要る。

そして己の刃を鍛える内に鍛冶仕事で炎を扱う故に火傷を負う場合もある。そして鍛冶師が鍛冶仕事で火傷すると言うことは未だに未熟である証拠でもあり、火傷の痛みは、炎を恐れ、炎に怖れるキツカケを生み、それに耐えられない者を選別し、炎への恐れと怖れを克服した者からさらに炎を畏れられる者を識別する事に繋がる。

狩人が狩人となる由縁を得る為に必要な事だ。そして、時代が進み、整形医療が発達した今では傷や跡を消す事は今の自分は過去の己を完全に払拭したと自負する事を意味する事である。

隼士は未だにそれが出来ずに消す事を拒んでいる。その理由を説明すると津佳沙が隼士を見る目が心配する者から自分よりも遥かに強い相手に向ける様な線形の眼差しで見る様になる。

「隼士みたいになれなかな？」

津佳沙の言葉に隼士は優しく慈しむ様な微笑みを浮かべる。

「俺くらいなら直ぐに飛び越えるさ……俺みたいな強さは求めなければ、な」

含みのある言い方に津佳沙は首を傾げるが答えを隼士は吐き出さずにそろそろ上が

ろうと津佳沙を誘う。

今日はこの隠れ里で行われる年二回の祭がある日だ。

その準備は早朝から始まっており、そろそろ祭が始まる様な時間であった。

更衣室に戻った2人は二足ほど先に上がっていた他のメンバーと合流するが何故か下着姿だった。

「まだ着替えて無かったですか？」

「制服が消えた。全員分」

彗士の言葉に勝武居が端的に状況説明を行うと彗士も驚きから目を見開くと更衣室の扉が開き中から筋肉隆々の生徒が1人現れる。

「お前らの制服ならクリーニングだ。それとリチャード先生からこれ着なつて」

そう言つて渡されたのは男性用の浴衣の数々だった。絵柄の被りは何一つとして無い。

「おお、リチャード博士もわかっている」

カルロが全員分を受け取ると真つ先に一番上のシンプルに黒と白い筋が入った浴衣を取ると、巧も一番下に積まれた一際大きなオレンジ色の浴衣を取る。

「俺がこれだけか」

巧が早速着ようとする中で帝人が薄緑に薄オレンジの模様が入った浴衣、勝武居が黒

に桜をあしらった浴衣を一着ずつ受け取ると津佳沙が次に2着を受け取りどっちにする？ と首を傾げながら目で語るが隼士の震えた声が響く。

「俺、浴衣の着方知らない……」

「ドイツ暮らしが」

浴衣の着方など常識だろうと勝武居がマウンティングを取らんとするが、ドイツで浴衣を着る機会など皆無な為に隼士はぐぬぬと握り拳を悔しそうに握るが津佳沙も浴衣を見比べて首を傾げる。

津佳沙も着方がわからないようだった。

「じゃあ、俺が教えるわ」

意外にも日本暮らしの長いカルロが2人に着付けを教える。と言っても最も簡易的な作法も何も無い着付けだが、それでも問題は無い場面だ。

隼士は薄紫に柳葉をイメージした浴衣、津佳沙は紺に白い水玉が入った浴衣を着ていた。

「みんなー！ 浴衣は着たあ？」

そんな更衣室に勇者と言うべき可奈美が顔を覗かせた瞬間に隼士の投げた籠が額を目掛けて飛んで行くがそれを寸前で回避する可奈美。

「着てなかったらどうするつもりだ!!」

「みんな着てるってなんかそう思ったんだよね」

なんとも言えぬ確信めいた可奈美の言葉に勝武居と隼士、そして可奈美の脇で止めよとしていた舞衣が苦笑を浮かべる。可奈美の謎の確信から来る行動は今に始まった事では無いんだなどこの時に全員が把握した。

「問題無かつたし、いいだろ？」

そう言つて更衣室の出入り口から出た帝人の前に一足先に外に出ていた可奈美が待つてましたと言わんばかりに帝人に向けて姫和を突き出す。

突如として押された姫和が僅かに体制を崩して帝人に向けて倒れ込むがそれを剣術で鍛えた体幹で倒れる事なく、帝人が抱き止める。

「毎年だが、似合うな」

祭の度に浴衣を着ていた十条兄妹。当然ながら帝人は姫和の浴衣姿など見慣れていゝる。が、やはり場所が違うのと何時も姫和が選ぶ、単色のシンプルな物とは趣きの違ふ、今の帝人が着る薄緑を基調としながらも、帝人の物とは違ふパターンの薄オレンジの模様が入った浴衣を着た姿は帝人にも少し新鮮味があつた。

何時もとは違う声音の帝人からの賞賛に姫和は僅かに頬を赤らめながらもそそくさと立ち去ろうとして、それを帝人が小走りで追ひ掛けて消える。

「お、姉さんの浴衣姿って初めてかも」

「どうだ似合うだろ！」

「似合う似合う」

逆に軽快に交流を壊す益子姉弟。

薫はオレンジの生地に青の花弁を模した模様が2種入った浴衣を2色の帯で止める装いだが、巧もオレンジ一色の浴衣だが、少し胸元を出す粋な崩しでお洒落に決めた。

巧はガタイがいい分着崩した方が似合っていた。

「和服も似合うね」

「そうデスか！　ありがとうございマース！」

「崩れる！　崩れる！」

帯の結び方かたこそ簡易的な物であるがしつかりと崩す事なく黒に白筋が入った浴衣を着ているカル口に複数の淡い色を使い、色同士の境目を青い線で仕切った和服に青い帯で結んだエレンが抱き着く。

「似合う、かな？　よく、わからないけど……」

「とてもお似合いです」

「えへへ……」

沙耶香は慧士の前で細かく足を踏みながら自分の浴衣姿を見せる。

紺に数え切れる数の水玉が入っただけのシンプルな浴衣に帯とその上に飾り紐を結んだ姿に隼士は心からの笑顔と言葉で賞賛する。

「よかったね。沙耶香ちゃん」

「舞衣、どうかな？」

「津佳沙くんもとっても似合ってるよ」

薄桃色に淡白の模様が入った浴衣を黄色い帯と赤い帯で締めた舞衣は隼士は社交辞令が上手く無い事を知っている為に心からの言葉を沙耶香に投げると津佳沙が袖を弱く引つ張り、沙耶香とほぼ同じ浴衣を手を広げて見せると舞衣も心からの言葉で伝えると津佳沙も恥ずかしそうに笑う。

「行こう！ みんな！」

「ああ！ そうだったな！ お前はそう言うやつだったな!!」

「なんの話？」

白に赤い水玉の入った浴衣を浅葱色の帯で締めた可奈美が黒に桜模様をあしらった浴衣を着る勝武居の言葉に首を傾げる。

似合うかどうか褒められるよりも目の前のお祭りを早く楽しみたい可奈美の残ったメンバーは静かに笑うと可奈美の後を追う。

お祭り会場に戻るとそれぞれのメンバーに自然と分かれる。

「クツソ!!」「ああ〜」

勝武居と舞衣は金魚掬い、勝武居は無茶してらんちゆうを狙ったが故にポイを破き、舞衣はコメットを狙ってやはりと言うべきかワントライで破かれていた。

「お、おとおお!!」「すげーな、これ……」

可奈美と薫はレインボー綿菓子を実際に作られているシーンを見て目を見開いている。綺麗に色分けされた綿菓子が富士山のように作られる光景は圧巻の一言だった。

「イエアアア!!」「嘘だ……」

カルロと姫和は型抜きに挑み、カルロが最高難易度の龍を最速記録でクリアした事に愕然とする姫和の背後でお祭りに来ていた地元住民が騒がしくなった事に気付いて背後を向く。

「彗士、上手い」「当然よ、狩人だからな」

向かい側のダーツを投げてトランプの絵柄に刺さったら景品ゲットと言う出店ではハートのエースに5本のダーツを突き立てた彗士にキラキラとした目で見つめる沙耶香が居た。

「イッタイメエガアアア!!」「これはソーリーデース」

射的に来たエレンの景品を倒したコルクが跳弾、カルロの目にクリティカルヒット。悶えるカルロを無視して、男若店主は景品をエレンに渡す。誰が好き好んでAPPI8

の少年を介抱するのか。

「うわあ!!」「あはは!! やるやる!」

巧に祭の楽しみとして食べ歩きを習っている津佳沙がラムネでハズレを引いたのと不慣れだった事からラムネを吹き出して零した津佳沙に巧は自分の上手く開けられたラムネと交換しながら笑う。

楽しい時間は直ぐに過ぎ去り、空に星が瞬き始めた頃に思わぬ人物と合流する事になる。

第三十一話 予期せぬ出会いと信じ難き真実

空に闇の帳が落ち始め、星達が瞬き始める時間。縁日を楽しんだ一行は何かと世話になってゐる境内へと戻つて来ると目の前には恩田累とその傍に老年なれど鍛えられた身体だけが持つ特殊な雰囲気纏う3人の男性が待ち構えていた。

「オンドウルヴオヴオニヴァナダヴァチガイルンデエスカー!!」

「勝武居! 声! 声! オンドウル語になつてる!!」

その人物に見覚えのあつた勝武居は慌てていたが、直ぐに彗士の突つ込みにより正氣に戻ると直ぐに腰から御剣を納めた鞘を抜刀可能な状態に動かしてから片膝立ちになり、右手を膝の上、左手に濁り拳を作つて地面に付ける体制を作る。

「勝武居よ。そんなに畏まらずとも良い」

灰色じみた白髪に目や鼻の堀が深く、並々ならぬ苦勞と覚悟がなければこんな顔にはならないだろうと誰もが容易く予想が出来る顔つきの老年な男性の言葉に勝武居は遠慮深げに言葉を紡ぐ。

「ですが……お館様」

「良いのだよ。栄家様はえいえがそう言うのだからな」

黒く健康そうな髪に厳格で真面目な印象だが、思い遣りと優しさを滲ませる顔の老年男性が優しく声を掛ける。

勝武居は黒髪の男に目をやった後にお館様と呼んだ人物、栄家に目を向けると栄家は大きく頷く。

「ところで勝武居よ。その武宮と刀使はご学友かね？」

立ち上がった勝武居に最後の一人、丸み帯びた顔に黒髪黒目の顔が本当に日本人の老年な男性と思わせる顔付きだが、この中で誰よりも強者の雰囲気纏っていた。だが、それよりもこの場にいる一部を除いた人間が驚いたのは御刀を今は帯刀していないに関わらず武宮と刀使である事を見抜いた事であろう。

「ご紹介します」

勝武居が此処にいる武宮と刀使全員を所属と名前までを教えると今度はこちらの番と3人の男達が自分の名前を名乗る。

「徳川栄家だ。此処にいる勝武居の自家の人間に当たる」

「鳥居忠元と申す。勝武居の父方の祖父にあたる」

「本多忠優と言う。勝武居の母方の祖父にあたる」

3人の言葉に舞衣が誰よりも驚き、固まる。

「有名な方？」

「有名も何も……徳川財閥のトップとその側近のお二人だよ!! 知らないの!」

隼士の言葉に常識だよと言わんばかりに舞衣が隼士に説教をする側で栄家はそこま
で凄い家ではないと頭を書く。

徳川財閥は時の將軍家、徳川家との血の繋がりがある人間が作り上げた財閥の一つで
あり、中部地方を中心に民間組織として警察機関が手の出せない範囲で武宮や刀使の派
遣を行う会社を所有し、武宮や刀使を育成する道場などの経営も行う財閥だ。各国の企
業との業務提携なども積極的にを行っている事で有名である。

勝武居も美濃関学院入学まではその道場で研鑽を積んでいた。

「柳瀬さんの所とはライバルであり、パートナーでもありと言う関係だな。それよりも
コレだ」

そう言つて忠優が懐から取り出したのは、勝武居がしたためた置き手紙をコピーした
物だった。

それを見た勝武居は半歩だけ後退する。

「やらんとしている事は分かる。どうして欲しいかも分かる。だがな、親としては、大人
としては子供が無茶しようつとしているのを黙つて見ておられないのだよ」

罰が悪そうにする勝武居に忠元が追撃を掛ける。

「直ぐに儂がコレを栄家様にお見せした時に栄家様は怒るよりも悲しんだのだぞ? 勝

武居が儂らを思つての事だとは分かるが我々はそんなに頼り無い存在だったのかとな」

何も言い返せずに項垂れる勝武居に栄家が話し掛ける。

「事は君が考える以上に重大だ。昔から大人や親に迷惑かけまいとする良い子でしたが、君はまだ子供なんだ。大人に、親に頼つてもいいんですよ？ 頼つて下さい」

怒っている訳でも無く、優しくされた事に泣きながらお礼を言う勝武居を祖父の2人に任せて栄家が勝武居の後ろに立つ人間達に目を向ける。

「可奈美さん、舞衣さん、慧土さん、姫和さん、帝人さん、エレンさん、薫さん、カルロさん、巧さん、沙耶香さん、津佳沙さん。彼はこれからも無茶するかもしれませんが、我欲で無茶するような人間ではありません。これからも仲良くしてあげて下さい」

「そんな、此方こそです!!」

「そうですね。彼の無茶には助かっていますから」

「それでも少し心配ですけど」

美濃関の3人に栄家は良い友人達だなと頷く。

「彼には今回の一件では大変助かっています」

「彼が彼でなければ此処には居なかつたかもしれないから」

深々と頭を下げる十条兄妹に栄家は礼儀正しく、良い子なのだなと好感を抱く。

「ああ、正直者でいい奴だと思つぜ?」

「ええ。少し他を優先し過ぎる気がします」

「でも、友達の為に大敵に剣を抜けるのはいい所だと思ひマスよ」

「だな。真面目だが、堅物じゃない。いい奴だな」

長船の4人に勝武居の性格をよく知っていると感心すると同時にあの子をお願いしますと頭を再び下げる栄家。

「色々教わっている」

「色々助けられた」

糸見姉弟の言葉に勝武居がこんな物静かな人物と付き合っている事に驚く。幼少の彼は何かと騒がしいグループに居た方だったからだ。

歳を取って変わったのかと子供の成長を栄家は感じ取っていた。

「あの……どうして此処に？」

遠慮気に訊く舞衣の言葉に栄家は小さく、確実に頷いてから答える。

「詳しくは話せないが、舞草と協力する事になった。宜しく頼むよ」

「あ、はい……」

まさかの大物の協力で尻込み気味の舞衣に聞き慣れた声、正確にはリチャードの声が響く。

「そろそろ時間だよ」

リチャードの言葉に理由を知らない者が首を傾げるが理由を知る者はリチャードの後を追うのだが、何故か帝人だけは蒼に呼ばれて何処かに消えてしまう。

帝人以外はそのままの格好で社の中に入り、折り畳み椅子に座らされると神楽笛や太鼓など神事で使われる和楽器の音が厳かに響き、その音の中で巫女装束に身を包んだ集団戦を教導していた長船の刀使の1人である貴子と里美が舞を披露する。

舞と神楽の音が無くなると黒い衣冠単いかんひとえを着た蒼が現れ、社の奥に設けられた階段を登り、その先にある神棚の観音開きの門を開けて、一礼する。

薫は蒼の黒い衣冠単の色を見て小さく驚く。黒はトップかそれに限りなく近い階級の人間しか着れない服だ。

「あれが御神体？」

可奈美の目には抱えるサイズの入れ杉とその前に横たえられた細長い物体だった。

「ノ口と御刀だよ」

その言葉に姫和が驚く、ノ口は現在、その危険性から折神家が一括集中管理してしており、御神体として祀られていた事があると言う過去の物になりつつあった。だが、累は今でも此処以外にも幾つかノ口を御神体として祀っている場所があると告げる。

「祀る……」

「そう、丁重に、敬い、祀るんだ。可奈美君は、そもそもノ口がどの様にして生まれるか、

知っているかい？」

可奈美は突然の事に言い淀むと彗士と舞衣が助け舟を出す。

「御刀の原料、珠鋼を精錬する工程で不純物として分離される物」「人の数多な感情、特に負の感情が陰世で物質的になった物」

「ふむ、極東的模範解答と欧州の模範解答だね。正直に言うと、どちらが正しいかは、今だにわからないんだ」

リチャードの言葉に彗士以外の全員が固まる。リチャードの言葉は今までの常識とは違う事を言っていたからだ。

「彗士君の解答が真実なら自然発生した荒魂を倒す為に珠鋼を精錬して荒魂が増加したと言う説と、珠鋼が出来始めたから荒魂が現れたと言う説。前者は状況証拠的に辻褄が合うけど、後者は物的証拠も正式な記録にも残っている」

「まるで卵が先か鶏が先か案件だな」

御刀の原料である珠鋼を精錬する際に不純物として排出されるのがノ口であるのだが、このノ口が排出された事が確認されるのは日本のみであり、欧州などではノ口は排出されていないが、様々な種類や能力を持った荒魂が現れる。だが、この説が一向に終わりを見せないのはノ口の有無よりも、出現した荒魂の性質や特徴が全くの別物であるからだ。

「それでもう一つの御神体ですが、アレは……刀？」

「ああ。この地に時の天皇の手で納められた御刀だよ」

御刀と言うワードよりも天皇が自ら納めたと言うエピソードに声を上げて驚きそうだった可奈美を津佳沙が口元を抑えて防ぐ。

「御刀も御神体に？」

「ふむ。彗士君は心鋼の御刀が製造される理由を知ってるかな？」

「人の心に宿るとされる神性が鋼を依り代に現れた物、神性が強い場所で聖火や聖炭と言った清火や清炭言った特殊な道具で鍛えた鋼に乗り移る場合、もしくはただの武器が御神体として神性の強い場所に崇められて神性が移る場合。だいたいこれですね」

「うん。模範解答だね。どれにも言える事だけど、移り香の様な物と言う事だ。それそのものには神性が無いから時間が経てば神性が弱まり、時に無くなる。手入れも心を込めてやるか、特殊な道具を使わないと心鋼がただの鋼に戻ると言う現象もその為だ」

「じゃあ、アレはただの刀？」

「蒼様曰く違うらしいけどね。なんでも抜く人物を選ぶそうだ」

リチャードの言葉を聞いた瞬間に彗士の目に冷やかさが宿る。それに気付いたのは舞衣だけだが、それを言う気には舞衣はなれなかった。だが、彗士の雰囲気が変わった事には全員が気付いており、なんとか出来ないかと思っていると再び神楽が響き、前

を向くと縹色（濃い青色）の衣冠単を纏った帝人が立っていた。

帝人は神事で決められたような動きをした後に蒼から御神体である御刀を受け取ると、写シが張られ、写シを維持したまま、神事で決められた動きで去って行く。

「あれは？」

「ノロが祀る為の御神体なら、御刀は使う為の御神体だ。今日はノロを祀る神事と御神体を刀宮、今で言う所の武宮に渡す神事が同時に行われる珍しい日だ」

姫和の疑問にリチャードは答えながら、密かに内心で呟く。

「（そうか……帝人君は舞草と行動を共にするか……）」

その理由もリチャードには分かるが長く生きた事と孫娘と近い歳の少年が背負うには大き過ぎる覚悟と代償を背負わせてしまった自分、より詳しく言えば自分達の世代に罪悪感を抱かずには入れなかった。

そのまま神事が終わり、そのまま外に出ると少し時間が欲しいと言い、栄家がある事を話し始める。

「さてと、今回の神事を見た後だから話すとしよう。よろしいですね？」

そう言つてリチャードに目配せする栄家にリチャードは頷く。

「かつてノロはこのように祀られてきた。その体制が変わつて、纏めて管理する様になったのが、経済的理由から社を減らしたかった明治時代の終わり頃だ」

それで区切った栄家に続いて忠元が続く。

「当然ながら、集まれば荒魂になる。だから、当時の折神家が厳密に管理していた訳だが、当時は人同士の殺し合い、戦争の時代、ノロという強力な物体があれば富国強兵の一環で使いたがる者は出る」

「軍事利用……」

姫和の言葉に栄家が続く。

「ノロは珠鋼と同様の神性を持つ、故に陰世への干渉力もある訳だ。もしも、写シだけでも誰もが張れば、兵士はどのなると思う？」

「一人十殺なんてザラじゃない……いや、下手したら不死身の兵だけで構成された師団も……」

隼士が戦慄を覚えた。写シに対抗出来る武器は今の所では神性を持つ素材で作られた物のみ、現代でも対荒魂用弾薬は決して部隊配備を行い、まともな運用など見込めない数しかない。

それを明治から昭和の時代に在る筈がなく、物的資源でも人的資源でも劣る日本に取っては豊富なノロは正しく切り札でもあった。

忠優が話を続ける。

「戦後にノロの収集は米国が関わった事で爆発的な加速を見せた。表向きは危険なノロ

は分散させずに一極集中で管理した方が安全という理由でな。確かに合理的だ。だが、合理性の国に神秘性など理解出来る筈がない」

栄家の口が開く。

「故に大荒魂が現れた。当時の政府や折神家の反対を無視した事だね。此処からはリチャード先生から聞いた話だが、強大な知性を獲得していたらしい。それこそ神と言って刺し違えない規模のね……しかも今は折神家に何トンを容易く超える規模でノロがある。それが大荒魂になれば……」

「この国は終わる。それがタギツヒメの神たる由縁」

姫和の言葉にカルロが大声を上げる。

「ちよつと待て!! 今までの話を深読みすれば……大荒魂は天災では無く……人災……」

真ん中辺りから声量が落ちたカルロにリチャードは頷く。

「彼等の眠りを妨げるべきでなかった。ノロは人の業により生み出された犠牲者だ。元の状態に戻せないなら、せめて社に祀って、安らかな眠りについてもらう。それが今の所、我々に来る唯一の償いなんだ」

リチャードの言葉に姫和と舞衣が納得が出来ないと言う風に声を上げると累がそれを擁護する為に言葉を紡ぐ。

「刀使たる者、武宮たる者、荒魂になってしまったノ口を祓い、鎮める。その行いはちゃんとは作ってきたわ。でも……」

それが崩れて来ていると言う言葉を累が飲み込むとリチャードが語り始める。

「刀使の起源は社に勤める巫女さんだったそうだね。武宮の始まり、刀宮も社で勤める神主や氏子、神社の守護を生業とする武士が起源だったそうだ。それが時代と共に変わりがながらも、荒魂を斬ると言う勤めを果たす以上は神主としての勤めもちゃんと受け継いでいかなきゃならない、ってことさ」

その言葉に全員がなにかを考える様に黙っていた。

「彼女達の様子は如何でしたか?」

「流石に堪えた様です」

時間は進み、屋敷の一室で累とリチャード、朱音と蒼は面談していた。内容は真実を語られた武宮と刀使達の事だった。

累の言葉に朱音はそうでしょうねと納得して見せる。

「仕方ないさ。常識が崩れ去る、いや、信じた学校が嘘を教えていたんだ」
「そうでしょうな。特に舞衣君は優等生ですから」

「受け入れて貰わなければなりません。刀使で在るならば、尚更」
「受け入れられなければその程度だな。武宮であろうとするなら」

朱音と蒼が同時に呟くと累は武宮と刀使達の事を心配する発言をすると朱音と蒼は黙って首を振る。だが、2人はまたも同時に彼等と彼女等がどんな決断しようとそれを受け入れると告げる。

「それも我々、舞草の勤めですな」

夜は更けて行く。静かに、昨日の様に……

第三十二話 舞草の隠れ里決戦 第一幕

「祭も終わりだな」

祭の喧騒が鳴りを潜め始め、鈴虫の風流な音が響く屋敷の縁側の一角で蒼から渡された御刀を膝に乗せて涼んでいた。すると右から平城の制服に着替えた姫和が現れる。

「それが蒼様から賜った御刀ですか？」

「ああ」

「そう言つて鞘に納まったままの御刀を膝の上から少し上げながら姫和に見せる帝人。

サイズや反りは何処と無く小烏丸の写しと言つていいほどにか浮いているが、鞘の形状から考えると何か違うと言ふ様な見た目だった。だが、目を引くのはその拵とその拵と鞘に繋がられたか細い鎖だった。

その鎖は4本あつたのだろうが、今は1本で繋がれている。

「兄さん、この拵つて……」

「言うな。完全に銃だよ」

垂直に伸びたグリップに3本の釘で止めた根元近くが異様に厚み帯びた刀身に柄に当たる場所から逆剥けの様に伸びた引き金に引き金近くだけをも守る様に伸びる着脱

式のマガジン。

グリップの前に着脱式マガジンがある形状はモーゼルC96に似た形状なのだが、至近距離で撃ち合う事を考慮してか砲身の様な銃口は箱型に近い形となり、何故か肉叩きの様なパーツが付けられている。

「抜けませんよね？」

「うん。この鎖だけど珠鋼か銀色の和鋼かも」

鞘からは抜けられない以上は無駄に重量があり、狙い難いこの上ない銃でしかない。辛うじて銃の柄は抜かなくても使えるのに加えて、空のマガジンは何個かある事、更に付けるマガジンによつては固定式マガジンとして扱える事が分かっているだけまだマシな一品だった。

「……祖父の、遺品らしい」

「そうか……」

姫和が手持ち無沙汰に帝人の隣に座ると帝人は無言の空間が嫌だったのか姫和に話し掛けるが、姫和もなんと言ったら良いかわからなかった。

祖父が無くなった時期が時期ゆえに遺品らしい遺品がわからなかった帝人と姫和だが、刀使となり、武宮となった今は武器を遺すと言う意味を深く痛感させられる。

それも御刀となれば、その意味は大きい物である。

「昔さ、爺ちゃんからお前を守ってやってってくれって言われてたんだ……」

「そう……なのか……」

「なんか予見してたのかも……こうなる事」

「かもしれないな。何故か先読みが凄かった」

「だよね」

2人の間に懐かしさからの笑みが浮かぶ。

「如何して向けないのかまだ、わからないけど。お前と一緒にこの戦いの中で分かればいいなって思っているんだ」

「そうですね。私も兄さんと一緒に戦えたらって思っています」

そう話す2人の心に奇妙な感覚が現れる。御刀同士の共鳴とでも呼ぶべき感覚、それは姫和の小鳥丸と帝人が持つ銃の拵を持つ御刀同士の共鳴だった。

なんとも言えない感情に支配される中で自分に近づく敵意の無い影に気付いて、2人が顔を向けた先には、美濃関の制服に身を包んだ可奈美がおり、可奈美は黙って姫和の隣に座る。

「お前も着替えたのか」

「うん。楽しかったね、お祭。帝人君の装束姿も素敵だったよ」

「忘れろ」

可奈美の言葉に帝人が若干な苛つきを匂わせながら告げるが、可奈美は気にせず言葉を紡ぐ。

「お母さん達も一緒に行ったりしたのかな？」

「どうだろうな」

そして姫和と可奈美も御刀同士の共鳴とでも言うべき感覚に可奈美は自分達の母が使った御刀に認められ、こうして出会えたのは運命だったのかと話すと姫和はそっぽを向き、自分達の母もお祭りに共に出掛けたのだらうと告げ、帝人はきつとそうなのだらうと共感を示した。

場所は変わり社の正面、巨大な篝火が焚かれた場所に舞衣と沙耶香は浴衣姿で立っていた。

「私は、何が出来るんだらう」

「舞衣は何でも出来る」

隠された真実、嘘を暴いた真実を知り、自分に出来る事がわからなくなった舞衣に沙耶香は何でも出来ると言い切って見せた事に舞衣は少なからず衝撃を受け、え？ と短く問い掛ける。

「私も私に出来る事、考えてみる。見えない事を考える事は人にしか出来ないから」

彗士が吐きそうな言葉に舞衣は小さく笑ってしまった。

「お祭りももうすぐ終わりデスねー」

「またノロが分祀されれば日本中でこんな祭りが開かれる」

「そうだな。いつかは益子神社でも再開されるだろうな」

石階段に浴衣のまま座って話すエレンと巧、薫とカルロの4人。益子の家系は神社で生まれ育つ関係故にこう言った行事にも自然と興味が傾く。

「姫和と帝人、可奈美に舞衣に勝武居に隼士、津佳沙に沙耶香も誘って、またこんな祭りに行けたらいいな」

カルロの言葉に全員が頷いた瞬間に打ち上げ花火が鳴る。それを別の場所、温泉から眺める影が2つあった。

「温泉に浸かりながら花火……贅沢だね〜」

「隼士はこれからどうするの?」

隼士と津佳沙だった。隼士は津佳沙の言葉に突き放す様で心苦しいがと、内心で前置きを置いてから言葉を吐き出した。

「舞草次第……かな?」

「どうして?」

「どうしてだろうね? ヒントは私は狩人だから。津佳沙は津佳沙のしたい様にしなさい」

隼士の言葉に津佳沙は少し考える様な素振りを見せながら肩まで浸かり直した。

「朱音様、蒼様、少しよろしいでしょうか？」

隼士は制服に着替え、花火の音が無くなつて暫くした後、姫和と可奈美の2人で廊下ですれ違ふと朱音と蒼のいる部屋を訪ねた。

「どうかしましたか？」

「少しお伺いしたい事がありまして、単刀直入に伺います。タギツヒメの討伐。私にご依頼されますか？」

その言葉にリチャードは成る程と頷く。

ゾリンゲンイエーガーの狩りは自分で見つけるか悲鳴を元に集まって狩猟の他に他地域では依頼を受けて狩る。隼士は悩んだ末にゾリンゲンイエーガーとして舞草への参加を決意、舞草側からの依頼があればそれを受けるつもりだった。

「しかし、それは……」

朱音が難色を示す。報酬が用意出来ないと言う訳ではない。柳瀬隼士と言う1人の

若者のこれからを自分達の都合で決めてしまう事にあった。蒼も同じ理由で口を噤んでいた。のだが……

「わかった。これは私個人としての依頼だ」

リチャードが隼士と同じ存在を知り、その理由も知っているが故に頷き、個人的な依頼と言う理由で舞草への助力とタギツヒメ討伐を依頼。

隼士は金打を鳴らしそれを了承し、立ち上がるうとすると朱音はそれを止め、蒼がリチャードに何か言おうとした瞬間に徳川財閥から派遣された武宮の1人が駆け込む。

その姿は制服の上に肩・腰・背中・胸・頭に足軽大將が纏う様な甲冑を一部機械化したかの様な武装、徳川財閥仕様B装備を纏った若い武宮が駆け込んで来た。

「報告します。現在、東西南北の守備陣地にて、綾小路の武宮、および刀使に特祭隊を混ぜた混成部隊と徳川武宮、徳川刀使、長船刀使、長船武宮の混成部隊が武力衝突中です。急ぎ避難を!!」

片膝立ちで報告する武宮の言葉に全員が急ぎ立ち上がった。

隠れ里の東西南北では銃声が響いていた。

「近付けるな!!」

北側、と言うよりも東以外に掘られた擬装塹壕から叫ぶ徳川武宮の1人の怒声に銃声
で答える友軍達。

一気に電撃戦だと言わんばかりに雪崩れ込む綾小路の武宮と刀使、この県の特別祭祀
機動隊を合わせた舞草摘発隊と相手に長船勢はアメリカと強い結び付き故かM191
9やM979と言った米国製銃火器で応戦し、徳川財閥の人員達はM979やM979
の弾倉を使える様にするなどの改造をしたAK100シリーズとM979、そしてその
2丁をフルオートに改造してドラムマガジンを搭載してヒヤツハー仕様にした銃など
で武装する舞草防衛隊。

圧倒的な火力優先に進軍が止まるかと思つたが、第一次世界大戦の戦場に様に塹壕に
入りさえすればとS装備やB装備を付けた舞草摘発隊が勇猛果敢に突撃する。

西でも同じ様に攻勢が掛けられるが森が生い茂る地形にベトナム戦争の戦線の様に蜘蛛
の巣様に掘られた擬装塹壕からゲリラ戦を仕掛けられるが此方は被害で言えば、舞草
側有利のダメージリリース状態だった。

「そこです!!」

鎌府、と言うよりも親衛隊から援軍で出撃した尾藤成宮の持つ長銃の射撃により塹壕

から顔を覗かせた瞬間に、頭を撃ち抜かれての戦闘不能や警察組織中心で構成された此処は催涙弾なども飛び交っており、塹壕を移動するにも危険が伴う戦場になっていた。

「弾切れ！」

弾切れを悟った尾藤は直ぐに這い蹲ると銃身下に設けられたチューブ弾倉と薬室に固形黒色火薬と銃弾を耐水性の高いマッチと同じ混合物で薄く塗り固めた弾丸を装填すると直ぐに起き上がると同時にコッキングハンマーを起こし、塹壕の蓋が迫り上がる場所に狙いを定める。

そして蓋が迫り上がり、横顔を覗かせた瞬間に引き金を引く。

引き金が引かれた事でコッキングハンマーが下がり、薬室に装填された弾丸を掠る様に叩く。

コッキングハンマーにはヤスリのような肌触りで弾薬を覆う混合物を引火させ、即座に黒色火薬に引火、爆発させて銃弾を放つ。

「あぐ」

撃たれた武宮が塹壕内に落ちると尾藤はレバーアクションのレバーを操作してハンマーの引き起こしと再装填を行う。

何故に現在主流の金属薬莢に雷管の複合式では無くこんな面倒くさい銃を使うのかと言え、法の抜け道を通る為である。

尾藤の銃は大別すれば着火方式が些か現代的なだけのマスケット式の改造品で必要となる資格は爆発物の免許、そして届出と許可だけである。満月の様に所得成功率何割の銃の免許が無くとも撃てるのである。

「後ろ！」

「その後ろな!!」

後ろの擬装塹壕の動く気配に振り向いた瞬間にさつきまでは正面だった擬装塹壕の蓋が開き、別の武宮に狙われた尾藤だが、別の銃声、同じ黒色火薬の発射音が響き、2人の舞草防衛隊の武宮が塹壕内に倒れる。

「危なかったですね」

薄い金髪を短く切り揃えた翡翠色の瞳を持った鎌府の制服にB装備を付けた同年代の優しい雰囲気に理知的な空気を纏うイケメンに肩を叩かれる。

「ジギルか。助かったよ」

尾藤を助けたのは親衛隊第四席苔石礎々石の助手を務めるジギル・マウントバツテンだ。元々は国際色豊かな綾小路の武宮であったのだが、親衛隊入りする此花寿々花と共に綾小路から鎌府へ来たが、苔石との関わりが親衛隊入り前から出来ており、その時の恩と縁から彼の助手に鞍替えした経緯がある武宮だ。

「まだ先です。気を抜かないで！」

銃剣付き中折れ式拳銃を使うマウントバツテンの言葉に尾藤は無言で目の前の長船の刀使を射ち倒す事で返答とした。

西側では他の場所と違い、些か静かだった。

「何処に居るかわかんないと進めませんね」

龍石清妃の言葉に近くで抜刀したまま姿勢を低くする、親衛隊第二席の獅童真希に所属する助手の錦貫和美が静かに答える。

「数は多くないと思います。ただ、ネックなのは……」

言い淀む錦貫の言葉に近くで地面の自然な窪みに身体を埋める錦貫や龍石と同じ様に鎌府の制服を纏う女子生徒、親衛隊第三席の此花寿々花の助手を務める苗場和歌子が呟く様に答える。

「こんな暗闇なのに当ててくる目の良さ……」

銃声。と言うには静かな銃声になると誰かの呻き声が響き、人が地面に倒れて、斜面を転がっていく音が響く。

「この銃声と発砲炎の小ささ」

3人の声が同時に響く。

この3人に関わらず助手は満月から狙撃の際の索敵法を一応は知っている。発砲炎と銃声で探す訳だが、こう言った森では銃声は反響するので、経験を積まなければ曖昧

になりがちだ。であればいいの今日の様な夜戦であれば発砲炎が頼りになるのだが、今回の狙撃は銃声も発砲炎も小さかった。

「ほう。隠れるのが上手い」

舞草南方防衛隊は陣地作成の難易度から練度で守る部隊だ。

選ばれたのは隠れ里と徳川財閥に所属していた前大戦で従軍経験のある人間から選ばれたのだが、その殆どが南方戦線経験者であり、樹上からの狙撃戦やゲリラ戦でその実力を発揮する。

そして彼らが装備する武装も有坂銃、それも三八式や三八式改狙撃銃や九九式狙撃銃など6・5mmの銃弾使用する銃で他の銃に比べると発砲炎・銃声が共に小さく済む特徴がある。

それを南方戦線を生き抜いた兵士達が操るのだ。しかも旧軍に取っては夜戦は陸海軍共に御家芸とも言える練度だ。僅かな月明かりに照らされた装備品や姿形だけの確に当ててくる。

「そっじゃな」

また銃声は響き、誰かが硬い斜面を転げ落ちていった。

何かと苛烈な各方面だが、阿鼻叫喚の戦線は正面玄関とも言える東方戦線だろう。

「うわあああああああ!!」

鍛え抜かれた筋肉を誇る長船武宮のラリアットにより首がもげながらも叫び声を上げる綾小路の武宮。

「ヌウアアアアアアアアアア!!」

筋肉隆々のイケメンアメリカ人にボディアーマーをメシメシと破壊されながら腹を締め付けられて叫ぶ特祭隊の警官。

「キヤアアアアアアアアアア!!」

後ろからお婆ちゃんに鎌を2つ掛けられて切断される友人の綾小路の刀使を見て叫ぶ綾小路の刀使。

「ウ!! ウ、ウヴアアアアアアアア……」

お爺ちゃんに心鋼のスコップで陰部を何度か強打された痛みで叫びながら倒れる綾小路の武宮。

「ヌヴァアアアアアアアアアア!!」

胸を槍でくじ刺しされた後に泣け飛ばされた際に叫びながら田んぼに落下する特祭隊の警官。

「いえああああああああああ!!」

両腕をパワーで引きちぎられる綾小路の武宮。

「チエストオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

そのまま撤退するアミンとすれ違った友衛が抜刀し、顔の半分を自分の御刀の鎬で隠す様に掲げ、己の御刀の銘を静かに呟く。

「けつしようべにはがね
血瘡紅鋼」

静型とも巴型とも言えぬ薙刀の刃を打刀の柄を付けた武器だが、その色は鎬は血が固まった様な赤銅色だが、峰と刃、乱れ刃の刃紋だけがスピネルのような幻想的で鮮やかな真紅で彩られた刃だ。

その特異な刃の武器を気にする事無く、1人の長船の刀使が斬り掛かる。

「やああー！」

気合い一閃。だが、その一撃は友衛の身体の横を沿う様に受け流され、態勢を崩した刀使に友衛は素早く、正確な足捌きで刀使の側面を正面に捉えると両手振りでも振り下ろす。

背中から両断された刀使が地面に倒れると横から突き技で襲い掛かる刀使だが、友衛は身体を海老反りにして、突き出された御刀の鎬を左腕と背中で挟む様に捕らえられる。

「しまったー！」

逃げ場を失った隙に友衛は右手も手首のスナップを効かせた振り下ろすので刀使の頭を2つに分けて写シを剥がす。

「ッ！」

親衛隊の登場に動きを止める大剣を携えたアメリカ人の武宮だが、パワーで予備動作を極力無くした攻撃を出そうとするが、友衛は武術で言う所の先の先と言う、相手が動き出そうとする予兆を見せた瞬間に先に動いて攻撃する技術で上段斬りを放つ。

「(重い!!)」

先の先を取られたと言えど、八幡力を使わない攻撃にも関わらず重いと感じてしまった長船の武宮に『の』の字を描く様に友衛は御刀を振るって膝を切断して抵抗を無くすと八幡力で蹴り飛ばして、迅移で移動。地面に背中が着くと同時に胸元に御刀を突き立て、写シが剥がれる前に首を斬り飛ばして撃破する。

一気に大ダメージを喰らった武宮が動きを止めると友衛が周りの状況に溜息を吐く。

「囲まれたか」

友軍は既に撤退か行動不能になっているが意地だろうか、目に見えて数が減っているがそれでも数が多い。

「ま、これくらいならね？」

問題無いと言わんばかりに二の腕に峰を乗せるように御刀を構える。

第三十三話 舞草の隠れ里決戦 第二幕

「ま、これくらいならね？」

問題無いと言わんばかりに二の腕に峰を乗せるように御刀を友衛は構える。

「やあー」

長船の刀使の一人が斬り掛かる。

友衛は構えた態勢のまま腕を突き出すように動かして突きを放つ事で牽制、牽制の一撃と言えども、親衛隊のそれは充分に脅威の一言だ。

怯んだ刀使の友衛は素早く扶る様に刃を動かして膝を切断すると、そのまま刃を掲げ、落下しきる前に肩へ刃を食い込ませる。

「か……あ……」

深々と、胸元まで刃が食い込んだ刀使から刃が引き抜かれる事で刀使は小さく息を吐きながら倒れ、写シが剥がれる。

「くそっ！」

大剣を持ったアメリカ人の武宮が大剣を振り下ろすが、友衛は八幡力を使った横振りの一撃を鎧に当てて軌道を変更させると、素早く腰だめに御刀を構え、居合斬りの要領

で振り、腰を両断する。

「バケモノ……」

ズシンと地面を揺らす様な音と共に上半身が地面に倒れ、上半身が倒れた場所に五体満足の武宮が横たわる。

友衛は倒れた武宮を一瞥して直ぐに御刀を構え直す。

「てえやあ!!」

右斜めから上段で攻めた刀の武宮を受け流し、前方から同じく上段で来た刀使を弾く。

「てええ!!」

距離を付けると受け流した武宮が復帰するが、相手が動いた瞬間に自分も動いて先手を取る先の先という技で逆に自分の横薙ぎを脇腹から鳩尾に掛けて斬り裂いて撃破。

「ぐうあ」

同じ方向から先程斬られた武宮を目隠しに接近した刀使は友衛の斬りながら身体を回転させるという動作で正面から斬り込むのとなんら変わらず、相手が動いた後に動いて先を取る後の先により斜め下からの斬り上げで斬り伏せられる。

「ああ」

両手で振るった御刀を片手に持ち変えて素早く振るい、斜め前方から斬りかかって来

た刀使を吹き飛ばしながら斬るといふ器用な動作で撃破、斬られた刀使は地面に勢い良く落下すると同時に写シが消える。

「ふっ」

今度は友衛から動き、最初の方に弾いた刀使を弱い八幡力を使って横に弾き飛ばすと一歩前に進むと後ろから斬りに来た大剣の武宮にバックステップで接近、股下に峰を乗せるとそのまま半円を描く様に頭から落下させ、逆立ちした瞬間に刃を返して背骨を両断する様に写シを張った武宮を両断する。

「ぐお」

斬った武宮の背中に乗った瞬間に前方から槍を持った武宮が突き技で挑むが、友衛は素早く突きを弾いて迅移で移動しながら肩から胸に掛けて切断し、槍の武宮を斬り倒す。

「はああああ!!」

横から来た刀使をバックステップで回避し、その隙を突こうとした剣の武宮の上段を弾き、素早く片手での薙ぎで腹を斬りつけて撃破した瞬間に後ろから躲した刀使が迫るが振り返って上段を弾き、シオルダータックルで距離を付けると迅移で移動、迅移の移動力をそのままに肋骨を避ける様に寝かした御刀で胸元を突いて返り討ちにする。

「やああー!」「せえい!」

両サイドから袈裟斬りを放つ刀使と武宮だが、友衛は刀使の御刀を自身の御刀で弾き、武宮の方は手甲で鎧を叩いて弾く。

「ううおー！」

双撃を弾いた友衛はそのまま身体を回転させて手で弾いた武宮をさらに弾き、後ろから迫っていた徳川財閥の刀使の腹を切り裂き、御刀を回転させて逆手に持ち変えた瞬間に弾いた武宮の胸元を切断、身体をさらに捻って御刀で弾いた刀使の脇腹に御刀を突き立てる。

「そー！」

刺した瞬間を狙った徳川財閥の武宮だが、バックステップで回避されただけで無く、ガラ空きとなってしまった首を切断され、友衛はそのまま斬首の勢いで踏み込み、後ろで上段斬りを放とうとした大剣の武宮の腕を抑えながら、腹に添えた御刀を薙いで撃破する。

「ぬうおおらあ!!！」

横薙ぎで放たれた大剣だが、友衛はジャンプで躲すと同時に大剣の鎧を足場に更にジャンプ、身体を横に回転させながら大剣の武宮の背中を大きく斬りつけ、その背後にいた徳川財閥・長船の刀使の御刀を弾いて身体の防御を崩すと素早く袈裟斬りから横薙ぎ、平突きと素早く3人を斬り伏せる。

「嘘ー！」

無言で振り被った横薙ぎを指と指の間で掴まれて止められた長巻の徳川財閥の刀使が呟いた瞬間に八幡力で引き寄せられた上で足払いをされて地面に倒れると同時に首に突き技を喰らう。

刃先が剪定バサミの上側の様に大きく湾曲している形状故に刀使の首はギロチンで斬られる様に切断される。

「はあ!!」

友衛は斬った刀使から長巻を奪うとそれを横回転させる様に投擲、プロペラの様に飛ぶ長巻に驚いて反応できなかった武宮と刀使が斬り伏せられるが、長船の武宮が飛んで来る長巻を掴むと自分の薙刀と併用して距離を取りながら両手の武器で攻め立てる。

「ウザい!!」

長巻の上段斬りを躲すと同時に峰を八幡力で踏み付けて地面に固定すると長巻の峰を走って接近、通り抜け様に二刀流で挑んだ武宮の首を切断、切断した武宮の頭を蹴り飛ばして迫る武宮を牽制すると地面を抉るような軌道で刀使の膝を切断する。

「八幡力はこゝも使うー！」

倒した刀使の頭を八幡力で踏み潰して撃破する。

「やあー！」

長船の刀使の横薙ぎを友衛は蹴り上げで防ぎ、そのまま身体を回して前方への蹴りを放てる様にした瞬間に蹴りを放った。

「え」

戦場に刀使の声が虚しく響く。

友衛の蹴りは吹き飛ばすのでは無く、腹から侵入した友衛の足は刀使の背中を突き出て止まる。

ゆつくりと自分の足を腹から引き抜いた友衛の足元に蹴り抜かれた刀使は倒れると友衛が目に見える速度で斬馬刀を装備した武宮に迫ると武宮は恐怖の叫び声を上げながらも斬馬刀を振り下ろす。

「甘い」

それでも恐怖から放った技が友衛に当たるはずが無く、御刀で横に受け流され、そのまま通り抜きざまに背中を斬りつけてられ、その後ろに立っていた刀使の腕を切断、斬った腕から御刀を奪い、奪った御刀の柄頭を足の裏で蹴り出しながら武宮の背中に突き立てる。

「はあ!!」

そのまま突き立てた御刀を下から掴んで背中を上を切り裂いて、抜くと投げて別の刀使を撃破する。

「ぬっ」

友衛は動きが止まった武宮に両手で御刀を保持したまま、踏み込みと身体の捻りを乗せた剛の剣により防御ごとと身体を切断。

「ふっ」

体を捻りながら足を動かして回転の勢いを乗せた突きは胸元に突き刺さり、背中を貫通して2人の刀使と武宮を倒す。

友衛は御刀を引かずに八幡力を使つて2人を蹴り飛ばす事で御刀を抜く。

「ぬううー」

抜いた体勢から身体を右回転させながら片手保持だった御刀を両手保持に戻し、回転の勢いと踏み込み、身体の捻りを加えた回転薙ぎで徳川財閥の指揮官らしき武宮の首を斬り飛ばす。

「クソ!!」

片手で保持した御剣を装備する武宮は踏み込みと身体のしなりを使つた力で素早く振り下ろそうとするが、友衛はその一撃を受け流す様に防御した事で御剣と御刀同士が擦り合う火花を残して互いの刃は通り過ぎる。

「遅いー!」

武器を返さずとも消える剣という武器の特性を生かして、そのまま返し刃を振るお

うとした武宮だが、振り方が一撃重視だった事と防御しながら次の攻撃を予備動作をしていた友衛には一歩及ばず、背中を斬られて少し飛びながら地面に倒れ、石畳に金属の御剣が落ちる音だけが虚しく響く。

「これ以上は！」

走り込んだ刀使に対して、突き技で牽制すると同時に戻した勢いで身体を捻り、戻す勢いで肩を袈裟斬りにし、続く大剣の武宮は八幡力の力で弾き返し、一歩前に進み、背中を斬り裂く。

「ふん！ はあ！」

走り込んできた2人の武宮の左側に御刀を横薙ぎで叩き付ける様に振るった後に八幡力で殴り飛ばし、右側の武宮も右フックで顔を殴りつけて怯ませると腹に御刀を横向きに突き刺し、上空に投げながら斬り裂く。

「ふん！」

2人を倒す隙に近付いた刀使だが、それを悟っていた友衛は攻撃に攻撃を当てて罅迫り合いに持ち込んだと同時に素早く蹴りつけた足で両膝を砕く。

「せい！！」

友衛は倒れる刀使の首に手刀を突き刺して写シを剥がすと同時に気絶させ、倒した隙を突かんとした槍使いの刀使に対しては身体を逸らして回避すると同時に手元まで近

付いた上で槍を手で押さえつけながら首を御刀で削ぎ斬る様に一回だけ振るい、打シを剥がす。

正しく鬼神、修羅、悪魔とも言うべき強さに戦意が下がる舞草の刀使と武宮達に友衛は怒りに似た感情を抱く。

「ぬおらあー！」

怒りに任せた僅かに上昇する突きの一撃が目の前の武宮を貫いた。そのまま引き抜かず御刀ごと持ち上げて後ろに投げ捨てるとその横に立っていた刀使に向き、肘鉄を喰らわせる。

「ぬうああ!!」

「はあー！」

逆側にいた武宮が放った膝を狙った一撃を、友衛は掬い上げる様に両手で振るった御刀で弾き、そのまま御刀を頭の上まで上げた上で掲げる様に持ちながら身体を回し、肘鉄を喰らってフラつく刀使の腹を袈裟斬りにした。

「はああああ!!」

巻き上げた武宮が復帰し、踏み込むがそれよりも深く、回りながら動き、踏み込みと同時に放たれた友衛の御刀は武宮が振り下ろす前に首に横向きに突き刺さった。

「ふんー！」

力が抜けた瞬間に地面に引き倒した友衛に対して、フランベルジュを持った武宮が上段斬りを放つが、友衛はその一撃を柄は左手で保持したまま、右手首で峰を支える独特な持ち方で防ぐと右手を捻り、フランベルジュの刀身を鷲掴むと蹴り飛ばす。

「やあー！」

蹴り飛ばした瞬間に背中を斬りつけようとした刀使が居たが、友衛は姿勢を低くして横薙ぎの一撃を躲すと同時に足払いを掛けて転倒させ、腹に自分の御刀を突き立てると横から攻めてきた武宮を睨む。

睨まれて一瞬だが固まった事で武宮の攻撃は遅れ、その隙に身体を僅かにズラして長い髪の一部を犠牲にしながらも回避。相手が大勢を整える前に顛顛こめかみに肘鉄を喰らわせ、怯ませる。

「ふ……やあ!!」

刀使に突き立てた御刀の柄を握り、刀使の腹から上を縦に両断しながら掬い上げる様に振った御刀は、肘鉄を喰らわせた武宮の首に吸い込まれる様に命中し、切断した。

「ん？ 貴女が最後？」

徳川財閥の刀使だろう。小太刀を二振り持った刀使と正対する友衛だが、刀使は才能こそある為に友衛と同年代の風貌だが、友衛レベルの実力者と相対した事が無かったのか僅かに震えている。

「やああ!!」

だが、奥歯を噛み締めて震えを打ち消すと右手の刃を振るう。それに対して友衛も御刀を僅かに上げて防ぐ。刀使は続けて左手の小太刀で突き技を放とうとするが刃先の迎撃を受ける。

刀使は一步下り、踏み込みと同時に右手の小太刀で顔を狙った突きを放つもそれをバックステップで躲した友衛は、相手の斜め横に飛び込み、首を狙った横振りを放つが刀使は両方の刃を重ねて、友衛の剛剣を防ぐ。

「ふうん!」

八幡力を使つて友衛の体重を斜め後方に傾かせる。

これにより、ただでさえ重い血瘡紅鋼は持ち主である友衛を、その重量から体勢の復帰という場面で足を引っ張つてしまう。

普段であればこの重さから剛剣の連続を与える血瘡紅鋼だが、こうなると手枷、足枷でしかない。

「貫つた!!」

何とか御刀を振り上げた友衛だが、小太刀は軽量で小振、故に取り回しが良く連撃や速攻に長けた武器である事を理解している刀使は密着し友衛の脇腹に小太刀を突き立てる。

「小賢しい!!」

しかし、それで止まる友衛では無い。両手で保持していた御刀から左手を外すと相手の首を片手で締めて逃げられない様にする。と鑢で相手の顔を殴り付ける。

友衛の血瘡紅鋼は重量バランスで言えば前方集中。刀の用語で言えば先重心の傾向が強い。こう言った刀は操縦し難い傾向に有る。だが、友衛は操縦をし易くする為に柄と鑢も重量の有るものを使う事で後方集中の重心、用語で言うならば、手元重心へと無理矢理に変えている。

そんな重量物の中心に近い鑢で殴られた刀使は頭をフラフラとさせながら、解放された瞬間に後ろへ下がりがり始めた瞬間に友衛の大振りの一撃が首に命中。首無しとなった刀使はその場で倒れ、五体満足の肉体へと戻り静かに横たわる。

「この鑢、使える。青砥さんと鳥田君にお礼言わなきや」

流星に重量がある物体と云えでも、極至近距離でただ殴っただけではそこまでの威力は無い。だが、友衛は勝武居の御剣を見た際に鑢を武器化する考えを見て、ただ思っただけだった鑢の形状を見直していた。

突起のある厚めの金属プレートを6枚も貼り合わせたそれはメイスの槌頭のそれとただ単純に殴り付けただけでも充分な威力を發揮する。

「割と強敵だった」

何とも無いと言わんばかりに脇腹に突き刺さった小太刀を引き抜くと倒した刀使の胸元に二振りとも鞘に戻してそつと置く。

「彼処、つばい」

友衛は東の戦線をほぼ単身で抜けると屋敷と社のある方角を目指して歩き出した。

第三十四話 舞草の隠れ里決戦 三河武宮ノ意地

「儂は此処で足止めしまする」

撤退を決意した朱音と蒼は十条・益子兄妹と可奈美に勝武居、柳瀬・糸見姉弟とエレンとカル口の12人に栄家に忠元、忠優の3人にリチャードと累を加えて、潜水艦での脱出の為に移動を開始するが、忠元が足を止めて、吐き出した言葉に栄家は黙って頷き、先を急ぐ。

「あの……」

栄家の後を追う様に消えた忠優に武宮達が続き、自分と近しい武宮が言ったのを見て、後ろ髪を引かれる思いで刀使達も先を急ぐ様に隠れ道へと向かう。

それでも、何故か舞衣だけが残って居た。

「舞衣殿。何故、行かぬ」

「一緒に行きましょう」

舞衣の言葉にB装備を納めた特殊ケースを作動させた忠元が叫ぶ。

「何を言うておる！」

足から腰、腰から胴、胴から頭へと武者鎧の様なB装備を纏った忠元は舞衣の言葉を

聞いて怒号に近い声を上げる。

「でもー」

それでも尚も引き留めようとする舞衣に元忠はゆっくりと近付き、頭を防刃性の布で覆われた手で優しく撫でる。

「こんな老いぼれも、気にかけてくれるおぬしは優しい娘じゃ」

言葉を探した忠元。その紡ぎ出した言葉は、決意と優しさが、確かに存在した。

「仲間を見捨てられぬ様は若い頃の儂の様じゃ。よくそれで仲間の足を引つ張り、心配させたものじゃ……」

懐かしむ様に夜空を見上げる忠元。過去を懐かしむ様な彼の姿を見た舞衣は言葉を失う。

「それでも……それでも、殿は、忠優殿は儂の側にこの歳になろうと居てくれた」
「なら……」

一緒に行くべきだ。そう言おうとした舞衣だが、忠元は手でその先を制する。

「これが、今の儂に出来る最後の恩返しなのじゃよ。此処は儂に任せてくれぬか？。お主を心配する者が儂よりもおるのだからな」

そう言つて御刀で間道を指し示した忠元に釣られて振り向くと狭い間道から沙耶香と津佳沙が、間道から出た隼士が其処に居た。

それでも尚、引き留め、連れて行こうとする舞衣の目の前を御刀の刃が通り過ぎる。「とうに覚悟は決めておる……侍は勤めを果たし、討ち死にするのみよ！」

抜かれた御刀は柄頭に長い柄が接続され、静型の薙刀になっていた。

「若いおぬしらは間道より逃げい！」

再び、3人が待つ間道を指し示した忠元に、今の自分では説得する言葉が見つからない舞衣は何も言えずに間道へと小走りで消える。

津佳沙と沙耶香を追う様に間道へと入った舞衣の後を追う様に隼士も間道へと再び入ろうとしたが、その足を止めると振り返り、忠元と目を合わせる。

「何もありませんね」

その言葉は、同じ男同士だから分かっている、と言う意思を匂わせた物だった。

忠元はその言葉に強く頷くと背中を向けて、境内の中心にゆっくりと歩いて向かう。

隼士はその背中を目に焼け付けると間道の蓋を戻して後を追う為に可能な限りの速度で動き始める。

「……いいんですか？」

潜水艦が停泊する隠しドックは山をくり抜いた大昔の水軍の軍港跡地を改造して作っている。そこまでの道は当然ながら隠している。が、歩き易い整備された道は敵の目に付き易い位置にある為に、本当の意味での隠し通路を通る。

最初に岩をくり抜いた巧が屈んでようやく通れる程の道を歩いている時に栄家の後ろを津佳沙と沙耶香を挟んで歩く、舞衣が忠元を置いて行った事を悔やむ様に訊くと栄家は強く頷く。

「各防衛線は恐らく抜かれる。向こうは綾小路の殆どの戦力に親衛隊も入れている。誰かが彼処で迎えうたなければならぬ……それに彼は足を患っている。この道を歩く事は出来ない」

「だから残った。別れの言葉は……」

「要らぬよ」

栄家が言い切った瞬間に上空をヘリコプターが通り過ぎる音が響く。

その音は離れた神社の境内で臨戦態勢を整えた忠元も空を見上げる。

「おつ、待たせ!!」「勿体振りやがって」

ヘリコプターのドアが開き、そこから2人の人間が飛び降りる。

折神紫親衛隊専用制服に身を包んだ幼さの残る2人は親衛隊第七席の燕結芽と親衛隊第八席の隼葉結だった。

「第七席と第八席か……」

薙刀を背中側で斜に構え、立てた右太腿に右手を乗せた態勢を作る。

「道を通して貰おうか? 爺さん」

「遙かに歳上じやぞ？ 少しは敬意を見せぬか」

隼の言葉に忠元が諫める様に返す。

「ええ〜。お爺ちゃんと戦つても面白くないじや〜ん」

「才能のみでのし上がった小童めが、意気がるでない」

燕の小馬鹿にする様な発言に対して、忠元は鼻で笑う。貴様らよりも強い奴は幾らでもいると言わんばかりに。

「結芽。2人掛かりで叩つ斬るぞ！ ニツカリ赤江！」

怒りに任せて抜刀した隼の言葉に従う様に燕も御刀、ニツカリ青江を抜刀し、刃を伏せて構える。

「お主……その刀……」

鯉口の近くに僅かに湾曲したアサルトライフルの弾倉が装着された機械的な鞘から抜き放たれた隼の御刀を見て、忠元の眉がより、眉間に皺が出来る。

その刀身は美しいというよりも禍々しさを感ずる赤黒い金紅石で作られたのではないかと思う色で形状はニツカリ青江の写しと言つていい程にニツカリ青江と類似していた。

その御刀の正体を予想しつつも予想通りの代物ならタダでは済まない。そう確信した忠元が薙刀を自分の前方で回しながら頭上に動かして、頭上で一回転、更に背部に動

かしてからも一回転させて、先程と同じ様に背後で斜に構え、右太腿に自身の右手を乗せる。

「三河武宮の意地を見せてくれるわ!」

忠元の叫びと共に2人が駆け出す。

先に接敵したのは燕の方だったが、忠元の経験が燕の速さに勝った。

「ぬん!」

完璧なタイミングで足元から地面をえぐる様な軌道で振るわれた槍に足を取られて、仰向けに転ばされた燕に忠元は流れる動作で打ち下ろす様な軌道の突きを放つ。

「させるかよ!」

だが、その突きは掬い上げる様に振るわれた隼の一撃で外されてしまうが、忠元は老年の経験から掬われた薙刀を巧みに操り、無茶せずに隼の足甲を狙った打ち下ろしの突きを放ってくる。

「あぶね!!」

その一撃を迅移で躲した隼だが、そこから忠元も迅移で位置を微調整した上で素早く振り上げる事で隼の腹から胸に掛けて、薄皮を剥がす程度だが、写シに損傷を与える。

「ガラ空き!!」

「奇襲は無言でするもので!」

石突で腹を突かれた結芽だが、八幡力を使つて、自ら後ろに吹き飛ぶ事で威力の殆どを受け流す。その隙に隼が無言で懐に飛び込む。

薙刀は腐つても長柄武器、懐に入れば有利と判断した上での行動だった。だが、答えは御刀を振る前に首元を掴まれ、引き寄せられると同時に頭突きを喰らわせられる。

「ふん！ 懐に潜り込まれるなど数え切れぬ程にあるわ！」

忠元の懐に入られた時の対処方は相手を先に掴んだ後に八幡力頭突きで吹き飛ばして、突くである。

積み上げて来た基本動作は足を患わろうと素晴らしいキレと速度を維持したまま放たれる。だが、隼も防御の硬さなら親衛隊一を争える人間、意地で忠元の突きを御刀の鎬で凌ぎ切つて見せる。

「まだぞー！」

踏み込みと同時に放たれた再びの突き、意地で凌いだ隼に防ぐ用意は無い。だが、薙刀の柄を蹴り上げる事で軌道を逸らした燕が忠元の腹を狙つて横に御刀を振るう。だが、忠元もただで斬られる弱者では無い。

薙刀を振つて、柄の後半部で燕の斬撃を受け止める。

「はあー！」

健康な右足の爪先を鳩尾に蹴り込んで引き剥がす。

鳩尾を蹴られた事で肺の空気を抜かれた事で呼吸困難へと陥る。だが、燕が倒れた事で隼の攻撃線が通り、走り寄ると同時に振るわれた逆袈裟斬りが忠元に迫る。

忠元はその一撃をバックステップで回避するが、隼も追撃に返した刃で袈裟斬りを放つが、忠元も両手の間の柄で袈裟斬りを防御を行う。

防がれた隼は罅迫り合いをせずに素早く御刀を振り上げ、振り下ろそうとするがそれよりも速く、忠元が先の先で先手を取った事で放たれようとした上段斬りは放つ前に迎撃される。

「はあー！」

八幡力で忠元を飛ばし、自分も後方へ身体を飛ばして、仰向けで苦しむ燕の上に着地すると同時に迅移を使った飛び込みで突き技を放つ。

「ぬるいわー！」

忠元は迫る隼に対して突き技での迎撃に出るが、隼は放たれた一撃を僅かに身体をズラす事で回避するが、それを待っていたと言わんばかりに忠元は柄を隼の脇に食い込ませると、斜めにした柄を使って隼の背を押し。

前に進む力に対して突如として斜め下に向かう力を入れられた事で隼は転倒、その隙に忠元は薙刀を引き、追い打ちで背中に刃を突き立てた上で振り切ろうとした。

「やっせなこよー！」

それを阻止せんと平突きをしながら飛び込んだ燕の一撃は肋骨の隙間を抜け、ごく僅かに左肺の有る場所を刺した。だが、忠元もただではやられない。膝蹴りを燕の腹に命中させると八幡力で吹き飛ばし、薙刀の射程外に出られる前に首を斬り落とす。

「ぐ……」

「やつと、一撃だ」

燕の写シが剥がれた瞬間に忠元が違和感を感じ、右胸に目を向ける。

そこには写シを張り直した隼の平突きで突き出された御刀が、背中から右肺を貫く様に生えていた。

クリーンヒットを貰った忠元だが、そこでやられまいと、奥歯を噛み締めて写シが剥がれるのを耐え抜き、気合の声と同時に、石突を突き出す。

石突で鳩尾を殴りつけられた隼はカエルが潰された様な声を上げて、息を吐き出しながら、忠元の力で上へと放り上げ、頭上で薙刀を何回も回しながら、写シを張り直した燕が薙刀の射程圏内に侵入した瞬間に回転から一転させた袈裟斬りを放つ。

無論ながら、大振りな一撃は燕に防御されてしまうが、忠元にとってはこの一撃は当てる為の攻撃では無く、足止めさせる為の物。本命はこの次に放つ、薙刀を軸に身体ごと回して放つ飛び蹴りだ。

忠元の足は確かに燕の顛顛を捉え、転倒させる。

「トドメじゃー！」

その声に燕は半分は本能で動き、身体を回転させて薙刀の刃から逃れた瞬間に忠元は背中に刃が走った感触を受ける。

「……………の太刀筋」

隼が何かを呟いた。その瞬間に刃が返り、袈裟斬りが放たれる。

「ぬうお…………」

全く同じ場所を斬られた忠元が呻き声を上げながらも耐えるが、この時には既に、忠元の反撃の隙は無い事を燕は知っていた。

両手で突きの体勢が作られ、右手のみで突き出され、戻されるとそこには突き出すだけの左手が待ち構え、引いて突き出すという突きに必要なスパンを可能な限り廃した突き技の連打を背中に何発も喰らう忠元だが、それを必死に耐える。

「ならば!!」

『く』の字を描く様に背中を斬り付け、そこから菱形を描く軌道で更に斬り付け、そのまま止まらずに鋭角な『P』を描く軌道での斬り付けるがそこで止まらず、振り下げた刃を大きく斜めに振り上げながら斬り付け、そのまま袈裟斬り、更に逆袈裟斬り、止まらずに更に袈裟斬り、更に真上に振り上げながら斬り裂き、再び『く』の字を描く軌道で振るわれる。

息継ぎをしながらも止まらない斬撃を背中に浴び続ける忠元だが、意地で頭上に薙刀を掲げ、背中に刃を受けながらも斜めに傾けた薙刀を叫び声と共に回転させた刃は隼には届かず、バックステップで躲かれ、同時に鞘に戻されたニツカリ赤江の居合斬りを腰に喰らう。

「今の時代じゃ……今の争いは……」

ダラリと両手が下がりこそしたが、写シは剥がれず、倒れもしないと忠元に前方がガラ空きになったとみた燕が心臓部に御刀、ニツカリ青江に平突きで突き刺す。

「今の……若いお主らで片をつけい……」

御刀が抜かれ、膝を付いた忠元を見て、勝敗は決したと言わんばかりに血を払う様に御刀を振り、納刀した隼と燕。

「殿の手を……老人共の手を……」

背中を向けた2人の親衛隊の背を視界に収めた忠元が地面に倒れる。

「煩わせるで、ないわ……」

写シが剥がれ、眠る様に瞼が閉じる。

「鳥居さん……」

その言葉は遠く離れた棧橋で、栄家が暴れん坊將軍の如く無双した事で倒れ、気絶する特祭隊の隊員達を尻目に潜水艦の甲板に足を踏み入れた舞衣の耳に鼓膜が揺れると

は違う何かで感じたのか舞衣が立ち止まり、社の方角に顔が向く。

「舞衣！」

沙耶香の呼び掛けに社の方角に向けていた首を潜水艦のハッチに動かした舞衣だが、その心は置いてきてしまった忠元の事で埋め尽くされていた。

第三十五話 舞草の隠れ里決戦 男達ノ最後

「先に行け！」

潜水艦の甲板に次々と乗り込む人間達を見守っていた忠優が突如と叫び、懐から御剣を抜いて構える。

これに栄家が真つ先に気付くが、その訳は直ぐに理解できたのか、唇を噛み締め、当之无愧としての決断をして、何も良い残さずに頷く。

「此処は御逃げ下さい。貴方が捕まれば、我々は終わりです。ですが、貴方さえ無事なら三河武士は必ず再起三起するでしょう」

あまりにも突然な事に社の方角を見つめる舞衣を心配して最後まで甲板に残っていた沙耶香が忠優を見つめる。

そして、直ぐにその訳を知った。

自分達を通つた道から3人、親衛隊第一席の友衛童子、親衛隊第七席の燕結芽、親衛隊第八席の隼葉結が現れたからだ。

「何をしたらいいかでは無く、何をしたいのかで動きなさい」

忠優が沙耶香にそう告げる同時に専用設計のB装備を纏い、八幡力を使って潜水艦の

甲板から陸地へと飛び移るその途中で、陸から潜水艦に飛び移ろうとした隼を殴り飛ばして陸へと戻す。

その隙に潜水艦は出航し、潜行を開始する。これで陸上からの追跡は出来なくなつた。だが、それを悔やむ前にするべき事があつた。

「この人……」

「コイツ……」

「氣を付けて」

肩から背中、肩から腹に掛けて数珠が繋がつた機械化された重甲冑とも言うべき、B 装備を纏つた忠優が現れ、武器を構えた瞬間に3人が同時に武器を構えた。

3人は同時に同じ思いを抱いた。強い、今まで戦つた誰よりも強いかもしれないと。

「栄家に過ぎたると言われしが2人の1人、三河武宮にして三河武士！ 本多忠優が首、手柄としたき者は堂々かかつて参れ！」

槍を回して中段の構えを取る忠優。それと同じ時間に各方面では特祭隊と綾小路の学生、そして親衛隊とその助手達が再編成を行う為に一時攻勢を中断し、南方戦線から人員を包囲に必要な最低人数のみを特祭隊から抽出、残りの人員は東方から隠れ里へ侵入、北側を挟撃した上で突破、西側を潰した後に南方を挟撃の作戦で片を付けるつもりだつた。

その為の陣頭指揮の為に北側に何とか南方戦線から離脱した龍石が北方戦線に到着すると同時に自体が動き出した。

それは舞草側の塹壕でだった。

「朱音様と蒼様、殿様は離脱された」

当主達の離脱により、一応の作戦目標はなされた。後は自分達の離脱が出来れば良いのだが、流石にそれが出来る状況では無い。

「我々は此処の死守をしなくて良くなったが」

「南方からの離脱は無理であろう？ ならば」

「各戦線で突破せよ、との事です」

「分かりやすい」

長船の日本人武宮と徳川財閥の武宮と刀使が話すと、長船の武宮が各員に伝言ゲームで伝達する。

その内容に意見がある刀使だったが、男の意地と義務の言葉で押し黙る。

何もせずに捕まる位ならせめて最後は戦士らしくというのが男の意地だろう。

「長船の武宮のアメリカ人達に告ぐ。貴君らのヤンキー魂に感謝する。此処からは大和魂の時間だ」

「総員、着剣！ 拔刀!!」

塹壕に籠る日本人の男達が神性を持つ鋼で作られた銃剣や短刀、短剣に鉄爪を取り出し、鞘に納めや刀や剣を鞘から抜き放つ。

「突撃!!」

誰かの言葉に全員が塹壕から飛び出し、突破口確保の為に走り始める。

先頭を走る集団は銃を乱射しながら走り、中には応射でやられる者や装填の為に立ち止まった瞬間に撃たれ倒れる者、倒れた者を躲して先頭に出ると銃を乱射する者。

「喰らえ!!」「しゃつころつぞ!」

敵の前線に到達した事で伏射をしていた特祭隊や武宮に至近距離から背中に銃弾を浴びせる者。

「うああああああああ!!」「くるばああああ!!」

立射で撃ち合つて撃たれ倒れる者。

「はあ!」「しまつ!」「取つたぞ」

武器を銃剣攻撃で弾かれ、無防備になった瞬間に別の者に銃剣を受けて倒れた者。

「はあ!」「ぐうあああ!」

刀で斬り付けられた者。

「うおらあ!!」「がはつ」

刀で斬りに来た者に銃床の殴打で答える者。

「グフっ!」「クソが!」

銃床で殴られて怯んだ隙に至近距離から胸を打たれた者。

「がああああ!」「ああ!!」「ああ!!」

迫る武宮達を拳銃の連射で倒した者が、塹壕から放たれた支援射撃に脚を撃たれて倒れる。

「クソ!!」「奴を倒せ!!」

手榴弾を手に走り、狙撃を喰らいながらも投合して何人か吹き飛ばした者。

「下がって!! 下がって!!」

捨て身の突撃に流石の龍石も後退命令はどうの昔に出していたが、進行速度に命令伝達が間に合わず、乱戦をしながらの撤退戦となっていた。だが、龍石の周りはまだ余裕があった。何故なら……

「此処まで!」

迫る長船と徳川の武宮を見て腰に構えた銃の様な物体の引き金を引く。引き金を引かれた物体はまず、背中のタンクから液体を抽出、抽出した液体を噴霧状にして遠くに飛ばし、飛んだ所で銃口近くのバーナーが展開、断続的に薄い青の炎で焼かれる。

御剣などを鍛え、直す際に使われる精油を使った燃烧剤を使用する火炎放射器である。

連射では無く放射の火炎放射器は構えるだけで簡単な防波堤が出来る。だが、中には強者も居る。

「炎程度で!!」

身体に薄青い炎を纏わせながらも迫る長船の武宮だが、錦貫が斬り伏せる。

「どうして此処に!」

別戦線で指揮をしていた彼女が此処に来た事に驚きながらも別の武宮を焼いて倒す。写シが燃え尽きると何故か火も燃え尽きる安全設計だ。

「私の西方が思ったより少なかったのよ」

各方面で最後の血戦が大詰めになりつつある時間、親衛隊3人が長い長い睨み合いから同時に忠優へ斬り掛かる。

やはり最初に接敵したのは燕だった。

燕はいつも通りの行動というべきだろう。平突きの一撃を放つが忠優はその突きを突き技で受け止める。

「はあ!!」「え!!」

御刀と御剣、しかも受け止められるのは更にそこから薄紙1枚よりも少し厚いくらいの部分のみ。それ以外の場所で防ごうとすれば刃は必ずズレてしまう。だが、忠優はしっかりとその場で受け止めて見せた。

その光景に残りの2人は動きを止めてしまう。

「そこだ」

そして、燕の勢いが止まった瞬間を狙って、忠優は刃を削る様に擦り合わせながら鎬と鎬を被せて巻き上げると燕の胸を狙い、寝かせた刃で突き技を放つ。

燕は咄嗟に迅移を使つて後退するが、それがわかつていた忠優は高い段階の迅移では無く、深い段層の迅移を使つて燕の背後に現れる。

「深い！」

深い段層の迅移は瞬間移動。そう比喻されるが、それを真近で見た友衛はその言葉を半信半疑から確かな現実だと認識を変える。

途中から視界から逃れた、下手をすれば人間が視界で捉えた物を脳で処理する僅かなタイムラグの間に移動した様だった。

「(でも!) 後ろ!!」

友衛は落ち着いて次の動作を起こしながらアイコンタクトで隼に命令を送る。

忠優は位置予測を誤ったのか僅かに燕を剣の射程内から逃していた。だが、踏み込みと同時に腕だけで無く、腰と膝に足首も使った射程延長の平突きを放つ。

そこで隼が追い付き、角度を付けた鎬で防ぎ、上方へと弾いた。そして、構えるだけだった隼は素早く刃を忠優に向けて一閃する。だが、その一撃に忠優は落ち着いて籠

手で迎撃する様に防ぐ。

「離れて！」

その声と共に鏢迫り合いをする様に押し込み合っていた隼が離脱すると忠優は飛んで来た物体を御剣で弾いて防ぎ、燕の平突きを峰側を殴って逸らし、掬い上げ様に振るうが燕の胸元の服分を切り裂くだけで終わってしまう。

「浅いか」

燕の様子を見ながら姿勢を下げて額を狙った友衛の一撃を躲した忠優に友衛は身体を回しながら更に手に持った獲物を振るう。

振るわれた獲物は遠心力と延伸力を使って、時には獲物を駆り立てる龍の様に、場合によれば蛇の様に低空を這って迫る。

それを忠優は時に後退、時に横にズレながら御剣で防ぐか弾く、躲すなりしながら捌いていく。

「鞭……いや、七、九節棍か！」

友衛の武器の正体を看破した忠優。

友衛は御剣を接続した九節棍振り戻すと、端に付けられた紐を引っ張ると各関節がそれぞれのだの部分に格納された事で一振りの薙刀へと変わる。

「忠元より面倒そうだ」

顔の横に御剣を掲げて構える。

薙刀使いとは嫌という程に手合わせを続けてきた。それでも九節棍になる事も出来るこの武器は忠元の長柄に御刀を接続しただけの忠元の物に比べれば攻撃軌道の引き出しの数は遙かに多い。

逆に引き出しが多いということは扱いが難しいという意味でもあるが、忠優は友衛が鞭術も基本以上は修めているという事実を先程の攻防で否応無く理解していた。

「はあああ!!」

薙刀を回して構え直すと同時に神速の3連突きを繰り出す友衛に対して忠優は最初の一撃を回避、続く一撃を鎬で防ぎ、3撃目を柄頭で受け止める。

「そっつ!!」「Now!!」

燕と隼の2人が同時に飛び込むと同時に忠優の脚を狙って御刀を振るう。だが、忠優は僅かに浮き上がり、脛足で防ぐと同時に2人の御刀を足場に後ろへ飛ばす。

「逃すと思うか!」逃がさないよ!

2人が迅移で追撃するが、忠優も遙か後方に迅移で逃げるが、それを予見していた友衛も同じ様に迅移で追うが僅かな時間が生まれる。その時間に忠優は背中から長い柄を取り出すと、御剣の柄頭に接続し、回しながら保持する場所を微調整し、剣から槍へとなった獲物を中段で構える。

「そこだー」

そして構えた瞬間に苔石が背後から御剣で刺突を放つ。

苔石も精神的ショックを直した上で友衛が通った本来の隠し通路に残した道標を辿つてここまで来ていた。

それを石突で弾かれ、忠優の横に着地すると同時に忠優は捻り込む様に操った柄で苔石の背を叩いて、迫る燕と隼の方角へ吹き飛ばして2人を阻害すると友衛に向き直る。

「はあー」

友衛は薙刀を頭上で回転させながら飛び上がり、落下の速度を活かした上段斬りを放つが、忠優はその一撃を斜めに傾けた柄で受け流し、着地の瞬間を狙って掬い上げる様な一撃を放つ。

それを友衛は足首の力を八幡力で強化したジャンプで躲すが、急な事もあり、必要最低限の高さだった事もあり、着地の瞬間を狙った突き下ろしには反応が出来ても対応出来ずに胸元を突き刺され、写シが剥がされる。

「友衛ー」

その隙を狙った苔石が背後から飛び出し、走った際の踏み込みを八幡力で強化した事で飛び込みへと変えた上で刺突技を放つ。

燕の平突きと違い、一撃の速さを重視したこの刺突だが、友衛の名を叫んだ瞬間に、槍

を構えながら振り返った忠優は既に迎撃の準備を整えていた。

「ふん！」

大振りの一撃を与えられて、地面に突き刺さってしまう苔石の御剣だが、苔石は地面から抜かずに手を放して距離を取り、徒手格闘の構えを作ったが、腕と腕の間を石突が入り、肋骨と肋骨の間の部分にある剣状突起に引つ掛けると天高く放り投げられる。

「はあ!!」

そして落下のタイミングで突き出された槍を腹に受けた苔石を忠優は燕の方角へと投げて、燕を妨害した上で隼に向き直る。

隼は忠元を討った、止まらぬ連撃を放とうと、ギリギリまで引きつけた上で下段から上段に御刀を構えるが、斬りかかる瞬間に忠優は瞬間移動と見間違う迅移で僅かに後退、石突で手の部分を払って、歩を横にズラすとそのまま背中を叩いて更に態勢を崩させ、転倒を寸前で耐えた隼の背中に槍を突き刺し、写シを剥がす。

「やあー！」

隼が倒されたと同時に苔石を蹴飛ばして立ち上がった燕が上段で斬り掛かるが忠優は槍を引き抜く勢いで後退して躲しながら槍を下に向けて、長さを利用した掬い上げで燕の足首を切断、転倒させる。

「へやあー！」

肩に背負う様に構えた槍を振り下ろす様に倒れた燕の鳩尾に鏢を使った殴打を見舞い、槍を引き上げると同時に腹を踏み付けて、逃げられない様にした上で胸に追撃の刺突を喰らわせて燕の写シを剥がす。

「いやああ!!」

今まで以上に本気の友衛が放った突きが迫るが忠優は槍を回して弾くも迅移で後退しながら友衛は再び態勢を整える。

その心には親衛隊3人を倒した忠優への怒りと絶対に倒す、否、絶対に殺してやると言わんばかりの形相だった。

「ッ……」

中段に構えた友衛と上段に構える忠優。ほんの僅かな睨み合いを挟み、友衛が先に忠優の槍の穂先を自分の薙刀の穂先で巻き払い、石突を掬い上げる様に放つ。

「つえい!!」

そこから叫びと共に上段斬りを放つがそれを横にした槍の柄で防がれるが、友衛は槍の柄を撫でる様に刃を引いて動かし、刃が柄を抜けた瞬間に突きを放つ。だが、忠優もそれでやられる人間ではない。

槍を斜に傾け、石突側の柄で穂先をズラして、腕の傍に通り過ぎさせて、鏢迫り合いの様に互いに八幡力を使って、槍と薙刀を押し合う。

そして、次は此方の番だと言わんばかりに八幡力を弱めた瞬間のバランス崩壊の隙を突いた忠優が御剣側の穂先を僅かに動かし、斬撃を放つが友衛は飛び退く様に下がり、互いに頭上で獲物を回して中段の構えで再び睨み合う。

「はあー!」「つおいやあ!!」

忠優は穂先で穂先を巻こうとしたのを友衛は薙刀を引いて躲し、それに対して次の一撃で仕留めるつもりで忠元は上段の突きを放つが、友衛は足首の八幡力を使って、膝を地面に擦りながら滑り、捨て身の一撃で忠優の腹に向けて薙刀を突き出した。

次が本命と外れば敗北必至の一撃、どちらが強いなど火を見るよりも明らかだろう。

経験を積んだ者は確かに強いが、経験が乏しい者は時折に賭けへ出る場合がある。

忠優はこの読み合いを間違え、友衛はこの読み合いに賭けで勝った。

「ぬうおおおおお!!」

だが、三河武宮の、三河武士の意地を見誤った。

忠優は剥かれる写シを寸前の所で繋ぎ止め、御剣の鏝で友衛の脚を引っ掛けて転ばせるとそのまま首を突いて、写シを剥がす。

「はあ……ハア!」

大きく息を吐いた瞬間に心臓の部分を何かを通り過ぎ、向かい側の岩に突き刺さる。

忠優は己を貫いた物質では無く、それが飛んで来た方向に視線を向けるとそこには独特な形状の御剣を構えた苔石が壁に寄り掛かり、荒い息を吐いていた。

「ただ信じ……土に埋まりし……」

槍の矛先と右膝で身体を支えようと様とするが、力が抜ける身体に己の体重を支える事は出来ずに徐々に倒れる。

「……枯葉なり……花咲き誇り……」

身体は地面に倒れ、仰向けに倒れる。最後の最後に力を振り絞ろうとするが、身体はその命令を受け付けずに脱力するが、掻き集めた力は僅かに肺と声帯を動かした。

「……泰平の世」

第三十六話　まだ見ぬ明日の為に

「長船と美濃関が……」

一方で舞草の潜水艦の艦内では、長船共学院と美濃関学院に警察が突入したと言う情報を受け取る。しかも、突入の理由は大規模テロの兆しがあると言う理由でだ。

流石のコレには勝武居と隼士が怒りを露わに机を殴ろうとしたが、それを栄家が止める。それも尋常では無い程の握力で手首を握り締めてだ。

それに2人は力を抜いて抵抗を辞める。痛みもあるが、栄家も自分の血族を美濃関に入学させている。保護者としての怒りは生徒としての自分達を遥かに超える事は理解出来た。

「平城も封鎖されたらしい」

その言葉に姫和と帝人は何も言わなかった。そして薫は長船の学長の安否を気にするが、連絡は付いていないと累は首を振る。

「艦長からの伝言を預かって来た」

暗い雰囲気の一同行にリチャードがハッチを静かに開けて入室する。場所は食堂だ。

他よりも広々としており、コレだけの人数が集まっても尚、収容人数には余裕があつ

た。

「各地の舞草の仲間達も身動きが取れないらしい。それと徳川財閥だけど、そこは問題無いらしいけど、身動きは取れないそうだよ」

「だろ。ウチは腐つても全国規模、事業関係無しに見れば一千万近い従業員が居る。潰せば社会問題だ。非正規は更に多いしな」

「ああ。監視がキツくなつたらしくてね。その連絡を入れるのがやつとらしい。一気に窮地に追いやられたね。大分前から仕組んでいた。つて感じだ」

リチャードの言葉に累は舞草の隠れ里を知った理由が気になり、問い掛ける。

それによりチャードは首を振って、内通者は居なかつた事と電子の世界からも里の位置は自然に偽装していた事、その偽装に綻びは無かつた事を伝える。

「知っていた。と言うよりも、なんらかの方法で見つけたんだらう」

そう呟いてたりチャードの言葉に隼士が『あ』と何かを思い出す様に呟いた。

その言葉は全員の注目を集める事となり、隼士は上擦った声で思い出した事を話す。

「マーケティング。ゾリンゲンの荒魂。と言うか欧州の荒魂がする行為んだけど、身体の一部を何処かに付着させて情報を集めたりするらしんだよ。ゾリンゲンの場合は荒魂が威嚇や縄張り主張、猟果の誇示にも使うけど」

「成る程。あのアンブルだね。中身はノロかノロの加工品だからね。なら、僕らの位置

は大丈夫だけど……」

言い淀むリチャードに栄家が続ける。

「時間は我々の味方では無い邪魔者は殆どが排除出来た。私ならばこの機に乗じて、天下を取りに行く。起こるぞ、20年前の大災厄を超える大災厄がな」

栄家の言葉は全員が理解している。そんな状況でどうするべきか。そう悩ませていたが、リチャードだけはどうか迷っていた。

決して策が無い訳では無い。それをこの潜水艦の艦長、カルロの父親から授かっている。だが、そうなると若い彼等と彼女等を死地に送る事になる。

リチャードはカルロの父親、レオスと違って軍人では無い。それ故に孫を死地に送る事に戸惑いがあった。レオスは優秀な軍人であり、必要なコストであるならば戸惑う事なくそれを払える対応の優秀な軍人だ。血を分けた我が子が死ぬ事も当然の様に覚悟している。

リチャードは迷った末に一旦は解散を提案する。時間は少ないが無い訳では無い。どうするにしても、狭い日本海から広い太平洋に逃げるまでは半日、ないしは1日は掛かる。

せめて、その時間はゆつくりと刀使や武宮を休ませたかった。

そんなリチャードの心情をエレンは悟ったのか刀使と武宮を連れて寢床の集まる区

画へと全員を連れて行く。だが、ほんの少し歩いた位で気が軽くなる訳で無い。

部屋には全員分の重苦しい雰囲気包み、ねねやくくも雰囲気察してた押し黙る。そしてそんな静寂の中に居ると人間は過去を思い出す。

「……………」

舞衣の脳内に忠元の言葉達が蘇る。

『仲間を見捨てられぬ様は若い頃の儂の様じゃ。よくそれで仲間の足を引つ張り、心配させたものじゃ…………』

『これが、今の儂に出来る最後の恩返しなのじゃよ。此処は儂に任せてくれぬか？。お主を心配する者が儂よりもおるのだからな』

「私…………」

舞衣の声に全員が舞衣の方角を向く。それと同時に忠元の言葉も蘇る。

『とうに覚悟は決めておる…………侍は勤めを果たし、討ち死にするのみよ！』

「私も覚悟を決めた。戦わなきゃいけない…………うん。戦いたい」

可奈美が舞衣の名を呼ぶと舞衣はベツトから立ち上がり、姫和に目を向けた瞬間に自分の中に何かが入って来たような感覚を味わうがそれを意識的に感じる事は舞衣自身にも、他の誰にも感じる事は無かった。

舞衣は隠れ里の温泉で舞衣に姫和が話した、戦う理由が舞衣には無いと言う言葉を返

すと帝人は姫和を横目でお前はそんな事を言ったのかとアイコンタクトで送る。だが、姫和は舞衣を見ており、帝人のそれに気付かない。

「それで、ずっと考えていた。自分がどうしたいのかって……私は可奈美ちゃんに追い付きたくて、勝武居くんと彗士に引つ張られて、津佳沙くんや沙耶香ちゃんを放つておけなくて。此処まで来た」

目が揺れる。それを見た彗士がその先を止めようとするがそれを勝武居に止められて、彗士は浮き上がった腰をベツトに静かに戻す。

「言い換えればそれだけだった。でも、今は違う。舞草の人達。何よりも忠元さんの想いを受け取って思ったの……これ以上、目の前の人達が犠牲になるのは嫌だって」

誰もが押し黙り、沙耶香と津佳沙が立ち上がる中で舞衣の独白は続く。

「私の力では、全ての犠牲を無くす事なんて出来ないってわかってる。でも、せめて手の届く範囲の人達の犠牲を無くしたい」

沙耶香と津佳沙の手を握る舞衣が今までのどの言葉よりも強く、言い放つ。

「それが、忠元さんが犠牲になってまで助けてくれた私の義務で、私自身だけの戦う理由だから」

その言葉に目を見開く者が居る。そして、舞衣の手を握り返す者が2人も居た。

「私も、戦う事しか出来ない。けど、忠優からしたい事をしなさいって言われた。舞衣

と、彗士と、津佳沙と、みんなと戦いたい。私もみんなを助きたい。だから戦う」

津佳沙は自分が言いたい事を全て言われたとがっかりしながらも舞衣の手を強く握って自分の想いを伝える。それに舞衣が微笑むと彗士の声が響く。

「自分は、ゾリンゲンの狩人で依頼された身。だけど、男の意地を見せられて、それだけで戦う軟弱者じゃない。男の意地と狩人の誇りを持って、刃を振るおう」

波切會凛厳と毒切會凛厳を抜いて宣言した彗士に釣られてか、薫がベットに横たわりながら、巧は壁に持たれながらも、静かな怒りを孕んだ声を上げる。

「俺も里のみんなの仇を討つて決めた。このまま黙って居られるか」「紫をこの手でポッコポッコにするまで泣き寝入りは無しだ」

決意の意識が蔓延した部屋の中に膨大で協力的な怒りと殺意の波動が混じる。

「俺は……」

その波動の主は勝武居だった。勝武居は美濃関に入学後に剣術の師匠とも言える講師から授業の一環で渡された懐中時計を懐から取り出す。

可奈美の剣の腕は知っていた。幼馴染で、いつも手合わせしていた勝武居には周りとは大人からは感じられない将来性に気付いてしまった。

それは幼心であるが故に、本能に近いぶぶで理解してしまい、何処か諦めの感情も出ていた。だが、美濃関に入学した事で出会った騎士の戦い方に勝武居は可奈美を超え

られるかもしれないと言う可能性を感じた。

そこからは迷う事無く、可奈美にも告げずに騎士の戦い方を身に付ける為に新陰流ではない流派の門を叩き、そこで騎士の戦い方も学び、今までの新陰流と合わせた戦い方を作り、今では可奈美と並ぶ実力者となっていた。

そして、騎士の戦い方を学ぶ上では、精神も密な関係である。

勝武居が取り出した懐中時計は銀鍍金の蓋にポールアックスを肩に背負う重装鎧の騎士が彫られただけの簡単な安いゼンマイ式の物。だが、武士と言うよりも騎士の様な戦いをする者達にとってはこの時計は己の誓いであり、過ちを犯さぬ様にする為の枷もあつた。

何故なら、最初に行う事はこの懐中時計の蓋の裏に、騎士とは何たるかが小さく英語か独語で掘られており、その下の空白に英語か独語で掘るのだ。

己が騎士を目指し、どの様な騎士になるかを。その理由を掘り、認められた者だけが騎士として見出され、学べるのだ。騎士の戦い方を。そして、勝武居は見出された。

「誓ったんだよ……」

懐中時計を開く。

下を開くタイプの勝武居の懐中時計の蓋の裏には英語で確かに彫られていた。

『Take weapons to save weakness, if you

are justice, go anywhere and stay strong for friends fighting together. I am willing to self-sacrifice.』

「騎士としての近いもある。だけど、今はそれ以上に……思い出した。俺は三河武士の末裔だって事を……」

懐中時計を閉じて、懐に戻す。

「折神紫に……タギツヒメに……三河武士に喧嘩売って、タダで済まされる筈が無いって事を身体に教え込んでやる」

誰もが怒っている。そう確信すると同時に可奈美でさえも怒った所を真横で見ても為か、すぐ近くの柱に抱き付く事で必死に耐えている。

「だけどよ……どうするつもりだよ。八方塞がりだぜ?」

「そうデスよ。敵は1人じゃ無いデス。大荒魂に辿り着く前にきつと沢山の障害が……」

「なら、障害を避ければいい」

カルロとエレンの言葉に帝人が答える。だが、エレンはそう簡単な話ではないと反論するが、帝人が頭の中の作戦を語る。

「この潜水艦にはS装備の打ち上げ機構がある。幸いな事にS装備保護の観点で人型の

「あんまり美味しく無いがな」

「レーションってそう言うもんだよ」

巧の言葉にエレンが、エレンの言葉に薫が、薫の言葉にカルロが答えて笑いあつた瞬間に全員の身体の前後に半透明の自分が現れる。

まさかの自体に全員が驚愕し、身動きが取れないでいるとリチャードが現れた。その顔はやはりかと言う表情を浮かべていた。

「直ぐに食堂へ」

リチャードの言葉に従つて食堂へ赴くとカルロの父親、レオスも加わつた先程のメンバーが既に集まつていた。と言うよりも事前に集まつていたと言う感じだった。

リチャード以外は前後に半透明の自分自身が浮き上がつていた。

「Dr. リチャード、Mr. 栄家。何か知っているのか？」

レオスの言葉は時間が無い。単刀直入に早く告げろと口外に告げていた。

それを受け取つた栄家は単刀直入に告げる。

「大荒魂出現の前兆だ。20年ほど前に経験した」

「ならば、国家規模の災害になる。何とかして、全国民に伝える方法は無いか？」

前後の霊体が無くなつた事で浮き上がっていた心が落ち着きを取り戻した蒼の言葉にレオスが答える。

「無い事は無い……が、ぶっちゃけ自首に近い。この子達……」

そう言つて、若い刀使、武宮達に目を向けたレオスだが、その先の言葉は出なかつた。もう既に、彼等は、彼女等は覚悟を決めている。そんな姿を見たりチャードは感慨深そうに呟く。

「全く、刀使や武宮という存在は……ならば、僕たち大人も出来る限りの事をしようではないか。よろしいですね？ 朱音様、蒼様」

「ええ、子の為に大人がやるべき事です」

「こうなつたのも私たちの世代の責任だ」

「払うべき時が来たと言う事か。作戦は聞いている。隼士くん、持つて行きなさい」

朱音、蒼、栄家の順番で立ち上がりながら告げると栄家は懐からベルトとそれにぶら下げられたポーチを渡す。

中には手裏剣や苦無と言つた投合武器が満載されていた。どれも栄家が修めた手裏剣術の為の武器達だ。

「使いなさい。足しにはなるだろう。これから君達を「S装備搬送用コンテナで打ち出して下さい」……」

栄家の言葉に帝人が被せる。自分達がやろうとしていた事を志願されて薄っすらと笑つてしまう。

「準備と横須賀港から発射するまで時間がある。準備が出来た奴から一寝入りして、回復をしろ！」 出撃予定時刻は、0100を予定している！」

レオスの言葉にそれぞれの返事を返した者から準備の為に去って行く。レオスも別の通路から艦内に指示を出すべく司令部へと向かう。

「私たちも準備を」

「出来る事が少な過ぎますがね。あと5年、早ければ」

「ええ。ですが、少しでも多くの敵を引きつけましょう」

「まだ見ぬ明日の夜明けが、変わらぬ物であるために」

「変えてはならぬ物、でしょうな」

大人達も準備を始めた。

まだ見ぬ明日が今日よりも良い日にする為に。

第三十七話 折神家殴り込みと仇打ち

舞衣の視界に広がるのは赤い彼岸花の花畑だった。そして何よりも舞衣の目を引くのは、その中心に置かれたダチヨウの卵ほどの大きさのある、焰の様な模様に入った卵だった。

舞衣の口から言葉が漏れそうになった瞬間に卵が砕け、中から卵に対して驚くほど小さな雛鳥が割れた殻の上に座って、彼岸花の茎の間から舞衣の目と自身の目を合わせた瞬間に景色が変わる。

それは影絵の様な光景で、襖を挟んで向こう側に3人の男性らしき影があり、舞衣の鼓膜を何処かで聞いた事のある声が揺らす。

『あの日の夜。何故か、殿と忠優殿とは今生の別れになり様な予感がしておったが』

その中の1人が2人の持つ盃だろうかに、徳利から何かの液体を注ぐ瞬間だった。2人の影が飲み干して立ち上がる。

喧嘩別れという様な別れ方では無い。

そして景色は変わり、甲冑に薙刀を持った男性の影に少女ほどの影が移る光景が生み出された。

『幼き頃より七首、愚風という、げにも恐ろしき荒魂と』

7つの首を持った蛇の様な荒魂の影と暴風を纏った鴉の荒魂の影が映ったバックスクリーンを背景に、少女は後ろ髪を引かれる様に消え、次に少年の影が現れると少年は敬意を表する様に甲冑の影に頷き消える光景を見せる。

『共に戦った間柄。いまさら、言葉など要り申さぬ』

薙刀を持ち甲冑を纏った男性に消えた少年と少女とは違う少年と少女の影が現れ、戦い始める。

その戦いは正しく、一進一退の攻防が続く。

『未来を託した若き者達が』

だが、遂に甲冑の影が2人の少年と少女の影に斬られ、地面に倒れる。その瞬間に赤い彼岸花の花弁と仄かに燃える鳥の羽が徐々にその光景を埋め尽くそうと、何処からか飛んで来る。

『築く、新たる世を見届けん』

その言葉と共に視界を彼岸花の花弁と仄かに燃える羽で埋め尽くされた。その瞬間に舞衣の臉が開き、視界に飛び込んだのは潜水艦の2段ベットの上的段だった。

「舞衣……」

そして隣で寝ていた沙耶香も起きていたが、何か怖い物を見たのか、弱々しく舞衣に

抱き着くが、舞衣に抱き返されると安心した様に小刻みな震えが止まる。

「沙耶香ちゃんも何か見たの？」

舞衣の言葉に聡明な沙耶香は舞衣も何か見たのだと理解すると、沙耶香は舞衣が見た物に興味を示し、舞衣は見た物を伝える。

寝ている時に見る夢と言うのは起きた瞬間から忘れる物だが、何故か細かな所まで覚えており、舞衣は沙耶香に見た物を出来るだけ細かく伝える。

沙耶香も舞衣の後に夢で見た事を伝えるが、舞衣ほど鮮明に覚えている訳ではなく、何かの生き物に似た光る生物が自分に飛びかかったと思うと歩き去って行った光景を教える。

何かと神秘の一言で片付けられる、もしくは片付けられない出来事は多いが、舞衣が沙耶香のあつた神秘的とも言える光景を聞いた覚えは無かった。だが、まだ幼さのある沙耶香には不可解な物を見た事への恐怖心もあつたのだが、思い出そうとしても思い出せない出来事に沙耶香の恐怖心は薄れる。

「12時か。そろそろ、みんなを起こさない」と

そう言つて、舞衣が上の段で眠る隼士の肩を揺り動かして起こすと隼士は直ぐにこの後の事を思い出したのか、トロンとしていた目に鋭さを戻して武器や持ち物の確認を行う。

他のメンバーも舞衣と沙耶香で起こそうとするが、彗士以外では可奈美とカルロしか眠れていなかった。

「よく、こんな時に寝られるな」

「何処でも直ぐに寝られるのは刀使と武宮の重要な素養デスよ」

薫の言葉にエレンが答えると全員が全員、自分の装備品に不備がないか最後の確認を行い、姫和が舞衣を見て告げる。

「指揮を頼む。お前の指揮なら必ず辿り着ける」

「十条さ「姫和でいい」

その言葉に舞衣は何も言わずに頷く。その目は自信に満ち溢れていた。指揮官を決め終わると全員が全員の顔を見渡し、全員の顔を見たカルロが手を差し出した。

それを見たエレンが、カルロの手の上に自分の手を重ねると薫がカルロの下に、巧がエレンの上に手を置く。これで全員が何をするのか理解したのか、舞衣、沙耶香、彗士、津佳沙、可奈美、勝武居と手を重ね、最後に帝人が乗せると姫和の最後におずおずと手を重ねる。

「誰か、掛け声」

カルロの声に全員がそこを考えていなかったのかと突っ込みたがったが、勝武居が掛け声で遮った。

「敵は折神家の屋敷にあり！」

勝武居の声に全員がエイ エイ オーの掛け声を上げた。

折神家の屋敷側に建てられた管理局の司令所では、先程の刀使と武宮の異常状態が混乱が収まったと思ったら、今度は折神朱音の出頭予告により慌しくなっていた。

「折神朱音の出頭……このタイミングで」

司令所の中では折神紫親衛隊第二席の獅童真希が狙ったかのようなこの情報に先程の不可解な現象と相まって不信感を抱いていた。

「ですが、この機に乗じて舞草の刀使や武宮と合流する可能性も有りますわ。無視は如何な程かと」

獅童の様子に折神紫親衛隊第三席の此花寿々花が釘を刺す。獅童の性格から考えて、真実を確かめに行く之行って自ら乗り込みに行かねないからだ。

「そうだね。鎌府を出して一応の警戒を」

近くの職員に鎌府学長の高津に出勤の要請をさせようとした獅童の耳に既に高津は生徒を引き連れて、朱音が現れると予告した横須賀港に既に到着しているという情報が届く。

「高津学長の暴走……ですが、今回は良い方向に傾きました」

「明夜……」「夜見さん！」

身体は良いのかと詰め寄る2人だが、当の本人もあの怪奇現象に遭遇しており、何事があつても良い様にと、明夜と夜見も親衛隊の服に袖を通し、武装をした状態で来た。

2人からすれば黙って寝ていて欲しい所だが、不可解な現象が有つて直ぐな事もあり、無理しない程度で復帰を許可をする。

「映像を映します」

職員の1人が液晶の一部に横須賀港の映像を表示させる。

音声データは無い為に司令所の人間にはわからないが、現場では野次馬の一般市民とそれに混じつて大量の報道陣、そして野次馬と報道陣が一定以上の侵入をしないように一般の警官とそれに混じつて前面に立つのは特祭隊の警官と特殊部隊の警官。そして建物の暗闇には狙撃銃を装備して特殊部隊の警官も配置されていた。そして勿論と言うべきか鎌府の刀使と武宮の姿がパトカーのサイレンが響く横須賀港に集結していた。

「無駄な事を……」

それを潜望鏡で見ていたレオスは潜望鏡を下ろし、艦橋に上がる梯子を登る。登り切ったレオスの視界にサーチライトで照らされた朱音を挟むように栄家と蒼が立っていた。

日本のトップに居座る女の妹と日本の経済に深く根付く財閥の長、そして知る人ぞ知る隠れた重要人物に日本中の人間が注目していた。

「自分達は撒き餌だ。派手に行くさ」

発射のタイミングを計るレオスが立つ艦橋の根元では朱音により演説に近い真実の暴露が始まろうとしていた。

「今、この国に……いえ、この世界に大きな危機が迫っています！20年前の、それ以上の災厄が起ころうとしているのです」

そして告げられる不可解な現象の正体が大荒魂復活の前兆である事、そして一刻の猶予も無い事。その言葉に鎌府の生徒達は不信感を手に入れるとそれを払拭するが如く、鎌府の武宮の1人が潜水艦の甲板に八幡力を使った跳躍で飛び移り、巫山戯た事を言うなど叫びながら武器を抜き、写シを張って斬りかかろうとした瞬間。

「大人が大切な話をしているんだ」

「静かに聴くのが礼儀という奴だ」

「それと不法入国も立派な犯罪だ」

右手を栄家の投げた風魔手裏剣に切断され、蒼に股下から打ち上げられた武宮がレオスのM600で撃ち碎かれる。

粗悪な禍神の御守りの原料で製造された大口径のダムダム弾は命中した相手の身体をスタスタに吹き飛ばす。

そして同時に垂直発射管を海水から守るハッチが全て開かれる。

それを確認した高津学長が狙撃銃を装備した警官に命令して、引き金を引かせるが、位置が分かっている狙撃兵の銃弾を迎撃出来ない蒼では無い。

「な!!」

「ぐうあー!」

朱音を狙った銃弾は蒼の大太刀に斬り伏せられ、狙撃銃は徹甲弾を装填したレオスの跳弾により、スコープを破壊され、別の狙撃銃を装備した警官の銃には銃口に銃弾を当てて、ダムダム弾の膨張により、花を咲かせるがその際に警官の腕を負傷させてしまう。

「どうか、皆さんのお力を、私達に貸して下さい」

朱音の言葉と同時にS装備搬出コンテナが6基、垂直発射管から1基づつ発射される。

「待ってろよ! タギツヒメ!! 今ぶっ殺しに行つて」

最後に1基には、中に入らないからと外にダクトテープでグルグル巻きにされた巧が括りつけられており、巧の『やるううう』という叫びがドップラー効果により間抜けに聞こえながら空へと打ち上げられた。幸いにも最後以外は発射管の中だった事と発射音で本人以外には聞こえていなかった。

「これは、攻撃ではありません！　今と飛び立ったのは……」

朱音が打ち上げられたコンテナを見上げる。

「希望なのです！」

打ち上げられた物の正体に此処に入り殆どの人間は巧の叫び声の所為で気付けなかったが、司令所ではいち早く、S装備の搬送コンテナである事を見破った。

「着地予想地点は！」

明夜の叫びに職員が素早く計算を行う様にPCに指示をすると即座にその結果が出る。

「此処です！　此処に向かって飛んできます！」

「やられた!!　奇襲を喰らうぞ！」

明夜が叫ぶや否や、ドアを蹴破るかの様に開けて廊下に飛び出ると地震が起きたかのような揺れに襲われる。

6基もの重量物がマツハ0に近い速度で地面に衝突したのだ。ごく小さい領域に地

震の様な揺れを起こすのも当然と言えよう。

「やってくれたな」

怒りを露わにする獅童も廊下へと駆け出す。

それと同じ時間に目的地へと着いた、と言うよりも目的地を突いたコンテナはそのハッチを開けて、S 装備を着込んだ刀使と武宮を解放し、巧は八幡力と筋力でダクトテープを千切る。

地上へと降り立った刀使と武宮は一斉に走り出し、地面や屋根、場合によっては壁を蹴って、己が一番早く動ける移動法で折神家屋敷の門前を目指す。

その途中で可奈美と勝武居は舞衣と沙耶香、津佳沙の3人と合流し、門前に着地すると地面を走って同着したエレンとカルロ、僅かに遅れた薫と合流。同時に壁蹴りで移動した隼士と屋根を走った帝人と姫和が既に門前で待機しており、そちらとも合流を果たす。

「巧は？」

巧以外が合流を果たしたが、巧の姿が無い。

巧の姿を探す全員が背後から轟音を感じて、飛び退くと立派な松の木をシヨルダータックルでへし折りながら誰よりも移動速度が遅い巧が現れる。

「うおらああああ!! 殴り込みじゃああああ!!」

そして、そのまま巧は門へシヨルダータツクルをぶちかまして、門を文字通り粉碎して、屋敷内へと侵入すると、他のメンバーも巧の開けた大穴、と言うよりも正門だった物を抜けて侵入を果たす。

「何も見えない!」

カルロが叫ぶのも無理は無い。S装備のバイザーに付けられた視界補助の機能が意味を成さない程の木片や土煙、埃が視界を埋めていたが、巧がカルロの声を聞いて、腕を片方ずつ振るい、右足で四股を踏む様に地面を踏みつけると、猛禽類の羽ばたきを思わせる風圧が3回も発生し、視界を覆っていた物が吹き飛ばされて、視界が晴れる。

漸く白砂の庭へと出る。

そこは全てが始まった地。御前試合決勝の舞台だった場所だった。感慨深い感情に支配される殴り込みメンバーだが、ねねとくく、旧式スペクトラム計により大荒魂の位置を知るとS装備稼働時間が30分という事もあり、時間が無いからと先を急ごうとしたその瞬間だ。

「にひ、あはは」「やってくれたね」

幼い少女の狂気を感じさせる笑い声と怒りに震える声が響いた。

その声に全員が声のした方向に武器の柄を掴みながら向くと声の正体を視界に収める。

狂気を感じさせる笑みを浮かべる折神紫親衛隊第七席の少女、燕結芽と、その隣で確かな怒りを目に潜ませた折神紫親衛隊第一席の美男子、友衛童子。その2人が満月を背に屋根の上から見下ろしていた。

「ええつと……きー、めった!!」

手の上に手を掲げて品定めのような目線は無遠慮に投げる燕が可奈美を捉えると笑顔で迅移を発動、可奈美と御刀を合わせようとするが。

「又ウン!!」

一直線のただ速いだけの迅移を邪魔できない巧では無い。御刀を上段で掲げていた燕だが、向こうから突っ込んでくる相手に対してラリアット以上に速い攻撃は無い。

巨木の根の様な安定から殺気も意識も無く突き出された巨木の如きアランの腕に頭をぶつけた燕は急停止をせざるを得なくなり、その隙に腕を振って巧は燕を吹き飛ばし、カルロが無言で弓を速度重視の射方で燕に放つ。

「全員、私1人で充分!」

カルロの矢を弾いた友衛が、可奈美に不規則な軌道を迅移で移動しながら迫るが、放った突きは勝武居の腕に掴まれて止められる。

「最上大業物よ!」

「だから、どうした!! コイツは貰うぞ!」

更に上に放り投げて持ち変えた御剣のハンマーの部分で友衛は背中を叩かれて正門の有った方向に放り込まれ、勝武居は迅移で追撃に出る。

「巧くん！ カルロさん！ エレンさん！ 薫さんは第七席を！ 勝武居くんは第三の席をお願い！ 彗士！」

指揮官役の舞衣の言葉に長船4人衆は頷くかサムズアップで答え、勝武居の方角からは何も無かったが、舞衣は満足気に頷き、津佳沙と沙耶香を連れ立って先を急ぐ。そして彗士は勝武居に加勢しようとした可奈美をタックルで担ぎ上げるとそのまま舞衣の後を追ひ、その後ろを帝人と姫和が追って先を急ぐ。

「ハの!!」

飛ばされた燕が斬りかかるがエレンの御刀で防がれ、鏢迫り合いになった所を薫が上段の叩き付けで攻撃するが燕は鏢迫り合いを離脱する事でその一撃を躲す。

「もうちよつとだったのに！ なんて余計な真似するの！」

「そこに殴れる顔面があったからだ」「この筋肉脳味噌の援護を命令されたからだ」「舞草の仲間達の仇の1人だからな」「貴女には大きな貸しがあります！」

「だから何！ そんなの弱いのが悪いだけでしょ！」

御刀を払いながら燕が叫ぶ様に吐き捨てる。

「知ってるよ。お姉さんとお兄さん達、弱いから此処に置いてかれたんだ。それって、

あの千鳥のお姉さんと違って、4人じやなきや私を抑えられないって事だよね」
 「それは違うな」

巧がそれを真つ向から否定した。四股を踏みながらだ。

「実力をちゃんと測れる舞衣だからな」

薫が御刀を肩に担ぎながら信頼の笑みを浮かべる。

「最良の判断を下せる指揮者が居マス！」

エレンの言葉を聞いて、我慢の限界だと燕が叫ぶ。

「だから何！ いいよ、直ぐに片付けて追いかけるんだから！」

そう言つて構えを腰だめに変えた瞬間に燕の臍の部分を矢が貫通した。

「It is impossible」

新しい矢を番えて構える。

「俺たち4人を舞衣は残した。それはつまり……俺たち4人なら、お前を倒せると判断したからだ」

「弱いくせに……」

燕が顔を手で覆い、怒りを露わにする場所から離れた正門と御前試合の会場を繋ぐ屋根のある広い回廊を火花で照らす影が2つあった。

「刃を手で抑えた時はどう言う事かと思つたけど……棧橋の彼ほどじゃ……」

火花散る鏝迫り合いから一転、顔が空いた瞬間を狙った頭突きが友衛の鼻っ面にク
リーンヒット。友衛が態勢を崩したその瞬間、押し飛ばした勝武居が腰から折り畳まれ
た金属棒を取り出した。

出撃前に栄家から渡された物だ。

畳んだ物を伸ばして、柄頭に接続した事で戦斧となった武器を構える。

「倒された三河武士の仇打ちだ！」

勝武居と友衛が同時に駆け出した。

第三十八話 迷う者と強敵、そして姉弟

本殿を走る一行は舞衣の明眼と、いつの間にもやら手に入れた魔眼の一種で透視の能力を与える透眼と呼ばれる魔眼の力を使って、初見である筈の屋敷内を迷う事なく移動する。だが、透眼は近くを見てみると壁などのぶつかる事と精神力の消耗が激しい事から今は透眼の能力は切っている。

「此処を突っ切つるよー」

近道だからと言った舞衣の言葉を信じて、大広間を仕切る襖を蹴り飛ばす津佳沙と熱したナイフでバターを切り裂く様に襖を切断する隼士。

「いつてええな!!」

「誰も居なかつた筈なのに……」

通り抜けしようとした大広間には、蹴り飛ばされた襖に下敷きにされた折神紫親衛隊第四席の苔石礎々石が、襖を跳ね除けて視界に現れると同時に一行もそれぞれの武器を構える。

「……………」

苔石も武器を構えるが何故か迷いがある様で戦意を感じられない。

「大荒魂、その話は本当だろうか」

確認。それも相手にするものと言うよりかは自分に言い聞かせる様な言葉だった。そんな苔石の様子を見て、姫和の口が動く。

「迷っているのか？ 親衛隊が」

「だろ。俺にとつての一番は苔石一家だ。親衛隊は俺のシノギ稼ぎでしかない」

苔石と遭遇した際は親衛隊としての忠義と誇りに満ち溢れた言葉を吐いていた苔石。もしも、此処にエレンが居れば納得した様な顔を浮かべただろうが、此処に居る一行にはそれを理解出来る者はいない。

無論ながら苔石も武宮だ。親衛隊と言う名誉職に就ける事は男として誇らしくも嬉しかった。だが、タダで抜ける訳にもいかず、武宮の派遣を行う苔石の実家に彼は親衛隊への人材派遣と言う形で親衛隊入りを行った経緯がある。

他のメンバーが忠義や意志で行動しているのに対して、苔石だけは忠義や意志ではなく、金で動いていた。そして己の忠義も意志も実家のそれと同じ物。実家のそれに従うならば、折神紫に刃を向けるべきだが、金で雇われている以上はそんな事は許されぬ。

親衛隊に払うべき責任と義務、実家への忠義と意志に板挟みを受けていた。

「最低限は果たそう……毘沙門天籠手」

そう言う顔と顔を上げ、籠手に仕込まれた全ての機構を確認する様に動かす。

「タギツヒメとやらは禁足地だろう。此処を真つ直ぐに行つて、廊下に出たら右、最初のT字路を右に曲がれば、渡り廊下への扉がある。俺を倒してから、行け！」

その言葉を聞いた瞬間に可奈美が斬り掛かるが、それを御剣で受け止めると同時に鎧と手首を使つて巻き落とし、突き技を放つも、可奈美は後退する事で御剣の射程から逃れる事で無事に終わる。

「その程度か!!」

自分程度も倒せないなら、タギツヒメを倒すなど無理だと言わんばかりに可奈美へ斬りかかるが、後退した直後で構えが崩れかけていた可奈美を庇う様に沙耶香に苔石は笑つて叫ぶ。

「倒す順番が変わるだけじゃ!!」

振り下ろされるその一撃を、沙耶香は横に御刀を横に受け止めた。その瞬間に苔石は沙耶香の御刀に触れた際に生まれた反発力に抵抗せずに、御剣をそのまま後ろに投げ捨てる様に手放し、素早く次の攻撃を放てる様に右手を開けると同時に拳を握つた。

「ぶっ飛ばしちやる！」

ストマックブローを喰らつた沙耶香だが、吹っ飛ぶのを耐えるが、苦しそうに膝を付いてしまう。

「此処で終いじゃき」

膝を付けた沙耶香に苔石は容赦無く踵落としを放とうとするのだが、それを彗士がシヨルダータツクルで防ぎ、栄家から受け取った苦無を右手で抜き様に投げる。

投げられた苦無を苔石は右手の籠手を掲げて防ぐが、顔を狙った苦無を防いだ事で自分の顔を自分の腕で塞いでしまう。その隙に津佳沙が勝武居との戦いで抜いた処刑刀を背中の中央から抜き、首を目掛けて横一閃を放つ。

苔石は津佳沙の一撃に気付いて股関節と膝、腰を使って身体を傾ける事でギリギリでは有るが左手の籠手で防ぐ事に成功するが、籠手と津佳沙の処刑刀の間から断続的な火花が発生し、津佳沙の武器は熱を帯びた光エネルギーを極彩色の明かりとして放出する。

「その武器―！」

津佳沙の武器の危険性に気付いた苔石が叫ぶ。

「この力！ 自分の意思で―！」

津佳沙は一度引くが、その瞬間に無念無想を発動して再び首を狙った横一閃を放つべく接近する。

そして、あの時の様に津佳沙の剣が強い光を発するが、あの時には無かった筈の不快にならない程度に鼓膜を突き刺す様な高音の音を発する。

「この音、そしてエッジ―！」

苔石はすれ違う瞬間、目撃し、確信した。

津佳沙の処刑刀の正体を。処刑刀のエッジはただの鋭いカッターなのでは無かった。動いていた、高速で動いていた。

エッジ全てにベルトカッターの様なセレーション入れたフルセレーションの鮫の歯の様な形状の細かい刃が、2つに割れたエッジの間を滑る様に走っていた。

その1個、1個が無念無想によつて輝き、高速で移動していた事で複雑な反射を生み、エッジ自らが光っている様に見えたそれを理解すると同時にコレが処刑刀などでは無く、処刑刀に似せたチエーンソーである事も、苔石は理解し、放たれた横一閃の一撃を再び左手で防ぐ。

「ぬうんー」

左手を上げて津佳沙の腕をかち上げると捻っていた関節を戻し、その勢いに肩と肘、更に体重を乗せた中段突きを津佳沙の脇腹に命中させて、彗士の居る方向に突き飛ばすと身体を横に一回転させる。

蹴り飛ばされた津佳沙は彗士を巻き込んで転倒してしまい、2人は纏れ合う。その隙に舞衣は苔石の背後に回っていたが、蹴った足を力点に軸足を支点で一回転している事を考えれば、舞衣の接近には気付いていた。

「すまんー」

謝りながら、回転の勢いを乗せた蹴りを、足の裏から上段斬りを放とうとした舞衣の腹に当てて吹き飛ばす。だが、舞衣はこれで良かったと吹き飛びながら僅かに笑う。

銃声が2回、暗闇に響き、苔石が素早くその方向を向いたその瞬間には発砲炎から飛び出した9mm弾は苔石の右耳と右目を奪う。だが、苦しそうな声を上げるも致命傷にはならない。続けて放たれた2発も右手の籠手に阻まれてしまう。

「十条帝人おっ!!」

苔石は足元の苦無を見て、その近くの床を八幡力で踏んでシーソーの様に床板を跳ね上げると苦無が宙に浮かび、苔石はそれを膝で蹴り飛ばす。

銃撃の主、帝人は上手くM60Cのグリップの底で飛ばされた苦無を防ぐが、その勢いと鋭さ故かグリップに突き刺さる。その光景に驚いた帝人に苔石が迅移で迫る。

「くそー!」

御刀を抜く暇は無い。そう判断した帝人は、迅移で射程範囲に帝人を捉え、停止した苔石のタイミングを見定めんと目を見開く。

拳を突き出す為に停止した上で突き出した苔石の右手だが、タイミングを合わせて振った、右手は側面に当たり、何とか軌道を逸らした事で顔面を狙った一撃を帝人は防ぐ事に成功する。

帝人はそのまま腕を曲げながら押し返すつもりで力を加えて罅迫り合いに近い事を

腕で始め、苔石がそれに乗った瞬間に腰を蹴って引き剥がし、残った銃弾を全て、苔石の顔を目掛けて放つ。

苔石はそれがわかつていたのか、引き剥がされた瞬間には両手で身体全体を防ぐ様に鉄扇シールドとも言うべき物を展開して、待ち構えていた事もあり、防ぐ事に成功する。「がはっ」

だが、姫和は帝人が引き剥がしと銃撃で苔石の動きを止めてくれるとわかつていたのか、銃撃と共に銃弾を超える速度で帝人の背後から御刀、小烏丸を掲げて迅移を発動させて接近。

シールドの隙間から小烏丸の刃を通して、胸の中央に御刀を突き立てた。

「よう、やりおったわ……」

そう言い残した苔石は小烏丸の刃が抜かれると同時に床に倒れた。

「行くこう」

幸いにも写シが剥がされなかった一行は、領き無事を確かめると目の前の襖を切断して廊下へと躍り出る。

「このまま直進してー!」

舞衣は透眼で見た記憶と苔石の言葉が合わさった事で苔石の言う通りの道を進むが、戦闘を走る慧士が虚空に抜刀からの斬撃を放つと僅かに入り込む月明かりが切断され

た、禍神の御守りの原料でコーティングされたピアノ線を照らす。

「古典的だが、確実に、早く設置出来る罠だな」

「時間は有りませんでしたので」

声が響いた瞬間に床下から巨大な弾丸が床を突き破って現れるが、津佳沙の拳が巨大な弾丸を弾き飛ばした。

その吹き飛ぶ弾丸を見て、隼士が眩く。

「銃……第六席か……」

「はっ」

折神紫親衛隊第六席の少年、満月明夜の声を聞いた舞衣が横の襖に居合斬りを放つが、3枚の襖が斬られ、その残骸の1枚に両断されたガラパゴスケータイが張り付いていた。

そして襖が斬られ、開いた視界の先から幾つもの銃弾が飛来する。

「隼士！ この先に罠は!!」

「投げナイフだけの検査だけど、無い!」

ピアノ線の罠はナイフを投げただけの確認だが、ナイフがピアノ線に切断されるか切断する、弾かれる事も無かった為に無いと言い切る。

「隼士以外は先に行つて!」

その言葉に姫和と帝人が同時に走り出し、可奈美は迷う素振りを見せるが、隼士が沙耶香と津佳沙に可奈美と姫和、帝人を頼むと言われると2人は可奈美の手を引いて走り出す。

「で、何でお姉ちゃんが残ってるの?」

「隼士と私が残るのが最善だから」

銃撃を警戒して背中合わせに武器を構える姉弟。静かで短い問答だが、2人にはそれだけで互いの真意を理解し、同時に役目を理解し合った。

暗い廊下に銃声が響く前に舞衣の声が静かに、隼士にだけ聞こえる音量で響いた。

「!! 前2つ! 中心、縦2畳! 横1畳半!」

隼士が無言で前2つの部屋に侵入、その部屋は縦5畳、横5畳の広さを持つ部屋で、その中心から縦に2畳、横に1畳半ずれた場所を乱切りするかのように隼士は愛刀を振るう。

「そこか!!」

一瞬だが、床下を転がって逃げようとする人影を見て地面に2刀を突き立てながら、追い掛けるが、満月も負けじと散弾を放って牽制しようとするが隼士は舞衣が銃を構えたという警告を聞いた瞬間に壁を蹴って、部屋中を飛び跳ね、位置を攪乱し続ける。

「透眼ですか……」

隠れた自分を的確に見つけた隼士が透眼を持ってしていると間違えた満月に冷や汗が流れる。

満月の隠れ場所の床を斬り伏せた音が響いた頃、渡り廊下へ両開きの扉の前にたどり着いた5人だが、扉の先から聞こえる音に気付いた帝人が姫和を左に、可奈美が津佳沙と沙耶香を右に突き飛ばした瞬間に、扉をぶち破つて大量の蛾の様な荒魂が溢れ出る。

「此処は、お通しする事は出来ません」

「臯月夜見、先輩」

沙耶香が蛾の荒魂の群れの中から現れた存在に気付いて、言葉を零すと津佳沙が立ち上がると武器を構える。

「押し通す!!」

武器での攻撃が来ると御刀を構えた臯月だが、繰り出されたのは足だった事もあり、反応出来ずに腰に足甲を引っ掛けられ、後方へ飛ばされる。

「此処は任せて!」

飛ばされた夜見が飛ばされながらも差し向けた荒魂を完全に殴り消しながら叫んだ津佳沙だが、後方から迫る荒魂に気付かない。それを沙耶香が斬り祓う。

「行って。此処は私たちが抑えるから」

沙耶香の言葉に先を急ぐべく、残された3人が先を目指す。此処を突っ切れば、禁足

地への出入り口である社が現れる筈だ。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「2人でやれば、勝てるから」

御刀を構えた2人の前に皐月が御刀を払う様に振りながら現れる。

「此処は通さない」「此処は通行止め」

「押し通ります」

3人の御刀が発した金属音が夜の屋敷に響いた。

第三十九話 始まる戦いと終結する戦い

渡り廊下を超えて、社とそうでない空間を隔離する様に置かれた扉と門の前に辿り着いた十条兄妹と可奈美。

仲間達が合流を暗黙の約束に、敵を引き付けてくれた事で、もう少しの距離まで来た。いた。

この先に折神紫、ないしはタギツヒメの元に辿り着けると思っていた3人だが、門の前を塞ぐ様に視界に映った人間を見て、案の定だと言わんばかりに御刀を抜く。

「いきげんよう。伊豆以来ですわね」

手入れの行き届いたワインレッドの髪に、綺麗な青い瞳の美女とも言える風貌を誇る折神紫親衛隊第三席、此花寿々花が石階段の上から腰を上げて立ち上がる。

「必ず来ると思っていたよ」

親衛隊第二席、獅童真希の言葉の後に全員が御刀を構え直す。帝人が可奈美と姫和が横目で自分を見ている事に気付くと同時にその意図を察して頷く。

「さあ、続きだ」

「斬るか、斬られるかですわ」

親衛隊の2人の目が赤く輝く。それを見た可奈美は予想こそしていたが、眼前にする
と驚き、帝人はわかつていた様な振る舞いで無反応、姫和はその眼の禍々しさに怒りの
感情を乗せた声を吐き出す。

「この禍々しき、やはりノ口を！ 半ば荒魂と化してまで、折神紫を守ると言うのか！」
眼を赤く輝かせたまま、御刀を構えも向けもしない2人に姫和がさらに叫ぶ。

「同じ親衛隊でも！ 人としての信念と誇りに板挟みされていた、苔石礎々石の方が
ずっと良い!!」

苔石の名が出た瞬間に獅童と此花の眼が人間のそれに戻ると、獅童はやはりかと言う
様に肩を下げる。

「確かに。だが、彼は仕事に手を抜き、紫様への忠義は薄い上にノ口も受け入れなかつた
半端者だよ」

「人なりは素晴らしいの一言ですが、所詮は金で雇われた者。信頼は出来ても信用は出
来ませんわね」

そう言つて、2人は苔石を捨てる様な言葉を吐きながら、御刀を掴み直す様な素振り
を見せると可奈美の声が小さく響く。

「許さないよ。確かに苔石さんは親衛隊として戦つた時に普段を力を抑えている様な感
じだった。それでも、あの人の剣は確かに重かつた！ 人1人が持てる重さじゃない。

それ程に重い剣だった」

可奈美は今まで受けた剣の重みの中で心に来る重さを持つていたのは苔石だった事を思い出していた。

その重さは決して自分一人だけで生み出す事も持つ事も出来ない程の重さだった。そして、その重さを親衛隊が知らない筈は無い。

可奈美はそんな重い剣を振れる苔石が、親衛隊と言う存在に挟まれ、心の内では苦しみながら悩み、泣きながら、それでも重みが減ら無い剣を振れる苔石を捨てる様な言葉を吐いた親衛隊の2人に怒りと言う感情を抱いた。

可奈美の言葉を聞いた獅童は一瞬だけ、3人が気付かない程の一瞬だけ自分の両腕を視界に収め、此花も同じ様に気付かれない一瞬だけ獅童の両腕に目を向けるが、2人は同時に3人を睨み付け、獅童だけが御刀を向ける。

「力無き正義は無力。力で無ければ、守れないモノもある」

「そして、力でこそ齎される幸福だって、あると言う物ですわ」

此花だけが頭上に御刀を上げて、写シを纏う。

「その力を与えてくれるのであれば、神でも、鬼でも」

獅童も身体を横にして御刀を構える。可奈美が息を吐き、吐き終えた瞬間に5人は迅移で飛び出す。3人は親衛隊を無視。一気に駆け抜けて、3人同時に門を八幡力で蹴

り飛ばして開けると、帝人だけが飛びこ込み、それを阻止しようとした親衛隊2人を姫和と可奈美で抑える。

「兄さんの邪魔は」

「させないよ！」

2人に送り出された帝人は禁足地へと向かう階段を駆け上がった。

後ろで響く剣戟の音を拾いながらも、決して振り返る事も無く、ただ前へ進む。

一歩づつ階段を上る度に、帝人の脳裏に親衛隊最期の1人である、折神紫親衛隊第八席、隼葉結の姿と、初めて斬り結んだ時に吐かれた言葉を思い出す。

『何が足りていない』

今になって、パズルの一番端のピースが足りない事に気付いた様な感覚を味わった帝人は、それを知る為に階段を駆け上がる。この先で待っているであろう人物と戦えば、それがわかるような気がしてならなかった。

「1人か？」

「後から来るが、斬れないぞ」

「面白い事を言うねえ」

俺に勝つつもりなのかと、隼が立ち上がる。

場所は廊下を抜け、階段を上った先にある門を抜け、社の正面との間に作られて広場

の様な場所。

その中央に隼は月明かりに照らされながら、渡り廊下を超えた先で待ち構えていた。

「此処に来た奴は殺して構わないんだって」

楽しそうに語る隼が腰の後ろに下げている機械的な鞘から御刀を抜く。その刀身は赤江の名の通り、赤く染まった入江の様な色をしていた。

「死ぬ覚悟はあるが、死ぬつもりも殺されるつもりもない。通して貰おうか、俺たち全員をー」

「オーケー。やってみろよ」

御刀を互いに構え、迅移で斬り結ばんと同時に地面から跳ねた。

「ふうああー！」

薫の放った掬い上げる様な一撃を燕はバックステップで避けた瞬間に巧が地面と挟んで叩き潰さんと言わんばかりに拳を振るが、燕はその一撃を冷や汗を掻きながらサイ

ドステップで躲すとその先を狙った薫の大太刀による叩き付け、それを足捌きだけで躲して、突きを放とうとする。

「ふうん!!」

が、巧の巨木が如き腕による裏拳が飛んで来た事で咄嗟に伏せて躲す燕だが、その目の前に寝転がって完全装備の弓を引く、カルロとバツチリ目が合う。

カルロは弓の弦をリリース、矢が真つ直ぐに飛んで来るがそれをジャンプで回避すると巧の大腰鉈による突きの追撃が飛んで来る。

燕は御刀で受けた上で御刀を斜めに傾けて横に逃げるが、その先を読んだエレンの横回し蹴りを受けて吹っ飛ぶが、何とか三点着地で隙を可能な限りで潰す。

「ぎいええええええ!!」

着地点で薫の回転の勢いを乗せた叩き付けが、トドメと言わんばかりに猿の様な叫び声を上げて振るわれる。

燕は八幡力で耐えながら、足の力を八幡力を使って大きくサイドステップをして離脱する。だが、躲した先にはカルロが弓から3本の矢を放つ。

「嘘!」

3本同時の矢に驚きながらも、唯一の命中弾である中央の矢だけを狙った振り上げで弾いて見せるが、その矢が突如として自爆、周りの矢も爆破し、燕の写シにダメージを

与える。

「けほっ」

黒煙に噎せながらも、バックステップで逃げた燕だが、逃げた先にエレンが控えており、エレンは腰を蹴りつけて燕の飛ぶ方向を変える。

空気が肺から吐き出した瞬間のコレについて動けないタイミングで薫と巧が同時に横一闪の一撃を放つ、燕の身体は吹き飛ばされるながら三等分になって塀に叩き付けられた。

「あまり俺たちを」

「舐めないでほしいデース」

薫の隣にエレン、巧の横にカルロが迅移で移動して、弓を番える。燕は四つん這いになりながらも鬪志と怒気を含んだ目で4人を睨み付ける。

「こんのお……こんのお……こんのおおお!!」

様子が変わった事に全員が構え直し、カルロは弓を引く力を増やして狙いを絞り直す。

「弱いくせにー!」

初めて自分が認めた者以外から受けた苦戦に怒気と憎悪をぶつける燕。齢は12、らしいと言えばらしい反応だろう。訓練をしなかった訳では無い。それでも天性の才覚

だけでのし上がってきた燕にとつては苦戦は楽しい物ではないし、嬉しい物でも無い。自分と認められた者以外は弱者。そう信じ、証明して来た燕からすれば、弱者の4人が弱者の証明とも言える群れる行為を持って挑んで来ただけでも怒りを感じずにいられない燕は感情に任せて突撃を敢行する。

「っ」

対してカルロは弦を捻り、回転を加えた矢を放つ。

放たれた矢は空気を貫くが如く飛翔し、真つ直ぐに燕へ進むが、燕は矢を見て、迎撃すればまた爆発すると判断してギリギリで回避を行い、そのまま直進する。

「きえええええ!!」

次に行動したのは薫の上段斬りだったが、それも僅かな横移動で回避すると薫では無く、その横のエレンへと斬り掛かる。

エレンも御刀の刃で防ぐが、燕はそのまま通り過ぎ、素早い切り返して背後から再びエレンを狙うが巧の大腰鉈の月に阻まれる。

「こんの!!」

突きを下がってやり過ぎすが、巧にとつて己の獲物は重い武器では無い。突きを躲されたなら次の一撃と踏み込み、身体ごと回した一撃を放つが燕はコレも回避すると自分の御刀を八幡力で叩き付けて地面に練り込ませると迅移を発動、エレンからカルロに目

標をシフトする。

「フアツキューー！」

燕の一撃をギリギリで弓の防御が間に合うが、その一撃は斬る為では無く、吹き飛ばす為の物だった。

カルロは吹き飛ばされるのだが、その勢いと速度は尋常な者では無く、塀を突き破り、その先の庭園に植えられた竹林の竹をへし折りながら吹き飛び、池に落ちた事で止まる。しかし、その衝撃に耐えられなかったカルロが気絶してしまう。

「カルロ!!」

飛ばされたカルロを見たエレンがそつちに意識を向けてしまい、燕の斬撃を背中に受けて体勢を崩すが、追撃を巧の大腰鉈が叩き付けられて防ぐが、その大腰鉈を駆け上がった燕の膝蹴りを喰らってフラつく。だが、巧は咄嗟に膝蹴りを当てた事で宙に浮いている燕の腰を鷲掴みにする。

「ちよっ」

刀使であるが、才能故にそこまでの身体作りをしていなかった為に華奢な身体付きの燕に、身体を苛め抜く。そんな身体作りを了承の頃よりしていた巧の身体は正しくゴリラの如し。そんな巧の太い手が細い燕の腰を掴めば色々な部分に接触するのは当然だ。

触れた場所が触れた場所なのか、燕は生理、もしくは本能的に固まってしまいました

そのまま投げられてしまいが、なんとか空中で手足をバタつかせて態勢を整えると、視界に回転しながら迫る大太刀が映り込む。

「嘘!!」

何とか回転に合わせて打ち払う事に成功するが、重量物だった故か、空中で軌道が変わった事で地面に横腹から叩き付けられる。

「ホント」

燕は薫の声を聞いた、直ぐに警戒して顔だけでも上げるが、既に空中で落ちかけていた大太刀をくくとねねが2匹掛りで空中に浮かせており、それを同じくエレンにより空中に投げ出された薫がキャッチし、叩き付ける瞬間だった。

燕は写シを剥がされるが、素早く大太刀の峰を掴んで、八幡力で引き寄せて、空中に居た薫を腕の防御ごと斬り伏せる。

燕は迅移でエレンに接近、その突進斬りとも言える攻撃を放って背後に駆け抜け、盛大なまでの土埃を上げて方向転換、八幡力を使った打ち込みで巧の動きを止めた上で脇腹を浅く斬りながら吹き飛び巧の背後へ、自分の身体を捻り込む様に動くがエレンがそれを阻止しようと踏み込んでの斬撃を放つが、燕は小柄な体型を活かした股抜きでエレンを交わし、巧の背中に足の裏か飛び移って斬り、背中を蹴って離脱する。

「巧!」

エレンが振り向き様の横振りで攻撃するも燕はしゃがむだけで回避、起き上がりながら搦り上げる様な斬撃を放つが、エレンはこれを防ぐ事に成功するが、防御が浮き上がり、エレンは腿を薄く斬られながら燕に背後を許してしまう。

それを阻止しようと先回りして大腰鉈を振っていた巧だが、燕は方向を変えてエレンの前に出る。エレンは視界に映った燕に御刀を打ち込むが、身体を逸らされただけで躲かれた上に御刀の峰を沿う様に振るわれた燕の御刀に斬られてしまう。

「うっ」

エレンは怯みながらも防御を解かなかつたが、燕は巧の背後に迅移で移動。巧は攻撃予備動作中だった事もあり、反応は出来ても対処は出来ず、回りながら身体ごと浮き上がる回転斬りを喰らった事で地面に倒れる。

「巧！」

エレンが飛び込むが、燕はエレンの攻撃を大きく斬り払い、次の攻撃を放つ。斬り払われたエレンは両腕を交差させて金剛身を使った防御を行うが、燕の上段斬りの衝撃には耐えられず、後退して金剛身が切れた所を胸に平突きを喰らい、地面に横たわる。

燕が血を払う様に御刀を斜め下に振るった瞬間、踵を貫通して何か突き刺さった感触を喰らって身体ごと向き直ろうとした瞬間に身体が止まる。

「これ、何……」

燕に刺さった物。それは舞草の武宮や刀使を拘束する為に開発された写シに突き刺さる構造と写シの身体の運動性能を落とす能力を持ったボウガン用のボルトだった。

燕は飛来した方向を目だけで見ると、そこには無残にも折れて倒れた竹林の浮島の中から、竹の矢らしき物から手を放し、口に加えていた鏃が妙に太い矢を手にしたばかりのカルロだった。

「よくもー!」

姑息な手段と道具。その出自はわからない燕だが、足に刺さったボルトがどんな物かは体験しているからこそわかる。そしてカルロの狙いが、動きが止まっている間に身体全体で弦を捻りながら引いている矢を命中させるだろう事も。

「舐めるなー!」

足のボルトを引き抜いた瞬間に、曲げていた足を伸ばして飛び出そうとした燕だが、その身体は十分な推力を得られなかったのか地面に転がり、それを理解する頃には身体に異物が頭から入り込んで来る感触と、一拍遅れて聞こえた大きな爆発音だった。

「おっと」

弓の構えを解いたカルロが飛んで来た物をキャッチする。

それは頭頂部に穴を開けられ、右腕は肩から、左腕は肘から切断された上に腰から先が消し飛んだ燕の写シだった。

カルロの腕の中に大き過ぎる攻撃を喰らったからなのか気絶した燕の身体が写シから人間の温もりと鼓動を孕む肉体へと戻る。

「上手くいったか……」

水に浮かびながら意識が直ぐに回復したカルロは燕がこつちを全く警戒して居ない事に気付いて、折れた竹を加工。これにより弓からボルトを打ち出す為の発射台を作成、

それが終わると燕の頭上から襲い掛かる様に鑿の様な切断に優れた鍬を持った矢を放つてから、ボルトを発射台を使って放つ。

放たれたボルトは燕の踵を貫いて地面と燕を固定させる。そこから燕が引き抜こうとしゃがんだ隙に鑿の鍬を持った矢が直上から襲い掛かり、右肩、左肘、左太腿、右脛をほぼ同時に切断、跳脚の際の推力を得られなかった燕は転倒。

その隙にTNT高性能爆薬を詰めたる鍬の矢を貫通と威力を乗せる射方で放つて燕の身体を貫通、足の間に爆発した事で上半身だけがカルロに飛んで来た所を彼がキャッチしたのだ。

「こんな gamble は……もう、ごめんだな」

だが、この方法は着矢する場所から燕が移動していた場合は全て失敗で終わる賭けだ。

大事なのは燕の未来位置の予測、矢の落下速度と初めて放つボルトの移動速度の計算

である。

予測が外れてもダメ、計算が間違ってもアウトというギャンブルにも程がある作戦だった。

第四十話 弾と刃が鳴る

薄暗い室内を瞬間的に眩しい程の明かりが灯り、同時に耳をつんざく様な一瞬の爆音。

此処は折神家の屋敷の来客者が出向き、寝泊まりする際に寝床を提供する為の部屋を集めた区画だ。

そこを走り回り、転げ回る影が3つ。

1人は親衛隊第六席の満月明夜、もう1人は美濃関学院の制服にS装備を着た柳瀬舞衣と柳瀬隼士の2人だった。

「はあ!!」

外から優しく、淡くではあるが室内を照らす月光を反射させる銀色の刃と月光を吸って青褪めた様な輝きを放つ刃が隼士の気合いと共に振られ、それと同時に床下へと落ちて行くのは、切られた畳と床板。

客人を迎える為に絢爛豪華とは言えないが、絵が描かれた障子紙を貼った襖に本物のイグサで編み込まれた畳、周りの壁も土壁など純和風で落ち着きのある部屋だったのだが、今では隼士と満月の2人が銃撃で破壊し、刃で切断している。

部屋を破壊するなど、木材と草、乾燥させた土で作られた和風の部屋で銃だけでの撃ち合いならば、まだわかるが床板ごと切断する彗士の刃が異常の一言であり、満月は冷や汗を流しながら回避や床下への逃走などを続けて好機を伺う。

「そこ」から前に10cm!! 横に3畳の境目!

対する彗士も音で満月の大体の位置を予測した上で舞衣が透眼と明眼を使った索敵の指示を受けて、床ごと満月を斬り裂かんと超振動を起こす二振りの刃を振って、確実に満月を追い込んで行く。

満月は2人の連携の正体に気付かず、床下や屋根裏を使った戦闘は不可能だと判断して、床や屋根に損傷を受けていない、無事な部屋の襖に背中から飛び込んで移動すると正面から戦う道を選んだのか、銃を構えて2人が来るのを待ち構える。

逃げた満月を追って、逃げた部屋に2人が飛び込んだと同時に銃弾の歓迎が来るが、舞衣はそれを明眼で、彗士は遠距離攻撃を多用する荒魂との交戦経験をドイツで積んでいる事も有り、回避に成功する。

「大丈夫?」

「いけるよ」

透眼の多用で息が僅かに荒い舞衣を彗士が心配するが、舞衣は特に無理をする事無く、息を整えて答えるとそれに満足したのか、彗士から満月との距離を詰めに掛かる。

「……」

隼士から突き出された右手の突きを満月は突き上げて弾くが、隼士は追撃で身体ごと回しながら左手の毒切會凜敵で切断に掛かる。満月はその斬撃を銃床で受け止める。

「はあー」

隼士が受け止められた瞬間に離脱、開いた隙間に舞衣が突きで飛び込むのを確認した満月は迅移で後退して、舞衣の突きから逃れようとするが、隼士が迅移ですり抜け様に斬り付ける。

満月が親衛隊内で一目置かれていた理由は罾や隠密を使った際の手強さだ。本気で隠れた満月から逃れようとすれば罾が待ち構え、攻めようとしても罾が待ち構えている。

相手を完全に封殺した状態で安全な場所から一方的に攻撃を加える。そしてその状況を作る能力に長けた事だ。だが、今回は罾を仕掛ける時間は殆どなく、隠密も舞衣の透眼や明眼により見透かされ、舞衣の指示を正確に実行出来る隼士の存在が真っ向からの戦いを強いられる形となる。

「つく……」

それでも、地力が無い訳では無い。

水神切兼光に認められたあの日から高津学長に目を付けられた満月はずっと前線で

戦った鎌府の武宮だった。

満月はその時の経験を脳から引つ張り出した回避行動で彗士の斬撃を僅かに脇腹を斬らせたくらいに留め、抜けた彗士に散弾での攻撃を加え、その隙に突きを放つ舞衣の一撃を銃床で受け止める。

「……」

背後から彗士が音が出ない様に旋回、背中を斬りつけようとするが、この区画の客室は防犯の目的で床が驚張りになっており、彗士の旋回する際の軸足が、床を固定する驚張りの特異な金具を動かし、驚が鳴くような音を立てた。

「ッー」

八幡力で舞衣を退けてから、しゃがみながら旋回した事で無音での奇襲を悟られた彗士の背中を斬り裂かんとした2刀での斬撃は空を虚しく斬ってしまう。

満月は躲すと同時に銃床を床に付け、その銃口を彗士に向ける。彗士は予期せぬ構えに驚き、僅かに身体を硬直させた瞬間に銃声が空気を震わせ、発砲炎が部屋を一瞬だけ照らす。

「あが……」

彗士はライフルグレネードを放つ様に置かれた散弾の銃撃をまともに胸に喰らった事で後方へと吹き飛ばされ、隣の部屋に背中から飛び込んだ。

至近距離で撃たれた彗士だが、逆に至近距離で助かったと言うべきだろうか、放たれた銃弾はその全てがS装備の胸部パーツに着弾、流石に命中時の衝撃までがS装備は対応出来なかったが、貫通だけは防いだ様で彗士の写シにダメージは無いが、S装備の出力に問題が生じてしまう。

「彗士！」

舞衣が彗士に攻撃させまいと伏せた満月に上段で斬り掛かるが、満月は掲げる様に銃を動かして、防御を行い、引き金の方を自分に、銃口の方を外に振って舞衣を引き剥がすと引き金を握る右手と腰を引いて、突きの構えを見せると起き上がる勢いを乗せた突きを放つ。

「はあー！」

だが、舞衣はそれに反応して切り払うが、満月もそれは予想済み。あくまでもこの突きは刺せたら御の字、無理でも舞衣に追撃させない為の物。

満月はハンドガードを握る左手を振って斬撃に移行するが、舞衣はその一撃を受け止め、その衝撃で横に摺り足で移動、籠手を狙った上段斬りを放つ。

「止められた!!」

満月はその一撃を突き上げる様な動きで防ぐと舞衣の剣を突き上げようと更に振るった瞬間。

「やああ!!」

飛んで移動する速度を迅移で上げた彗士の波切會凛蔽の一閃が走る。満月は彗士の動きが驚張りの金具で気付かなかつた事に疑問に思うが、角度から舞衣が動くと同時に移動して一旦は外に出て、驚張りの床から逃げ、この瞬間に斬り掛かつて来たのだと瞬時に理解する。

満月の強さは、不解な物に出会つても即座に仮説を立てて身体の硬直を最小限に抑えられる頭の柔軟さと回転の良さから来る隙の無さも隠れた強さである。

「(無言でするべき)」

舞衣を犠牲にすれば自分も舞衣に刺突、或いは斬撃を喰らわせればその瞬間に彗士に斬られていただろう事は彗士の接近に気合の入った声を聞いた瞬間に満月は理解していた。

それは彗士も同様だが、舞衣を犠牲に満月の首を取る事に彗士は価値を見出せず、今回の様な行動を起こし、満月に防御行動を許してしまう。

満月は銃床で防ぐ為に銃を立たせて彗士の刃を受け止めようとする。彗士もそれがわかつた上で、大振りに刃を振るい、そのまま駆け抜ける。

「なっ……」

満月の驚愕の聲が漏れると同時に床に切断された銃床が落下する音が響く。

満月にも彗士が強化樹脂で製造され銃床を切断したという事は理解しているが、信じられなかったのだ。自分の銃床は生半可な刃では斬る事は出来ない程に堅牢な素材と構造だ。それがわかつている故に確認しようと、視線を切断された銃床に向ける。

視界の半分にはパットの部分を禍神の御守りと同じ材料で作った銃床の端が、もう半分には長さが3分の2になった銃床を持つ銃が映り、同時に腹半分に至る長さに斬り抜かれた腹も映る。

写シは剥がされきれなかった。満月は即座に彗士に銃口を向けようとした瞬間に腹から体が落ちて視界が横たわると、口から短く息が漏れて、視界を彷徨わせると抜刀した御刀を捻って僅かに突き出す様な血振るいをした舞衣が納刀する瞬間だった。

「ああ……」

抜刀で斬られた。それも音を発生させない効率的な抜刀によって。相談すると今度は別の疑問から彗士に視線を向けると、柄頭からケーブルを引き抜く彗士が映る。

「持ったか」

彗士の呟きは小さくも確かに響く。

出力発生に難を生じさせた彗士のS装備だが、搭載した固定型バッテリーからの出力抽出には異常は無い。

彗士はジョイントパーツの規格が一緒だった超振動を発生させて刃に伝達させる柄

の柄頭にS装備のケーブルを装着、S装備の出力抽出によりオーバードライブを発生させ、振動数が増した刃で切断した

「……なる、ほど……」

それを理解した満月が呟く。

「お見事……」

銃床を振動数が増したと言えど斬り伏せた斬れ味と耐久性、防御させる為に意図的に声を上げ、振動機構搭載の柄をS装備と接続させる隼士の判断力と発想力。

そして、隼士が失敗した時の為に次の手を用意、更に隼士の為に様々な物を含めたお膳立てを行う舞衣の気配りの良さと自分の意図を気付かせない慎重さ。

その全てを含んで一言で賞賛する満月の声が響くと2人は無言で頷き合い、背中を向けて先を急ぐ。

その背中にそれでいいと心の内で呟いた満月の脛が、精神力の低下から閉じ始めた時、皐月の顔が脳裏に浮かぶ。

「許して……」

その瞬間に何故か申し訳なさが浮かぶ満月。

「ぐれますか……」

決して聞こえる筈が無い。それでもある自分に光をくれた人物の顔を思い出しなが

ら眩いた謝罪の言葉が風に飲み込まれると同時に満月の瞼は閉じ、眠る様に、身体から力が抜けた。

「この力を、私も自分の意思で使う……」

閉じた瞳を開いた沙耶香の身体が極彩色の残像を残して駆け出し、迫る荒魂の群れを引き裂く、その隙間から同じ様に極彩色の残像を残しつつ、戦っている相手、親衛隊第五席の皐月夜見の名を叫びながら津佳沙が飛び出す。

「っ」

荒魂の群れを突き破って飛び込んで来た津佳沙の一撃を何とか防ぐ事に成功するが、その顔は防いだ際の重さよりも、御刀を削り切ると言わんばかりに振るわれた不快な音からだった。

「私は……」

御刀を引いて突き出しも津佳沙は大きく後退して沙耶香と入れ替わると同時に沙耶香が横に御刀を振るう。

「あの人の為に！」

沙耶香の一閃を突き上げ、左足を前に出して、右足を引き、御刀の重さと体重、更に重力を加えた柔らかくも鋭い上段の一撃を放つが、沙耶香は受けられないと判断すると即座に後退で躲す。

「御刀を!!」

籠手を狙う様な掬い上げる一撃を放つ臯月だが、津佳沙が飛び込むと同時に蹴り上げた脛のS装備に抑えられる。

臯月は後退して御刀を抜くと沙耶香と津佳沙の2人は追撃せずに御刀を構える。

「臯月夜見先輩、貴女は迷っている、ううん。わかっていない」

沙耶香の言葉に臯月の無表情に近い顔に困惑の色がほんの僅かに現れる。

「貴女に何が」

「貴女が何にわからないのかは、わからない」

臯月の言葉に津佳沙が答え、沙耶香と共に触れた御刀から想いが伝わってくると告げる。

津佳沙も沙耶香も、隠れ里では心鋼造の御刀や御剣と打ち合い、その刃に想いを乗せ

て振るう人物からはその想いが臚げながら感じていた。

感受性の強い2人だが、今まで受け止めた刃の中で皐月の刃は今までの誰よりも強い
想いが込められていた。

「その御刀は1人の為に」

「積み上げた御刀だって」

その言葉に皐月は過去を思い出した。

第四十一話 夜を見やる者と明ける夜の者

秋田県のとある集落。

それこそ豊かな自然以外に何も無い、そんな場所。

それでも、私の記憶で楽しい記憶と言える物は、殆どが何も無いと言つても怒られない様な、この集落での記憶でした。

「夜見ちゃん」

それこそ幼馴染と言う言葉を知る前なら、離れて暮らす同じくらいの年齢の兄か弟。そう言えてしまうぐらいには同じ時間を過ごす事になる少年が手を差し出す。

彼との出会いは確か小学生低学年の夏休み。当時は知らない言葉のカーストトップ。その女子から、『何を考えるかわからないから近付くな』そう言われた瞬間に小学校の友人など出来る筈が無かった私がお手をおずおすと差し出すと、大人達に遊んでくるとだけ告げ、私の手を彼の方から掴んで引つ張つて行く。

私は彼の手を引かれるまま、当時は珍しいにも程があつた囲炉裏がある木造造りの家を出て、夏の日差しが肌を指して、蟬の鳴き声が鼓膜を揺らす外に連れ出される。

親が友人が一人も居ない私を気遣つて、家族ぐるみの付き合ひのあつた家族の一人息

子と言う事で紹介された彼は私の知らない様々な事を教えてくれた。

山の歩き方に遊び方、小腹が空けば食べていい物と駄目な物。川に行けば川遊び、魚の釣り方。私が普段から居る場所、都会と呼ばれる場所では出来ない遊び、触れる事はおろか知る事さえ無かつただろう知識や体験、それも四季折々の遊び方や知識達も含めて。

気付けば、長期休校の課題が出された瞬間には長期休暇の合間の僅かな時間に全てを片付けて、長期休校初日から出校日を除いた日の全てを彼の家で過ごしていた記憶もありました。

「鎌府に通つて、刀使になりたいです」

そして、囲炉裏で食事をしていた頃に彼の祖父と祖母から将来は何になりたいか聞かれた小学生最後の冬休みにそう答えた事を今でも強く覚えている。

それを聞いた彼の祖母と祖父がにっこりと笑つて、私から彼の方を向いた事も。その頃はと言う事だと思つていましたが、その訳は直ぐにわかりました。

鎌府共学院中等部入学式。

御刀の検査を入学検査の日にお予め行い、認められた御刀を新入生に渡されて、佩刀が許される様になる式典、佩刀式の時に真っ先に呼ばれたのが、水神切兼光に選ばれた彼だった。

彼の顔は恥ずかしさと納得がいかないと言う様な顔だったのを強く覚えていた。

校庭での交流会で真つ先に彼の元に行つて、どうして鎌府に入学したのか聞いた。その時の恥ずかしそうに、周りに消え入りそうな程に小さく、まだ慣れ切れていなかった標準語の喋りで告げた言葉と薄つすらと赤く染まった彼の顔もよく覚えています。

「夜見ちゃ、心配でね。作つて貰つた弓銃が無駄になつちやつた」

そう言われて、彼の部屋に置いてあつた道具を思い出す。確か、弓にボウガンの様な台座を付けた武器で、弓と同じ射程距離で汎用性も無くなる代わりに精密性とボウガンに近い操作でボウガン程の威力が無い事も微妙な武器扱いですが、ボウガンよりも連射力がある武器だった筈だ。

それを聞いて、私は何も反応が出来なかつた様な覚えがあります。まあ、あの時の私は少し気になりつつある彼から心配されて、学校まで追い掛けて来た。しかも、長期休校の時しか会えない相手がすぐ近くに居る。それが嬉しさ余つて恥ずかしいと言う物でしたが……彼は高津学長に呼ばれて、交流会から姿を消します。その背中を見ながら私が呟きます。

「……明夜が、遠くなつた気がします……」

水神切兼光、しかも史上稀な男性適合者、対して私は掃いて捨てるほどある無銘の御刀の適合者。

そして彼は、中等部に関わらず水神切兼光の適合者に恥じない活躍をしてみせる。それを掲示板で知ったり、新聞部の記事で知ったりと経緯は様々ですが、どんどん遠い存在の様に感じる。そして当然とも言うべきか、彼が親しそうに微笑みを浮かべる相手が私だけだと知られば、私にも注目が向くのは当然だった。

結果は彼ほど才能が無い。修行をしていない訳では無い。逆に彼の側に立てる様にと教師の方から心配される程には修行している。それでも実力が伴わない、彼と任務を共にする先輩を相手にした手合わせで勝てない。

それが露見した時から、周りは好き勝手に様々な事を言い始めます。

内容は辛い、酷いなんて言葉が釣り合わない物。存在そのものの否定の様な気がした。それでも、校内で出会う度に包帯や絆創膏、湿布が増える彼の姿や、消耗品でない道具には強い拘りを持つ彼が拵を既存の量産品を使い続ける姿を見ると、自分の事など言えず、無理に笑顔を作る事も諦めて無表情を装う様になりました。

彼も気付いていて、あえて合わせたのか、そんな笑みを浮かべる余裕が彼にも無かったのか。答えは私の変わり様にショックを受けてどうすれば良いかわからなかったからですけど、彼も無表情で私の言葉に答える事が増えていった。

そんな関係が変わるキツカケになったのは高津学長の言葉でした。

「力を欲するなら授けましょう」

それから私はノ口を受け入れた。彼の力に、側に居たくて、彼に相応しい刀使になりたくて。

その力を受け入れ、扱い切れなかった未熟さと彼と私の不運が重なった結果が、彼の目から殆どの光を奪うと言う物でした。

そして、彼は一命を取り留め、武宮科から衛生科へ異動する際に同室だった生徒からダンボールと大きな荷物を渡されます。

渡されたのは彼の道具で、どうすればいいかわからないからと言う物でした。彼が捨てるつもりだったのかわかりませんが、わざと部屋に残したそれは段ボール一つも埋められない私物の数々と妙に使い古された弓銃でした。

そしてダンボールの中には鎌府に入学した日から、書き留め続けた日記でした。

中を読めば、彼の様々な経験を字にした物や何気ない一日に後輩とのやり取りの中にまるで隠す様に書かれていたのは彼が弓銃を使おうとしていた理由でした。

いつかは銃火器の武宮として、刀使の私の隣で戦う事でした。

「銃を使うなら……目は……何よりも大事でしょうに……」

それを知った私は彼が痛み止めとして刺している目薬にノ口を混ぜた物を渡しました。彼はこの目薬の目的がただの痛み止めで決して治す目的でない事を知っていて、原材料を怪しむ事も訊く事も無く、光を失った目に薬を注入しました。

あの人の夢とでも言うべき目的を壊してしまった事への贖罪に。

そして、直ぐに高津学長の命令に近い形で親衛隊入りをしてしまった私ですが、目に光を取り戻した彼は私を追う様に、親衛隊全員に幼馴染を任せられ無い場所だからと、弱みを狙った喧嘩の様な私闘、暴走の様な方法で実力を証明して、親衛隊に入った。

「夜見に助けられたからそのお礼。それと弱い部隊に幼馴染を預けられないでしょ？」
小慣れた感じの標準語で話した親衛隊に喧嘩を吹っ掛けた理由を話す親衛隊の制服を着た明夜の言葉。

それを聞いた私は理解してしまいました。

この身も、この心も、この一生さえも捧げたとしても払えない贖罪を背負った事に。
……だから、私は彼の側に居る為に強くなる事を止めたりはしない。そして、あの人の為にこの手を汚す事も厭わない。

「彼の夢が、目的が、私の側に居る事なら、私は彼の側に居続けます」
決意を滲ませた声で告げると同時に皐月の方から動く。

今までは対の先を重視したカウンター中心の立ち回りから一転、先の先を取りに来る動きと気迫を乗せた皐月の瞳は、今まで見て来た皐月の無気力、無表情とも言える何も籠っていない目とは大違いのそれに沙耶香と津佳沙は反応が遅れる。

「ッ……」 「津佳沙！」

それでも写シが完全に斬られる前に津佳沙の両手に付けられた手甲の装甲が辛うじて致命傷を防ぐと沙耶香が懐に飛び込んで皐月の腰から脇に掛けて斬り裂こうと御刀を振り上げる。

「つくう」

皐月は素早く後退して躲すと津佳沙も後退、沙耶香が体勢を変えろスペースを作ると正眼に構える。皐月も構えた沙耶香に御刀を突き技の構えを作ると同時に迅移を使用、突き技で沙耶香に挑む。

「ふっ」

沙耶香も突き近い軌道で御刀を振るい、皐月の御刀を僅かに逸らすと刃先を皐月の腕と腕の間の上に乗せて、鳩尾から僅かにズレた位置を刺す。

皐月は迅移を使って後退すると、それを追う様に今度は津佳沙が皐月に斬り掛かろうとする。

皐月は上段の構えを見せるが津佳沙は関係無いと言わんばかりに和鋼のチェーンソーを肩の前で正面を刺す様に構えながら接近を続ける。

津佳沙の武器は刃先まで回転するチェーンが走っており、突き技は出来るがそこまで得意な武器では無い。

無言で皐月が踏み込み、御刀を振り下ろした瞬間に迅移を加速させた津佳沙が更に低

空に逃げ込みながらチェーンソーを上には振り、右手首を切断、そのまま刃を返さずに振り下ろして左手首も切断する。

「セイヤア!!」

そして鳩尾に放たれる津佳沙の拳。だが、皐月も殴られた拳が離れる瞬間に写シを貼り直して、落下していた水神切兼光を掴むんで壁に叩きつけられるが、上手く受け身を取って立ち上がる。

「此処で!」

沙耶香が皐月にトドメを刺すべく御刀を突き出す。皐月はそれを的確な距離で突き上げ、沙耶香が体勢を整える前に上段から斬撃を放とうとするが沙耶香も上段の構えを取っていた。

「……」「ふっ」

皐月は無言で沙耶香は息を吐く為の様な声を上げて御刀を振るう。

皐月の御刀は沙耶香の頭を両断するに十分な速度も力も有ったが、沙耶香はその一撃を自分の御刀を当てる事で逸らし、空いた皐月の胸元に御刀を突き立てた。

「お見事です……」

御刀が抜かれた勢いで皐月が床に倒れ、沙耶香は鞘を立てる様に納刀したのを見て、津佳沙も背中にも張り付ける様に背中コンテナにチェーンソーを戻すと、バタバタと床

の鶯の様な金具の音を消し去る程に大きな足音を立てて隼士と舞衣が姿を現わす。

「親衛隊第五席……勝ったのか」

「うん。津佳沙が居なかつたら負けてた」

隼士の言葉に沙耶香が答える。

臯月に突き上げられた腕にチエーンソーの安全な部分を当てて攻撃体勢にいち早く戻れた沙耶香は臯月の上段に合わせて自分も上段を放つ事が出来たお陰で放てた切り返しは臯月の攻撃を弾いて防御に隙を生じさせて胸元を突いた。

もしも津佳沙が沙耶香の体勢を整える手助けをしなければ、今頃は斬り伏せられていた事は確かだったかもしれない。

「津佳沙くん。怪我はない？」

「うん。先を急ごう?」

舞衣は津佳沙を心配して怪我がないか問うが、津佳沙は大丈夫だと頷き、軽く回る事でアピールすると先を急ごうと渡り廊下のある方角を見つめる。

4人は先に行ったメンバーとの合流を果たす為に先を急いだ。

第四十二話 死闘回廊

禁足地へと伸びる唯一の渡り廊下。

普段はごく限られた者しか入る事は叶わず、通る事が出来る者でも絶対に行わない剣戟が繰り広げられる。その勢いは凄まじく、渡り廊下の隙間からは、風に運ばれて薄く積もった土が煙として舞い？その中には建材に使われた木の木片すらも混じっていた。

その渡り廊下にて剣を振るうのは4人。1人は母のやり残した事を代わりになさんとする十条姫和と言う刀使。もう1人は姫和の為に強力する刀使の衛藤可奈美。そして姫和がなさんとする事を阻止する為に立ち塞がり、この渡り廊下を歩く事を許された数少ない人物であり、折神紫親衛隊第二席の獅童真希と同じ折神紫親衛隊第三席の此花寿々花の2人だった。

姫和は獅童に上段からの斬撃を浴びせようとするがそれを獅童は腰溜めに構えた御刀を斜め上方に振り上げて弾き、返す刃で姫和に御刀を振り下ろす。

速さを主体にした姫和に対して、強さを主体にした獅童の戦いにおいて姫和は獅童に防御されない太刀筋を、受けにおいては獅童の刀を受け止めない行動を求められる。

姫和は鎬に刃をぶつけて受け止める出なく、軌道をズラして攻撃を防ぐと迅移で下が

る。だが、獅童もそれがわかっていたと言わんばかりに突き技での追撃を掛けよう構える。

「わかつていたさ」

姫和は後退から横移動に変更、獅童も突きをやめて捻り込む様に迅移を行う事で姫和の側面に入ろうとするが、姫和は取られまいと更にステップを加えて後退。だが、獅童も逃す道理は無いと距離の長い迅移で追い付き、真つ向斬りを放つが姫和も先程と同じ様に軌道をズラす様に弾いて防ぐも、獅童の立ち直りが早く、横振りが放たれるが姫和はそれも防ぐと同時にその勢いを使って後退する。

「逃がさないよ」

獅童は剛剣の使い手。同じ事は何度もされている為に即座に返しの横振りで倒そうとするが姫和はそれを受け流して横に迅移で距離を取ろうとするが獅童も迅移で追い掛け、手摺近くで捕捉すると同時に横振りを放つ。

「つく……」

姫和を受け流せずに真つ向から受けてしまうが鏑迫り合いに持ち込まれない様にわざと倒れる様に動くが、足首を八幡力で強化して行った跳脚を迅移で加速させて僅かに距離を取ると同時に転倒を免れる。

獅童は姫和が逃げるが距離を稼げないとわかっていたのか距離を目算した上で迅移

を行い、迅移中に上段の構えに移行するが、此処で姫和の速度重視の剣が勝り、放たれた直後の勢いが乗る前の斬撃に斬撃を当てて弾き、追撃の横振りを放つも獅童は身体を僅かに逸らすだけで躲してしまふ。

「くう……」「ぬうん」

迅移で後退して逃げようとした姫和だが、鏑迫り合いに持ち込もうとした獅童は左手の指で刃先の峰を挟むように持ちながら、御刀を身体の前に出して体当たりをする様に姫和にぶつかる。

姫和は咄嗟に御刀を立てて防ぐが鏑迫り合いになってしまふと身体を捻った勢いで勢いの何割かを受け流した上で身体全体で押し返すが、獅童は押し返されるとわかると直ぐに御刀を振って、姫和を渡り廊下から吹き飛ばす。

「ふあああ!!」

渡り廊下から投げ出された姫和だが、両足から地面に着地すると同時に獅童は渡り廊下の柱を足場に跳脚で威力を増やした上段を放つ。

姫和はこれを受け止めるのはマズイと判断を行い、飛び退く事で避けるが獅童も跳脚で運動エネルギーを生み出し、空中で腕を交差せる様に保持した御刀の刃を上に向けて顔の横で保持する構えを取る。

「ふうふう……ふうあー」

息を吸い、溜めた力を吐き出す様な事と共に突き出された刃先を姫和を裏霞で防ごうとするが、防ぎきれずに防御を削る様に動いた刃先が左肩に突き刺さり、そのまま押されて背後の木に叩きつけられる。

苦悶に満ちた声を上げて動こうとする姫和だが、身体は肩から獅童の御刀を釘代わりに打ち付けられたかの様に動かない。

「こんな……ものー！」

自分の御刀で脇から肩を切断、同時に獅童の脇に回って斬り掛かろうとする。が……「この程度で僕を……」

姫和の行動は余りにも露骨が過ぎた。

獅童は御刀を捻って、木の内部における刃の自由を手に入れるとそのまま左に振って木の8割を切断、御刀を戻して捻って空間が広がった場所で刃を回す。

「取れるかああ!!」

気合いと共に切断されなかった木の幹の2割を切断、そのまま振り返り様に写シを張り直して上段を放とうとする姫和に身体の捻りを加えた横一閃を振るう。

同時に放たれた斬撃だが、獅童の方が速く目標を斬り伏せ、姫和の身体を側面へ倒された勢いが斜面で増し、そのまま渡り廊下の基礎部分まで転げ落ちる。

転げ落ちた時には実体に戻っていた姫和は痛みから苦しい声を受けながら起き上

がろうとするがS装備により強化された聴覚が風切りを拾い、素早くそこから四肢を使ったジャンプで退避すると、一拍遅れで獅童の上段が先程まで姫和の居た場所を切り裂いた。

「写シでなければ斬られない。なんて今さら思わないでね。十条姫和」

転がって自分のジャンプの威力を消して立ち上がろうとする姫和に獅童は先ほど放った突き技の際に行った構えです姫和に言葉を投げる。もしも、これが他の親衛隊なら上手く着地出来なかった姫和を斬った後に血を流す姫和に冥土の土産とばかりに投げただろうが、誇りある勝利、動けない相手を斬り伏せるのは獅童が抱く美学に反する。姫和が荒い息を整えて構え直すと同時に屋根の上で切り結んでいた可奈美が姫和の叫んだ瞬間に此花が迅移で飛び込んだ。

「させませんわ!!」

此花の突きが可奈美の視界を覆うと可奈美は素早く身体を反って躲し、振り下ろされた御刀をS装備の籠手で受け止めるが、此花は可奈美の御刀に自分の御刀を引つ掛ける様に振るい、後方に投げる様に防御を崩すと素早く上段斬りを放ち、可奈美の片腕を切断する。

「まずは一本……何時ぞやか、出し抜いて頂けたお礼ですわ」

腕を斬られた際のダメージで痛々しい声を漏らしながらも後退、片手で御刀を構え、

防御の姿勢を見せる可奈美に此花は正眼の構えをしながら言葉を吐き出していた。

「強い……でも」

可奈美は片腕で戦える相手ではないと判断し、素早く写シを張り直して正眼に御刀を構える。

「こんな所で止まる訳にはいかない」

幾らか切り結び、獅童は上段の構えで、姫和は正眼の構えで様子見になった姫和が己の想いを確かめる様に口を動かす。

「その為にみんな！」「此処まで来たんだ！」

可奈美が瓦を踏み砕きながら走り出し、姫和は迅移で獅童に斬りかかった頃。社の前では2人の男が斬り結んでいた。

「っひー」

ズボンが袴に似たデザインの親衛隊の制服。それがこの少年とも言える齡の男が折神紫親衛隊第八席、隼葉結である証拠だ。そんな男の放った横一閃を峰に左手を添えて防いだのは平城学館の男子制服の上にS装備を付けた十条帝人だった。

「っふー」

帝人は隼の御刀を弾き、掬い上げの軌道を描く一撃を放たんとするが隼は弾かれた御刀の柄を左手で握り逆手持ちに持ち変えると腕の力に腰の捻りに乗せた斬撃を放つ。

帝人は初めて見る動きに驚くも反射的に動いた身体がその斬撃をギリギリで躲し、意識した動きでバク宙で更に距離を取り、腰を落とした左蛟の構えを作る。

「はああ!!」

左蛟の構えから身体を回して遠心力を生み、生み出した遠心力を使った斬撃を放つが、その攻撃は踏み込みと腕の力、腰の捻りを加えた横振りに弾かれる。

隼は弾いた勢いを上手く利用して上段の構えに移行、弾かれてたたらを踏む帝人にお見舞いするが、帝人は片手を峰に添えて何とか防いで見せるが威力が強過ぎるのか、防御姿勢のまま地面を削る様に後退する。

「やるねえ」

隼は楽しそうに声を漏らす。

帝人は片足を上手く伸ばして勢いを殺しながらもう片方の脚で上半身を支えたまま、片手を峰に添える防御姿勢から上半身の姿勢を崩さずに霞の構えで防御体勢を継続させる事で防御が崩される事を阻止していた。

言うのは簡単だが、抵抗の激しい砂利道を足の裏で削る様に後退させる程の威力を受けながらも軸を揺らされずに構えを変えるのは相当難しい。例えるなら自動車の突進を喰らいながらも姿勢を足を浮かさずに足の姿勢のみを変え、腕のみを動かして剣を持ち変える様なものだ。

「来なよ」

挑発する様に御刀を僅かに弧を描く様に振るう血振るいをしながら、身体を僅かに斜めに見せ、正眼に近い構えを作ると帝人も右肩越し構えの姿勢を作つて受けて立つ意志を示す。

「ちよこまかとー！」

何度も跳び退き、距離を保ちながら戦う姫和に対して横振りの一撃を放つた獅童が苛立ちを隠さない声で告げると、再び飛び込みの勢いを乗せた掬い上げる様な横向きの一撃を放つが、姫和も苦しげな声を上げるが、御刀で受け、後ろに下がる事で耐える。

火花に照らされた獅童は上段の一撃を放つが、姫和はその一撃も一歩下がりがらではあるが受け止め、追撃に放たれた横からの一撃を上逸らす様に防ぐ。だが、獅童は御刀を直ぐに戻すと再び右からの斬撃を飛ばす。

「つく……」

姫和もその斬撃に反応して、防いでみせるが身体が後退する瞬間を狙った獅童の掬い上げに更に回避行動を取らされた事で返しの太刀で振るわれた上段をともに受けざるを得ず、峰に片手を添えた防御、ボクシングで言う所のクロスアームガードの様な防御でしか受けられなかった姫和は逆袈裟斬りも同じ防御姿勢で受けるが僅かに上半身は後ろに傾く。

「はああ!!」

その隙を逃さない獅童では無い。身体を回して上段の構えに御刀を持って行き、全ての力を乗せた斬撃を姫和に放ち、そのまま組み伏せる様に姫和を地面に背中から倒す事に成功する。

倒された姫和を必死に御刀を上げてこの状況から脱しようとするが、倒れた自分に対して立っている獅童の方が重量と重力を乗せられるだけ有利だ。

「このまま……押し込ませて貰うよ」

御刀の刃は徐々に姫和の首筋へと近付く。

「これだけの……これだけの強さがありながら、なぜ荒魂を受け入れる!」

姫和の叫びに近い言葉に獅童は笑いと嗤いを含ませた笑顔を浮かべる。

「僕は自分が強いだなんて思った事は……一度としてないよ」

様々な想いが混じった笑顔を浮かべる獅童。最初に脳裏を過ぎったのは女子と見間違えない外見をした武宮だった。

「目指す極地は彼方に遠く」

薙刀を刃を掴んだ勝武居が友衛を薙刀ごと柱に叩き付けんと振り回すが、友衛は長柄を九節棍に戻し、叩き付けられようとした柱に足を八幡力でめり込ませて、足場に変えると九節棍を振って逆に勝武居を柱に叩き付ける。

「抜きたい背中では遙かに速く」

笑顔で駆け出す燕にそれを追う自分は徐々に離される光景が脳裏に通り過ぎる。

どんな鍛錬を積もうと、同じ鍛錬を積もうと決して追い付けない様な速度で抜き去り、置き去りにする燕。

「並ぶ者に決して敵わない」

自分達を目立たない所での確な支援を飛ばす此花の顔が獅童の脳裏に浮かぶ。

その本人は可奈美の太刀を巻き落とし、首を刎ねんと一閃した御刀をS装備の籠手で受け止められる。その動きは何処か苔石の防御行動に似ており、此花が一瞬だけ動きを止めた隙に可奈美が攻撃に転じて、五分の状況に戻す。

「その道は歩けぬほど険しく」

人で無くしてしまった幼馴染の為にその身に傷をつける事を厭わず、その者の為ならば死ぬ事さえも辞さない覚悟を抱き続ける皐月の顔が視界にチラついた獅童。

「たった二本の牙はただ鋭く」

地形の知識と狩猟の技能。たった2本の磨き上げた牙^{能力}だけを頼りに、たった1人の為に親衛隊に喧嘩を売り、勝ってしまった満月の殺気すらない無機質な目が、獅童に思い出される。

「立ち塞がる堅壁は遙か高く」

どんな太刀を放とうとどれだけ速く振るおうと、その防御を崩せるビジョンが一切見えない防御を披露し、疲れから身体が鈍れば即座にノンストップの連続攻撃で削り殺しにかかる隼の太刀筋がフラッシュユバツクする。

「見上げる頂きは遥か高い」

思い出されるのはアフリカは視察に行った際に現地のテロロストに襲撃を喰らった際に圧倒的な実力を見せ、当時は敵の中枢の1人だった隼の容赦無い攻撃を凌ぎ切り、生け捕りにした折神紫の強さだった。

「守られた背中は遥か大きい」

とある任務。写シを剥がされた獅童が両腕に重傷を負い、御刀を持つのがやつとの状況。

年貢の納め時と諦めかけた時に単身で救援に駆け付け、天を支える様に肘を曲げて拳を上げると言う独特な構えを見せる小さくも大きく見えた苔石の背中を思い出す。

「そのどれよりも強い力を得て並び立つ。目的の為ならばどんな手だつて使う。君だつてそうだろう?」

押し込む力を強くする獅童に姫和は苦しい声を上げながら必死に耐える中で渡り廊下の直線になっている場所で此花と可奈美が斬り結んでいた。

「お仲間がピンチですわよ」

可奈美の上段を払い、振り上げる様な動作で横に一閃しながら此花が挑発する様に可奈美に言葉を放つが、可奈美は此花の横一閃を防ぎ、追撃に放たれた上段も防ぎ、左からの横一閃も御刀で上手く受ける。

「今日はお助けしませんの？」

横の一撃で反撃に移るが此花もその一撃を防ぎ、突きを放つが可奈美に防がれると素早く御刀を戻し、掬い上げる様な斬撃で反撃の隙を潰す。

「姫和ちゃんは」

突きから直ぐに軌道を変えて放たれた右からの斬撃を可奈美は弾き、返しの刃で飛んできた左からの一撃も弾くと可奈美は自ら御刀を振って、此花の力が乗り切る前に攻撃を迎撃する。

「強いですから」

此花の放った突きに対しては鎬を斬り付けて、軌道を変える事で防ぐと今度は上段が放たれる。だが、これにも可奈美は弾く事に対応して見せる。

「あら、そう！」

此花は姫和を心配しない可奈美の言葉に自身も言葉で返すと同時に顔を狙った刺突で返答するも、刃先は可奈美の横顔に逸れ、可奈美は此花のおかげを気合の声と共に振った御刀で下に押し込むが、此花は反撃の隙を与えないと踏み込みのフェイントで可

奈美に後退の選択をミスリードで誘い、自分もステップで距離を詰めた掬い上げの一撃を放つ。

「っっ」

可奈美は苦し紛れながら自分のミスを自分で拭い、此花の背後に回るが、相手の迅移を予測して相手の懐に迅移で潜り込む事の出来る此花には可奈美の行動は予想の範疇である。

可奈美が背後に回る頃には既に此花側は攻撃の準備を終えており、上段を振り下ろす頃だった。

可奈美は何とか防ぎながら横にステップ移動、着地と同時に跳び込む様に突きを放つて此花に回避を強要し、自分は距離を取って御刀を構え直す。

「せいやあー!」(貫った)

構え直すと同時に放たれた上段に此花は自分の流派の基本であり、得意とする所の巻きを狙えると読み可奈美の上段に横振りでの迎撃行為を行う。

刃は相手の鎧に触れ、次に刃、更に向こう側の鎧に触れ円を描く軌道で落とそうとした此花だが、可奈美は此花の動きに合わせて巻きを行い、此花の技から逃れる事に成功する。

「これで……終わりで」

獅童の刃が姫和の首筋に食い込んだ。だが、この感觸が姫和の中の何かをも切った。

「お前の……言う通りかもしれないな……」

力を加えながら故に掠れながらの声だった。

「目的の為なら……今ここでお前に勝つ為なら……」

姫和のバイザーに様々な情報警告音の様な音と共に表示される。

「どんな手だつて!」

姫和の胸部S装備から煙が吐き出され、獅童の身体から力が抜ける。

「使つてやるさ!!」

姫和のこの叫びが発射の合図になったのか圧力を受けながら固定用パーツが外れた事で胸部S装備の装甲が弾ける様に飛び、獅童は間一髪でその装甲を躲すが人間の習性故か飛んで行く装甲に目を取られてしまい、腹に迫る姫和の蹴りに気付けないまま、真面に喰らつて宙に浮かぶ。

「ふうおあああ!」

可奈美は気合の声と共に駆け出し、此花の防御を斬り払い、空いた身体に突き技を食らわせた上でそのまま走り、後ろの柱にぶつけてから、御刀を引き抜く。

引き抜かれた此花は肺から空気が抜ける声を上げながらその場で崩れる様に座り込み、刺された場所を手で押さえ、顔を上段の構えを取る可奈美に向ける。この時には既

に反撃は愚か、防御も行う気力がないのか、まるで介錯を待つ人間の様にジツとしていた。

別の場所で刀使の叫び声が同時に響き、姫和は獅童を駆け抜け抜けざまに斬り付け、可奈美は真つ向から此花を斜めに斬り裂く。

姫和は正眼に御刀を構えながら写シが解けて地面に倒れる獅童に向き合うと同時に可奈美が姫和の名を呼ぶ。

姫和が声のした方向に向けると先を急ぐと頷く可奈美が映る。

「行くこう」

「ああ」

2人を揃って渡り廊下を走り、最後の登り階段を上がり切った瞬間に2人の間を何かを通り過ぎ、足元に何かが僅かな回転を加えながら滑り込んで来て止まる。

「そんな……そんな事……」「嘘……ですよね……」

可奈美は足元に転がった物を見て、信じられない物を見る様に眩き、姫和はこれは性質の悪い冗談で、転がる物が冗談だと言いながら立ち上がると信じたかった。

2人の足元に転がる物。それは……身体を斜めに切り裂かれた片腕の帝人の写シだった。

第四十三話 月下の死闘

上段で振り下ろされた帝人の一撃を迅移で躲し、背後に回った隼は横振りの予備動作をフェイントにした掬い上げの斬撃を放つが帝人は防ぎながら地面を滑つて後退するが、隼は追撃に上から刈り取る様な弧を描いた上段の一撃を放つが帝人はバックステツプで回避する。だが、隼はそれで逃す気は無いと空いた隙間を埋める踏み込みと同時に後ろから挟り込む様な掬い上げの一撃を放つ。

ここままで3回の斬撃を放った隼の一撃はその全てが余波により、巨大な爪で引つ掻かれた様な跡を玉砂利ノ庭に残している。

「ぬうああ……」

挟り込む様な3発目を苦しげな声を漏らしながらも何とか防いで見せた帝人に『し』の字を僅かに回しズラした様な軌道で放たれた突きが襲いかかる。

「ぬおー」

帝人は辛うじて反応して見せた事で裏霞の構えに移行する動作の途中で鎬を叩き、軌道がズレた事で事なきを得るが外れた時の風切り音が凄まじく、直撃をしていた場合を考えると冷や汗が流れる。

「はあー！」

此処まで攻められっぱなしでは終われないと言わんばかりに帝人が脇腹を蹴って隼を引き剥がし、蹴り足を戻した勢いで身体を回して袈裟斬りを放つ。

蹴られた事で体勢が崩れていた隼だが、刀の長さか踏み込みが足りなかったのか服を斬る程度に収まった事で反撃と言わんばかりに御刀の刃を上にして振り上げ様とするが帝人に御刀の鎧を御刀で叩かれた事で弾かれさらに下から上への逆袈裟斬りを喰らう。

「くう」

この一撃も弾かれた時に半歩だけ下がった隼は服を斬られる程度の損傷で済むが帝人が無言で上段からの掬い上げで斬り付け隼は更に後退すると帝人は巴の構えで動きを止める。

隼が構えを取ろうとした素振りを見せた瞬間に帝人が身体を回しながら迅移で接近、そのまま低空から挟り取る様な軌道で御刀を振るうが、隼を御刀を地面に突き刺し、姿勢を低くしてその斬撃を防ぎ、もう一回転して横というよりもズレた縦の様な軌道で御刀を振るった帝人の御刀の鎧を抜いた勢いで放った掬い上げで迎撃、さらに横振りでの一閃を浴びせる。

「ふうあー！」

帝人も弾かれた御刀を素早く霞の構えに戻して横一閃を防ぐと一步を踏み込み、攻撃の素振りを見せた瞬間にバク宙で隼が距離を取った事で御刀の刃先が僅かに足らず、背中ギリギリの空を斬った。

「とおらあー!」

空振りの隙を突いて片手で持った御刀を首から脇腹に抜くる軌道で振った隼だが、帝人は空ぶつた勢いに自分の足で生んだエネルギーを乗せて回転、素早く、隼の斬撃を霞構えで防ぐ。

「ふうん」

隼は片手で振った御刀を片手で保持したとは思えない速度で刃を返して横帝人の腑を狙った横一閃を放つが帝人は霞から袈裟斬りで迎撃、御刀が触れた瞬間に巻き上げ上に弾くが、隼は空いていたもう片方の腕で御刀を掴んで両手保持に戻した瞬間に上段を放つ、帝人がそれを防いで後退、即座に上段を返したが、隼は片手を峰に添えた防御で防いだ事で鏝迫り合いになる。

「まだ、何かが足りてないね」

御前試合で言われた事に帝人が上段で止められた御刀に更に力を加えて押し斬ろうとするが、隼は押し込まれた瞬間に自らも足を曲げて帝人のバランスを崩すと掬い上げる様に帝人を投げた。

「ううわ」

空中に放り出された帝人は隼の頭上を越えて、背後に頭から落ちる時に隼が振り返途中の隼を捉える。

「てえやあー！」

添えられた手から溜められた力が解放された様な重さと勢いのある上段が帝人の顔を狙って放たれた。帝人は咄嗟に反射で防御姿勢を作る事に成功するが踏ん張りの効かない空中だった故に、バク転を続ける様に吹き飛ばされる。

「ぬうあ……」

地面に御刀を刺して何とかスピードを殺した事で、辛うじてながら足から着地出来た帝人の視界に片手で保持した御刀の峰を首裏に当てた様な構えから放たれた横一閃を、地面に突き刺した御刀を盾にする様に身を屈める。

「ぬうあー！」

隼はその御刀ごとさらに帝人を吹き飛ばし、飛ばされた帝人は着地が上手く出来ずに地面を転がって漸く止まった。

「お兄さんの剣は何かが抑え付けられてるね」

笑いながら御刀を片手で持ったまま、肩に担いで告げた隼の言葉を聞きながら帝人は立ち上がると、正眼落としての構えで接近、足を斬ろうと振るうが隼にはバク転で躲され、

片手保持の横一閃が放たれる。

「やああー！」

帝人は霞の構えで上に受け流す様に横からの一撃を防ぐと素早く上段で左肩を狙う斬撃での反撃を行うが、隼は身体を半身にして上段を躲しながら上段突構えに移行し、刺突を放った。

帝人は背中から上体を落として刺突を躲すとバク転で距離を取り、踏み込みと同時に腰の捻りを加えた片手振りでの横一閃を放つが正中構えの隼に防がれる。

「見えた。お兄さんの剣は快樂を忘れてるね」

快樂。その言葉にトラウマ、消したい記憶が刺激され目を見開くと同時に鏢迫り合いの途中にも関わらず、不用意に力が抜ける。その瞬間を隼は片方の口角を上げるだけの笑みを浮かべると柄を片手で保持したまま帝人の御刀を上方に跳ね上げる。

「ふっ」

指の構えに近い構えを隼が取ると頬を柄頭で殴って怯ませながら半歩後退させる。帝人は殴られた事で我に返り、視界に映る半身から回転して正面に向き直りながら横の一閃を放つ予備動作を行う隼を見て直ぐに防御の為に片方で持った御刀を立てて、八幡力を発動させての防御姿勢を作る。

隼もこの一撃で仕留めるつもりだったのだが、防御姿勢を整え切れておらずとも防御

できる姿勢を作った帝人を見て、斬撃を八幡力で強化して振るった事で帝人は防御した御刀が弾かれ、弾かれた御刀を追う様に身体を揺らされてしまう。

「ぬううん」

帝人は軸がブレにブレても、視界に隼を捉え続けようと顔を向けた瞬間に右目を隼の掬い上げに切り裂かれる。

「ぬうおお、ああ」

斬られながらもバク宙で隼から距離を取る帝人だが、視界の半分が白く染まった視界に苦虫を噛み潰したのと同じ様な表情を浮かべる。

それを見た隼は片手首のスナップで御刀を横向きの回転を掛けながら僅かに投げてキヤツチすると口を動かす。

「人を斬りたくてたまらない」

キヤツチした御刀の刀身を鑑賞する様に胸元で地面と水平になる様に傾け、柄を掴んでいない手で刀身を撫でながら、隼は続ける。

「でも、何かで忘れさせられている」

片手で保持したまま、身体の横で手首を回して御刀を回しながら隼が告げた。その言葉に帝人は『違う……』と片目を抑える手を外しながら首を振る。

「俺の剣は、活人剣……」

ゆつくりと立ち上がりながら両手で保持した御刀の刃先を隼に向けた帝人を見て、子供の様な何かガツカリしたと言わんばかりの表情を浮かべると苛立つを含めた様な動きで御刀を再び手首の駆動だけで回しながら、同じ様に苛つきを孕んだ言葉を飛ばす。「そう覚えさせられているんだよ」

何回転かして、刃先が地面に向いた瞬間に御刀を突き立てて、地面を斬りながら接近、距離感を地面に刺す事で偽装させながら、接近した御刀を僅かに斜めに傾いた軌道で振り上げる。

それを帝人は一歩下がる事で躲したが、隼は御刀を梃子の様に片腕を起点に振り下ろして追撃を掛けるが帝人はさらに下がる事で躲すも、撒き上げられた砂利と土で帝人の視界が覆われる。

そんな帝人は御刀を回転させた追撃が放たれ、それを間一髪で防ぐも体勢を崩した帝人は、隼の背中で御刀を持ち変えてからの真つ向斬りを受け止められないと判断し、八幡力を使った大きな飛び退きで逃げる。

「はああ!!」

帝人は着地すると八幡力で跳びながら上段の構えを作りながら、隼に接近する。それに罅迫り合いで答える隼だが、直ぐに帝人の御刀を跳ね上げて罅迫り合いを崩し、首を狙った横振りを放ちも帝人が弾き返すと隼は下を向いた弓を描く様に御刀を振ると帝

人は上段の構えで迎え撃とうする。

「う……」

だが、飛んで来たのは斬撃では無く、脚撃。何とか護拳で受け止めた帝人だが、命中時の衝撃は凄まじく、帝人の身体が衝突音と共に後方に動いてしまう。そこに隼の腹を狙って放たれた刺突が襲い来るが帝人が御刀を上手く使って防ぐと同時に身体の捻りで後方に受け流す。

「はぁぁ……」

隼は受け流され、背後に回されたと判断した瞬間には振り向き様の横向きの大振りな一撃で帝人を牽制し、帝人はその一撃を正中構えで防ぐ。

「はっ！」

隼は足を八幡力で僅かに埋めて蹴り上げる事で石飛礫や土で目隠しを行うと御刀を納刀する。

「ぬう」「フツ」

隼は右手を前に差し出し、左手で鞘を腰の後ろで保持する居合の構えを取り、帝人は片方の視界に隼を捉えながら踏み込みの足を上げつつも肩越し構えを取る。

月下の即席の決闘場に銃声が響き、満開の火花を咲かせながら、人間には出せない速度で紅い御刀が抜刀され、構えられた右手の直ぐ下を通る瞬間、帯電した様に白い雷を

纏った右腕に掴まれた御刀は直進運動から上昇運動へと運動を変えて、帝人の片腕を切断、後方へと飛ばした。

「はいひい」

片腕を斬られ、苦悶の声を小さく吐きながら後方へと体勢を崩した帝人を見た隼は人を斬った事が楽しくて堪らないと一種では凶悪な笑みを浮かべると御刀を返す。

「へアア！」

そのまま一步を踏み込んで斬り飛ばす様に袈裟斬り。それを防ごうと片腕だけで持った御刀を突き出すが、隼の御刀は帝人の愚鋼造の御刀を切断して、渡り廊下の方角へ飛ばす。

袈裟斬りを受けた帝人の身体は渡り廊下を渡った可奈美と姫和の足元に転がる。

「そんな……そんな事って……」「嘘……ですよね……」

可奈美は足元に転がった物を見て、信じられない物を見る様に眩き、姫和はこれは性質の悪い冗談で、転がる物が冗談だと言いながら立ち上がると信じたかった。

「帝人くん……」

身体が五体満足の生身に戻ったとしても死んだ様に反応を示さない帝人に可奈美が涙を目尻に溜める。

写シを張っていても、一度に大き過ぎる攻撃を受けると脳死の様な症状を起こしてそ

のまま死亡する場合がある。刀使や武宮の殉職の5割がこの大ダメージを一度に受けた故の脳死に近い死に方である。

「貴様……」

姫和が御刀を抜いて構える。それを見た隼は面白い物を見た時の子供と全く同じ無邪気な笑みを浮かべた。

「お姉さんとなら楽しめそうだね」

血に飢えた様な笑みを浮かべて姫和に隼が斬り掛かった。

第四十四話 靖国の前で

白い霧の様な物が薄く立ち籠める空間に帝人は一人で立っていた。

手には折れた愚鋼造の御刀は無く、腰に立てたあの隠れ里で渡された御刀だけが存在した。

「此処は……」「此処は靖国、その入口前と言った所かな」貴方は？」

何処だと言う言葉を吐く前に聞こえた方向に身体を振った風圧で霧が僅かに晴れると霧の先に薄つすらだが、石階段が見えるとその石階段に腰掛ける古いデザインの皇居警察の制服に身を包んだ若い男が視界に現れる。

「私が誰でも構わないだろうか？」

「それは……」

目の前の男の正体は今決して重要な事ではない。帝人はそれを理解しているが故に話を進める為に警戒しながらも男の言葉に頷いてみせる。

「見た所であるが……まだ認め斬られていない。と言う所か」

視線は帝人の持つ御刀、その御刀と鞘を固定する細い珠鋼製の鎖だった。

帝人はこの鎖を外す方法を知っていると確信して外し方を問うと男は笑みを浮かべ

る。

「それは外す物では無く、外れる物だ。そうだな。外れた理由は教えて置こう」

そう言うのと足に立て掛けていた納刀された刀を持ち上げる。それは程度が違えど今の帝人が持つ物とほぼ同じ物だった。

「1本目はその刀を認めるに値する覚悟を持つ事。2本目はその刀が認めるに値する心がある事。3本目はまもる為に戦う覚悟と心を持つ者である事だ」

「4本目は？」

「教えぬ。だが、気付いて……いや、思い出したか？」

それを聞いた帝人は頭を抱えると景色が薄く白い靄が立ち込める道場へと変わる。

ここでは小学生程の子供達が愚鋼造の御刀を手に模擬戦の様な物をしていた。

その中の1人が良い動きをしていた。

「しえいー！」

上段を下ろした一撃を足捌きだけで回避すると同時に腹を御刀で斬りつて倒し、別の方向から振り下ろされた一撃は回転しながら跳び、背後に回ると頭を斬りつけて撃破。さらに別の子供が横振りを放ちがそれを御刀で防ぎ、蹴り飛ばして背後からの横振りをしゃがんで躲し、立ち上がり様の突きで振った子供を倒した。

「えいやあ!!」

背後から斬りかかった子供の一撃を後退りで躲し、振り返る為の首を回した瞬間には御刀で斬り付けられていた。背後から攻撃しようとした子供もいたが、その袈裟斬りは受け流され、カウンターに放たれた回転斬りで腰を切断される。

「せえいー！」

回転斬りを終えたタイミングで刺突を繰り出した子供もいたが、その子供は振り上げの一撃で腕・腹・肩と斬られて倒される。

「てえい、やー！」

背後から上段斬りを放とうとした子供は股から頭を先に斬り裂かれ、別の子供が横一闪で首を狙おうとするが、片腕で腕を抑えられ、御刀が途中で止まってしまう。

「あ……」

腹に御刀を突き刺して腕を受け止めた子供を倒す瞬間に膝を曲げて背後からの首を狙った一撃を避け、引き抜き様に体を回して大振り故に隙を晒した子供の腹を斬る。

『……………』

斬られた子供が倒れる音だけが道場に響く。

模擬戦に参加している全ての子供が緊張した面持ちで御刀を構える中で、先程まで一方的に斬っている子供だけが楽しいと言わんばかりに笑っていた。

「てえいー！」「やああ！」

斬りかからない子供だ叫び、その叫びの直後に刺突を繰り出す子供。だが、笑う子供は最初の叫びに視線をやるも刺突に気付くと足を滑らせて頬を僅かに斬られながらも直撃を躲して腹を開いて、刺突を繰り出した子供を撃破する。

「てええー！」

ついさつき叫んだだけの子供が御刀を振り下ろしながら叫ぶが、先に片腕を肩から斬り飛ばされ、更に斬り飛ばす為振り上げた御刀の勢いを使って身体を回しながら背後に回った子供に背中を斬りつけられた事で倒されてしまう。

「やあー！」

背後から片手であるが素早い袈裟斬りを放つ子供もいたが、その一撃は防がれ、防いだ子供は防ぎながらも手元を胸の高さまで上げ、相手が振り抜いた瞬間に上半身を前に傾けながら上段下ろしで首筋に御刀を突き立てる。

「せええ!!！」

首筋に御刀を突き立てた瞬間に背後から平突きが飛んで来るが、突き立てた子供は相手を斬り裂く様に御刀を身体から抜き、床に膝を付けながら回転。

平突きを躲しながら向こうの接近する力を利用して、腹を斬り抜いた。

「はああ!!！」

指の構えから真つ向斬りを放つ子供もいたが、無双する子供は逆袈裟斬りを鐔に当て

て相手の御刀が勢い付く前に後方へ弾き、素早く御刀を横に振って腹を斬り、斜め前方から振り下ろされた御刀を峰で弾いて肩を斜めに斬る。

「せえいやあ！」

上段から振り下ろされた一撃を半身になって躲した無双する子供が振り上げた御刀で攻撃した子供の両腕を切断。

「てええええ！」

背後から上段で攻撃しようとした子供が上段を振り下ろす前に懐に潜り込み、逆袈裟斬りで腹と肩を斬り、逆袈裟斬りが頂点に到達するとその際の勢いを回転運動に変えて振り向き、上段の攻撃を弾いた。

「あ」

弾かれた勢いでバランスを崩した子供は道場の床に片膝を付く様に立った姿勢になると無双する子供に首を斬られて床に倒れる。

斬った子供は最後の子供が倒れるのを見ながら僅かに御刀を回転させてから慣れた手つきでスムーズな納刀を行い、2階部分でこの光景に固まった大人、子供達の保護者達が見つめるだけの空間に鯉口と鞆の口が合わさった音だけが嫌に響く。

鯉口を鳴らす子供の表情は光悦と愉快で埋められていた。

それを見た道場主に破門を言い渡され、その子供は子供らしく驚き、固まっていた。

それを帝人は1階部分の脇で見ている。

「覚えがあるだろう」

そんな声が聞こえて足元に視線をやると先程の男が床に御刀を置き、その側で胡座で座っていた。

「……………」

そんな男の言葉に黙る帝人。

『人を斬りたくてたまらない』

『でも、何かで忘れさせられている』

『そう覚えさせられているんだよ』

そして思い出される隼の言葉。

「斬られた子供達の中には刀がトラウマになった者がいる」

隼の言葉を思い出して顔を伏せていた帝人が、男の方に顔を向ける。

「そんな彼女等や彼等にも夢があった。貴様はそれを快楽の中で無意識に奪った。貴様はその事実気付かず、刀使や武宮、荒魂を斬り続けてきた」

男が御刀を掴んで立ち上がる。

「そしてあまつさえ、その事実を知り、目を逸らそうとしている」

「ソレを忘れさせたのは誰だ？ 俺の人生を弄んだのは？ 俺の記憶も意識すらも弄つ

てどれだけ滅茶苦茶にしたのは誰だ？」

「それを君が知る必要は無い。そいつは既に死んでいるからだ」

その言葉に帝人の口から自然と言葉が漏れる。

「自らの思いで斬りたくて斬った訳じゃない。斬らなければ意味が無い。そんな場所だったんだ」

帝人が祖父からの教えで実戦を積みと言われて入った道場は兎に角斬り合いをさせる事を重視した道場だった。斬り合えば、武器の振り方も武器の恐ろしさも知り、武器を持つ者としての自覚が自ずと芽生えると言う教育方針からだ。

「あの道場で、俺は人はいとも容易く人を殺し合えるのだと知った」

帝人のその言葉に今度は男が口を開いた。

「いいか、十条帝人。人間の意志は、周囲の環境から形創られる」

男の顔が帝人から右の方角に変わり、その方角に帝人も顔を動かすとその場所では人が人を斬り、刺し、撃っていた。それも写シでは無く、生身の人間同士がだ。

「そこに自由意志など存在しない。存在するのは心の遺伝子とも言うべき意志達だ」

景色は変わり、何かの祭典や儀式の様に一本の御刀を受け賜る光景が額縁に入れられた写真の様に現れる。その光景に移る人物に共通点こそあるが別人が多く映っていた。

「心の遺伝子とは文化の様な物だ。この御刀を受け賜れば、その遺伝子を継ぐ事になる

……心の遺伝子とは受け継がれる物だ。この剣を受け賜った者は皆、同じ意志を持っていた。長く続く意志に触れ、受け入れようとすれば自らもまた、同じ意志を持つ様になる」

「俺の記憶を弄ったのも、その心の遺伝子なのか？」

「違う。だが、この心の遺伝子は時代を超えて行く」

写真に写る人物達の服装が徐々に古い者へと変わり、中には教科書で見た事のある様な人物もチラホラと映る。

「お前の先代がこれを継がせたかった。だが、貴様は3本目よりも先に別の鎖を千切った。故に記憶を弄ったのだ。」

「俺の活人剣も受け継がされた物だと言うのか!!」

帝人の怒りに満ちた声に男は反応しなかった。

「人を守る剣。刀と言う武器の本質をあの道場で知った貴様には心地良かったのではないか？」

帝人の脳裏に姫和が折神紫に御刀を向けてからの出来事、祖父から言われた言葉の数々が思い出される。

「そして貴様は刀と言う武器の本質からも目を逸らして刀を振るう。この瞬間にそれ思い出されて何も出来ていないのが証拠だ」

顔を逸らすだけの帝人に男は鞘に納めたままの御刀を向ける。

「恥じる事は無い。今のお前に意志も判断も存在しない故に恥じる物も責任も無い。だからこそ今になってこの記憶を見せた。この御刀、心の遺伝子は今の貴様では受け継げない、出来たとしても変質した物、劣性遺伝になってしまう」

鯉口が切られる音になる。

「ならば、いつその事。此処で貴様を殺した方が心の遺伝子は保たれる。いずれは貴様よりも相応しい者が現れるだろう」

御刀が抜かれ、鞘が地面に落ちる音が鳴った瞬間に帝人の口が動いた。

「待てよ……礼を言わせてくれ」

思い出される平城学館に入学してから何処か感じていた物足りなさ。それがわからずにその物足りなさに蓋をして感じ無い様にしていた。

姫和と可奈美と行動を共にした時は必死さと極限に限りなく近い状況から感じなかった物足りなさ。

舞草では別の事で充実して感じなかった物足りなさ。だが、陰世の影響で幽体離脱したかの様な現象が起きてから感じ始めていた物足りなさ。

「心の何処かで何かが抜け落ちたかの様な感覚の正体……隼葉結と戦えば何かかわかると思っていた……だが、違った……そして何か足りなくても姫和を守る為に、姫和が為す

べきと思つた事の為に御刀を振れば埋まると思つていた。それが正しい義なのだと思つていた。だが、それも違つたんだ」

「懺悔でもしているのか？」

男が御刀を上段に構えて帝人の首を斬る準備を始める。

「認めたく無かつたが……これを見て確信したよ……俺は戦いを求めていた。あの道場で俺だけが、破門にされた理由は……俺だけが、人斬りを……楽しんでたからだ！」

両手を地面に叩き付ける帝人に男は構えが僅かながらにブレる。

「祖父から教わつた活人剣は、剣術はそんな俺を救つてくれたよ。お陰で俺は今まで真つ当な人間で居られた」

「貴様……」

御刀を構えたまま、足をする様に後退する男。

「だが……お陰で思い出したよ」

すくりと立ち上がり、背中を立てていた御刀を掴み、抜刀可能位置にズラす帝人を見て、男はさらに摺り足で後退する。

「刀とは人を殺す道具なのだ」と

「何を言つて……」

「人斬りの俺に……戻る刻だ」

男は不味いと御刀を振り下ろすがそれよりも速く、帝人の鞘引き抜刀と同時に放たれた斬撃が男の首を断ち斬った。

「あぐっ」「あうっ」

写シこそ剥がれていないが、隼の劍撃に吹き飛ばされて帝人の近くまで来てしまう。「終わりだ」

帝人を斬り裂いた空砲居合いが2人を斬り裂かんと放たれるが、その一撃は迅移で飛び込み、姿勢を低くしながら構えた八相の構えで受け止められ、火花が散ると銃声が3回、月下の社前の空間に響く。

「その御刀……」

脇腹を3発の銃弾に穿たれた隼が1歩、また1歩と後退りながら、帝人の持つ御刀が愚鋼造の御刀とは全く違う、珠鋼造の御刀以上に銀色に輝く刃に鎬の部分は銀に近い灰色の鋼が見える珠鋼以上に神々しい鋼を使った御刀だった。

「フー……フー……はあー！」

隼も負けていない。油断した帝人に隼は生身で斬り付け、帝人の腹が僅かに斬られる。

隼が生身で斬り付けた頃に姫和と可奈美は驚き、帝人の傷に僅かながらのパニックに陥ってしまう。だが、帝人が傷口を触った事で血で手が汚れるとくつくつと笑い始める。

「痛みだ……これでこそ、戦いだ！」

低かった姿勢から直立に戻った帝人を見て、隼も獰猛な笑みを浮かべる。

「そうだ。これが戦場^{いくさば}。戦場こそが俺の居場所……」

隼が御刀を構えると帝人が片手で保持した御刀の刃先を隼に向ける。

「俺は……殺人剣の刀を持ち、活人剣の刀を振る！」

互いに写シは張らず、殺意を込めた御刀を振った。

第四十五話 帝の殺人剣と隼の殺人剣

「おお！ 素晴らしい！」

「御刀に認められたわ」

「まさかこの歳で……」

御刀を祀るとある大きな神社。そこに祀られた御刀、ニツカリ青江に触れた一人の幼い少女が、その身体に写シを張るとそのまま振り返って一人の同じ程の少年にピースインを送ると少年も嬉しそうにピースサインで返す。が……

「やはり妹君の方が……」

「兄の方は出廻らしかしらね？」

そんな無邪気な子供に聞こえる様に話すべきで無い言葉を構わず投げる大人達もいた。いや、殆どがそんな大人達だった。

言われたのは自分なのだとして少年の方は感じ付いたが、少女の方にそれを悟らせまいと無理な笑顔を浮かべる。

この瞬間から、少年の心に何か黒い物が鎌首を擡げるようになる。

「凄……天才だ」

「御刀に愛された娘よ」

とある道場。自分よりも年上の刀使候補を斬り伏せたのは、幼い少女が幾分か成長して少女になった、神社で御刀に認められたあの彼女だった。

「その癖に兄は御守りに心鋼だ」

「同じ苗字を名乗って恥ずかしくないのかしら？」

この道場の立地は一等地に程近い場所であるが故にこの道場に通う子供は世間一般で言うところのセレブの子供達。そして金が有ればそれに見合うだけの品位、それが満たされれば世間体を気にし始めるのは道理とも言える。

この辺りの地方では心鋼と御守りの刀使や武宮は、実績を持つともと珠鋼の御刀、和鋼の御刀に認められていないと言う理由で優秀な刀使や武宮として認める事は中々無い。

兄より優れた妹はいない。妹に劣る兄の評価は最悪どころか露骨なまでの排他が含まれた。

それは体裁的であろうとも平等である道場主にも現れた。

通う者に合わせた訓練内容。そう考えれば実力故に難易度も変わるのだが、神童と呼ばれた彼女の兄には、まるでお前に才能は無いのだから諦めろと言わんばかりに以下に完璧な素振りしようとする素振りしかさせず、打ち合い練習は勿論の事、終いには指導ら

しい言葉も無くなった。

そして兄の少年は、何かを決意しましたと告げると、妹には黙って道場から消えた。

最初こそ妹は何故と家で兄に問い詰めるが、親からはあんな奴に構う暇があれば、剣の稽古をしなさいと言われた。だが、当の兄は待っていてと楽しみに言い放つ一点張り。

少女は兄の言葉を信じて兄の居ない道場に寂しさを感じつつも稽古に励んだ。その末に……

「あれだけの刀使を一人で」

「まさに神童」

周りの大人も子供もその才能を讃える様になるが、少女は嬉しい反面、決して努力せず、ここまでの実力を才能だけで得てきた様な大人や子供の発言に苛立っていた。

消えた兄も家の庭で木刀での素振りを続けている。隣で素振りをする自分よりもよっぽど綺麗な素振り、他の基本的動作も自分よりも遥かに綺麗なそれだった。自分の才能など、ただ基本と言う一つを積み上げた兄の努力に劣る。自分が努力しても基本だけは兄を未だに超えられない。だが、周りは兄の努力を讃えず、自分の努力も才能の一言で片付けられて見抜きもされない。

その事に苛立ちを隠せずにいると道場の扉が勢いよく開かれた事で大音量になると

タンクトップ姿の大人の男が仁王立ちしていた。

「誰だ！」

「貴様に用は無いら」

無礼な物言いに道場主の男が刀を腰に据えて近寄ろうとするが、タンクトップの男は道場主には目もくれずにまるで挑発する様な眼差しで少女を見ていた。

「此処は私の道場だ。私を無視しないで欲しいのだが？」

「道場に用があればな。だが、用があるのはその少女だ」

刀の距離。貴様の価値などその程度だと言わんばかりの言葉に道場主が御刀を抜き、写シを張った瞬間にタンクトップの男は腕を突き上げるだけで道場主の首を殴り飛ばした。いや、正式に言えば、アッパーを喰らった瞬間に全ての背骨が顔ごと抜けた。

「と、此奴を殴り殺す為に来たんじゃないやなかつたな」

写シが剥がれない。と言うよりも写シが剥がれる程のダメージに気付いていない事で写シが張りっぱなしの道場主の身体を奥に蹴り飛ばしたタンクトップの男は少女に指を指す」

「此奴と戦え」

そう言つて身体を半身にすると、少女とその関係者が目を見張った。

背後に隠れていた人物は、少女の兄だったからだ。

「神童と呼ばれて、鼻が天狗になってるからな。へし切りに来たぞ」

そう話す兄の言葉に、タンクトップの男が面白い物を聞いたと口を押さえて必死に笑いを堪えていた。だが、そんな事を言われた神童と謳われた少女の自尊心を刺激された。

基本しか出来ない兄と兄に一步及ばずとも基本は抑えた上で応用も出来る。そこまでの強敵で戦っていないなくても実戦経験はかなりの数を積んでいる。

少女は負ける筈が無いと御刀を構える。周りも少女が勝つと信じて疑わず、戦いのいく末を聞くに耐えない野次を飛ばしながら見物する。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

息が荒い少女の前に一切の乱れが無い少年が御刀を下げて立っていた。周りには大人達の罵倒の声だけが響いていた。

試合は一方的な蹂躪の様になると思われたが、蓋を開ければ一方的に攻め立てる少女の攻撃を少年は動きながらも全て捌き切った上で耐え凌ぎ、スタミナ切れで御刀を持つ事さえ貫くなくなったタイミングでトドメのストマックブローで身体を曲げさせて固まった瞬間に首を切断すると言う物だった。

「勝ちだ！」

勝ち方など些細な問題。

重要なのは武を振るつた者ならば、最後まで立っていた者が勝者と言う事だ。最後の1人になるまで隠れ、勝利の余韻に浸っている間に背中から無言で突き刺して倒そうと、攻撃を真つ向から凌いだ上でスタミナ切れで動けない相手を殴り、首を刎ねようと勝利に代わりはない。

周りの大人は少年の強さを認めなかった。だが、少年にとつては目の前に倒れる少女から認められる。それだけが重要だった。結果としては良きライバル関係と言えよう。

少女は少年の防御を突破する為に、少年は少女に反撃で勝つ為に互いに手合わせを重ねる様になる。その姿は少女が少年に勝とうとしている様にしか見えないが当の2人は本気だった。

「はああー」「やああー！」

火花が散り、2人の男が互いに離れると同時に構えと作る。片方は十条帝人、もう片方は隼葉結である。

帝人は身体を深くした独特な地擦り正眼の様な構えだが、隼は身体を僅かに斜めに膝を曲げて正眼に構える。

「そろそろ決着だ」

「そうだね」

帝人が地を這う様に接近、逆袈裟斬りを放つも隼は真逆の角度で構えた御刀で防ぐ

が、帝人は僅かに浮き上がった身体が落下するのに合わせて返しの太刀で袈裟斬りを八幡力込みで放つが此れも隼は御刀の角度を変えただけで防いで見せる。

「ッシー！」

帝人は防がれた攻撃をそのまま上昇させて袈裟斬りを放つが此れも隼は角度を変えただけで防ぐも、帝人は防がれた事で御刀の軌道が変わった事を逆手に取った横振りを放つが隼は素早く半歩横に動いて、正眼の御刀で横からの一撃を防ぐと同時に大きく後退する。

「フツ」

それもわかっていたと言わんばかりに帝人が追撃、逆袈裟斬りで防御を刎ね上げることが、隼は刎ね上げられた衝撃を使って体勢を変更、前蹴りを放つて帝人に攻撃するが霞の構えで防がれる。

「やっ」

前蹴りを防いだ帝人だが、その威力が段違いだった為に防御ごの後退させられ、防御姿勢だった霞の構えも解き気味だった所を隼の上段斬りが迫る。

「ハッ」

帝人は半身でそれを避けた上で横の一閃を回転斬りに近い方法で振るうが、隼には通じないのか横飛びで躲されるも、帝人は更に追撃で横の一閃を回転エネルギーに変えて

袈裟斬りを放つが腕を寄せた正眼の様な構えで防がれ、更に距離を取られるが、刺突で追撃を掛けた事で服の糸を僅かに切断する。

が、それだけだ。

お返しと言わんばかりに隼から刺突を躲す為に捻った身体からコンパクトな軌道で振るい上げられた御刀が帝人の太腿の薄皮を僅かに切断し、僅かに赤い軌跡を描きながら刃が周り、腕を狙った軌道から足首を狙った軌道の連撃が放たれるも、帝人はバックステップで刃の届かない距離に逃げる。だが、隼は更に踏み込み、片方での重い斬撃を放つ。

「ぬう」

それを霞の構えで防いだ帝人に素早さ過ぎる返しの太刀が飛ぶ。

「くあ」

それを裏霞の構えで防ぐが防御が崩された。

「つうおあー！」

隼の本気を滲ませた方向が響くと同時に御刀を頭上で掲げる様にしながら回転し、遠心力に踏み込みの力を加えた袈裟斬りが放たれた。帝人は無理に防がずに離脱を選択した事で重傷を負う所を胸元を大きく浅く斬られるだけで済むが、平城学館の制服には大きく切れ込みが入り、緑色は赤色に染まる。

「つおらあー！」

帝人は気合の声と共に斬られた事で下がった御刀を振り上げて、隼を引き剥がす事に成功し、防御の為に正眼の構えを取った瞬間に隼が踏み込みと同時に放った斬り上げで防御が上に弾かれる。

「ふんー！」

素早く刃を捻り込む様に振るう事で斬り上げを放った隼だが、帝人は薄皮を切り裂かれながらも後退で致命傷を避ける。

「はあー！」

後退で生まれた隙間を身体を回しながら踏み込み、巻き上げながら浮き上がるとも言える軌道の斬撃を放った隼の一撃を帝人は峰を片手で保持した全力の防御姿勢で見事に防いで見せる。

「てえい！」

防がれた攻撃だが、防いだけで次の攻撃には移行出来る隼を見て、帝人は内心でイニシアチブを取れなかった事に舌打ちしながらも身体を増して半身になった隼に突きで来ると判断し、霞の構えに移行する。

「やああー！」

回転と腕と膝の突き出し、そして捻りを加えた速度と破壊力に優れた隼の突き技に帝

人の防御が崩れる。

「そー！」

帝人が納刀、鞘を外して頭上に掲げながら回転、回転に乗せた頭上からの袈裟斬りの軌道で放たれる居合斬りが帝人の胸元を斬り、血煙の様に帝人の血が吹き出る。

隼は返り血を浴びながらも一旦は飛び退き、右手で御刀を引きながら、左手で御刀に付着した帝人の血を拭い、手に付いた血を弾く為に手首を振るが、それが帝人には立てと言う挑発に見えた。

「まだまだ！」

立ち上がった帝人に隼が地面を刃先で斬りながら接近、振り上げた一撃を帝人はサイドステップで回避、隼は逃げた帝人に回転斬りで追い立てるが帝人は肩で保持の補助をする様に御刀を構えて、反りを使った上への軌道誘導でその一撃を防ぐ。

「せー！」

軌道を誘導しきれば今度は此方からだと言わんばかりに額の前に有った両腕を首元まで下げるとそのまま平突きを放つも、その一撃は素早く復帰した隼の袈裟斬りで迎撃されてしまう。

「ふう、ハア！」

袈裟斬りをそのまま振り切れば、もう片方の手で保持していた鞘に受け取られる様に

して納刀され、腰だめから僅かに斜め上を向いた素早い一撃が帝人に放たれ、首の付け根から僅かに下がった位置にあった皮膚を斬る。

「フウアア！」

コレで決めてやると言わんばかりに片手で振るわれた袈裟斬りだが、命中の寸前で帝人がバク転で離脱、周りに自分の血を撒き散らせながらもその命の灯火を僅かに揺れながらも確かに燃える蠟燭の火様に長らえさせる。

「ふうー……」

帝人は追撃に出来ない隼を確認して取った行動は納刀し、姿勢を低くする事だった。

そして息を吐き、吸い込んで肺に貯められるだけの酸素を貯めると一気に迅移を使って姿勢を低くしたダツシユで接近する。

「ならばー！」

隼も納刀からの居合で迎撃しようとしたが、刃が振るわれた瞬間に帝人は足からのスライディングで隼の懐に潜り込み、滑りながらに斬撃を放つが、隼も八幡力を使ったバク宙で帝人の攻撃から逃れる。

「ヘアア！」

片手で振るわれる袈裟斬りを帝人は両手で保持した刀で防ぎながら後退するが、バランスに僅かながらの綻びが生じる。

「フツ!!」

その綻びを狙ったかのように振るわれた緩やかな傾斜を付けた腹への斬撃を帝人は辛うじてながら片手で保持した事で防ぐが、防御が崩される。

帝人が必死にバランスを整えようとする前で隼が頭上に掲げた鞘から回転と共に抜き放つ居合の構えを見せたのを見て、帝人は居合が放たれた瞬間を狙って自分も身体を回す事で全体重を乗せた斬撃で迎撃する事で命中を防ぐ。

「らああ!!」

だが、隼の攻撃は終わらない。地面を刃先で斬りながら振るわれた掬い上げの斬撃。だが、帝人の防御も終わっていない。身体を回しながら霞構えに近い体制を作り上げて上手く防御すると隼は更に踏み込んでの袈裟斬りを放って鏢迫り合いの形に持ち込んだ。

「そろそろ終わりにするぞ!!」

鏢迫り合いに持ち込んだ隼が八幡力を使ってでも刃を押し込んだ上で首筋を引き斬るつもりだと察した帝人は拵に銃口を上手く調整した上で発砲、隼の肩に風穴を開けると霞の構えに近い体勢から御刀を振り上げて鏢迫り合いを制すると同時に隼の御刀を持つ手を上段斬りで手首から斬り落とし、上段斬りの勢いを殺すと同時に次の攻撃に移行する為の回転で身体を回しながら、上段で下がった御刀を首元まで上げて再び視界に

隼を捉らえる頃には平突きが構えが出来ていた。

「これで終いだ！」

腕と腰、膝と足首が連動させた、今まで類を見なかった程に奥へと到達した迅移による神速の平突きが、隼の剣状突起を貫通して、身体に突き刺さる。

「うわああああ……」

刺された痛みと刺された場所から吹き出す銀色の液体。それを帝人は気にする事無く、ヨロヨロと弱々しい動きでありながら今だに抵抗の意志を見せる隼にトドメを刺すかの様に御刀を捻りながら更に突き刺し、抜く時には先程の捻り以上に捻る逆捻りを加えながら引き抜く。

「あ、うああ……」

血振るいをする帝人の前に隼が膝を地面に突き、刺された場所から流れる人間の中に流れる物では無い液体を自分の手で受け止める。

受け止めた銀色の液体を見て思い出すのは、大人の汚さと醜さ、何よりも己の血族が腐り切っていた事を知った時のことだった。

共に切磋琢磨していた少女、自身の妹が重く、そして不治の病を患った。現在の医療で治せない病氣と知った彼の大人達は何か方法が無いかと動き回った。

名医と言う名医に見せ、様々な検査を行ったが結果は全て同じ。だが、1つだけ方法

があつた。それは違法な治療方法、15歳以下の兄から心臓を抜き取つて、妹の心臓と交換する移植手術であつた。

偶然にも兄との適合率はこれ以上は望めない程に高かつた事が、大人達の欲望を大いに刺激してしまつた。

大人達は酷評していた兄を見限り、国外へ連れ出して心臓を抜き取つて日本へと持ち帰つた後に妹へ移植した。

自分は見捨てられ、心臓を生きながら引き抜かれた事を知つたのは自分がこんな身体になり、海外に赴いた折神紫の抹殺依頼に失敗、親衛隊に所属し、過去と自分の正体を知つた折神紫から真相を教えられたからだ。

自分は心臓を引き抜かれた後に残りの肉体は売買の対象となり、とある研究者の研究所で人口心臓のテスト個体された後に別の組織に誘拐され、戦闘用人口心臓の交換、筋肉を排除した後に戦闘用人口筋肉へと変えられ、ニツカリ赤江を渡された。

ニツカリ赤江。コレが後の悲劇の始まりだつた。

ニツカリ赤江の鋼材。それは禍神の御守りの原料と同じ鋼材。通称では禍鋼まががねと呼ばれる鋼材で作られた御刀だつた。

鋼の性能としては珠鋼と同様であると同時に心鋼の様に禍鋼は誰にも振れる。そして様々なメリットとデメリットを持ち主に与える。

ニツカリ赤江は歴代所持者の全盛期の能力を現在の所持者に与え、殺人への忌避感と恐怖感などを無くし、求める様になる。

折神紫に敗れるまで御刀の幾度と無く殺人を行った、故に親衛隊で妹と再会しても自分が兄だとは言えなかった。言える行いをしていなかった。だからこそだろうか？ 妹の奇襲まがいな遊びと称した暇潰しの斬り合いにも様々な形で答えていた。

僅かばかりの何かを求めて……隼の姓を名乗るのも、妹の燕に勝つたと言う記憶を忘れない様にと言う願掛けでもあった。

倒れた隼に帝人が近付き、側に跪く。

「サイボーグ……」

義肢技術の最高峰。それだけの言葉で言い表せるだけの知識しか持たないが、それを見極める方法として最も簡単な方法としては銀色の専用機能を持たせた人工血液だ。

「に……さ、ん……」

「姫和。コレがお前のやろうとしている事だ。その覚悟は？」

殺すつもりで刀を振るい合って居た帝人の顔は、自分を案じる時に見せるいつもの表情だった事が姫和は言葉に詰まる。

「傷は……」

可奈美は斬られた傷を案じるが、帝人の傷は既に止血は済まされたかの様に血は止ま

り、それどころか既に傷口には爪で切れそうな程に薄いくだが、既に皮膚が覆っていた。「この御刀のお陰でな」

立ち上がり、血振るい納刀を行う帝人。

その御刀は姫和の小烏丸の様な鋒両刃造の刀身は写しの様に似通っているが、剣先は太刀の様に小烏丸より鋭い。

帝人は隼の御刀、ニツカリ赤江とその鞘を拾い上げると、逆手に持ったニツカリ赤江の刀身を確かめる様に見つめる。

その刀身には自身の血が付着していた。

「使うの……」

可奈美が問い掛ける。己を斬った人間が持っていた、己の身を斬った御刀。出来としては最上級だろうと可奈美はその御刀に何処かで忌避感を抱いていた。

「いや……」

帝人が眼前に柄が来る様に掲げると大きく斜め下に振る事で己の血を払い、腰の位置で持っていた鞘にゆっくりと戻しながら、顔の横から眼前へと鞘と御刀を動かす。

そして眼前に僅かな刀身と鯉口が映ったタイミングで僅かに納刀の動作を止めてから、一息に納刀を終えた。残心と取る様にほんの一瞬だけジツとする帝人を見た姫和と可奈美は、帝人が隼に敬意を抱いている事を悟り、それを静かに見つめ、帝人が御刀と

鞘を倒れる隼の側にソツと置いたタイミングで口を開いた。

「帝人くん」「兄さん」

振り返った帝人の視界に手を差し出す。可奈美と姫和が居た。

「行こう」「行きましょう」

「ああ、終わらせよう」

第四十六話 禁足地の奥地に待ち受ける者

獅童真希・此花寿々花・隼葉結の3人を見事に退けた可奈美・姫和・帝人の3人は社の中に侵入。その目の前に開け放たれ状態で佇んでいた門からまるで死地に赴く人間を迎え入れる様な圧迫感を感じながら潜り、山の中を走る渡り廊下を抜けて、山肌にポツカリと空いた洞窟へと侵入する。

自然に空いた洞窟を利用したそこは昔ながらの宗教的な施設と言う趣きを感じさせる場所だが、時代の流れ故か人の手が多少は加わったからなのか完全な自然物には無い不自然さを感じさせる。

そんな岩肌剥き出しの道を3人は駆け続けていると、人工物の多い区画に出る。

「雰囲気が……」

「うん。変わったね」

姫和の言葉に可奈美が同意した瞬間に帝人が奥にポツカリと開いた洞窟の先から近付く存在に気付いて、御刀を構えると同時に銃口を向けると同時に躊躇いも無く、その銃の引き金を引いた。

銃声と共に飛び出した銃弾は真っ直ぐに洞窟へと飛び込んで行き、金属同士が当たっ

た音がなると同時に小さな火花が奥から僅かに光となった3人の視界に映る。

「割れる筈の無い殻を割ったか……」

奥から二振りの御刀を抜刀した折神紫が意味深な言葉を発しながらゆつくりと歩きながら現れ、顔を3人に向ける。

「戻つて来たか。幼い2羽の鳥、いや、3羽の鳥よ」

姿を完全に捉えた3人の内、2人の刀使が震える手の震えを意志の力で抑えると同時に御刀を抜いて構えるのと同時に武宮は弾倉に入った弾丸を全て放つ。

「フツ」

放たれた銃弾だが、折神紫は鼻で笑うと一息に全ての銃弾を両手の御刀で弾く。

「巢立ちを迎えたか、未だ雛鳥のままか」

折神紫の言葉を聞きながら武宮が空の弾倉を抜き捨てると弾が満載された弾倉を最後だと嘯み締めると空いた穴に差し込み、スライドを引いて初弾の装填も終えると再び武器を構え直した。

「その剣を持って証を立てるが良い」

折神紫の発するそれが大荒魂だと確信した3人が獲物を持ち直す。それと同時に折神紫の身体が写シを張った事を示す淡く白い光が包む。

「荒魂が写シを……」

「親衛隊の人も使っていたし、不思議じゃ無いよ」

「そもそもの話で陰世の技術だ。当然だよ」

姫和が迅移で接近すると同時に斬り込むが、右の御刀で払われ、左の御刀が姫和の腹を斬ろうと右脇腹から左肩へ上がる軌道で振るわれる。

姫和はその一撃を防ぎながら斜め前方に移動し、可奈美と帝人の視界に折神紫を捉えやすくする。それと同時に一足遅れで迅移を発動した可奈美が上段で攻撃し、それに合わせて姫和も攻撃するが可奈美の攻撃は右の御刀で、姫和の攻撃は左の御刀で防ぐ折神紫。

此処で普通なら可奈美を片手持ちの刀が持つ弱点、鏑迫り合いに弱いと言う点突いて押し込み、そっちの対応に意識を向けた瞬間に姫和は側面か背後に回る。が、今回はこれに3人目の帝人が居る。

帝人は迅移と共に肩から突進する様に接近、足首、膝、腰、肩、腕を連動させた神速とも言うべき刺突を放つが折神紫は無茶せずに後退、その隙を突いた姫和の回り込みには軌道を被せる様に振った御刀で牽制しつつ、可奈美の攻撃に空いているもう片方の御刀で防ぎつつ、押し退け、帝人の掬い上げる様な軌道を姫和を妨害した御刀で防ぐ。

即座に交代しようとした帝人だが、平突きが飛んで来た故に交代では無く回転しながら僅かに横にズレて峰側に逃げ込みながら、頭上に掲げた御刀を回転の終わりに合わせ

て袈裟斬りに放つも、片方の御刀に鏝近くで防がれてしまう。

折神紫は更に帝人の袈裟斬りを防いだ御刀を振り上げて、帝人の払い除けると振り返りながら態勢を整えた姫和の横一閃が命中する前に軌道を弾いて、防ぐと上段の攻撃を放とうとするが姫和が即座に迅移で後退を選択、その隙を稼ぐ為に可奈美と帝人が2回つつ御刀での攻撃を行うも、数歩後退されただけで全て防がれた事で姫和と同じ様に2人も後退する。

「S装備の打ち込みを片手で！」

基本的に刀での二刀流は受けを想定していない。

これは日本刀が両手でもしように前提であり、また両手持ちの武器と鏝迫り合いになれば、当然の如く押し切られた後に引き斬られるからだ。故に攻撃を防ぐ時は受け止めで無く、攻撃に攻撃を当てて弾くか逸らしてからも片方の刀で攻撃する。

剣術についての授業を行い、それを知っている3人からすれば、強力な打ち込みが行える自分の攻撃をいとも容易く受け切っている事に驚きが隠せずにいると折神紫の口が動く。

「我が尖兵の鎧たるその装備……荒魂を宿した親衛隊と渡り合えたのなら、まずまずと言った所か……」

楽しい。その感情を誰にも聞こえぬ様に、折神紫は呟いた。

「母がやり残した勤め！ この私が果たす！」

十条兄妹が同時に叫ぶと折神紫は静かにやってみると答え、姫和が折神紫かタギツヒメなのか問うが、折神紫が答える前に帝人の口が開いた。

「お前がどつちだろうと関係無い。俺の心の遺伝子が叫ぶ……お前を殺せとな!!」

帝人が飛び込むのとS装備の稼働時間が3分を切った事を確認した残りの2人が後に続く。

「……やはりな」

白い石を敷き詰められた社前の庭に1人の男が地面に膝を付いて、地面に倒れる隼の亡骸の側に黙って佇む。

「こっちは人間か……写シ無しで斬り合っただろう……」

首を回して周りを見渡せば、銀色の石に混じって赤い石もある。時間が経って固まったのか僅かに赤黒い物もある。

佇んでいる人物からすれば最早、他人のでも自分のでも見慣れた人間の血なのだと感

覚的に理解する。そして同時に2人の人間が背後から近付いている事に気付いて顔を向ける。

「ッ！ 葉結！」

地面に横たわる人物を見て、獅童と此花が駆け寄り、手首や首筋に指を触れる。

サイボーグでも内部機構次第では脈はある。

隼の場合は戦闘用人工筋肉と人工血管、そして人工筋肉で作られた人工心臓である。心臓以外の内臓は全て生身のまま、故に食べたカロリーをそのままサイボーグパーツ稼働のエネルギーに変えられるが、同時に心臓が動かないと各種内臓が餓死するか壊死する。

「まだ動いている……」

「助からねーぞ」

獅童のまだ助かるかもしれない。そんな意志を感じさせる言葉に苔石が現実を突き付けるような言葉で答える。

隼の傷口は確実に殺される為に挟られている。応急処置程度で止められる血の出方では無いし、人工血液の場合は専用の血液凝固剤を用いなければ不純物の多さ故に凝固が通常血液よりも遅い。

自分達では知識・物資の両面援助けられない。病院に担ぎこもうとサイボーグの場合

は治療よりも修理に近く、今の日本ではその技術は遅れ気味であり、周囲の認知度は低く、同時に歪んでいる。

今の隼は人工筋肉に搭載された薬品により仮死状態に近い状態にされている。

「隼に介錯を行う」

その言葉を聞いた獅童が片手で苔石の首を掴んで僅かに締める。流石の苔石も氣道を圧迫されて苦しそうな表情を浮かべる。それでも獅童は激昂する様に何故だと問いかけ続けていると獅童の指に此花の指が絡まり、優しく指を動かす事で苔石の氣道を圧迫から解放する。

「首を絞めていては話せませんわ。それに何かあるのではなくて？」

此花の問い掛けに苔石が咳き込みを終え、肺に空気が溜まってから思い出す様に告げる。

それは隼の正体に苔石が気付いた時に口止めと共にお願いした事。それは自分が助からない時は介錯を任せたいと言う物だった。

他のメンバー、皐月か満月ならやりそうだが、隼にとっては皐月と満月は性格は合格でも、そこまで親しく無く、やってくれるか怪しい部分があった。だが、苔石なら仕事として依頼すれば必ずやるとしてお願いしていた。

「2人には酷だろう。それに戦う事も出来ない程に消耗している。荒魂の力を使い過ぎ

たな」

荒魂を抑えながら利用する。これには多大な神経を使う。普段なら何度か写シを張れる3人だが、獅童と此花は荒魂の影響で、苔石は心の葛藤故に1回で倒れてしまっている。

「俺にはもう……これしか……2人は他の奴らの場所へ！」

ある意味では仕事をこなせず、それすらも出来なかつた自分に親衛隊を名乗る資格も、親衛隊の仲間で居る資格もない。そう感じた苔石は隼と言う友の願いだけでも叶える為に、そしてその光景が心の傷にならない為に2人を別の親衛隊の仲間が戦う場所に向かわせる。

そう言われた2人は苦虫を噛み潰した様な顔を作ると他の親衛隊が待ち構えていた場所へと歩いて行く。

「……本当にこれでいいの？」

介錯と一緒に頼まれた事を思い出し、迷うような表情をしながらも横たわる隼に問い掛ける目を向ける苔石。

日本ではサイボーグ手術は人体改造手術として忌み嫌われている。腕を無くした刀使や武宮もサイボーグ手術を受ける為に海外に渡り、そのまま永住するかそれに近い事をする。

隼の場合は公務員。それも否応無く注目を浴びる部署。そんな場所に手足を変えたと言うレベルでは無い彼の正体が死んでからバレれば、折神紫をよく思わない相手に『人体改造を容認し、強要した』と言う事実をでっち上げられてしまう格好の餌になる可能性もある。

「はあ……」

溜息を吐く苔石。

預かれる範囲で自分が死んだ時には死体の隠蔽も頼まれていた事を思い出して憂鬱になる。

確かにこの手の仕事も実家は行う事がある事は知っているし、覚悟もしていた。が、それが知人となると流石に覚悟が揺らぐ。

「ッ！ 誰だ！」

その揺らぎが別の違和感を感じて武器を構えた瞬間にその人物の顔を見て、構えを解いた。そして出てきた人物は手伝ってくれと苔石に言うと、苔石は心の揺らぎ、そして友を殺したくない、死なせたくなかないと言う思いからその言葉に頷いて協力した。

禁足地。

折神家でもごく限られた者が踏み入る資格を持つが、その資格を持つ者でもごく限られた時だけにしか踏み入れる事を許されない場所に場所に土足で踏み込んでいた者が4人も居た。

柳瀬 舞衣とその弟の彗士、糸見沙耶香とその弟の津佳沙だ。

「もうすぐだよ」

僅かな斜面に沿うように作られた階段を上がり切る直前に呟いた舞衣の言葉に僅かに前を走っていた彗士が懐から取り出した苦無を2個ほど投げる。

投げられた苦無は弾丸のような横回転を僅かに行いながら、空気を貫通する様に飛んで、飛来先に棒立ちしていた折神紫の左目に突き刺さり掛けた所を咄嗟に右の御刀で弾いた瞬間に二本目が眼前に現れる。

「影手裏剣!!」

第1投に第2投を隠し様に放つ高等テクニクに折神紫は驚きながらも左の御刀で弾くが、無念無想を使って接近する津佳沙の存在に気付いた。

影手裏剣は第1投が刺さった際に更に深くねじ込む為のハンマーの様な役割と共に第1投が防がれた時の保険であるが、彗士はそれにミスディレクション、視線誘導とも

呼べる物を与えていた。

人間は動かない物よりも動く物、それも近く、速い物に注視してしまう。

津佳沙は姿勢を低くして折神紫の視界から僅かに隠れつつ、苦無よりも僅かに遅い速度で接近、第1投を弾いた瞬間に加速、第2投に自分の身体を隠す事で弾いた第2投の直後に視界に映り、相手のリズムに僅かな空白を作る。

「ッ！」

突き上げる様に放った突きだが、それを二刀の斬り払いに弾かれた津佳沙だが、背後に回った帝人と姫和の横薙ぎの一閃が背中を断ち切らんと迫る。だが、その攻撃も弾いた勢いを使った超信地旋回で向きを変えられ、立てた二振りの御刀に防がれる。

「隙ありですー」「空いてる」

背後から同じ様に横の一閃を放とうとする舞衣と沙耶香だが、折神紫は姫和と帝人を弾いて振り返ると2人の斬撃を掬い上げる様に斬り上げて、下ろす上段で斬り裂こうとする。だが、振り下ろす御刀は同じく上段で斬りかかった可奈美が津佳沙の開けた隙間に入り込んで放つ一撃を防ぐ為に頭上で交差される。

「何っ!!」

可奈美の一撃を防ぐと同時にS装備の稼働時間が限界を迎えた。しかし、折神紫の脳はS装備が消えたのを確認したのと全く同じ時間に背中に強い違和感をX字に感じて

いた。

「Wolf der Gruppe」

床から刃が引き抜かれた音と共に刃が折神紫の両腕を切断する。折神紫の足には彗士がシレッと鹵獲した満月の弾丸から抜き取った禍鋼の首が地面に足の甲を縫い付けていた事で防御が完全で無かった。

不完全でも防御した折神紫の腕は相当であるが、相手は今まで折神紫が相手にした事のないタイプ。防御が間に合ったとしても彗士は途中で軌道を無理矢理にでも変更した上で腕を剣の性能で切断、防御を排除した上で連続攻撃、それも1発1発が獲物に群がる狼の様に四方八方から襲い掛かる物。

何発斬ったかなど、斬った本人も斬られた本人も数えるのが億劫になる程に斬り付けられた斬撃は最後の1撃で両足がで切断された事で漸く止まった。

地面に倒れた折神紫が立ち上がる。それを見た彗士の口から大荒魂と呼ばれた存在がそんな程度で倒れる筈がないと告げた瞬間に雰囲気が変わり、声の質も変わった折神紫の声が響く。

「十条！ 衛藤！ その御刀で、私を討て！」

叫び終わると同時に苦しい声を受けながら髪の毛が浮き上がり、いくつもの人外の目、黄色に赤い眼球を持った目が髪の毛の間から開く様にいくつも現れる。

それと同時にこの場の全員が悪寒を感じて、身体をびくりと跳ね上がった。
「遅かった……」

慧士の苦痛に歪んだ声が静かに響くと同時に折神紫以外の全員の前後に、突如として半透明の自分が再び現れ、帝人が陰世に大きな事象が起きた事を悟った小さな声を上げるとその声に反応したかの様に黄色に輝く目をした折神紫が顔を見せる。

「我は……タギツヒメ」

第四十七話 譲れぬ者の戦い

「な……何とか……何とか勝てた……舞衣も無茶を……」

確かに燕が気絶している事を確信したカルロが絞り出した言葉。

舞衣は4人なら勝てると考えていた。だが、それは燕の怒りによる戦闘力増加は考えられていなかった。

そうでなくとも、長船の4人全員が揃って、漸く五分五分の格上相手に相打ちですまなかつたのは、運と相手の油断、と言う余りにも不確定過ぎる要素の全てが味方になつたからに過ぎない。

「取り敢えず……どうしよう」

燕を相手に何とか勝利を飾つた長船4人衆だが、3人がやられ、カルロも身体の各所にガタが来ているのか小刻みに震えている。

燕にトドメを刺した射法だが、アレはカルロの身体には未だに負担を強いる物であり、消耗した身体でやる様な物ではない。それでも満身創痍に限りなく近いが満身創痍という訳では無いカルロは手持ち無沙汰だ。

燕が復活する時間と倒された仲間の復活時間がわからない以上は動けない。カルロ

が運べるとすれば巧以外の2人だけ、それに気絶した女子を無遠慮に担ぐ勇氣も度量もカルロは待ち合わせていない。まあ、有ったとしても意識の無い人間を運ぶ力などない。

「あ、勝武居」

今手頃な最大戦力としては門を入れて直ぐに入りざるを得ない建築物の中で戦っている勝武居だ。

動ける上に矢もある、何なら回収すれば良いカルロは勝武居に助太刀すればまだやれと判断して立ち上がり、突き破った塀から、建造物の正面を捉えた方角を見た瞬間。

「うわああ!!」

カルロは尻餅を突いて、残骸の上に倒れた。

カルロが目にしたのは建造物の高さギリギリのサイズを持つ赤い鬼と西洋と東洋の意匠を含んだ全身鎧を着た鉄仮面の戦士の影だった。

私が捨て子で、拾い子だって事に気付いたのは意外と早かった気がする。

記憶の殆どに映る大人なんて剣術の先生か屋敷で働く従業員とも呼ぶべき存在で埋められている。それに、記憶の中に父なんて存在は一片たりとも無い。

母と呼べる唯一の存在との関わりなんて数える程だろうか。それよりも幼い頃の記憶に強く残るのは母と呼ぶべき存在以外が自分を見る時の顔が人間を見る様なもので無かった事。

それがまるで、一般人が荒魂を見る様な恐れしか無い目で自分を見ていた記憶しかない。

その理由は直ぐにわかってしまった。大人達に無くて、自分にしか無い額から皮膚を突き破る様に生えた物。

それが原因で本当の親から捨てられた事も直ぐにわかった。それでも、母と呼べる存在はそんな私を愛しい者を見る様な目で見下ろして、抱え上げてくれた。

ただ、無条件に私に愛情を注いでくれた。それがわかった日からだろうか？ 大きくなったら母と呼べる存在を守る人になりたくて努力して、此処まで来た気がする。

母と呼べる人の背中には遥かに彼方に薄っすらと見えればまだ御の字程の実力で、徐々に母としての顔が無くなりつつあるけど、側に置いてくれる。ただそれだけの事で、こ

の歳になつても、ただただ嬉しかった。

私は、母と呼べる存在を狙う者を、絶対に許したりはしない。だから……

「殺す!!」

確かな殺意を持つて振り下ろされた赤い刃の薙刀。それを振るうのは人間では無く、赤く細長い湾曲した角を持つ貧乳の美女にも見える男性の武宮、友衛童子だ。

そして、その刃を受け止めるのは戦斧を持つて、S装備を着込んだ美濃関の武宮、鳥多勝武居だ。だが、その表情は苦しげだ。勝武居は友衛を引き剥がすと大きく後退する為、飛び退き、友衛も逃がさないと追撃を掛けるが、勝武居も迅移で逃げるのでは無く、逆に接近して背後に回る事で攻撃の機会を手に入れるが、あえて攻撃せずに武器を上段に構え直す。

「はああ!!」

それでも御構い無しに友衛が脛を狙った一撃を振るうが、勝武居はそれを穂先で弾く様に戦斧を振るい、弾くも友衛が弾かれた穂先を八幡力を使って無理矢理に首を狙った横薙ぎに変える。

「らああ!!」

だが、その一撃も勝武居は弧を描く様に下げていた穂先を上げて、友衛の攻撃を防ぐと、素早く石突の方の柄で払うも、友衛は身体を回転させながら柄を持つ場所を変えて、

脛を狙った一撃を放つ。

勝武居もそれに気付いて、脛を狙った一撃を穂先で止め、素早く払い上げる。

「やあ!!」

だが、友衛は勝武居に薙刀を上げられる寸前に自らも薙刀を引き始めていたおかげで、直ぐに突きに移行出来た事もあり、突きの一撃を放つも勝武居は横に移動するだけで躲すも、上段の斬り付けが飛んで来る。

「当たるか!!」

右手だけで保持した戦斧の石突き側の柄を背中に当てて保持力を強化しながら左足を軸足に右足で遠心力を生んで振るった穂先で友衛の薙刀の穂先を弾き、身体を回しながら片手持ちから両手持ちに変えて叩き付ける様に腹に向けて横薙ぎの一撃を放つ。

「その程度で取れる思う!!」

叫びながら左手のアームハンマーで軌道を無理矢理に下に変えて防ぐと、右手で薙刀を上投げて、短く持ち替えると身体を回して、懐に入り、詰めれば鏢のメイスが、下がっても刃が当たる距離で振るう。だが、勝武居は回避では無く、右手を突き出して刃を鷲掴みにする事でその一撃を防ぎ、友衛を上突き出す様に投げて引き剥がす。

「こちとら、刃握り締めるんだ! 掌を斬れると思うな!!」

騎士の戦い方の中で鏢の部分は、立派なトドメに使える武器であり、通常戦闘でも使

える武器でもある。そんな鍔だが、普段の持ち方では防御用途の使用しか出来ない。が、剣先などの刃のある部分を握れば立派な鈍器、ないしは刺突武器になる。

剣を使う武宮や刀使の殆どは、剣の運用法らしく、斬れ味よりもその重量を生かした叩き斬る要素で斬る為に斬れ味は刀に比べれば鈍い傾向にある。だが、美濃関では剣でも相当な斬れ味を誇る物が多い。何故なら剣の研ぎでは無く、刀やナイフの研ぎ方で刃が作られるからだ。

勝武居の剣は、彗士の手により、ナイフの研ぎ方で刃付けをされており、尋常では無い斬れ味を持ってしまった。故に最初は指や掌の写シが切れていた勝武居だが、写シにも慣れがあり、短期間で極一部の損傷であれば慣れて硬くなる事がある。

勝武居の手首から先が正しくそれであり、指先から手首までの範囲を長い時間を掛けて、常時で金剛身を発動しているのと変わらない耐久性を獲得している。

勝武居の手は彼の信念ほど強固だ。

「こつちだつて……守りたいから！」

友衛が斬り掛かり、勝武居が防ぐ。その猛攻とも言える連続攻撃は、友衛の心の内に潜む、激情の様に激しく、底が見えない。

何故なら、友衛も己の信念に基づいて、様々な技を修め、鍛え続けた人間だからだ。

「あの人に、私は救われた!!」

鏢迫り合いから互いに離れ、友衛の突きが放たれる。勝武居は戦斧を回して弾くが、左腕のS装備に命中して破壊されると、横にズレて距離を保ち、頭上で武器を構える上段の構えに移行、友衛も腰溜めに構える中段の構えで穂先を突き付ける様に構える。

「あの人は、私に計り知れない程の愛情をくれた!!」

勝武居が中段に移行した瞬間に穂先で穂先を突き、石突を突き出す様に動かすが、勝武居は腕と腕の柄で防ごうとするが、胸のS装備に命中する。

胸のS装備に重大な故障とバイザーに表示されると即座に胸のS装備をパージして身軽になる。同時に他の部位も電力供給が無くなり、沈黙すると空間に吸い込まれて消える様にパージされる。

「私は、あの人を守りたいと思った!」

下から襲い掛かる様な突きを下がって躲した勝武居だが、友衛は柄を九節棍に変えて、鞭の様に操って追撃を掛けると、勝武居も柄を三節棍に変えて迎撃する。

それでも全弾の迎撃は出来なかったのか、所々に被弾した事を示す傷は写シに付いていた。

「私は、あの人に返し切れぬ恩ができた!!」

長柄に戻した友衛の上段を勝武居は同じく長柄に戻した戦斧で受け止め、互いに鼻息が当たりそうな程に近くなるまで押し込み合う。

「それでも、あの人の背中では遥かに遠く、高い」

鏑迫り合いになり、互いに火花を散らす様な鬨ぎ合いが始めると友衛の口が自然と動き、声帯は言葉をつき出す。それと同時に脳裏に想い浮かんだのは、大切な母とも言うべき人物の背中だった。

そして、鏑迫り合いが友衛に有利になりそうになった時に苦しそうな勝武居の言葉が小さく響く。

「お前に譲れない物が有る。だが、此方にも、信じ、馳せ参じてくれた人が居る！」

隠れ里に来てくれた3人の大人達の顔、特に最初に立往生をした老人の顔を思い出しながら友衛を押し返した勝武居は、戦斧を叩きつける様に振るう。

友衛はその一撃を柄で防ごうとするが、その柄は想いを乗せた斧の部分が、中の金属ワイヤーごと断ち切られる。

「俺にも犠牲になつてくれた人が居る!!」

短くなった柄を勝武居に投げ捨てて、打刀に変えた友衛に対して勝武居は石突で投げられた残骸を弾き、戦斧を回して、相手を牽制してから中段に構える。

構えた時の勝武居は、あの棧橋で立ち往生した親の顔とその背中を思い出していた。

「俺たちに託してくれた人が居る!!」

潜水艦で自分達に未来を託し、敵の目を引き付ける役目を買って出た自分が将来、死

ぬまで仕えるだろう主人の顔と背中を思い出しながら、両肩を狙って神速の2連突きを繰り出す。

友衛は御刀を左右に振る事で軌道を逸らして、命中を防ぐ。

「先に行つた仲間の為にも、犠牲になつたあの人達の為にも、託してくれた館様の為にも！ お前に勝つ！」

気合いと想いを乗せた一撃だが、下から跳ね上げる様な防御に抑えられ、払われると同時に友衛と勝武居は身体を回して次の攻撃に備える。

勝武居は突きを、友衛は横薙ぎを放つ。

「あ、ぐ」

結果は勝武居の一撃を脇腹に擦りながらも耐えた友衛の一撃を胸に喰らつて倒れた勝武居。

辛うじて写シこそ残つたが、柱の裏でカル口の援護が貰えない位置だつた事もあり、馬乗りにされるのと近い状態で上段から御刀を振るわれる。

「貴方の剣も重かつた。でも、想いだけで実力は埋まらない」

実力は確かに拮抗していたが、僅かに勝武居が負けていた。そして想いの強さも僅かながらに友衛が優っていた。

勝武居は降ろされた御刀を辛うじて柄で抑えるが、柄が防御に耐えられず切れた瞬間

に、開け放たれた門から高速でハイパワーモーター搭載の無人機が飛び込み、勝武居の脇に何かを投下する。

「な、がああー！」

無人機は投下後も、そのまま前進して、友衛の脇腹に機首を練り込ませて飛ぶが、友衛に八幡力で投げ飛ばされた事で地面に落下し、翼とプロペラを折った事で飛行不能にされる。

「一体何が!!」

無人機を確認しようとした友衛の視界の端に御剣を構えて突きを放つ勝武居の姿を捉える。

友衛は御刀を片手で保持し、刃と刃を当てて防御しながらも身体を回して受け流すと、空いた背中に両手での上段斬りを放つが、勝武居は受け流された瞬間に脚部に八幡力を掛けて急ブレーキをしながら方向転換をしており、その上段を見事に防ぎ、八幡力で弾き飛ばす。

「それは!!」

正眼落として構える友衛が今の勝武居の姿を見て驚く。

足を守るのは幾つもの鉄板を2列斜め施した脛の鎧に膝をダンゴムシの様に繋げた3枚の装甲。

腰には紐で装甲同士を繋いでしなやかを持たせた装甲板を前後に3枚、左右に1枚ずつ持たせた甲冑の様な装甲。

肘から先を守るのは、指を1本ずつ守る様に海老の殻の様な装甲を施し、手首から先は1枚の大きな鉄板を曲げて作った様な一体成型西洋鎧を模した装甲。

胸を守るのは3枚の葵の葉を模した鉄板を西洋鎧の様に繋げ、背後には伸びる1本の竹に止まる小鳥が2匹、さらに上部の中心から均等に別れた位置に葵の葉が3枚ある鳥多家の家紋を背負っている装甲に、肩を守る為に紐で装甲板を繋いでしなやかさを持たせた甲冑の袖の様な装甲には美濃関学院の校章が描かれている。

勝武居は正眼に剣を構える。元々は新陰流を修めた剣士。その構えは堂に入っている。

「徳川財閥のB装備……でも、そんな物は見た事ない……」

そう言いながら互いに隙を伺うべく、ゆっくりと横に摺り足で移動する中で勝武居はこのB装備を着た瞬間から感じていたS装備以上のしつくりと来る感触からこれが自分専用で作られた物なのだと察していた。

「つーぶー」

勝武居が上段で斬り掛かると友衛も剣を上げて防御を行うが、勝武居はそのまま剣を引き、腿を狙った斬撃を放つが友衛も足を引きながら刀を上から下に弧を描く様に振る

い止めると峰を素早く叩いて相手に防御させない様にする。

「(胴は無理)」

だが、勝武居は素早く鎧で防ぐ様に身体を動かして、友衛の攻撃に備えており、友衛は胴を諦めて脛を狙って御刀を振るが勝武居はジャンプで避け、素早く正眼に構え、互いに左右から御刀と御剣を当てあい、2発目を防いだ所で一瞬だけ鏢迫り合いに持ち込む。

「っ」

勝武居がB装備と八幡力で友衛の鏢迫り合いから押し勝ち、そのまま横にズレながら回転斬りを放つも、友衛は御刀を横に振りながらしゃがんで躲す。

互いの刃は奇しくも空を切るが、勝武居はこれで斬れるとは考えておらず、素早く突きを放つも友衛は裏霞に近い体勢でその突き技を防ぐ。

その状態から一瞬だけ静止した2人だが、勝武居からそれを解き、掬い上げる様な斬撃を放つがそれを友衛は迎撃を行い、防ぐ。

すぐに勝武居は剣を引き、両手で上段を放つも、友衛もその動きに合わせて両手で保持した御刀を横に倒して勝武居の剣を受け止め、横に受け流すと身体を回転させて構える時間を省いた斬撃を放つが、勝武居は誘い上段からさらに背後に倒れる様に御剣を動かして防御する。

その状態から真つ向斬りを行なつて友衛の御刀を弾き、振り返り様に上段を放つが袈裟斬りを放つていた友衛の御刀とぶつかり、鏝迫り合いになる。

「つふ」「つは」

互いに飛び退き、着地と同時に距離を詰め、勝武居が上段斬り、友衛がそれを防具しながら、その衝撃を使つて後退、突きに必要な距離を稼ぎ、放つが勝武居もその技に對して最初に友衛がした様に立てた御剣で受け流し、回つて背後に受け流した友衛に斬り掛かるも、友衛も自分がした事にやられるドジでは無い。

「やああ」

立てた御刀で勝武居の横薙ぎを防ぐと弾く、弾かれた勝武居が構え直すタイミングで御刀を振つた友衛だが、B装備の肩装甲に阻まれる。その強度は学校の機材として卸す様な代物では無い。

勝武居は素早く上段を放つが、友衛もそれを躲した上で上段を放つが無理な体勢から放つた所為で外してしまい、互いに下段で鏝迫り合いする事になった瞬間、再び互いの正面と背後に半透明の自分が浮き上がる。

「くそ！ 時間が、大荒魂が復活する！」

「!! 待ちなさい！ 大荒魂つて……」

勝武居の言葉に友衛が驚きの声を上げる。

「折神紫に取り付いている荒魂だよ！ 俺たちはそいつを倒しに来た！」

その言葉に友衛の手から力が抜け、ゆっくりとした動作で勝武居から下がる。

片手で顔を覆い、ブツブツと何かを零している友衛の姿はシヨックを受けた際に現実を受け入れられない人間がする時のそれだった。

「いつから……いつから紫様に荒魂が……」

「相模湾岸大災厄の日からだ」

それを聞いて何かをぶつぶつと呟きながら、御刀を地面に手放しながら、両手で顔を伏せながらしやがみ込む。それは今までの自分を全て否定され、絶望し、打ち拉がれる少年の様にも見える。

友衛の豹変に武器を構える事を忘れた勝武居の肩にカル口の手が置かれて、振り返ると顎をしゃくって山の方角を指すカル口と勝武居が来るのを待つ、エレンと薫、巧が武器を背負って待っている。

勝武居は友衛に対して後ろ髪を引かれる様な思いがあったが、先に行った仲間を思うとすぐに後ろ髪を引かれる思いは断ち切られて、可能な限り早く先を急ぐ。

第四十八話 決戦!!

「我は……タギツヒメ」

突然の名乗り。それに突つ込む暇を捨てて後退、それぞれの流派に沿った構えで御刀を構える。

「舞衣、怖い」

「私もだよ。沙耶香ちゃん」

沙耶香のか細い声に舞衣は頷くと同時に可奈美が口を開き、隼士が可奈美の言葉に同意の意味で頷いてから口を動かす。

その言葉が合図となったのか髪の毛が変化して化け物のそれになった物から4本の腕が生えると隠世の中ってしまったのだらう太刀の御刀が4本ほど虚空に現れるとそれを掴んで構え、折神紫の腕にも太刀が二振り、同じ様に呼び出したのかその手に握られる。

「多分、本人もな……助けられないが……」

此処まで荒魂に侵食されては助けようが無い。

隼士はそう判断するのに時間は掛からなかった。そして先程の名乗りと変化は完全

に荒魂が憑依した人間の全てを飲み込んだ事を意味する物だと判断を下した。

彗士は毒切會凜敵の柄をキツく握り直すと同時に化け物の腕が振り下ろされ、彗士に向けて御刀が振り下ろされる。

その軌道は先程まで滅多斬りにされた事への恨みが籠った、殺す事を目的として見るならば素晴らしいと言う一言が付く様な太刀筋だった。

「ッ!!」

が、その一太刀に彗士はハラリと風に舞う木の葉の様な動きで身を踊らせて躲し、波切會凜敵の方で手首を切断しに掛かるが余りの硬さに刃が僅かに張り込むだけでせき止められてしまった。

その瞬間に動きを止めた彗士にもう一本の腕に握られた太刀が頭上から迫るのを風切り音で感じた彗士は即座に御刀を斬った軌道と寸分違わぬ軌道で御刀を引き抜いてバックステップで回避を行い、地面を斬りつけた化け物の腕に今度は毒切會凜敵の刃先だけを斬り付ける。

「これなら!!」

振るわれた刃先は浅くも確実に鯨の目の様な裂傷を付けており、斬り方次第では充分に対処出来ると言う確証を得た彗士の動きに迷いや恐怖は無かった。

「あり得ぬ……」

彗士の迷いも恐怖も無い動きはタギツヒメに取っては驚愕よりも不可解の方が多かった。

今まで戦ってきた、というよりも取り込んだノロの記憶の中において心鋼の御刀を持つ武宮や刀使は総じてその動きに迷いや恐怖があった。だが、彗士は心鋼の武宮に関わらずそれを匂わせる事すらない。

タギツヒメは己の頭上に生える4本の腕の全てを使つた猛攻を浴びせるが彗士はその全てを躲し、隙を見て剣先だけの斬撃を幾つも付けて離脱し、距離を取り続ける。

その距離は如何なる攻撃が来ようとも反応さえ出来れば躲した上で反撃も見込める距離。故にタギツヒメ側はその距離を詰めれば良い。

「ッー」

のだが、彗士との距離を詰めようと意識を割いた瞬間に帝人からの銃撃が飛び、銃声を聞いた上で迅移を行なつて銃弾を視認、化け物の腕に持った太刀の1つで弾くが弾いた瞬間に前方と後方から糸見姉弟が懐に飛び込んで来る。

「いつの間」

2人は小柄故に逆に距離を取るよりも距離を詰めた方が良い。

更に言うならば身長の高い折神紫の身体を持つタギツヒメが相手ならば、人間の両腕で対応すべき距離まで飛び込む事で2人の方が近距離における腕の稼動範囲による取

り回しの良さから有利だ。

「はあ」「やあ」

事実として踏み込みと共に放たれた沙耶香の御刀を1歩の後退で躲したタギツヒメだが、御刀を振り下ろすには更に1歩は下がらなければならぬがその距離に下がったタイミングで津佳沙が踏み込んだ事で横への回避を強いられるが、そのタイミングで回避位置を予見していた様に姫和の攻撃範囲に誘導される。

「見えている」

化け物の腕を交差させた上段の二撃を放つが天井を八幡力で蹴って、急降下、更に腕に八幡力を掛けると同時に重力と体重を掛けた押さえ込みを放たれて両腕を僅かだが地面に埋まる。

「俺は見えていないのか？」

「貴様……」

抑えた本人である帝人の言葉にタギツヒメが僅かな苛立ちを見せた瞬間に可奈美が化け物の手甲に突きを入れて固定、更に津佳沙が和鋼のチェンソーを突き刺し、沙耶香が御刀を突き刺す事で地面と完全に固定したタイミングで舞衣と隼士が御刀を振るう。

舞衣は納刀から上向きの抜刀術で、隼士は飛び込み前転の様に全員の頭上を越えて落

下の際に身体ごと縦に回した回転斬りを2度も喰らわせる。

「ギャアアアアアアアアアアア!!」

舞衣の抜刀術と彗士の削ぎ切る様な攻撃は、舞衣に斬られた腕を完全に切断され、彗士の攻撃を受けた腕は辛うじて繋がっていたが津佳沙が咄嗟にチェーンソーで削り切る事で完全に切断される。

「可奈美!」

「うん!」

腕が再生して繋がらない様に可奈美が御刀を振って腕同士を引き剥がし、帝人が腕を蹴って可奈美の御刀から腕を外す。

「隙だらけだ」

タギツヒメが堪らない様子で飛び退いた瞬間にで抜刀術を使った際に見えた御刀に僅かだが熱が宿り、刃が僅かに着火していた様な光景を斬り付ける瞬間の一瞬だけだったが視界に映っておりその光景についての考察で動きが緩慢となっていた舞衣に向けて2本の腕で斬り付けようとする。

「舞衣!!」 「お姉ちゃん!」

彗士が投げナイフで牽制、その隙で間に合った糸見姉弟の御刀と拳が腕を払い除ける。

「お姉ちゃん！」

「!! めん！」

彗士が舞衣に呼び掛ける隙を可奈美と十条兄妹の猛攻で稼いでいる隙に我に帰った舞衣は彗士と糸見姉弟に指示を飛ばすと3人は頷くと直ぐに行動を始める。

彗士が斜めに走り出し、沙耶香は逆方向に、津佳沙と舞衣は同じ方向に、タギツヒメの方向に走り始めるとその足音で後退を選んだ姫和と可奈美だが、タギツヒメ刃それをさせないと紫の腕で御刀が振るわれるが帝人が銃撃で妨害、ならば化け物の方で動き始めるが迅移同士で高速のすれ違いと言う一歩でも間違えれば大事故な行為で攻守を変えた4人の行動に驚愕で動きを止めてしまう。

戦いにおいて相手の虚を突いて空白の時間を作る事は優位に立つ為にはかなり重要な事だ。それでも相手は歴戦の猛者とも言える紫に憑依した大荒魂だ。即座に反応して反撃に転じて来る。

「(この技は……こう!)」

津佳沙が無念無想を使用して急加速を行い、タギツヒメのタイミングをズラした上で八幡力を使って飛び上がると同時に通常の迅移で懐に潜り込み、振り落とされていた紫の腕を今度は無念無想を使った動きで掴んでみせる。

無念無想の最高速の維持を生かした急接近からの相手の拘束を行うと直ぐに化け物

の腕を使って津佳沙を斬ろうとするタギツヒメだが、津佳沙を斬り裂く前に舞衣の横の一閃により両腕を二の腕から切断されると同時に胸も斬られる。

「ハッ!!」

拘束が両腕の切断によって解放された津佳沙が腕の射程外に自分と舞衣を置く為に紫の腹を蹴る事で引き剥がし、蹴り飛ばした方向には背後では津佳沙と舞衣が失敗した際の保険と追撃を兼ねた沙耶香と彗士が待ち構えていた。

タギツヒメは化け物の腕で彗士と沙耶香に斬撃を放つも壁を蹴り出して斬り付けるつもりだった彗士は素早く進む方向を屋根の方向に変更を行う事で斬撃を回避するが、沙耶香は防御に成功するが僅かに吹き飛ばされてしまい、その援護に彗士は動き始めるが、タギツヒメはそれを予知していた事もあり、空中の彗士に対して挟み込む様な斬撃を放とうとしていた。

「彗士!!」

彗士が斬られる。そう判断した沙耶香が咄嗟に足元に投げ捨てられていたノ口を納める容器を納める神棚を放り投げる。

放り投げられた神棚は彗士の足元に飛来、素早く神棚を蹴って上に逃げた事で軌道修正を迫られたタギツヒメの一撃だが、足場となる天井に足をつけた彗士は軌道修正で放たれた突きを見て、八幡力を発動させる。

「天井に足を！」

天井に僅かに、靴の底を埋める程度だが踏み込んだ隼士は突きに合わせて転がる様に身体を動かす事で化け物の腕を転がって接近、すれ違いざまに何本もの斬撃の跡を髪が変質した荒魂の部分に残してから背後に着地する。

再び脳に直接響く様な異様な叫び声を上げると黙れと言わんばかりに隼士の毒切會凜巖が逆手持ちで背後を突いた。

突き出された刃は紫の身体を突き刺さり、身体を中心線から刃先が生えるまで深々と突き刺さる。

それからどれだけ経っただろうか。

誰も彼もが動きを止めて、先行きを見届けようと武器を構えたまま身動きを取らずに佇む。

呼吸の音も布が擦れる音も風が吹く音さえも聞こえない程の静寂が支配し、その静寂さ故に隼士も刀が抜けずにそのままの体勢で動きを止めていた。

そんな空間の中で鉄と岩がぶつかり合う音が2個、静寂を破るとそれに釣られたかの様に全員が構えを解き、隼士も刀を抜いて素早く距離を取る。

「倒したのか……」

写シを解き、膝を突いて俯く様な姿勢のまま動く事も喋る事も無い紫の姿を見た隼士

は構えを解くが納刀はしなかった。

それは彗士の脳裏に引つかかる事があるからだ。

「何故……解けない？」

ドイツで荒魂に深くまで取り憑かれた人間は倒すと身体が骨までノ口となって溶ける様に消える。これは筋肉や内臓、骨や骨髄までも荒魂化しているからだ。

特に今回の様に身体が変質する程に侵食されている状態ならば、撃破後に身体が溶けて無くなってもおかしくは無い筈なのだが、紫の身体は溶けていなかった。

それが彗士の中に違和感となつて横たわり、その感覚が納刀と言う行為をさせない理由となつた。そして不可解な状況が写シが溶けて俯いたまま動かない紫を見ながら、警戒の意識を緩めなかった。

「ッ!!」

そして、それが功をそうした。

紫の身体からは禍々しい光が溢れ、その光はまるで何かの腕の様にしなりながら周囲の人間を弾き飛ばすが全員が納刀をしておらず何とか防ぐ事は出来たが、彗士以外は防ぐと同時に弾かれ、彗士は防ぎながらも足の裏を地面で削る様にしながら後退する事で危険域から外れる。

視界の先には砕けた木のカケラや土埃に混じつて赤い靄が突き飛ばした犯人を隠し

ているが、赤い靄は土埃で隠れているのか、彗士は気付けなかった。

「大丈夫か！」

彗士の言葉に各々の声で無事を知らせる。が、受け身を取れずに地面に倒れたてしまい、更にダメージを受けたのか立ち上がるまでに僅かな時間が掛かっている。

彗士は立ち上がるまでは無防備な仲間を守る為に一歩だけ前に踏み出した瞬間に視界にしなりながら迫る一本のナニカを確認する。

「させない！」

それは先程までの腕とは違い、赤い背骨の先を頭蓋骨から刀の様な形状の赤い骨に変えた様な物だった。

それが鞭の様にしなり、倒れて動けない舞衣に迫るが、彗士は迅移を発動させて舞衣に迫る腕に対処する。

「そこ！」

相手が骨の相手ならば、彗士にとってはやり易い相手だ。

斬るべき場所は間接ではなく、その間接同士を繋ぎ合わせる椎間板のみ。

誤差数ミリと言う僅かな部分を相手の動きを見た上で、感と経験により微調整を行った空中に添えて置くお得意の攻撃方法で背骨の椎間板のみを切断する。

切断された背骨により脅威度を改めたのか、更に5本が彗士に迫るがそれよりも多い

小型荒魂に迫られた事のある隼士の経験が生存本能と言う人間が持ち得る本能の警笛の内の一つを鳴らさせない。

「(右か左か……右!)」

最初の振り下げの一撃を見て、僅かに身体を右に反らして回避する。

「ツチー！」

回避と同時に毒切の刃で椎間板を斬ろうとするが僅かにズレてしまい切断できなかったが続く二撃目を回避する為にサイドステップを行なった引き抜き、三撃目は波切で防ぐ。

「はあー！」

そして波切と赤い骨刀の接地面を起点に弧を描く様に飛び越えて、四撃目を躲し、続いた五撃目は波切で弾くが遂に此処で波切が耐えられないと言わんばかりに中腹が碎ける様に折れる。

「どうした!!」

が、そんな事は何度も経験している。心鋼の御刀は何処まで突き詰めようと荒魂を斬れるただの刀。御刀とは違う物、御刀のなり損ない。折れる事を前提に使用している。

どんな状況で折れようとも直ぐに対処出来る様に心を鍛えるのが心鋼の御刀を所持する武宮と刀使の必須条件。

即座に毒切で椎間板を切断するが、その間に相手は残った4本で斬撃を放っており、どれも即死級の軌道だった。

「がっ……」

相手は狩人の彗士だ。生身で戦う事を余儀無くされる環境で戦い方を覚える故に最小限のダメージで済ませる為のダメージコントロール技能は修めている。

彗士は4本の攻撃を捌けないと判断すると敵の本体が居るだろう位置に折れた波切を投げ、身体を振り、傾けるなどして四肢の切断で済ませるが達磨になった彗士は剣圧に吹き飛ばされ、背中を岩肌につけた衝撃で息を吐き、気絶してしまう。

「彗士……」

彗士が吹き飛ばす程の剣圧は地面から立ち上がりこそしたが、ダメージでフラつく他の仲間を再度、転倒させるには十分に倒れた拍子に沙耶香が彗士の名を叫ぶ。

「マサカ、フィウチ、デアルガ、ヒトタチ、モラウカ」

木片や土埃、赤い靄の先からは人骨を使った鎧を着た様な姿の折神紫が現れる。が、その声は余りにも禍々しく、聞くだけで身の毛が逆立つ様な声だった。

件の人物は気絶する彗士に一步一步とゆっくりとした歩きで近付く。

「ケンハ、ハナサヌ、カ……ヨイ、トゲダ」

肩には波切でついたであろう切傷がついており、それが憎しみを助長しているのか、紫

だった者は腕を中心に空間から滲み出る様に現れたノ口を集め、鎌をつけたカマキリの様な腕を作りあげる。

「デハ、シネ」

それを彗士に振り下ろそうとする。

「させない!」「させません!」

寸前で彗士を守る様に沙耶香と舞衣が飛び込み、両腕を一撃を防ぐものの、紫だった者はそれならば彗士の前に2人を刺し殺せば良いと思ったのか、腕に八幡力を使っているのと同等の力で押し込もうとする。

「っ……」「う……」

上方を取られた上に咄嗟だった事もあつて体勢が悪い沙耶香と舞衣の2人の額に鎌が徐々に迫る。

「舞衣ちゃん! 沙耶香ちゃん!」

「キシユウハ、ムゴン」

そこに可奈美が助けに入ろうとするが鞭の様にしなる腕に阻まれてしまう。

そして鎌の刃先は2人の額に僅かに食い込んだ瞬間、紫だった者の二の腕に2つの突起が生える様に片腕づつに突き刺さる。

「ア?」

突然の事に首を曲げて確認した瞬間に突起が爆発、両腕が弾け飛んだ紫だった者は大きく飛び退くとそれに追撃を掛けようと迫る影があった。

「折神紫！ お命頂戴!!」

頭上に掲げた剣を身体ごと回しながら上段で叩き込むのは美濃関の男子用制服の上から部分装甲の鎧に身を包み、腰には刀では無く剣の鞘を縦に背負った背中。

「チツ、浅かった」

悪態を吐きながらも剣を持ち上げて、身体の側面を相手に見せ、首の前で腕を組み、左腕の上面に剣の鎬を置く独特な構えを取る。

その構えを取る武宮はこの折神家への殴り込みに参加した中ではただ一人。

『勝武居!! (くん!!)』

鳥多勝武居。

折神家親衛隊第一席、友衛童子の壁を破った、折神家殴り込み組の最強戦力だった。

第四十九話 決戦!! 第二幕

「ぬおおお!!」

上段から降ろされた刀が生えた鞭の様な腕の一撃を上方に弾いた勝武居は弾いた際の踏み込みからダツシユに派生させ、腕は剣を素早く体に引き寄せ、腰を僅かに曲げる事で被弾面積の減少と曲げた腹で剣を抑えやすくして、剣先のブレの抑制と剣の保持力を高める姿勢を作る。

「ヌウー」

紫だった者は弾かれた腕を背後から、更に正面から同じ腕が一本、左右から薙ぐ様に一本づつと刃が迫る。

「っ!」

四方からの攻撃。正直に言うならば逃げ場が無いとも言える状況だが、勝武居は幼少の頃から剣を握っている。その時間は可奈美と同等だが、集団戦で鍛えられたその剣術と見切りは恐ろしく実戦的だ。

「ハ?」

勝武居は前方の突きに対して全力の迅移により接近、後方の突きと左右の薙を置き去

りにした上で自身の劍の柄だけを動かして突きを左に弾き、そのまま掬い上げの一撃で腕を骨に切れ込みを作ると同じ位置の反対側に身体を回す事で遠心力を加えた上段の一撃で叩き割る様に切斷、そして迅移を再び発動させて本体と接敵する。

紫だつた者もカマキリの腕に刀を足した腕を紫の両腕にノ口により形成して交戦の構えを見せた瞬間には勝武居の劍が振られる。

突きとも斬りとも言えない微妙なラインの掬い上げの一撃が放たれるが、紫だつた者は右の腕で弾くと左手で反撃に出るが、勝武居は右手で相手の肘を抑える事でその一撃を防ぎ、同時に腹を蹴つて僅かに距離を開けさせる。

「はああ!!」

開けた距離を即座に詰めた勝武居が横薙ぎの一撃を放つが下側の鎬を殴る様に振られた腕でかち上げられるが、勝武居は上まで腕と劍が行った瞬間に劍を離すが直ぐに掴み直すと重力と劍の自重に任せた縦の一撃を放つ。

「ナニ!!」

紫だつた者は驚きながらも勝武居の腹に横薙ぎの一撃を与えるがB装備を着ているが故に装甲に切り傷を作るりながら吹き飛ばしただけであり、更に同時着弾で勝武居の反撃の一撃を貰い、胸の肋骨の様な装甲に切り傷を残して紫だつた者も吹き飛ばされる。

「ヤルナー」

斬られた腕をノロで再生した上で6本の背骨の鞭とでも言える触手を作り上げて6方向から反撃された勝武居だが、冷静に1本づつ対処しようとする。

最初の一撃を転がって回避、素早く立ち上がると同時に回し蹴りで2本目を弾き、3本目を剣で右に弾く様に防ぎ、4本目は刺突で来た故に鎧を盾に見立てて防ぐ、5本目の上段はターンで4本目から逃れると同時に回避、6本目は地面へばり付く様に倒れて躲す。

「モラッタ」

最初の1本目が7連撃目の攻撃で倒れた勝武居に振り下ろしを放つが斧頭と剣の刃の間に絡める様に防ぎ、更にブレイクダンスの様に地表で身体を回して触手を捻り切ってみせる。

絶好の機会を逃した事に腹を立てたのか、残った全ての触手で連続攻撃を放つが勝武居はバク転を繰り返して後ろへ後ろへと逃れ、時には空中で剣を構えてギリギリの防御を交えながら逃れ続ける。

「ヌウー」

一歩前に出て勝武居に集中している行動をした瞬間に鎖骨の辺りに違和感を感じた紫だった者が視線を右の鎖骨に向けた瞬間に身体に何か鎖骨の装甲を削りながら体

内へと侵入しようとする物体を見つける。

「コシヤク、ナー！」

身体を高速回転させて攻撃を仕掛けた者を吹き飛ばす。

自分の武器である和鋼のチェーンソーから手を離し、短くも小さな悲鳴を上げて吹き飛ばされたのは津佳沙だった。

「オソロシイ、ブキ、ヨ」

鎖骨に似た装甲があと僅かで削り切られる所だった紫だった者はチェーンソーを力任せに引き抜くとそのまま握り潰す。

チェーン以外は通常の金属、それに工具であるチェーンソーは圧力に耐えられずに握り潰される様に先端が壊れ、そのまま崩れる様に他の場所も崩れる。

触手で勝武居に斬撃を放ちながらも吹き飛んだ津佳沙に意識を向けた紫だった者は両腕を血振るいする様に振るいながらゆっくりと近付いて行く。

津佳沙は息を即座に整えて立ち上がり、拳に和鋼のメリケンサックを付け直し、威嚇する様に足を振る事で身体のコリをほぐすと同時に恐竜の爪の様なアイゼンの装着具合を確かめる。

「大丈夫」

グラつきは無いと判断した津佳沙が踏み込み、その足を軸に飛び上がった瞬間、沙耶

香が無念無想を発動した状態で紫だつた者に背後から接近、膝裏を斬りつけて抜き去り、体勢を大きく崩させた。

「お姉ちゃん！」

見事なまでの援護に呼び掛ける事を返礼として、そのまま装甲化されていない顔面に右ストレート叩き込んだ。

チエーンソーを失つた津佳沙の現状では、己の手足こそが唯一の武器と言えるだろう。

その唯一の武器を叩き込まれた事で浮き上がった身体に今度は足を突き刺すと言える様な鋭い前蹴りで放ち、腹部に命中すると紫だつた者は踏ん張りが効かない故に身体は吹き飛ばされる。

「くそー！」

そして飛ばされた先には姫和が突きの姿勢で待ち構えており、一息で御刀を突き出した姫和だが、狙いを間違えたのか、狂つたのかわからないが姫和の刃は背中にも伸びていた骨の様な甲殻でせき止められ、満足なダメージは入っておらず、逆に姫和の方が危機に陥る。

「イイカゲンニ！」

怒りからか両腕と共に背骨の様な腕もメチャクチャに振り回す。

形成された刃が頑丈で斬れ味が良かったのか岩の足場がベニヤ板の様に切り裂かれ、重量に引かれて下へと落下する。

上層で戦いが繰り広げられる最中に御刀を鞘代わりにしながら岩肌が剥き出しの道を少し覚束ない足取りで動く人影、獅童真希の姿があつた。

「確かめなければ……」

此花と別れた獅童の携帯に介錯を終え、処理を行う為に場所を変えろという内容と共に折神紫が荒魂に取り憑かれている事や確かめるならノ口の貯蔵施設に行けと理由と共に知らせるメールを送っていた。

獅童は此花を燕と友衛の方に向かわせて貯蔵施設へと赴いたが結果はここ10年であらゆる手で集めたノ口の完全消失によるからの田圃の様な形状をしたからのタンクの数々だった。

それを見て、息を止めた獅童に声を掛ける人物がいた。

「飲み込めましたか？」

その態度は最初からこうなる事はわかっていたという様な達観した様に岩壁に背中を預けたエレンだった。

「此処は？」

目の前の戦いよりも何処かで異様さを僅かに、それこそ残り香の様に放つこの空間を

不審がった巧が言葉を漏らす。

肩に乗ったククは目の前のノロを入れた人間を哀れむ様な目を向けていた。

「ノロの貯蔵施設だな」

かなり深い水深を持ったサッカーコートサイズの施設。

10年間もの間に集められたノロが満タンにまで集められた施設であるが故にその異様さは目の前に広がる光景に薫が答える。

「まさか、スイソウでイツカツカンリとは」

カルロは折神家がノロを一括管理していたが、小型水槽を集めた様な施設と思い込んでいたが、まさか大型スイソウに纏めていたとは思わなかった。だが、これを見てカルロは別の疑問を抱く。

「ナゼ……このジキ」

最初の大荒魂出現の事件、相模湾岸大災厄の様に一定量集まれば当然の如く現れる。10年という時間も大人しくノロになっているというのが引つかかった。

「ノロは特定の周期に合わせて、電気を流せばスペクトラム化しない……」

それを聞いてカルロがは？ と訳の分からない言葉を聞いたと言う反応を見せる。

カルロの脳内だとノロの集中管理は明治時代から、そんな時代の技術力でそれがわかるかと言われると答えはNOだ。ならば、折神紫統治の10年前からだと考えてみる。

が、それならば長船の情報網に少なからず引つ掛かる内容だ。

「それが無いと言う事は……」

「大人しい振りしてただけって事だ」

カルロが真剣な声で呟かれた言葉に薫の言葉が無慈悲に突き刺して来る。

それを聞いた獅童は自分の指が金網に食い込み痛みを覚える程に強く金網を握る。滑落防止も兼ねた金網が変形する事は無いが、もしも安物の金網なら曲がついていそうな力み方だ。

「穢れの根源であるノ口は、祓っても祓ってもキリが無い、だから……」

「毒には毒を、ってか？ 間違つてはいない」

巧の言葉にカルロが続ける。

「強大な力は強大な力を産みます。問題なのは、その強大な力をどう使うか、どの目的で使うか、どの手段で使うかです」

人の為に、未来の為にノ口を受け入れる。それは構わない。だが、その目的の為に取った手段が大荒魂に味方する事だった。いや、結果的になつたと言うだけだが、獅童は2人の言葉が己を突き刺す巨大な槍の様な物となつて突き刺さっていた。

何とも言えぬ沈黙が支配した瞬間に岩が切れ、砕ける様な音が全員の鼓膜を揺らし、その後には視界に岩と共に人影が落下してくる。

上層で折神紫だった者と戦っている武宮と刀使たちの影だった。

落下する場所から離れた位置にいた可奈美と帝人は大きく下がる事で危険地帯から逃れる選択を取り、姫和は何度か防ぐ内に防御は厳しいと引く事を選んだが真っ先に足場が崩れて一時的に退場してしまう。追撃に出ていた勝武居は無茶苦茶に振るわれる刃を確実に危険地帯真っ只中だった事もあつて退避ではなく、地面を切りながら迫る刃を回転やステップ、鎬や刃での防御で凌ぐ道を選択する。

「彗士ー」

岩と共に落ちる彗士を舞衣が何とか抱えるがそれで体勢が崩れたのか危険な状態で岩と共に落ちるが舞衣の叫びを察した2人が無念無想を使用した急行により、迫る岩を御刀で打ち、四肢で殴り、蹴りを繰り返す事で4人は無事に下の階層に着地出来る。

「ぐはっ」「ああ……」

その側に突き飛ばされた様に勝武居と姫和が背中から地面に落ちる。

落下中に彗士の保護に走った4人を見て、助ける為に落下する岩の塊を蹴って移動した2人は空中で紫だった者に斬りかかったのだが、ものの見事に弾かれ、背中から下の階層の床に落下した。

勝武居はB装備の衝撃吸収能力が助けになったのと受け身を取れたお陰でダメージは少ない。が、姫和は完全に生身である事からダメージが大きかった。

「オワリダ」

勝武居は素早く立ち上がれたが、舞い降りる様に立って着地した紫だった者の攻撃に対処出来るかギリギリのタイミングだった。

「フツ」

息を吸い、止めると同時に振るわれた可奈美の御刀、落下の重力と速度の乗った一撃は荒魂の刃を折るのに十分な威力を持っていた。が、逆に言えば高所からの奇襲で無ければ斬れない強度である事を認識させられる。

「コヤツ」

刃を構えた瞬間に胸と背中に5回、その中でも3回が身体を異物が貫いた感触を受けた紫だった者は視線を下に下ろす。

地面には僅かに煙を放つ弾痕、そして身体からは直ぐに止まるがノロが僅かに漏れ出していた。

「キサマ、カ！」

急降下で迫り、鐳の部分から上がる紫煙を振り払う様に御刀が振るわれた際に発した風切り音で攻撃を察した紫だった者は背骨の様な腕を取り敢えずで振るうが全てを外してしまい、両腕での防御も衝撃に耐えられずに突破される。

「駄目か！」

それでも防御としては成功したのか、威力が下がった一撃は肋骨の様な甲殻に触れるとそこで機動を止めてしまう。

そして身体の一部とも言える甲殻に触れた事で紫だった者がある事に気付く。

「ツ……キケンダ」

鎌の様な刃が刀に変わり、凄まじい速度で振るわれる。それを迅移を使った後退で躲した帝人だが、追撃の背骨の様な腕を幾度となく弾くと距離を話す為に銃撃を何度か加えるが運悪く全てが肋骨に似た甲殻に当たってしまうが衝撃で身動きを止める事には成功し、距離を取る事には成功し、勝武居も位置を変える事で挟み撃ちの形を作る事に成功する。

「舞衣！」

沙耶香と津佳沙が同時に無念無想を使って駆け出すと同時に舞衣の名を叫ぶ。

気絶が深いのか先程の落下の衝撃でも起きなかつた彗士の事を考えると目の前の荒魂を早急に討つ必要がある。帝人と勝武居だけでは討伐に時間が掛かり、ダメージが大きく一時的にも休む必要のなる姫和の護衛に可奈美が行っている。

「任せて」

自衛のできない彗士を離れたとしても、流れの一撃が刺さらないという確証が無い事を考慮すれば、彗士への護衛は必要。

彗士が自衛のできない状態であるなら舞衣が適任であると、沙耶香と津佳沙の2人は打ち合わせ無しで互いに察し、意見を統一したのを瞬時に汲み取った舞衣は頷き、2人を見送る。

勝武居と帝人に津佳沙と沙耶香が合流を果たし、腕の数では互角にまで持ち込んだが、戦力が低下した上にその護衛に戦力を割いている以上は苦戦を強いられるのは間違いない。

薫は無言で御刀を抜き、目の前の金網を切り裂くと巧も御刀を使って金網を切断し、道を阻む金網を完全に破壊した。

「待てー！」

どうするつもりか察した獅童は御刀に手を添えるが、強い声とは裏腹に心の迷いからか手には力が入っていないかった。

それを見たエレンは獅童の言葉を無視して飛び降り、空中で写シを張り、着地と同時に迅移で駆け出す。

薫と巧も飛び降る為に両足に力を込めた瞬間に鞭の様に迫る赤い背骨と赤い刃が視界に映る。

「GO!!」

カルロが咄嗟に2人を蹴り飛ばす事で凶刃から逃れさせ、同時に迅移で獅童共に後ろ

に下がる事で自分も刃から逃れるが、背中の制服を大きく着られる。

「如何して……」

敵である自分を助けたカルロに獅童は訳がわからない物を見たかのように問い掛ける
とカルロは武装を外し始めながらも気恥ずかしそうに笑う。

「荒魂討伐の為に弓を手にした時……」

背中の部分が大きく破れた制服を脱ぎ、下着の上から羽織っていたガーのベストを露
出させると剣戟の音に辛うじて勝てる音量で続きを告げる。

「目に見えるモノ全てだけでも守ろうと決めたんです」

ベストと肌シャツ、長船の制服のズボンと言う出で立ちになると外した装備を付けな
がら、獅童にカルロは確かな声音で告げる。

「戦う意思が無いなら武器を抜くな。戦う覚悟が無いなら戦場に出るな。此処で隠れて
いればいい」

矢筒などの装備を付けると最後に地面に落ちていた自分の弓を掴み、壊れていないか
最低限の確認をすると右手に3本の矢を指で挟む様に掴むと弓に番え、射線が戦場を通
る様に身体を起こししながら更に言葉を告げる。

「大いなる力を使うなら、大いなる責任を背負うと同時に払う。それが我々の義務の筈
です」

矢を放つと同時にしやがみ、最後の一本の矢を掴む様に矢筒から取り出し、弓に番えるも弦を張る事はせずに、その視線を手元から獅童の御刀を見た。

「もしも、貴女がその御刀を抜いて此処から飛び降りるなら……」

崖際まで走って立つと同時に最後の矢を剛射で放ち、横目であるが獅童の目を真つ直ぐに鋭い視線を射抜く様に向ける。

「貴女も刀使だ」

カル口は獅童の反応を確認する前に飛び降りた。自分は武宮であると行動で獅童に示した。

第五十話 第三席の決意と仕事

祭殿では死闘の決戦が繰り広げられているが、この場所ではまるで兵の戦いの跡の様に嫌な静かさが漂っていた。

その場所で地面にへたり込む様に足を曲げて後ろへ回し、上半身は水不足の作物の様に曲がり、額から生えていた角は消え、頭は地面へと首を曲げて見つめる目は虚ろで光など無かった。

この世の絶望に始めて触れた様な悲壮な雰囲気を持つのは白み帯びた髪を持つ美少年、の面影など消え失せると同時に薄い恐怖を感じかねない雰囲気を持つ、親衛隊第一席の友衛童子だった。

「童子おにーさん……」

その友衛童子の姿を少し離れた位置から心配と困惑を混ぜた視線を同じ親衛隊の制服に身を包んだ第七席の少女である燕結芽が送っていた。

燕のよく知る同一人物とはかけ離れた離れた雰囲気を持つ同一人物に面喰らうと同時にどのような言葉を掛ければ良いのか分からず、本人が通常通りであったとしても聞こえない声で名を呼ぶことしか出来なかった。

「結芽……」

同じ親衛隊に所属する第3席の少女、此花寿々花が優しい声音であるが、目の前の光景故に何処か心配そうな声音が混ざった、複雑な声を持って、燕に話し掛ける。

「寿々花おねーさん……」

どうしたら良いか分からない。縋る様な声に目尻に薄つすらと涙を溜めた燕の言葉に此花は改めて友衛の姿を視界に捉える。

心ここに在らず。と言う物ではなく、魂此処にあらずとしか言えない姿を晒す友衛の姿は、此花の心を一瞬にして怒りで埋め尽くす事はそう難しい事では無かった。

此花は燕ですら今までで見た事が無い程にズカズカと大腿で乱暴に地面を踏みながら友衛の前の立つが、友衛は目の前の影に気付いていないのか未だに顔を伏せたまま、身体に力を入れずに骨格で支えている様な姿勢のままだった。

「ッー」

今の友衛のだらしない姿は此花が知る姿とはかけ離れ過ぎていた。

親衛隊所属前の綾小路の武宮だった頃から彼は常に背をピンと張り、その顔には少しの苦労や苦痛を浮かべず、周りを安心させる様な優しい笑みを心から常に浮かべている様な人物で、口からは教えられた物では無く、自分で勝ち得た誇りを常に感じさせる声と言葉が吐かれていた。

そして何よりも誰にでも臆する事無く、親衛隊入りを果たしたいと告げていた自信に満ちながらも決して傲る事の無い姿は陰ながらであるが、此花も敬いに近い感情と共に憧れに似た感情を抱いていた。

「本当にっ！」

此花が乱暴に友衛の額を左手でアイアンクロウの様に掴み、上に向かせる事で友衛の視界に自分を映させるが、生氣と光が消えた友衛の目に自分の姿が鏡の様に映つたのを確認した瞬間に歯を食い縛り、容赦の無い張り手を頬を喰らわせる。

「寿々花おねー……さん……」

何があろうとも優しく悟らせる様に、もしくは痛い所を容赦なく突く様に言葉を投げるタイプの此花なのだが、今回は言葉では無く、即座に腕を出した事に燕は困惑し、弱々しい声で此花の名を呼んだ。そんな燕の言葉に意を返さず、此花は頬を叩かれて横を向いていた友衛の襟首を掴んで自分に向かせ、僅かに上体を持ち上げる。

「体が何がありましたの！ いつもの貴方らしくありませんわよ！」

叩かれた上に襟首を掴まれた事で頭を揺さぶれた友衛は嫌でも視界に此花を映すと同時に認識しざるを得なくなつたが、口からはか弱い空気が音も無く吐き出させるだけで、言葉になつていない。いや、言葉どころか何か意味がある行動にもなつていなかった。

それを見た此花は齒軋りをするともう一度、同じ方の頬に張り手を喰らわせる。

「貴方の親衛隊第一席の肩書きは飾りですか!!」

親衛隊の席順は入った順番により決められる。これが世間一般での認識だが、詳しく、正確に言うならば、第五席から先が順番に決められるのである。ならば、第一席から第四席は何で決めているのか。それは忠誠心の高さから選ばれる。

苔石以外は当然ながら第一席の座を狙うが、第一席は当初から友衛の為に用意された席。後からそう言える程に友衛は忠誠心が高かった。それも当然だろう。英雄として折神紫では無い、母親として折神紫を知っていた。そして、武宮の道は息子が母親の仕事の興味と憧れを抱いたからこそ目指した道。

誰よりも単純だが、故に純粋な想いで歩んだ道に君主や英雄では無く、母の為に働くと言う思いで親衛隊に入った友衛の忠誠心はある種では正しい従者の姿だった。

その姿を知る此花としては今の友衛にはもう直ぐにでも殺意に昇華しそうな程の怒りを覚えていた。

「貴方は言いましたわよね! もしも、荒魂になったのなら、私が責任を持って、人として殺してあげると!」

此花はノ口を身体に取り込む時に友衛に相談を持ちかけていた。

獅童は真つ先に受け入れ、苔石は真つ先に拒否を示した。此花は迷いを背負おつてい

た。親衛隊の3人は自分にとってにはライバルであり、獅童は同性に関わらず自分よりも剣術の腕は良く人柄も良い、苔石は自分と同等の武力だが、人間は自分より出来ている。友衛はノ口を取り込むことを拒否したが、誰よりも強い武力を持っており、人を引き付ける魅力もあの2人とは違う魅力を多く持っていた。

ライバルである3人に置いていかれてたくない。でも、人としても負けたく無い。迷いを背負おつていた此花は心が弱つていたのか、友衛の包み込み、受け入れる様な笑みと言葉にやられたのか、ノ口を受け入れるかどうか、受け入れた時の恐怖、当時の心情の全てを打ち明けた。

あの時の友衛は此花の恐怖にだけ言葉を吐いた。

『もしも、荒魂になったら、私が此花寿々花と言う人間として、責任を持って斬つて上げる。そして、此花寿々花と言う人が居た事を忘れない。勿論、他のみんなも、ね?』
それを聞いた此花はノ口を受け入れた。同時に親衛隊の3人には無い魅力を持った人に本当の意味でなってみせると。

此花は襟を持つ手を更に握り込むと友衛の身体を僅かにだが追加で持ち上げる。

「貴方が行かなければ、荒魂として紫様は討ち取られますわよ! あの時のみんなの中に紫様は居ませんでしたの! 息子とは、母親の為に無茶をする事も辞さない生き物ではありませんの!」

此花の理論もクソも無い感情任せに吐かれた言葉に友衛の瞳に光が戻る。

「寿々花……もう一発、お願いしても、いい？」

「ええ。何発でもやって上げますわよ！」

寿々花にもう一度、張り手を貰った友衛の顔をいつも通り、を超えてこれから全てを賭けてでも無茶を押し通すと言う顔をしていた。

首を振って前に垂れていた髪を左右に押し返しながらかち上がった友衛に此花は少し力んでだが、持ち上げた友衛の御刀を両手の掌に鎬を乗せて差し出す。

「わたくしも行きますわよ？」

受け取って、納刀した友衛が驚愕の表情を浮かべると、此花は笑みを浮かべる。それは友衛がする様な優しい微笑みの中に困った物を見る微笑みも混ざっていた。

「無茶をする殿方の背中を押して、付き合うのも女の甲斐性、ですわよ！」

「綾小路の頃から思ってたけど……」

言おうか言うまいか迷い、言い淀んだ友衛だが、意を決した様に言葉を続ける。

「親衛隊に入ってから、もっと魅力的な女性になったよね」

友衛が言い切ると同時に曲がりくねった内部を通るのを嫌がってか、八幡力で飛び、屋根伝いに走り始めると、後を追おうとした燕が立ち止まって此花に呼び掛ける。

「寿々花おねーさん？」

「真希さんもですが、童子さんも不意打ちが過ぎますわよ……」

「すずか おねーさん！」

「え?! 何か有りまして?」

「もう! 童子おにーさん、屋根走って行っちゃったよ! 何考えてるの?」

「え?! いえ、何でもありませんわ! さあ、追いますわよ!」

独り言は聞かれていないとわかったが気恥ずかしい此花は逃げる様に友衛の後を追う様に走り去る。それを燕は首を傾げるが何故か分からなかったが、1つだけわかった事があった。

「大人になつたらわかりそうだなー」

そうだけ言うと2人の後を追う様に走り出した燕だが、もしも此処に獅童と隼以外の親衛隊が居れば知らない方がいい奴だと突っ込んでいただろう。

第五十一話 終わる気配を見せぬ戦い

鞭をしならせる様にして進む荒魂の腕は、命中の直前にバンツと何も触れていないにも関わらず快音を鳴らす。

その快音は優れた鞭使いが生み出す空気中で鞭の先が音速を超えた証であり、同時にそれは……

「う、うあがああああ!!」

鍛え抜かれた鋼の如き肉も受け流すような柔軟な柔肌も等しく痛め付ける武器になつた証でもある。

鞭の一撃を喰らつた巧が写シを介して、神経に直接敵に感じるのは肌を叩かれ抉れた様な痛み。

「巧!!」

咄嗟にカルロが追撃に振り割れた鞭の腕に対して、咄嗟に弓本体の変形機構を作動させる事で弓を棒に変形させ、自分から飛び掛かる様にして接近した後に遠心力を超えた横殴りの一撃で迎撃、鞭の様な腕を地面に叩きつけるとエレンが踵落として更に地面に練り込ませ、薫が猿叫特有の叫び声を上げて腕を叩き斬る。

「下がれ、巧！」

薫の支持を受けて1段階よりも遅い迅移で距離を取る巧を見て、エレンは鞭の攻撃に注意する様に残った2人へと警告する。

鞭と言うと獣の調教に使われると言うイメージだが、本来は罪人に対して刑罰で使われる道具でもある。

その刑罰は罪状によって鞭で叩く回数を変えて叩くと言う物だが、これは数発を越えれば、最悪は鞭叩きを宣告される事は事実上の死刑とも言える代物と化す。

何故なら人間の脳が鞭により与えられる痛みには耐えられず、ショック死などで命を絶つからだ。

鞭はこの世で初めて音速を超えた武器であるが、同時に処刑道具でもある。

そんな鞭の一撃、その気になれば鉄にすらダメージを与えてしまう様な、一撃を喰らい、生身で鞭を喰らったのと変わらない痛みを受けながら自力で行動を起こせるのは痛みに対して多少の慣れを持つ巧だからこそだろう。もしも、別の人間が喰らっていたなら最悪、永遠の戦線離脱を強いられただろう。

「クソ!!」

「駄目だよ！ 勝武居くん！」

巧の戦線離脱を受けて、勝武居が叩き斬る様に振った縦の一撃で触手の一本を切断、

そのままの勢いで迅移を発動させた勝武居に舞衣が制止の声を上げるが勝武居をそれを無視し、跳躍加速を使用した事で本体の折神紫の身体に正面から肉薄する事に成功する。

「ヤリオル」

「だあああああああ!!」

まさか小細工なしの正面突破を成し遂げた勝武居に賞賛の声を上げながら迎撃態勢を取った荒魂に、気合の叫び声を上げながら剣を振り下ろす。

その一撃は防御に掲げた御刀を押し退け、肩口に命中するが、命中の甲高い金属音を響くのとほぼ同時に金属が無理矢理に折った時になる独特な音が響き渡る。

「お、折れたあ!」

流石の事態に勝武居が素っ頓狂な声を上げると戦場が硬直する。肝心の折神紫に取り付いた荒魂もこれが予想出来ていなかったのか硬直してしまう。

度重なる荒魂との戦闘に加え、全力と限界を超えて戦った友衛との戦いの中で勝武居の剣は知らぬ内にダメージを剣身に溜めており、此処でそのダメージが祟った事で根本から折れてしまった。

「……………」

勝武居自身も珠鋼や和鋼では無い剣ゆえにいつかは折れるとわかっていたしそうな

らない為に注意を払っていたがまさか此処で折れるとは思っていなかった。

戦う相手も仲間もまさか此処で折れるとは思っておらず、なんとも言えない沈黙と静寂が包む。が、勝武居の剣は普通では無い。万が一にも剣身が折れたとしても戦う事が出来ない訳では無い。

「ダラー！」

顔面に突き立てられるのは護拳も兼ねる斧頭。剣身が折れば剣としては使えないが、折れたのは剣身の根元であるなら手斧としては運用は可能。

不意打ち気味に放たれた斧の一撃は正確に顔面の正中線に突き刺さった事で、たたらを踏みながら後退する折神紫の身体から斧を引き抜いた勝武居はアイアンクロウの要領で頭を掴むと首に斧を突き立てようと大振りの一撃を放つ。

「ナメルナー！」

髪が変質した荒魂の鞭の様な腕で斧を持った右手を切断、本体の手で握っていた太刀を脇腹に当てがい、側面に飛ばしながら斬る。

斬られた勝武居が腹を三等分に斬飛ばされながら岩に当たって気絶したのを確認すると素早く全ての触手の様な腕が振り回されて土煙を巻き上げる。

巻き上がる土煙の中で僅かに見えていた影が再び変形を起こす。

折神紫の身体が苦しむ様に悶えながら、人外の形と言うよりも身体の中から甲冑が生

える様にその身体を纏つて行く。

身体を守るだけだった骨の甲冑は骨板と小さな骨を束ね集めた様な袖と腰鎧が追加される。

この変化にエレンとカルロ、薫の3人は巧を守れる様に飛び退き、可奈美と舞衣、彗士は勝武居に駆け寄る事で後退すると同時に無抵抗の勝武居のカバーに入る。

姫和と帝人は元より隙あらば突っ込むつもりで少し離れた位置に陣取っていた事で自分の獲物を構え直すだけに留まり、沙耶香と津佳沙は八幡力で飛ぶ事で天井近くまで飛び上がる。

全員が煙から離れ、攻撃が飛び出しても対処出来るギリギリの位置でありながら攻勢に出るのにも支障をきたさない絶妙な位置で警戒するが、真つ先に動いたのは飛び上がった沙耶香と津佳沙で、僅差で遅れながら舞衣、舞衣から僅差で耳と足の裏で勘付いた彗士だった。

沙耶香と舞衣が地面に御刀を突き立て、彗士が素早く地面を熱したナイフでチーズを切る様に切断した場所に寸分違わず、津佳沙のドロップキックが放たれ、ドロップキックの着弾と同時に彗士の刃は地面を切り、抉る様に振るわれる。

「良〜」

地面を見た彗士が声を上げた。

4人の視線の先にはひしやげる様に折れ、千切れた荒魂の触手の様な腕と地面と共に宙を舞う同じ物体。

地面の中を這う様にして奇襲を仕掛けたのだが、沙耶香と津佳沙の何か嫌な予感を感じた故の行動が舞衣を警戒させ、透眼を発動させるに至り、奇襲を視覚情報で察知した。隼士は暗闇や地中から迫る荒魂との戦いをドイツで経験、足の裏から来る振動が、その記憶と経験を呼び覚ました事で勘付く事が出来た。

無論ながらこう言った攻撃は姫和と帝人の方にも向き、こちらは天井と地面からの挟撃だったが、上から迫る一撃は帝人の銃撃で軌道がズレた事で地面に突き刺さる。

「フッー」

突き刺さった触手に袈裟斬りを放つ。刃は熱したナイフを刺した高級アイスの様に骨格に食い込み、力任せに振り向いて切断。切断する際の振り抜きと同時にマガジンリリースボタンを押して、振る勢いそのまま排出、排出された八幡力込みです蹴り、姫和に防御されたことで弾かれた触手に命中、バランスを崩した瞬間に姫和は迅移を使った突進の様な突きで壁に縫い付ける。

「兄さんー」

姫和の言葉に帝人は行動で答える。

迅移で接近すると同時に関節を狙って御刀を振るう。

今回は熱したナイフでロールケーキを切る様な綺麗な断面を晒して触手が地面に落ちると帝人に斬られた触手はまるで逃げる様に引つ込まれる。

「ぐうあー！」

が、この触手による奇襲を無害で切り抜ける事は出来なかつた。

背後の地面から伸びた2本の触手に背中を刺され、貫通した巧が苦痛に歪んだ声を上げながらも貫通した触手を八幡力を使って掴む。が、背骨の突起部が刃になっているのか指を切断して尚も前に立つカルロに迫る。

振り返ったカルロだが、迎撃は既に間に合わない間合いまで来てしまっており、どうあがいても貫かれる。それを受け入れたカルロは攻めてもの抵抗に睨み付ける様子を細めた瞬間に迅移特有の白い光が前を過ぎ去っていった。

「獅童真希！」

カルロの窮地を救ったのは親衛隊第2席の獅童真希だった。

獅童真希による迅移と八幡力を使った強力な一撃により触手の腕は切断され、薫が背中側を遅れて切断するとエレンが残った触手の腕を蹴り飛ばすと巧の写シが剥がれると同時に倒れる。

「巧！」

「古深川カルロ！ お前は紫様を！」

そう言つて、真希が投げ渡したのは一本の矢だった。それも羽は少しボロボロとなつた使い古しと嫌でもわかる物だったが歪みは無い事を即座に理解したカルロは背後から斬られながらも追撃と鞭の様にしなりながら迫る攻撃から意識を外す。

「カルロ！」

薫が真希を意識から完全に外したカルロを咎める。だが、カルロは真希はこの戦いに自分達の味方として参戦していると確信していた。何故なら……

その目は覚悟と誇りに満ちた刀使の目立つたのだから。

そして触手の腕は背中を見せたカルロに狙いを定めるが攻撃はエレンと薫に防がれる。カルロは矢筒に一旦戻すと同時に変形させて弓形に戻し、状態を確認してから通常の鏃を貫通性に特化したライフル弾の様な形状の鏃に変えた矢を矢筒から抜き、足をハイポットの代わりに地面に踏みしめ？全ての関節や稼働する身体の部位を使って弓を引き絞り、狙いを定めると譲られた矢を放つ。

放たれた矢は剛射の射方、しかも今までの最高のそれであり、時代が時代ならばその矢は竜巻を纏っている吟遊詩人に語られる程の風切りを回転の気流を生みながら荒魂に迫り、防御を貫通した上で身体すらも貫通する。

「キサマ……」

怒りに満ちた声が重くも小さく響き、殺意に満ちた目でカルロを睨み付けると、本体

の指の間にノコを集め固める事で整形した短刀を8本も投擲する。

最初の4本は弾いたカルロだが、残りの4本は左肩、左胸、鳩尾、腹に刺さり、貫通しない。

「カルロ！」

貫通しない刃にエレンが全てのナイフを蹴飛ばすが剛射の負担と投げられた短刀のダメージが祟ったカルロは写シが剥がれて膝を付いて、地面に倒れる。

「させるか！」「させん！」

追撃を掛けようとする触手を見て、本体への攻撃を選択した姫和と帝人だが、それは罠だった。

追撃に回した腕は急速に反転した事で正面から互いの速度で距離を食い潰しながら迫る。

姫和と帝人は攻撃に対処しようとしたタイミングで残りの4本も打ちつ放し機能を有するミサイルの様にカーブを描いて迫るが、正面に集中する2人はコレに気付けない。

周りの人間の誰かが後ろからの攻撃に叫ぼうとしたが、自分の攻撃を辞めて他の仲間
に攻撃を集中するとは思えずに驚愕からか声帯の仕事が遅れた。故に姫和と帝人の2
人は正面からの攻撃を弾いた頃には背中からの攻撃は回避も防御も出来ない距離にま

で迫っていた。

「背後に注意しなさいな」

「おねーさんもおにーさんも油断し過ぎ〜」

刺さるはずだった一撃から姫和と帝人を助けたのは親衛隊の制服に身を包んだ2人の少女、第三席の此花寿々花と第七席の燕結芽だった。

2人は高所から飛び降りると同時に姫和と帝人に迫る腕を縦の一撃で切断してのけ、そのまま感情に任せた様な連続した攻撃を浴びせられるも冷静に弾き守り、結芽に至っては反撃と言わんばかりに御刀を振るい、浅いものの少なくない数の傷を負わせている。

「ツッ」

それでも、此処までの戦いに親しい間柄だった葉結の所在不明という事実が結芽の精神を本人が知らない、感じられない場所で縛り付け、その縛りは無意識の内に動きに現れ、結芽も少ないながら手傷を負わされている。

「本体に突っ込みなさい！」「本体に突っ込んで！」

結芽が手傷を迫っている。その事実親衛隊第一席、友衛童子は結芽が健在の内に勝負を付けると判断して誰でもいいから続いてくれと自分も突撃を敢行しながら叫び、童子の言葉に舞衣は可奈美に手振りて突っ込む様に指示、さらに寿々花と結芽の援護の為

に沙耶香と津佳沙の2人を送る。

4人の牽制と2人の突撃に対処する事になった折神紫だが、それを予めわかっていた様に4人の方には腕を増やして圧倒させつつ2人の方には己の腕で対処する選択を取る。

戦いは未だに終わる気配を見せなかった。

第五十二話 終わらぬ決戦

折神紫の本体へと吶喊した童子と可奈美。

2人の接近に折神紫は迎撃を選択、上段から右の御刀を振り下ろすが、可奈美は冷静に斜めに傾けた自身の御刀で受け流す。

「ッ」

受け流し切った所で即座に上段の一撃を放つが折神紫は一步下がる事で攻撃の回避と共に絶好の距離を手に入れるが、童子が視界の外から飛び回し蹴りをしながら現れた事で側頭部を蹴られた折神紫は横に吹き飛ばされる。

側頭部に対して情け容赦の無い飛び回し蹴りの命中。しかも鍛えられた武宮からの一撃なら常人なら最悪は死亡、良くて気絶だ。当然ながら折神紫も鍛えた刀使と言えども、生物としての限界はある。気絶をしているだろうと童子は思いながらも下半身は蹴りの姿勢で構え、上半身は御刀で受けられる様に抜刀状態で構え、可奈美も隣で自身の流派の構えを作り、油断のない視線を折神紫に向ける。

「嘘……」 「冗談を……」

そんな2人の前で折神紫は倒れた操り人形の糸を手繰って起こす様に関節を曲げる

事無く立ち上がる。その目はしっかりと開けられ、気絶から起きた人間特有のフラつきは無い。それどころか即座に迅移で距離を詰め、可奈美に右の御刀での上段を放つてくる。

「マジかー！」

可奈美は御刀でその一撃を防げたのか周囲に金属同士が当たる音を響かせ、折神紫は金属音を聞くと同時に右の御刀を下げ、それと連動する様に左の御刀での横薙ぎが可奈美を襲う。

横薙ぎの一撃も辛うじて止められた可奈美だが、無茶な防御ゆえに身体が弾かれ、バランスを崩し掛ける。無論ながらその瞬間を逃す様な相手では無く、右の上段をワザと御刀に当てて完全にバランスを崩させる。

「させないー！」

その瞬間に可奈美を左の御刀で切り裂こうと上から下に振り下ろそうとした折神紫だが、童子が飛び込みと同時に腕を斬り落とす様な上段からの攻撃が横入りした事で折神紫は後退、それを追う様に童子は横薙ぎの一撃を放った事で距離を更に開けさせられる折神紫。

振り出しに戻れた帝人と童子は互いに息を即座に整え、武器を構え直す。

「合わせられる？」

正面から迅移で来ると思った可奈美だが、それは折神紫のフェイント、正面からの迅移を超える速度で三角移動をした折神紫は背後から2人に両手の御刀を上段で振るって斬ろうとする。が、童子はそれに気付けた事で二刀の御刀を横に構えた御刀で防ぎ、八幡力を使って跳ね除ける。

「頑張る!!」

跳ね除けられた折神紫が踏み込んだ瞬間に2人は同時に距離を詰めると同時に折神紫の腹を蹴り付ける。

可奈美は勿論だが、童子はもう母親同然の人物は荒魂になりきってしまったっていると受け入れ、母を楽にさせる為に戦うと決めて身体に力を入れ直す。

2人が折神紫、大荒魂を抑えている内に戦線離脱を余儀なくされたメンバーの避難をさせる。

エレンやカルロ、薫、勝武居に彗士は安全な上階へと避難させたが、巧だけは重さ故に上段に運ぶには無理があると判断した舞衣はノ口が溜まっていたであろう貯蔵水槽に落として邪魔にならない様にする。

そんな退避行動を起こされている間にも大荒魂と童子・可奈美の戦いは続いている。

耳を揺らす様な金属音と共に可奈美は剣戟の重さに耐えかねて背後にたたらを踏む様に下がり、大荒魂は追撃と言わんばかりに飛び上がりながら振るわれた上段の一撃は

敢えて身体を逸らす事で回避、上段に振るわれた御刀が向きを変えて振るわれた横薙ぎも身体を曲げる事で躲す。

「イツ」

が、左からの突きを躲す事は出来ず、刀を僅かだが、斬られてしまい、大きく飛び退く事で安全な距離へと逃げ、その隙を潰すかの様に今度は童子が右斜め上方からの一撃を側面から放つが半歩下がれた事で不発に終わるが童子は即座に横薙ぎの一撃に移行、追撃を仕掛けるも一歩下がるだけで躲されてしまう。

童子は牽制と攻撃の為に踏み込めば射程に入るといふ距離で無限の記号を描く様に御刀を振り続け、数回の往復の後突き技に転じる。

体のバネと関節の駆動をも使った突きは大荒魂の腹に突き刺さるが致命傷という程のダメージでは無く、それを確認した童子は伸ばした足を曲げる勢いを利用して飛び込む様な突きを放つ。

大荒魂はジャンプで大きく距離を開ける事で躲すと同時に正確に着地、急いで立つ上がろうと膝を立てた童子だが御刀を先に踏まれた事で膝立ちの状態で拘束され、袈裟斬りを放たれるが、童子は即座に地面を転がる事で加害範囲から脱出、追撃の突きも身体を揺らす事で躲し、追撃の突きで足が退いた御刀を即座に突き上げて牽制、一歩退いて瞬間に輪を作る様に御刀を振るうが腕を蹴られて無防備に身体を晒してしまう。

「しまっ」

八幡力で踏みつけられると思つた童子だが、可奈美が童子の足を掴んで後ろに引つ張つた事で踏みつけを回避する事が出来た。

童子を助けた可奈美が童子の上を飛び越えて上段斬りを放つが大荒魂はその一撃を回避すると左の御刀を横に薙いで可奈美の腹を斬ろうとするが可奈美も追撃で振つていた横薙ぎがぶつかり合う事で互いに不発に終わる。

大荒魂は即座に御刀を戻すと今度は太腿を狙つて下段で攻めるが同じ様に可奈美も御刀を振るつた事でこの一撃も不発に終わり、童子はこの攻防の隙に立ち上がるが、大荒魂は左の御刀を戻し勢いを利用して回転、右の御刀で回し斬りを放ち、可奈美はそれを姿勢を低くする事で躲したが、追撃の蹴りを胸に喰らつた事で後転する様に転ばされてしまふ。

童子は立ち上がると大荒魂の目の前を横切る。それを攻撃と判断したのか大荒魂は後ろに下がるが、童子は通り過ぎると同時に迫る様に曲がつた事で視界の死角に入り込んでおり、そこから飛び上がると同時に袈裟斬りを放つが大荒魂は視界にいないことから更に飛び退く事で攻撃の射程外に逃れていた。

「運の良いいー！」

追撃の突きを放ち童子だが、これもも身体を逸らされる事で躲され、横の一撃で更に追撃を掛けるも左の御刀で受けられる、押し退けられると同時に右の御刀が太腿を狙って振るわれる。

「やー」

童子は防御は無理と判断し飛び上がる事で躲すと同時に回し蹴りを放つ。この回し蹴りは予想できなかったのか大荒魂は側頭部に喰らうものの、苦し紛れの一撃故かそこまで威力の籠ったものではない故に数歩だけ後退させられるだけだった。

「やああー」

そこに可奈美が着地した童子を飛び越えて上段を放つが大荒魂は二刀を交差せる事でその一撃を防ぎ、後退で距離を稼ごうとするも可奈美が追撃で放った片手での上段を右の御刀で受け流す様に防ぎ、受け流した瞬間に放たれた童子の下段を狙った横薙ぎを左の御刀で防ぎ、小振りで放たれる連続攻撃も的確に捌き、鏝迫り合いの様に刀が止まったタイミングで右の御刀が袈裟斬りで童子に襲い掛かる。

袈裟斬りを後退で躲した童子に大荒魂は左の御刀を横薙ぎに降つて牽制すると同時に振つた際の力を回る力に転用し、背後の可奈美に身体の向きを変えて、可奈美の放つた上段に左の御刀の上段を当てて弾き、右の御刀を八幡力を使って振るう事で可奈美を身体ごと弾いたら素早く童子の方向へ身体の向きを変えて、左の御刀を上段から振るう

事で童子に攻撃から咄嗟の防御を強要する。

童子はこの一撃を防ぐと即座に押し返すが押し返すタイミングが不味かったのか押し返したタイミングと大荒魂が御刀を引くタイミングが一緒だったのか、可奈美の奇襲の一撃を防がれるだけで無く、右の御刀の速度重視のコンパクトな振りの一撃が可奈美の腹を僅かに斬る。

大荒魂は可奈美への追撃で無く、体勢を整えた童子の足を斬り払う様な一撃で牽制、片足立ちとなった事と腕を振った事で御刀の重さに負けた童子を放って可奈美に足を狙った一撃を振るい、立て直した童子が足を踏み出した瞬間に足を突き出して童子の腹を蹴り、可奈美にも後ろ蹴りの要領で腹を蹴って引き剥がす。

「つくうー！」

可奈美を引き剥がした大荒魂は童子に狙いを縛り、連続した突きで攻めたてると童子も下がりがながら御刀を左右に振るって防ぎ、追撃の僅かな隙をついて大きく飛び退き、着地と同時に右周りの一撃を放って防御させると素早く左回りに回って追撃を掛けるがこれも防がれる。童子は再び回転、投げ渡す事で持ち手を素早く変えて放った一撃は攻撃方向を誤認させた事で防御をすり抜けられたが、大きく飛び退かれた事で不発に終わる。

それでも童子の追撃は終わらず、素早い踏み込みと同時に突きが放たれたが身体を横

にズラされた事で躲され、後ろにいた可奈美の首筋ギリギリで刃先が止まる。

「うわあー!」「ごめん!」

童子は事故で味方を刺し掛けた事、可奈美は味方に事故でやられるとこだった故に体の動きを止めてしまう。

その隙を突かれた童子は腹を大荒魂に蹴られて怯んだ所に顎に蹴りをもう一撃を喰らった事で後ろに回る様に倒れ、トドメに上段を放たれる所で寿々花が飛び込んだ。

「させませんわよ!」

寿々花のシヨルダータツクルで距離を開けられた大荒魂は寿々花を蹴り退かし、即座に飛び上がったの上段斬りを放つが寿々花は素早く己の御刀を相手の鎧に当てて巻く様に跳ね除けると空いた顔面に目掛けて突きを放ちが、顔を傾けながら飛び退かれ、飛び上がったの両膝蹴りを顔に喰らい、更に地面と両膝に挟まれる形で頭にダメージを喰らった所為か気絶してしまう。

「不味い!」

倒れている寿々花を振り返る事で確認した大荒魂に、童子は寿々花が危険と判断、寿々花を意識から剥がす為に攻撃を加えんと走り寄ると同時に上段を放つが、横振りの一撃で弾かれる。

「!?!」

そして童子は大荒魂の呑まれた紫の僅かに歪んだ口角を見た事で、この行動は相手の思う壺だったのだと悟り、急いで剣を引き戻そうとするが攻撃にリソースを割いた重い剣はこういう受け身の防御や咄嗟の防御では足枷となる。

「オモイケンガアダダ！」

重い剣に身体を僅かに持つていかれていた童子は大荒魂の両手での剣戟の嵐に見舞われるも、当たる場所の調整や必死の体捌きで致命傷を寸前の所で躲し続けるが綱渡りのそれに変わりはない。

「チヨコザイ!!」

二天一流の動きから見た事の無い巻き取る様な動きで上半身を上にカチ上げ、下半身が僅かに浮いた瞬間を狙ったかの様な足払いで童子はその場に倒され、再び創り出した副腕で首を抑えられてしまう。

「トドメ」

そのままの体勢のまま、身動きの取れない童子を討つべく、もう一本の副腕を作り出し、鎌の様な刃を腹部に突き立てられる。

「ムネンムソウ……ガ、タダソレダケ……」

討つた瞬間の無音の急接近。だが、奇襲にするには2人、沙耶香と津佳沙の視界に対する知識と経験が足りなかった。故にただ速いだけの無念無想は大荒魂には脅威にな

り得なず、届く事はない。逆に逆手に持ち直された御刀の刃が2人の喉元を貫く。
「やああ!!」

が、結芽のドロップキックは大荒魂の頭を捉え、大荒魂の身体が地面を滑る様に後退、バランスが整う前にと、真希の剛剣が空気を唸らせながら迫る。

「っ?!」

剛剣は空を斬った。大荒魂はジャンプで躲したからだ。が、その瞬間を狙っていたと言わんばかりに寿々花の突きが放たれる。しかし、正面からの攻撃だった故か御刀の刃を足場に背後にバク転の様に空中で回転しながら回り込まれてしまう。

これが普通の刀、心鋼だったならば折れていただろうが、寿々花の御刀は珠鋼の御刀。折れる事なく足場となり、背後に回られた瞬間に鎌の刃が股下から迫る振り上げる一撃により背骨を縦に両断されてしまい、写シをはがしながら地面に倒れる。

「寿々花おねーさん!!」

結芽が駆け出すが鎌の刃が行く手を遮らんとするがそれを躲して突きの射程まで飛び込んだ結芽だが、突きは放たれなかった。何故なら射程に飛び込んだと同時に結芽の頭から大荒魂の持つ御刀の刃が生えたからだ。

「結芽ー!」

踏み込みと同時に全てを両断する一撃を放たんと腕を振り上げた真希だが、結芽の頭

を突き刺した御刀が結芽の頭に突き刺さったまま向きを変えて放たれた横振りの一撃が肩と首を上段が振り下ろされる前に切断してみせた。

「……フム」

御刀を構えて警戒する薫とエレン、帝人と姫和を見て腕にノ口を集めてスペクトラム化した短剣を8本ほど、扇を広げる様に生み出すと真上へと放り投げる。

不可解な行動に構えを深くする4人だが、この行動を意味を4人は身を持って知る事となる。

「え？」

誰の声かはわからない。もしかしたら全員かもしれないが視界が暗転し、銃声を聞く
と写シが剥がれた時の様に意識を失った。帝人以外は……

「ホウ……」

左目をノ口で作られた短剣を引き抜き、気合いで最後の1枚を貼り直した写シで立つ
帝人を見て大荒魂が呟いた。

「コノトトキニナツテワカッタ、ソレハ……」

帝人はこの言葉で大荒魂がまた強くなったと悟り、柄を強く握り直すが息を整える事は出来なかった。

「（よくはわからない……けど、助かった！）」

まるで刀が1人でに、自分の腕を振るう様に振るわれた事で陰世を通る事で眼球の目前に瞬間移動した短剣の1本を防ぐ事が出来た。だが、精神力は枯渇寸前で体力も枯渇寸前だ。

「オマエニデキルノカ？」

大荒魂の挑発する様な言葉も帝人は隠された意味さえも理解した。

帝人の御刀は神の為に神を斬る者に与えられる神斬りの剣。姫和の三段階迅移を用いた心中技と同じ事が出来る。が、この御刀でそれを行った時には大荒魂を陰世に送り込み封じるのでは無く、文字通りの消滅を行える必殺の刃へと変える。

問題は三段階迅移を使えるかと言う事、何よりも刃を直撃させられるかと言う事だろう。

「はぁー……」

帝人は一の太刀の構えを取る。

距離と手数のアドバンテージは向こうにある。ならば速度を利用して捨て身の一撃を与えて一撃必殺の太刀とする。

それしか姫和を守る手段が無い。覚悟を決めて身体に力を入れた瞬間、自分の背後に大荒魂が現れ、風が背中を撫で付けた。

「?!」

後ろに回られた。そう判断して振り返った瞬間に見たのは、古ぼけた皮の上着に似た焦げ茶の写？を貼る彗士だった。